HAPS
一般社団法人HAPS | 京都市東山区大和大路通五条上る山崎町339
Tel. 075-525-7525 | Fax. 075-525-7522 | http://haps-kyoto.com

2020年度 京都市
文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業 報告書
HAPS

2020年度
京都市

文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業

報告書

2021

HAPS

2020年度
京都市

文化芸術による
共生社会実現に向けた
基盤づくり事業

報告書

2020

目次

004　はじめに　文：中川眞

008　第1章　相談事業
- 010　SW/AC について
- 012　相談いろいろ
- 014　ディレクターズノート ―Social Work / Art Conference 2020　文：奥山理子

020　第2章　京都市内の福祉施設等の文化芸術活動の状況についてのアンケート調査
- 022　調査に至る経緯
- 024　調査の概要／基礎情報
- 026　京都市内の福祉施設等の文化芸術活動の状況についてのアンケート調査報告
- 042　調査結果の考察　文：樋口貞幸
- 046　調査結果を受けて ― 福祉・教育に関わる分野で文化芸術を行うこと　文：奥山理子・小泉朝未

048　第3章　モデル事業
- 050　崇仁地区を中心に実施したプロジェクトによせて　文：石井絢子
- 056　プロジェクト1　山本麻紀子
  「巨人の歯と眠り」
  「糸と布染め」
  「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」
- 062　プロジェクト2　谷本研＋中村裕太
  「タイルとホコラとツーリズム」season8《七条河原じゃり風流》
- 070　「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」モデル事業報告書　文：中村優花
- 091　継続調査1　2018年度モデル事業　継続調査報告
  「ノガミッツガーデン」の継続を通して、福祉とアート、施設と地域のあり方を考える　文：高嶋慈
- 106　継続調査2　2017年度モデル事業　継続調査報告
  明るい場所であなたより先に服を脱ぐ　文：和田ながら

116　第4章　連続講座「文化芸術による共生社会実現のためのアーツマネジメント入門」
- 118　第1回講座　特別養護老人ホーム グレイスヴィルまいづる　淡路由紀子
- 123　第2回講座　きょうと WAKUWAKU 座　今井利華
- 128　第3回講座　彫刻家　花岡伸宏
- 136　第4回講座　京都市修徳児童館　木戸玲子
- 141　第5回講座　総合福祉施設 東九条のぞみの園　小笠原邦人

148　第5章　人材育成
- 150　人材育成レポート：アシスタントコーディネーターとしての一年　文：小泉朝未

154　巻末対談
奥山理子×遠藤水城
アートと社会をめぐる営為を捉え直す ―「ケア」の視点から
進行：中川眞

164　あとがき　文：中川眞

172　実施概要

175　プロフィール

はじめに

文｜中川眞（2020年度 京都市「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」ディレクター）

本冊子は京都市の令和２年度「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」の報告書である。本事業は平成29年度の「文化芸術で人が輝く社会づくりモデル事業」に始まり、翌平成30年度「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」、平成元年度からは「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」へと名称が変わり、２年を経過したところである。「共生社会」の実現は、現代に住む私たちの大きな希求である。長年にわたって様々な制度構築や試みが積み重ねられてきたが、市場原理的な経済活動がグローバルに突出するなかで、新たな分断や差別が生まれるなど、実現にはさらに丁寧な制度設計や意識の改革などが必要な時代となっている。本事業は文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課（計画推進担当）が主管し、一般社団法人 HAPS が主催、実施しており、京都市という地理的な枠組みのなかで行われているのであるが、少しでも先進的な取り組みを実現し、他地域のためのモデルとなることをめざしている。

令和２年度の事業は次の５つの取り組みからなっている。

①相談事業

Social Work / Art Conference（SW/AC）に寄せられる相談への対応。

②調査

福祉関係の事業所へのアンケート調査の実施。

③モデル事業

下京区崇仁地域における住民とアーティストによる共同制作など。

④普及・啓発事業

社会課題にアプローチするアートプログラムの事例や効果を伝えるための講座の実施。

⑤育成事業

社会包摂的な現場で活躍できるアート・コーディネーターの育成。

以上、これらの取り組みは順調に推移したと言えるが、次の「本年度の経緯」で記すように、当初の予定（特に調査部門）から大きく活動が変化したところもある。本冊子はこれらの報告を旨とするが、前年度までのモデル事業についての継続調査の報告を加えている。

本年度の経緯

新型コロナウイルス感染症の蔓延が昨年度の２月頃より顕在化し、さらに緊急事態宣言の発出とそれに伴う社会的活動の制限・制約という予想もしなかった新事態の影響を、本事業は内容面、スケジュール面で大きく受け、予定を大幅に変更せざるを得なかった。しかしコロナ禍を見据えて手法や内容を新たに吟味するなど、事業についてじっくり再点検できたという側面もあった。

相談事業（①）は、HAPS が新たに開所した HAPS HOUSE での相談対応（SW/AC）を6月から開始した。コロナ禍のために２名のスタッフは自宅作業が中心となって対面での相談は困難となり、周知の作業も思うようにできなかったが、共生社会に関する事業を主管してきた京都市文化芸術企画課の紹介によって相談者につながるなど、ゆっくりではあるが着実に作業が始まった。相談する側とされる側が、「支援される／支援する」という関係にならないよう、注意深く業務設計がされていたのではあるが、スタッフ２名はとりわけ関係性の構築に繊細な神経を使い、相談者と SW/AC が相互に何をなし得るのか、という共同作業のスタンスをとりながら事業を進められたのは良かったといえる。ただ、ディレクターの報告にもあるように、相互に求めているものを深く理解するのが難しいことをあらためて感じさせられた。だがそこを素通りするわけにはいかない。なんらかの SW/AC の方法論を定式化してゆく必要があるだろう。令和２年度の相談件数はアーティストから7件、施設・団体等から39件であった。

調査（②）は、社会包摂的な手法をもつ施設、機関を中心に、市内各所、市外数カ所の聞き取り調査を実施する予定であったが、聞き取りが不可能になったため、計画は中止となった。オンラインでもできないことはないが、現場が見られないのは致命的でもある。そこで、調査の方向を転換し、SW/AC の活動の一環として、２回のヒアリング、アンケート調査を実施した。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって芸術文化活動が制限され、それに関わる関係者（アーティスト、施設スタッフ、コーディネーター、教育者、研究者など）に大きな影響が生じ、とりわけ経済的問題は深刻なものとなった。その実態を把握するために京都市

は本事業とは別に5月（2020）と1月（2021）の2回にわたり回答者1,000人以上の規模のアンケート調査を実施した。ただし、このアンケートの対象としては、福祉・医療などといったSW/ACがターゲットとする領域の人々や活動は想定されなかった。コロナ禍において、とりわけ生命の維持と直結するこれらの施設に問うこと、つまり時間を奪って本来の業務を妨げることが憚られたのである。しかし、そこにおいてもコロナ禍の影響は計り知れないだろうという想定のもと、本事業の方で把握できないだろうかという議論が生まれてきた。そこで京都市による調査と時期的に並行して5月にヒアリング調査、12～1月にアンケート調査を実施した。

モデル事業（③）は下京区崇仁地域にて2件（山本麻紀子、谷本研＋中村裕太）実施した。旧同和地区である崇仁地域は、京都駅の東に接するという好立地にも関わらず、高度経済成長期を経てなお一部にいわゆる不良住宅を残したまま現代に至っている。その南側には在日コリアンの集住する東九条地域がある。

2014年に京都市立芸術大学の崇仁地域への移転（2023年度）が決まったのが、地域の近年の大きな変動のきっかけとなる。かつて地域住民が鴨川の河原から砂や土を運び、町をあげて建設した柳原小学校を前身とする崇仁小学校の校舎が2020年に解体され、136年の歴史の幕（景観）が閉じられた。そのことはコミュニティにとって大きな衝撃であったと推察される。京都芸大のキャンパス敷地確保のために多くの地域住民が引っ越し、現在は近くに新築された市営住宅への移動が完了した。周辺地域からの分断やトラウマに晒されてきたコミュニティに、大規模移転によって更なる分裂が生じる可能性があることから、コミュニティの再構築は喫緊の社会的要請といえる。要因が複雑に錯綜する課題に対処するためには、熟達のコミュニケーション能力を持つソーシャルワーカーや行政関係者、地元の各種団体とともに、文脈を複眼的に見据えることのできる創造的なアーティストの協働が、現場の事態の変容に処して、一つのキーになるのではないかと思う。ただ、本モデル事業においては、そのような「目的」をアーティストに課しているわけではなく、これまでに培ってきた方法論に沿いながら、新たな対象とどのように向き合い、アウトプットしていくのかということに注視するという姿勢を保っている。

普及・啓発事業（④）は連続講座「文化芸術による共生社会実現のためのアーツマネジメント入門」（全5回）を実施した。共生社会実現のための活動に携わる方を一人でも増やしたいという目的で入門講座を計画したのであるが、本年度の特色は、アーツマネジメントのプロフェッショナルではなく、福祉的な施設や機関に勤務しながら、そこでのアート活動を積極的に推進し、実際に担っている方に講師をお願いした点にある。当初にコンタクトをとったときには各講師は戸惑われたが、趣旨を説明すると快諾をいただいた。数度の事前打ち合わせののち、当日はライブ（オンライン）で実施した。講師は、淡路由紀子（特別養護老人ホーム グレイスヴィルまいづる）、今井利華（きょうとWAKUWAKU座）、花岡伸宏（彫刻家）、木戸玲子（京都市修徳児童館）、小笠原邦人（総合福祉施設 東九条のぞみの園）の各氏であった。なお花岡伸宏氏は施設利用者の作品とのコラボレーションや、地域で／地域住民とかかわるプロジェクトを展開している。講師は熱のこもったお話をされ、質疑応答も熱心に行われた。また、参加者同士のコミュニケーションを推進する意味合いで、講演終了後に「談話室」という肩の凝らないおしゃべりコーナーを設けた。このコーナーはSW/ACのスタッフが運営した。

育成事業（⑤）は昨年度から本格的に開始予定であったが、3度の公募を経て令和2年3月にようやく然るべき人材を探し当てることができた。育成プログラムについては、現場での実践を軸としながら、被育成者のこれまでの経歴や属性に応じた形で逐次プログラム化していくという方法になった。担ってもらった業務は、相談事業の拠点整備、相談の集計・記録・報告、勉強会の開催、アンケート素案設計、モデル事業のマネジメントサポート、発信（noteの執筆）など極めて多岐にわたった。

Chapter I

Coordination

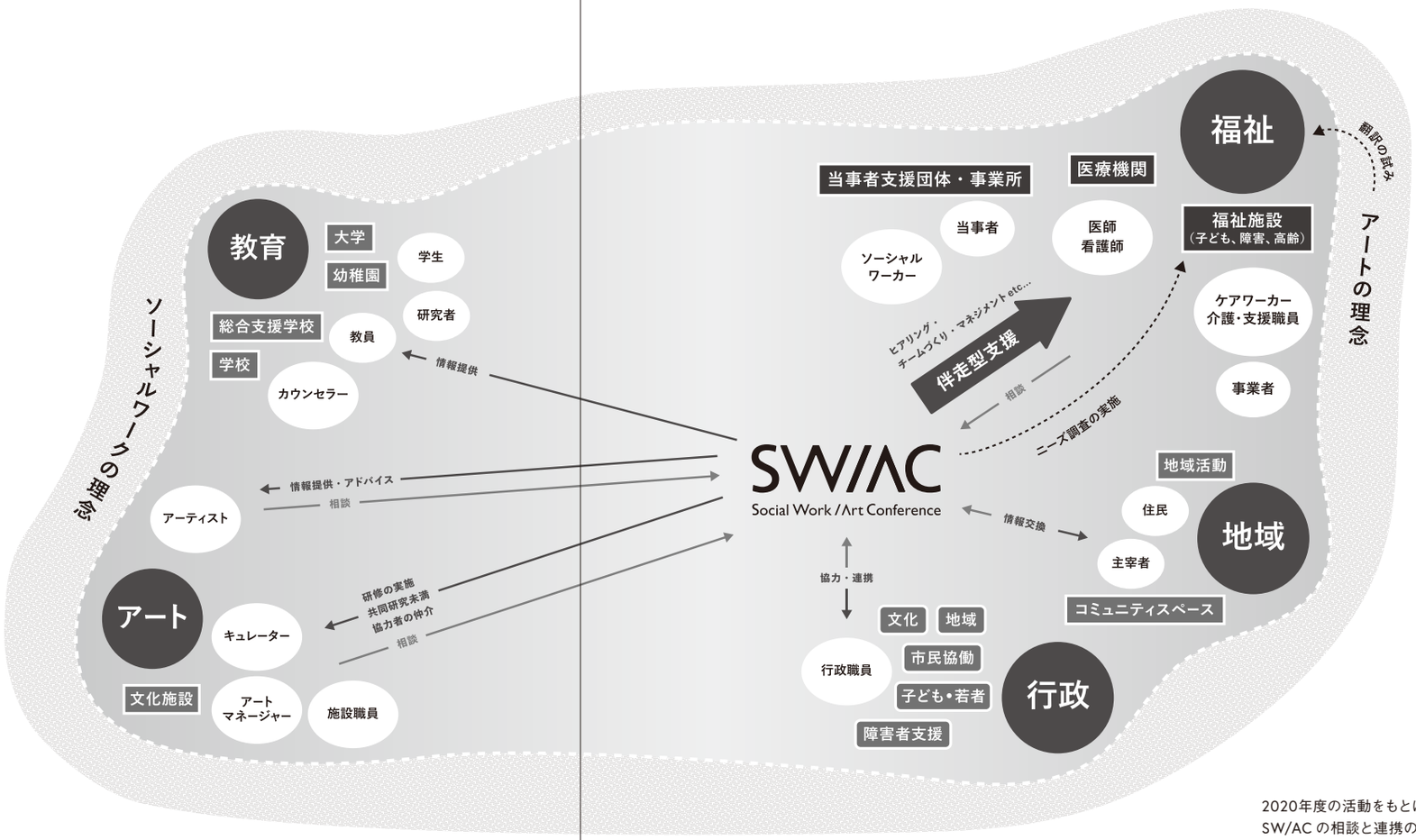
相談事業

相談事業の実施は「文化芸術と社会包摂に関する事業」が始まった平成29年度当初からの懸案であった。それが昨年度末に実現し、本年度に本格的な稼働が始まった。福祉、医療、教育、地域などの現場に生じる様々な課題や困難を、アートや表現を通して解決したり、和らげたり、関係性を変えたりといった活動のニーズが増えてきたのが背景にある。しかし、そういった社会的課題（あるいは現場）とアートを繋げる方法やルートについては必ずしも人々に共有されてこなかった。その両者の架け橋となり、サポートしていこうというのが本事業の目的である。事業は Social Work / Art Conference（SW/AC）のディレクターである奥山理子と、人材育成事業で雇用された小泉朝未の2人体制でスタートした。相談者は大組織から個人に至るまで属性が多様であり、それぞれの求めるもの、イメージが大きく異なるなど、予想以上の振幅を経験しながら、46件の相談に対応した。手応えは十分であったが、この種の相談事業については先行事例に乏しく、1件ずつ丁寧にこなしてゆきながら手法を開発していくこととなった。相談業務の他に、啓発・普及の講座に「談話室」を設けたり、福祉関係施設への聞き取りやアンケート調査を行うなど、キャパシティの拡張にも取り組んでいる。（中川眞）

左から SW/AC ディレクターの奥山理子とアシスタントコーディネーターの小泉朝未　撮影：堀井ヒロツグ

SW/AC とは

Social Work / Art Conference（SW/AC）　は、2020年6月に多様な分野とアートを繋ぐための相談事業として開設しました。SW/AC では、個々の人間性の尊厳や価値を擁護するソーシャルワークの理念を参照しつつ、相談者らとアートや表現についての対話を重ねながら、新たな相談機能をつくり出すことを目指しています。開設年の今年度は、福祉の領域から、文化芸術との関わりによってこれまでとは異なる形で課題に取り組みたいといった相談が寄せられ、課題の聞き取り、取り組みに向けたチームづくり、進行管理、アーティスト等を繋ぐといったコーディネートを行いました。またアーティストや文化芸術系団体からは、福祉や福祉に近接する事柄についての意見交換の相手役となり、プログラムや施設の運用方法についてアドバイスをしたり、当事者や支援団体等を紹介したりしました。相談者や関係者との目的の共有を常に意識しながらも、分野によって情報収集や合意形成の回路が異なるために、その中間の立場で各者のニーズを汲み取ったり、互いの言語を翻訳したりする必要性を感じ、継続的な支援者としての役割を実感した一年となりました。



2020年度の活動をもとに作成した
SW/AC の相談と連携のイメージ

相談いろいろ

今年度は特に福祉、または文化芸術に関わる人びとから様々な相談が寄せられました。
相談内容、SW/AC が設定する対話の場でまず伺ったこと、その後の展開をまとめました。

福祉イベント事務局

「介護」がテーマのフォトコンテストで審査員を担っていただける写真家を紹介してほしい。

SW/AC

企画趣旨、募集対象、そして過去のコンテストの傾向を教えてください。また、新しい審査員に期待することは何ですか？

展開

これまで福祉関係者だけで審査を行ってきたので、新しい視点を加えたいということでした。ただし、写真の応募者が介護福祉職員に限られていることから、介護現場が想像できる人が求められることも分かり、福祉コミュニティでの活動経験が豊富な写真家を紹介しました。

個人

身体障害があり就労がうまくいかず引きこもりがちだが、独学で絵をずっと描いている。ギャラリーなどで自分の作品を発表できる機会があるとよい。

SW/AC

絵を描くことで得られていることや大切にしていることは何ですか？また、日常生活で困っていることはありませんか？

展開

初回は障害者協会の相談員を伴って面会しました。生活のために働きたい、できることなら好きな絵を活かしたい、と話し始めましたが、人との交流そのものを求めておられるようでした。そこで、HAPS が企画するイベントや立ち寄りやすいアートスペースなどを紹介し、交流の機会を増やすことから始めました。

福祉施設協議会

高齢者や介護をテーマにした絵本を制作したいが、どのように始めたら良いか？

SW/AC

主催者がプロジェクトを通して目指したいことは何ですか？

展開

絵本づくりの前に、まず介護現場の状況やそこで感じる課題について聞き取りをしました。チームビルディングを行い、編集者、作家等の制作側の選定、依頼を担当しました。社会に向けて絵本をどのように届けたいか議論しながら、プロジェクト全体のコーディネートを続けています。

共同作業所

作業所の製品の販売促進と利用者の満足度向上にアートを取り入れたい。

SW/AC

どんな人（アーティスト、デザイナー）に作業所に関わってもらいたいですか？

展開

相談者が抱いているアートのイメージは様々なので、作業所のニーズに合う人を考えるところから対話を始めました。利用者の描くイラストを使い、自主製品のパッケージを一新したいという思いがあることがわかり、作業所との交流に興味を持ち、イラストの集め方から一緒に考えてくれるデザイナーを紹介しました。

アーティスト

介護施設でのアーティスト・イン・レジデンスをしている。今後施設で開催するイベントに協力してくれるグラフィックデザイナーを紹介してほしい。

SW/AC

介護施設での活動の様子を候補デザイナーと一緒に見学させてください。

展開

介護施設でのレジデンスがどのように行われるのか関心を持ったので、実際に訪問させてもらうことになりました。アーティストの活動やそこで起こっている人との交流、施設の雰囲気などを知ることができ、デザイナーにとってもプロジェクトに参加するモチベーションにつながりました。

編集者

福祉をテーマにした WEB メディアを作ることになった。発信する方向性や掲載時の表現などを相談したい。

SW/AC

壁打ち相手だと思って、他では尋ねにくいこともざっくばらんに訊いてください。

展開

編集長、コンテンツ担当者それぞれと、福祉というテーマの広がりについて意見交換をしながら、WEB メディアの特徴を考えました。SW/AC にとっても福祉の重層性や可能性を考える機会となり、年度末には HAPS のトークイベントに編集長を招き、コーディネートについての対談を開催しました。

Social Work / Art Conference 2020

文｜奥山理子（Social Work / Art Conference ディレクター）

コロナ禍での開設

メールや送付状の冒頭に、新型コロナウイルスの感染状況を心配する文言を書かない日がなくなった。以前は季節の移ろいに心が動いたことを伝えていたのに、どうしても躊躇してしまう。また、来る日も来る日も感染者数、重症者数、死者数、病床使用率の数字を追っている。単純な数字だけで判断してはいけないらしいが、素人にはそれくらいしか手掛かりがない。何かに気を取られ、その数字すら気に留めなくなってしばらく過ぎてしまうことだってある。はっと我に返るのは、辛い闘病生活を送った人や家族が亡くなったという人を特集するニュースに触れた時で、感覚が鈍化していたことへの罪悪感に苛まれるということを繰り返した。「非常事態」とは、非常時が日常化してしまうことなのだと気づかされる。

そんな一年が、「Social Work / Art Conference」（SW/AC）開設初年度と重なった。華々しい幕開けという訳ではなく、寄せられた相談の一つ一つに対応して行く中で、少しずつではあるが相談事業として目指したいと思える姿の輪郭が見えてきたような一年だった。その輪郭に近づいては遠のくといったことを繰り返しながら取り組んだ初年度を、私の視点から振り返ってみたいと思う。2020年に開設した意味は、きっと何年も経過した後に実感できるのではないだろうか。そうであれば良いなと、思う。

東九条の拠点「HAPS HOUSE」

京都の東九条に構えたHAPSの新しい拠点は、名称を「HAPS HOUSE」という。HAPSが東山 アーティスツ・プレイスメント・サービスの頭文字から取っているので、「東九条にも当てはまるね」と、言ってみたり、言われてみたりしながら、SW/ACの事務所を置いたこの場所で、私は週に数日、アシスタントコーディネーターの小泉朝未とともに相談業務にあたることになった。

東山にあるHAPSの事務所（本部と言えばいいだろうか）と同様に、HAPS HOUSEも透明なガラス扉を配した玄関とその奥には土間が広がっている。しかし一度目の緊急事態宣言以降、HAPSではリモートワークが中心となったため、実際にはより限定した日にしか事務所には来ることができていない。コロナ禍でなければ、土間部分で来客をもてなしたり、気候のいい時期には扉を開放して通りがかった近所の方たちとおしゃべりに興じたりといった光景を想像していただけに、開設早々に電気が消え、扉を閉め切った状態が続いたことは、非常に心苦しいことであった。集うことを制限せざるを得ない中で、コミュニケーションを図り、関係が育つことを目指す地域や社会を意識した活動とはなにか、そのことを考えない日はなかった。

ある日、たまたま私たちが出勤していた日の夕方、突然雨が降ってきた。ちょうどその時、前を通りかかった地域の方が、目的地までもう少しなのだけど雨宿りをさせてほしいと言って、HAPS HOUSEに入ってきてくれたことがあった。以前から東九条での活動に携わっておられて顔馴染みだったその方と、私たちは雨足が落ち着くまでの少しの間、互いの近況報告や世間話をして過ごした。その方の人柄や交わしたやり取りが小気味よかったことも手伝ってか、雨宿りができる場所というのが何となく洒落ている感じもして、妙に嬉しかったのを覚えている。この気負うことのないささやかな交流が生まれた夕方のひと時を、HAPS HOUSEのはじまりの記憶として留めておきたいと思う。

京都市との連携

SW/ACを開設したら、まずは前年度の準備期間にヒアリングをさせていただいた方たちや今後連携していきたいと考える専門家、関係機関などへ挨拶をして回り、SW/ACの趣旨を説明して、活動の周知を図ることを計画していた。しかし、コロナ禍ではそうもいかない。アウトリーチができないことに頭を悩ませていた開設初期、京都市からいくつか相談事案を紹介してもらうことからSW/ACの仕事が始まった。HAPSでの事業を所管するのは京都市の文化芸術企画課という部署であるが、2017年より共生社会事業をともに取り組むうえで、積極的に他の部署との連携を図り、また事業を通して出会ったさまざまな分野の実践者との関係性を維持することに努力を惜しまない、稀有な担当者に恵まれた。そのおかげでつないでもらった案件から、私たちが活動のスタートを実感することができたことに、深く感謝している。

例えば、介護職の啓発につながる書籍の出版についての相談だったり、新しいギャラリースペースに障害のある方の作品を展示する上でのアドバイスを求められたり、幼児教育や障害児教育に携わる方たちから文化芸術活動の効果などについて助言を求められたりした。いずれも、比較的規模の大きな団体からの依頼が多く、問い合わせていただいた相談者の奥にさらにたくさんの当事者、支援者がいることを想像すると、いやが上にも張り切ってしまう。一人でできることは限られている。だからこそ、訴求力と波及効果が期待できる規模の大きな事案にも積極的に応じていきたいという思いが強かった。しかし、規模の大きな団体を対象にしたときのコーディネーションは、その

分手間暇のかかる難しい道を辿ることになる。

福祉施設とコーディネーション

私にとってこれまで「福祉施設」は、いちばん心の落ち着く場所だった。代表的なのは母が施設長を務めてきた亀岡の障害者支援施設で、気がつくと小さい頃から休日の多くの時間を私は福祉施設の中で過ごしてきた。でもそれだけではない。この10年ほどの間に日本のみならず海外も含め多くの福祉施設を訪ねる機会に恵まれ、国を問わずホームを思わせる居心地の良さを感じることができた経験が、私にとって文化芸術と福祉とを繋ぐうえでの重要な拠り所となってきた。しかし、SW/AC での相談対応を始めてから（いや、必ずしもそれだけが理由ではないのだろうが）、私が抱いてきたこの福祉施設に対する印象は、今、変化が起こり始めている。そしてこの変化は、少なからず苦痛を伴うものであった。

さて、「福祉施設」とは、法律に則って福祉制度を活用した支援事業を提供する施設のことである。障害者支援、高齢者介護、児童福祉など、各種の法律や制度によって対象となる人や支援の専門性は異なるし、また当然のことながら、施設一つひとつで異なる設立背景や特徴を持っている。さらに近年では、福祉事業に民間企業が積極的に参入するようになったことで、一気に多様化した。

それでも、「福祉施設」には共通する「何か」がある。それはまず建物の雰囲気がそうさせるのかもしれない。建築基準や防災基準を備えることで、間取り、導線、塗装、カーテンなどの室内装飾が共通するという点はあるだろう。あるいは、スタッフのユニフォームや作業着がそうさせるのだろうか。生活サイクルに即して支援を行おうとすると、必然的に動きやすい服装になる。ポロシャツにジャージ、そして首からぶら下げるネームカードといったよく見かけるユニフォーム姿がいちばん効率的で理に適っているのだろう。またあるいは、サービスを利用する当事者と支援を提供する職員という、予め決められた関係性で築かれるコミュニティの雰囲気がそうさせるのだろうか。

村川拓也による舞台作品『Pamilya（パミリヤ）』は、遠くフィリピンからやってきて介護士として働く女性が出演し、フィリピンで暮らした日々を回想する自分語りを織り交ぜながら、舞台上で女性が働く介護施設での日常を本人自ら再現するという内容である。そこには、始業前にジャージに着替え、マニュアルに従って移乗、食事、入浴の介助が行われ、カラオケや軽い運動といったアクティビティが提供される姿が淡々と描かれている。そしてその全ての行為の合間には、必ず利用者への声掛けが挟まれる。やさしく過不足のない声掛けにも関わらず、どこか二人の間には一線が引かれているような印象を受けた。後に、主人公と同じ制度でフィリピンから来た介護福祉士候補生や彼ら・彼女らを支えるコーディネーターが、これは日本特有の流儀なのだと教えてくれた。過度なスキンシップや声掛けは利用者の依存を誘発してしまうから控えるようにと教わるのだという。ハッとした。舞台作品は、決して介護現場を報道的に扱うものでも、ましてや施設環境を否定するものでもない。しかし、再現するという表現手法を通してニュートラルに扱われたことで、福祉施設が内包する重層的な事柄がありありと伝わってきたのだ。

福祉という分野、とりわけ福祉施設で働く人々の多くは、これまでの私もそうだったように、施設のことを施設の中だけで考えることが当たり前になっている。そうするうちに、一般的には取るに足らないようなことが問題視されたり、反対に、一般的には理解されにくいようなことが習慣として深く根付いたりもする。さらに、仕事は代替可能なルーティーンワークが尊重されるため、支援者の個人性が育まれにくいことも特徴として挙げられるだろう。そのため、文化芸術を用いようとひとたび交流が始まると、コミュニケーションがうまくいかない。相談者の「こうしたい」を具現化しようと奔走するもののなんだか不満そうであるとか、具体的な進行プロセスで関係者の足並みが揃わないといった事態が起きたのだ。そして、相談者のフラストレーションと、制作を担うアーティストのフラストレーションを、まるで波打ち際のテトラポットのように私たちが一身に浴びた。こうした事態を必死になって分析するうちに、はたと、そもそも私たちが相談者の描くものとは異なるイメージを受け取っていたことに気づかされる瞬間があった。相談の基本である、相談者のニーズを正しく理解していないではないかと、お叱りを受けるかもしれない。しかし、そのくらい、違う、のである。

相談対応を重ねるうちに、とりわけ福祉分野においては、数回やりとりを重ねたら対応完了というのではなく、伴走型支援を必要とする事案が多いことが分かった。それによって、SW/AC の専門性が文化芸術を扱う上でのよい伴走者となることが目指されるとの一定の見解を持つこともできた。しかし、SW/AC の側がすでに理想とするゴールとその道のりを見通すことができていて、福祉関係者の手を引いて半歩先を走っていこうとするイメージだとすれば、それは払拭する必要があるだろう。相談者の見ている「現場」と、外にいて見えてくる「現場の様子」は違うのだ。また、相談者が導入したい「文化芸術」は、文化芸術の実践者にとっての「芸術性」とは違うことも分かってき

た。そして双方が見ようとしている「社会」の姿もまた、違う場合があるという前提に立たなければならない。大事なのは、いまそれぞれに立っている場所から大きく相手に向かって手を振って、「私はここにいる！」と伝え合うことから始めることではないだろうか。そして、お互いのコンディションや動き方を感じ取りながら、少しずつ距離を縮めて行く。そうしてようやく出会えたとき、それぞれの後ろを振り返るとできていた足跡こそが、取り組んだプロセスとして一本の道に繋がって見えてくる。共生社会実現のための文化的インフラを整えるということから相談事業計画がスタートしたのだが、まさかの徒歩と手作業による開拓だ。

生きづらさを様子見しないために

SW/AC のテーマは「共生社会の実現」にあるから、相談の対象者は、なんらかの理由によって社会参加が困難な状況にある人々やそうした状況と向き合っている（支えようとしている）人々ということになるが、図「2020年度の活動をもとに作成した SW/AC の相談と連携のイメージ」（p.10）にもあるように、その範囲は常にアメーバのように変容しつづけるものだと考えている。しかし今のような説明だと、その仕事は医師やソーシャルワーカー、ケアワーカー、自治体の福祉窓口の仕事だと捉えられるかもしれない。

約5年前に遡るが、世界的に活躍するアーティストのクリスチャン・ボルタンスキー氏とブエノスアイレスで面会する機会を得た。その際に、こうした仕事をアーティストたちとともに取り組みたいと語ったところ、彼はじっくりと耳を傾けた後にひと呼吸置いて、「なぜ、アートがそれを担うのか。医療や福祉の仕事ではないか？」と私たちに問いかけてきた。

現代社会で心の不調に苦しむ人たちは多い。精神科医療において心の病の解明がずいぶん進んだと言っても、10分程度の診察で自分でも整理がついていない心身の状態を的確に医師に伝えることは容易ではない。カウンセリングを利用するという選択もある。しかし、もともと個人の意思を言葉で表明することを教育されてこなかった日本において、高いお金を払って「言葉」で「自己」を洞察する作業は、決して相性の良い方法とは言えないだろう。さらに、年々深刻化、複雑化、そして増加し続ける個人や家庭内に起こる諸問題に対して、福祉の窓口は行政も民間も、「受け付ける」「承る」ことで精いっぱいというのが実情ではないだろうか。急性期には専門家にしか対応できないことがある。しかし、人の心や生活環境から起こる課題は、長期化、停滞化してしまう傾向にある。そのため、経過観察、つまり様子見の状態を取らざるを得ないということが、多くの現場で起きているのではないだろうか。

しかし、生きづらさを抱えるということは、本人にとっての一大事である。本人が自覚できていない場合も、である。それを「様子見」されてしまっては困るのだ。個人だけの問題ではないことは、すでにさまざまなところで十分語られてきた。大切なのは、本人も周りも、そして社会全体も、目を逸らさず、沈殿させずに、しっかりと意識を注ぎつづけようとする態度を育てていくことではないだろうか。そのためには時間も協力者も必要だ。医療や福祉が十分割けない状況なのだとすれば、他の分野が買って出たら良いではないか。文化芸術の領域でも力になれることがあるかもしれない。気分が紛れる場面をつくれるかもしれないし、問題だと思っていたことがまったく別の魅力として立ち現れるかもしれない。そもそも問題にすらならないかもしれない。それを伝え合うことができる関係性が要となる。

例えば、クラスに馴染めないと学校に行きたがらない子どもがいたとする。ほとんど家族とも喋らないが、自宅では、家庭内で揃う段ボールなどの材料を工夫してオリジナルのスピーカーを作っているのだという。「それ、面白いね。一緒に音を味わってみよう。」と言ってくれるアーティストと出会ったとしたら、その後この子にどんな変化が起こるだろう。家族や学校関係者は、これまで子どもとアーティストを引き合わせるという選択肢などなかったかもしれないが、これからは選択肢の一つに加えてみてほしいと思う。

一気に多くの人々を啓発するための事業をコーディネートする場合もあるが、個人や少人数でのやり取りの中で発揮できる相談のかたちもあると思う。多種多様な相談者のニーズに、しなやかに出会い、携わっていきたいと考えている。

ただし、一つ踏まえておきたいことがある。それは、文化芸術を取り入れることやアーティストを起用することは、相談者が手を抜くためのお手軽な方法ではない、ということである。アーティストは、価値が定まっていないことや約束されていないことに情熱を注ぐし、芸術は、問いを抱え続けることの象徴であるとも言えるかもしれない。だから、不安に駆られる連続かもしれないし、問いは深まる一方かもしれない。しかし、こうして鍛えられていくことで、私たちはようやく、人と社会の両方へ働きかけようとする入り口に立つことができるのではないだろうか。こんなことを言うと、もう明日から誰も問い合わせてくれないかもしれない。でも、京都の片隅で、生真面目に不器用に考えつづけている場所が、一つくらいはあってもいいではないかと思う。

Chapter 2

Reseach

京都市内の福祉施設等の文化芸術活動の状況についてのアンケート調査

新型コロナウイルス感染症の影響が大きく広がってゆくにつれ、社会の諸活動に大きな制約や制限が生じ、文化芸術活動もまたその大波に呑まれていった。本年度のリサーチは2つの時期に集中的に実施した。第1回は2020年5月、第2回は2020年12月～ 21年1月である。第1回リサーチは市内の20団体を対象としてヒアリングを実施した。その内訳は、文化・福祉・市民活動の拠点として施設運営を行う団体が14件、文化芸術表現活動のコーディネートやアウトリーチを行う団体が6件であった。新型コロナが発生して間もない時期であり、その影響を知ることが目的であった。その結果、公営の事業所の活動停止や、密を避けるという難題に直面しながらも、新たな工夫を模索する姿が浮かび上がった。第2回リサーチでは、市内の障害者施設、高齢者施設、子ども・子育て支援施設等を対象に、文化芸術活動の有無やコロナ感染症の影響などを伺うアンケート調査を実施した。発足したての SW/AC 事業の周知と今後の事業計画の策定を視野に入れたリサーチである。回答は167件であった。コロナの影響を把握するだけではなく、文化芸術活動の実態とその課題、問題点を明らかにすることに重点を置いた。回答団体のうち約6割が文化芸術活動に携わっており、文化芸術の役割・機能をあらためて知ることができた。それらのニーズについてアーティスト側は必ずしも認識しているとは限らない。その間にあって関係をつないだり創ったりするのが SW/AC の仕事であり、そのために読み込まねばならぬ多くの情報が今回のリサーチデータには詰まっている。本報告書では主に第2回調査の結果を記載した。（中川眞）

調査に至る経緯

新型コロナウイルス感染症に伴う初めての緊急事態宣言が発令された2020年4月中旬、京都市では、市内に拠点を持つアーティストや彼らを支える個人及び文化芸術活動を行う団体に対して、状況を把握し、活動を再開するための支援施策を検討するためのアンケート調査[*1]の実施計画が立ち上がっていた。

6月に開設を控えていたSocial Work / Art Conference（SW/AC）では、福祉、医療、教育などの領域に関わる専門機関や、支援団体、コミュニティなどからも相談に応じることを想定しており、文化芸術関係者と同様の実態調査が必要なのではないかと考えた。しかし、未曾有の事態の中でいのちを守るための対応に追われているであろうこれらの分野に対し、文化芸術にまつわるアンケート調査に協力してもらうことに慎重にならざるを得ず、SW/ACでは、HAPSが過去3年にわたって実施した、文化芸術によって社会包摂を目指す活動を行う市内外の事例調査を通じて関わった団体に対し、感染拡大による活動への影響をヒアリング[*2]し、文化芸術の側からどのようなサポートが可能なのかを検討していくことになった。

これらの団体では、身体的、社会的に支援を必要とする人々のケアを本務とする場合や、そうした人々に文化芸術活動をコーディネートする役割を担っていることが多い。そうした現場では、そもそも接触を避けることができず、オンラインへの活動の切り替えも難しい状況にあった。さらに、感染症対策として本人との接触を減らすこと、また表現活動を制限することで、これまで提供できていた運動やコミュニケーションの機会が減ってしまい、支援へもさまざまな影響が出ていることがわかってきた。

その一方で、事業所と在宅での支援を組み合わせて表現活動を継続するといった工夫も聞かれた。ヒアリングを通して、このように困難な状況においては、新たな活動をつくり出すための支援だけでなく、補助金や助成金の活用状況を訊ねたり、活動の工夫例を何らかの形で共有、周知したりすることも、支援になりうることが徐々に分かってきた。

感染拡大が多少抑制された11月より、SW/ACの相談事業の周知も兼ねることで、再び福祉分野へのアンケート調査を実施することを京都市と検討することになった。調査の目的、対象、集計方法等について協議を重ねた末、12月から1月にかけて市内の障害者施設、高齢者施設、子ども・子育て支援施設等を対象に、文化芸術活動の有無や新型コロナウイルス感染症の影響などを伺う「京都市内の福祉施設等の文化芸術活動の状況についてのアンケート調査」を実施した。

次頁からは、本調査の報告（一部抜粋、HAPSウェブサイトに全編公開）を掲載する。調査結果からは、文化芸術活動が福祉の分野においてどのように取り組まれているのか、意義や目的を何とするのか、障害のある方、高齢者、児童など支援対象の異なるそれぞれの事業所で取り組まれている文化芸術活動の事例などについて知ることができる。

また、本報告書のために調査設計・分析・考察に関わった樋口氏による新たなテキストとSW/ACによる考察を収録した。

本アンケート調査は、文部科学省科学研究費補助金「アジアにおける社会包摂型アーツマネジメントモデル形成と応用」(代表、中川眞)を一部使用して実施。

1 「京都の芸術家等の活動状況に関するアンケート」として実施（第1回:2020年5月7日〜5月20日、第2回：2021年1月14日〜2月2日）

2 HAPSは、京都市の2017年度「文化芸術で人が輝く社会づくりモデル事業」および2018年度「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」、2019年度「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」を通して、文化芸術によって社会包摂に取り組む団体に向けた事例調査を実施した。京都市内の事例調査先のうち回答のあった20件を対象にヒアリングを行った。ヒアリングは、非公表にあくまでも近況を伺う程度のもので、質問項目についても会話の流れに合わせて柔軟に変更した。

京都市内の福祉施設等の文化芸術活動の状況についてのアンケート調査報告

データ集計・文｜吉澤弥生（共立女子大学文芸学部教授）

調査の概要

京都市及び一般社団法人 HAPS は、福祉をはじめとする多様な分野と文化芸術をつなぐための相談事業「Social Work / Art Conference」（SW/AC）の開設を機に、京都市内の社会福祉施設等3,419件（障害者施設等642件、高齢者施設等1,888件、子ども・子育て支援施設等889件）を対象に、文化芸術活動に係る実態調査を実施しました。

実施期間｜2020年12月15日（火）－2021年1月8日（金）　25日間

調査方法｜質問票（インターネット・ウェブフォーム）

※ネット環境がない事業所16件に限り郵送法を併用した。
※ウェブフォームは、Questant（株式会社マイクロミル）を利用した。

調査対象｜3,419件

※京都市内の社会福祉施設等のうち、「高齢者施設等」「障害者施設等」「子ども・子育て支援施設等」を対象に抽出した。

回答率等｜回収数：167件
回収率：4.9%
有効回答数：167件
有効回答率：4.9%

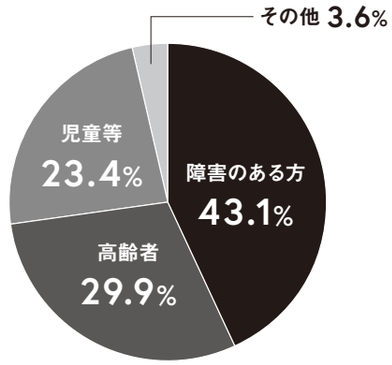
※アンケートのウェブフォームの URL が記載されたハガキを登録されている住所（3,424事業所）に送付、回答を依頼した。そのうち宛先不明で返送されたものが5件あったため、対象数から省いた。
※本報告書内に表記されている割合の数値は、少数点第2位を四捨五入しているため、誤差が生じている箇所がある。

調査委員：樋口貞幸、吉澤弥生
奥山理子、小泉朝未（ともに、一般社団法人 HAPS）
監修：中川眞
調査協力：大澤寅雄
ウェブフォーム：合同会社琉球ラボ

基礎情報

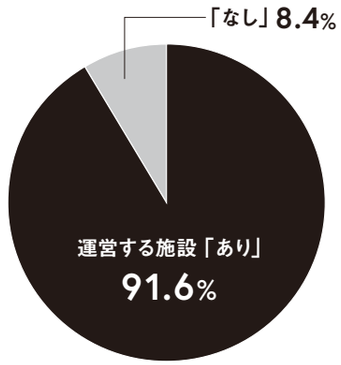
主な支援分野｜回答数167

	件数
障害のある方	72
高齢者	50
児童等	39
その他	6
全体（n）	167



運営する施設の有無｜回答数167

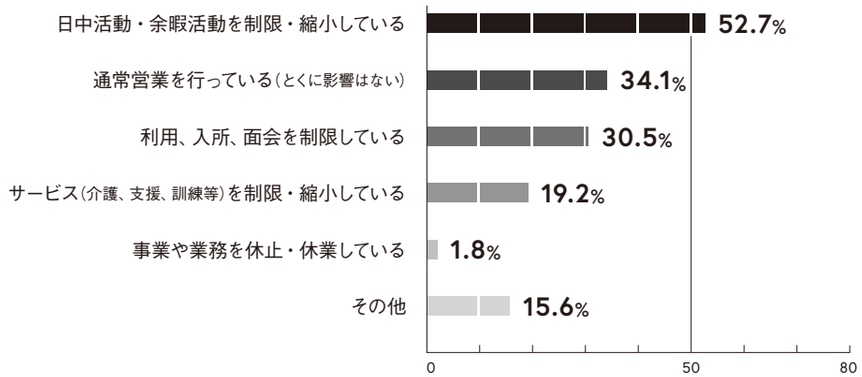
	件数
施設あり	153
なし	14
全体（n）	167



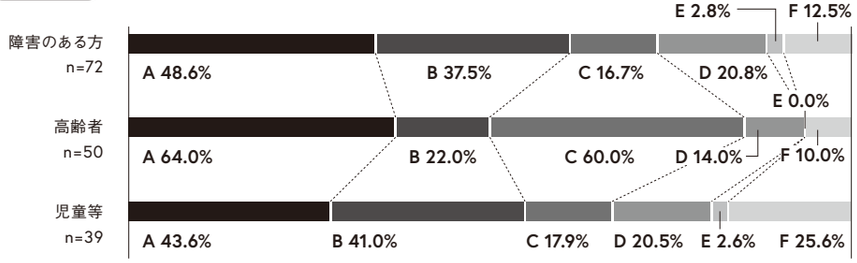
新型コロナウイルス感染症の影響について

Q1 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う貴事業所・団体の運営状況について教えてください

回答数167 | 複数選択



クロス集計



A ■ 日中活動・余暇活動を制限・縮小している
B ■ 通常営業を行っている（とくに影響はない）
C ■ 利用、入所、面会を制限している
D ■ サービス（介護、支援、訓練等）を制限・縮小している
E ■ 事業や業務を休止・休業している
F ■ その他

※「その他」の回答

【障害のある方】職員は支援終了後テレワーク／事業所として日中余暇活動の制限は行っていないが、利用者からの希望により個々に制限がかかっている／移動支援は、繁華街など人の集まる場所の制限を、行なっています／希望する利用者は在宅にて通常運営を実施／一部在宅支援を利用している／通常運営を行なっているが、影響はある／食事を2グループに分けている／感染対策を実施しながら通常運営を行っているが、面会については制限している／感染拡大しないようにできる限り3密を避けるよう留意して活動を行っている

【高齢者】人を集める形でのイベント等を控えている／日課となった消毒作業、訪問面接前後の手指消毒、帰所時の手洗いと消毒、執務室の常時換気と加湿／面会：ガラス越し、オンライン／通常運営しているが影響はある／家族面会を制限（オンラインのみ）

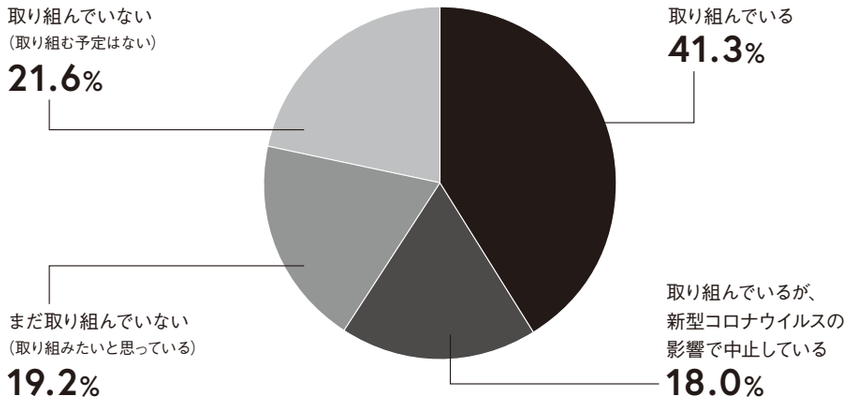
【児童等】感染予防対策をとった上で通常に近い形で運営／通常運営だが、コロナの影響はある／どうすれば実施できるのかを考えながら事業展開している／自粛期間は各家庭に家庭保育の協力をお願いしていたが、保育室は閉めることなく運営するように要請されていたため、運営していた／取り組みには予約制にして密にならないようにしている／感染拡大防止に努めながら、事業を実施／清掃、消毒、衛生面での配慮など丁寧に行っている。活動に制限はないが、3密にならないよう配慮している／内容によって縮小／事業や行事など、縮小、内容を変更して行っている／行事等、制限、縮小している

【その他】感染防止対策を行いながら運営を継続／コロナ感染予防対策を行っている

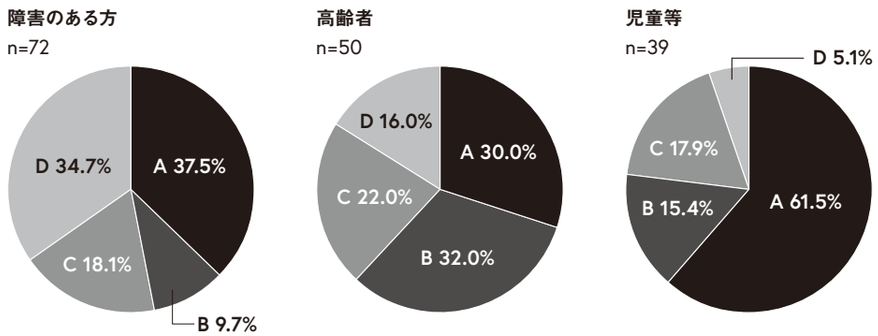
文化芸術活動について

Q2 貴事業所・団体では、平素から「文化芸術活動」に取り組んでいますか？（「文化芸術活動」は、日中活動・余暇活動、芸術療法等での文化的な活動を含みます）

回答数167 | 単一選択



クロス集計

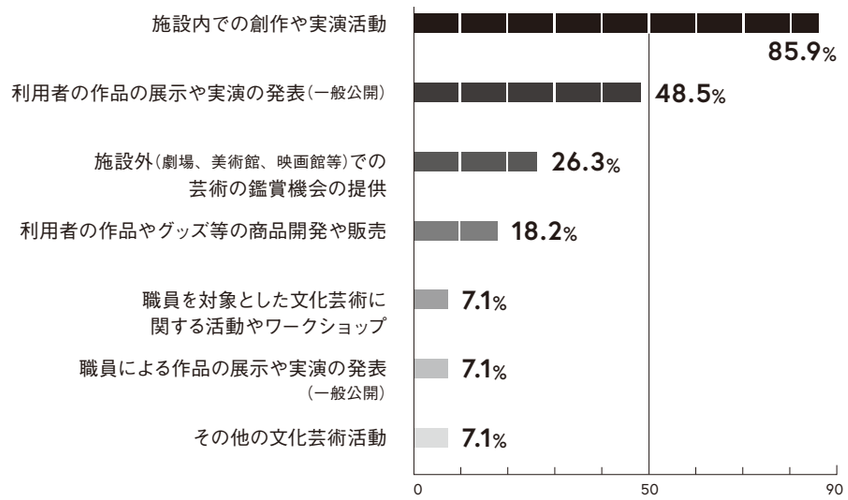


A ■ 取り組んでいる
B ■ 取り組んでいるが、新型コロナウイルスの影響で中止している
D ■ まだ取り組んでいない（取り組みたいと思っている）
E ■ 取り組んでいない（取り組む予定はない）

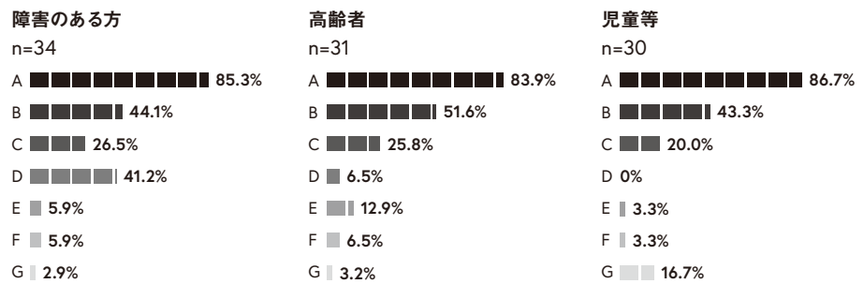
文化芸術活動について

Q2-1 貴事業所・団体では、どのような文化芸術活動（プログラム）に取り組んでいますか？

回答数99 | 複数選択



クロス集計

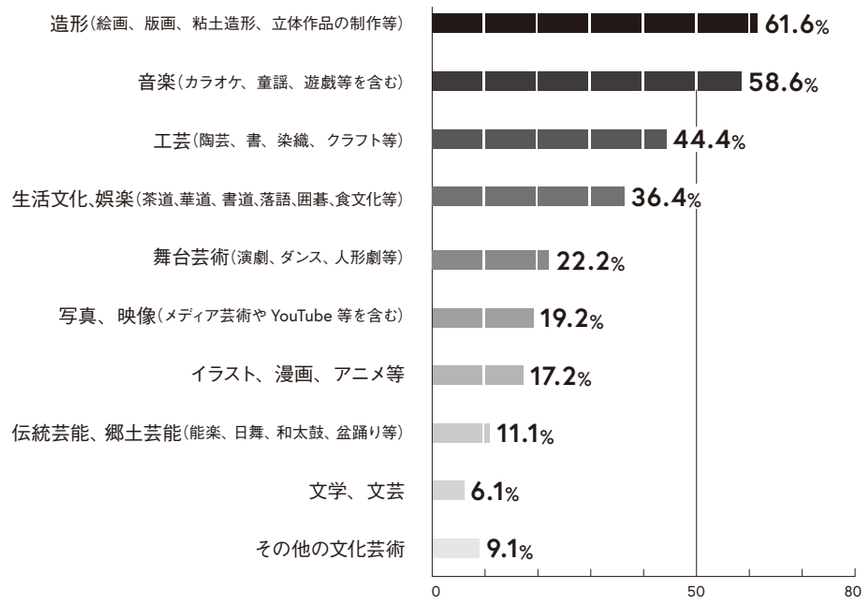


A 施設内での創作や実演活動
B 利用者の作品の展示や実演の発表（一部公開）
C 施設外（劇場、美術館、映画館等）での芸術の鑑賞機会の提供
D 利用者の作品やグッズ等の商品開発や販売
E 職員を対象とした文化芸術に関する活動やワークショップ
F 職員による作品の展示や実演の発表（一般公開）
G その他の文化芸術活動

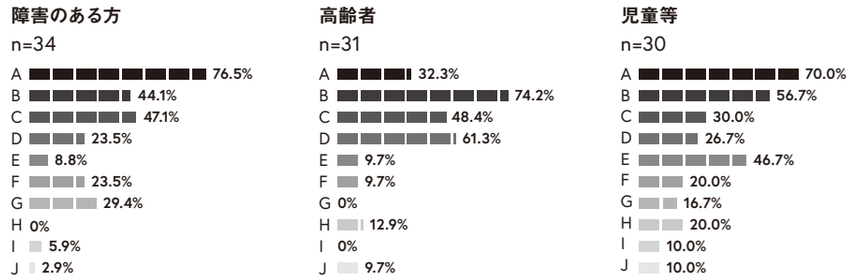
※「その他の文化芸術活動」
【障害のある方】工芸織物の製作販売
【高齢者】植物を介した地域のつながり
【児童等】児童対象のダンスをする機会の提供／演劇、歌、創作劇、パネルシアターなど外部からの出演／絵画、工作、幼児クラブでの陶芸など／施設内での音楽鑑賞など

Q2-2 貴事業所・団体では、どのような文化芸術活動（分野・ジャンル）に取り組んでいますか？

回答数99 | 複数選択



クロス集計



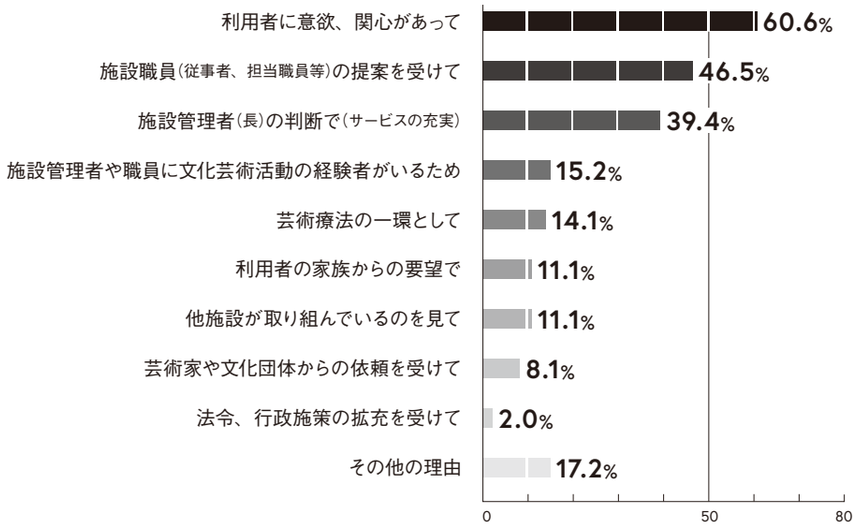
A 造形
B 音楽
C 工芸
D 生活文化、娯楽
E 舞台芸術
F 写真、映像
G イラスト、漫画、アニメ等
H 伝統芸能、郷土芸能
I 文学、文芸
J その他

※「その他の文化芸術」
【障害のある方】大道芸（紙芝居、南京玉すだれ、バルーンアート、皿回し）
【高齢者】HAPS さんと共同実践／担当利用者が作成した作品や地域の高齢者サークルの作品 (編み物・折り紙など)
【児童等】百人一首かるた／児童文化全般／和太鼓
【その他】伝統芸能（サムルノリなど）、K-POP／町を舞台に見立ててのパフォーマンス

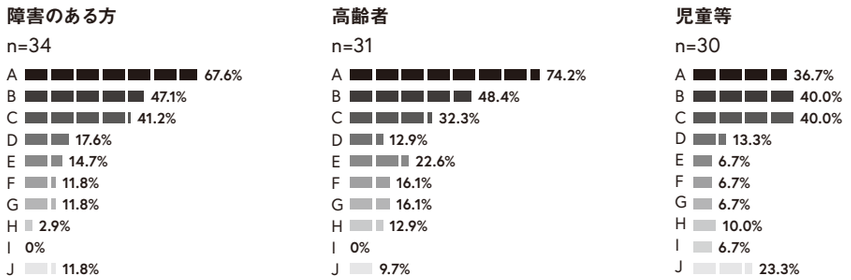
文化芸術活動について

Q2-3 貴事業所・団体で文化芸術活動に取り組むようになった経緯（理由）はなんですか？

回答数99 | 複数選択



クロス集計

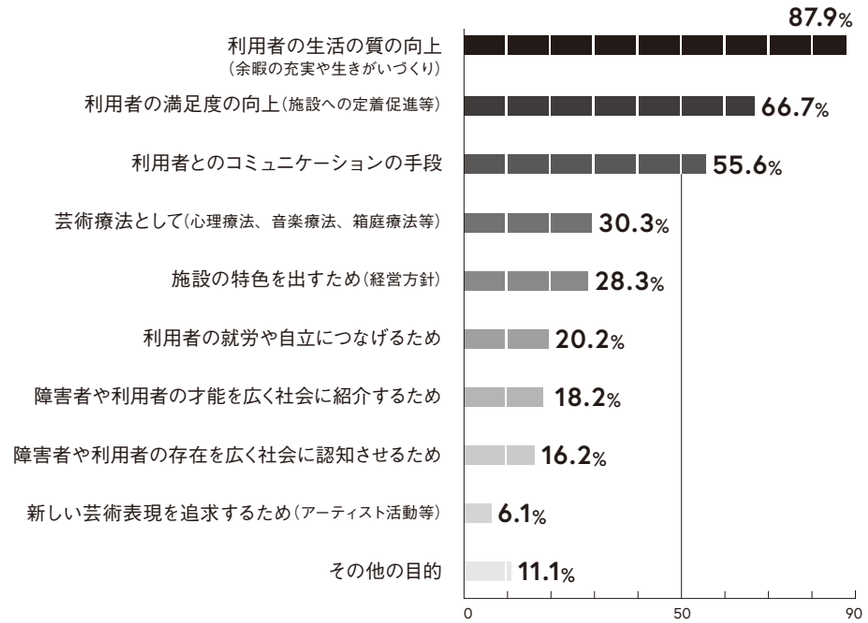


A 利用者に意欲、関心があって
B 施設職員（従事者、担当職員等）の提案を受けて
C 施設管理者（長）の判断で（サービスの充実）
D 施設管理者や職員に文化芸術活動の経験者がいるため
E 芸術療法の一環として
F 利用者の家族からの要望で
G 他施設が取り組んでいるのを見て
H 芸術家や文化団体からの依頼を受けて
I 法令、行政施策の拡充を受けて
J その他の理由

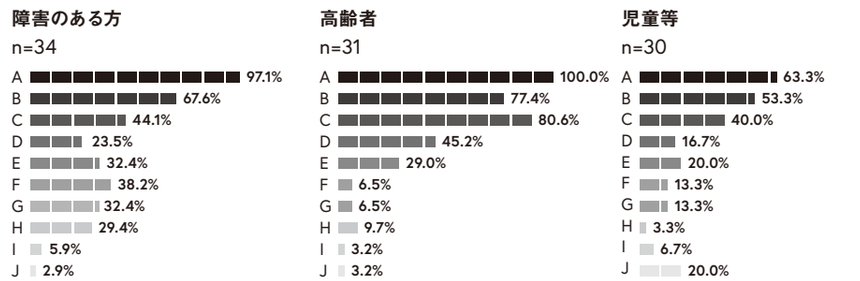
※「その他の理由」
【障害のある方】運営方針に定めています／みんなで合奏するのが楽しいから／日中活動の一環として／作業の空き時間を過ごすため文化芸術活動とは言えないかもしれません
【高齢者】地域活動と職員研修の場として／社としての取組／地域のイベントに参加し、周知・普及啓発するため
【児童等】芸術・文化にふれる活動／利用者のニーズ・希望／利用者（児童）に機会を提供するため／芸術に触れる、教育活動の1つとして。継続して取り組んでいるから。保育の中で児童たちに豊かな経験や表現活動が必要と考えているので。
【その他】訪問者との交流を盛り上げるため／画一的で貧しい価値観しか有しない社会を変えるため／特に文化芸術と意識している訳ではないが、保育内容が芸術活動そのものであったり、切り離せない内容であるので、日々取り組んでいる。

Q2-4 貴事業所・団体での文化芸術活動の目的はなんですか？

回答数99 | 複数選択



クロス集計



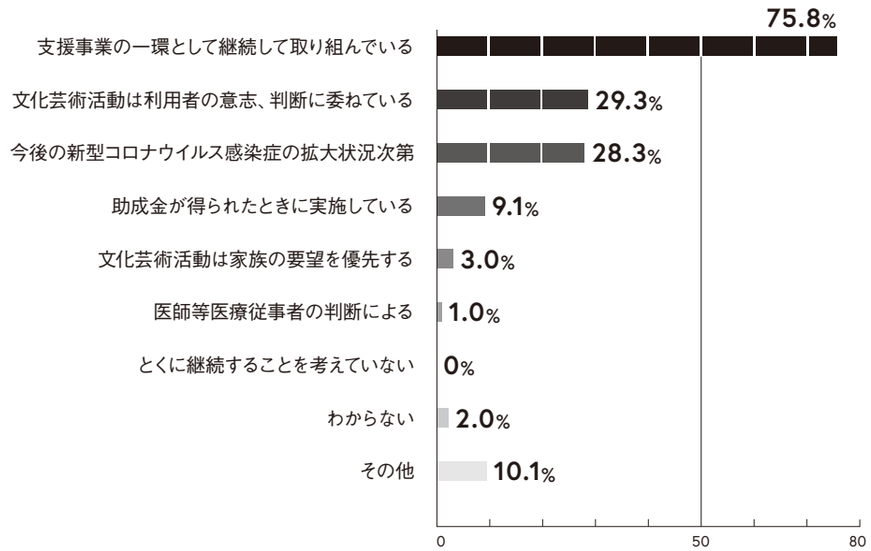
A 生活の質の向上
B 満足度の向上
C コミュニケーション手段
D 芸術療法
E 施設の特色
F 就労や自立
G 才能の紹介
H 存在の認知
I 芸術表現追求
J その他

※「その他の目的」
【障害のある方】日常の作業（西陣織製作）
【高齢者】取り組むことが職員の人間的魅力の向上に繋がりそれがサービス内容の向上に繋がると考えている為
【児童等】子どもたちが芸術文化に親しみ、身近に感じたり、感性をみがくため／利用者（児童）の経験拡大／芸術に触れる活動の機会／発達にあった発表をすることで成長を保護者と確認し、喜び合うため。／保育の中で子どもたちに豊かな経験や表現活動が必要と考えているので。／子どもたちに様々な文化や芸術を伝えるため
【その他】訪問者と文化交流するため／画一的で貧しい価値観しか有しない社会を変えるため／子どもの心、豊かな感性を育てるため

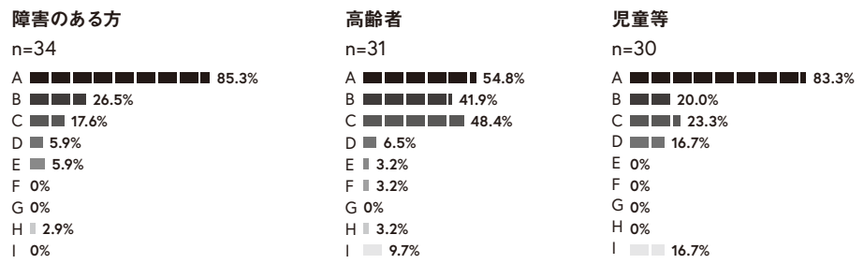
文化芸術活動について

Q2-5 貴事業所・団体では文化芸術活動に継続して取り組んでいますか？

回答数99 | 3つまで



クロス集計



A 支援の一貫として継続
B 利用者の意志、判断
C 感染症の状況次第
D 助成金を得られたとき
E 家族の要望を優先
F 医療従事者の判断
G 継続は考えていない
H わからない
I その他

※「その他の理由」
【高齢者】新型コロナの状況を踏まえて出来る形を模索しつつ取り組みたい／感染状況が収まれば再開したい／「文化芸術」活動といえるようなものは行っていないので答えにくいです。
【児童等】子どもの成長に必要だと思うから鑑賞や取り組みを行っている（コロナ禍下だからこそ必要だと思います）／「新しい生活様式」の中でできる活動を考えて活動していきたい。／歌やお遊戯などは保育の一環である。／保育の一環として継続して取り組んでいる／感染予防をしながらもできる工夫をしていきたい
【その他】利用者の意志、判断以前に法人の使命として取り組んでいる／保育内容から切り離せない

Q2-6 取り組んでいる文化芸術活動について、どのような取り組みをしているか、概要をお聞かせください。

取組概要3つまで

障害のある方

取り組み1

- こころのネットワーク事業の作品展やパネル展示への出展
- 京都とっておきの芸術祭出展に向けて
- アート作品の制作・展示発表・製品化
- 代表も含めスタッフは現役のミュージシャンが多数在籍している為【日本一質の高い音楽会】を目指して企画している
- 絵画、その他創作活動の支援。発表。SNS を通じて発表している。
- 美術クラブ
- 絵画制作中心
- 臨床美術を学んだ講師を招き、造形活動
- 演劇：利用者の抱える精神障害の啓発。
- 地域のまつりでの展示会に参加
- 施設内で陶芸教室を開催している
- ボランティアによる書道教室、お茶など
- 毎日の作業としての西陣織
- 創作物の作成、展示、販売
- 主にイラストレーターやフォトショップなどのデザインソフトを使って制作した作品を所内ポスターや授産商品（ポストカード等）として使用する
- 絵画
- 廃材（古い着物）を利用したアートパネルの販売
- 生活介護の取り組みの中での創作活動（絵画や紙漉きにての大きな漉き紙製作）
- 陶芸
- 音楽療法（音楽療法士による音楽療法プログラムの実施）
- 毎月1～2回程度の写真、芸術、音楽、新喜劇、自主研究（趣味を深める。漫画やアニメを楽しむ人もいる）
- 日中プログラムの中で創作活動を行なっている。自分の描きたい題材を自由に選んでもらい、自分の使いたい画材を選んでもらい描いている。
- 作業で取り組んでいる和紙を使った創作活動
- 音楽療法（外部より講師に来ていただく）
- 絵画、切り絵などの創作
- 臨床美術
- 創作活動
- 芸術一般的鑑賞
- 色鉛筆、スケッチブックをそれぞれの方用に用意をして、作業の空き時間に自由にスケッチ、または塗り絵などをしていただいている

取り組み2

- 法人内でのイベントでの活動発表（作品展、文化祭、個展など）
- 陶芸、クラフト
- 天才アート作品提供
- バンド演奏の練習と発表、レコーディング
- ハーバリウムやメモ立て、コースター、ビジョンマップなどの作成
- とっておきの芸術祭への出品
- 大道芸：南京玉すだれをはじめとした活動。依頼に応じて他施設で公演も実施。
- コロナの影響で日中余暇活動が制限される為、人が少なくプライベートな空間が作れる
  るり渓にキャビンを購入し支援にも活かせるよう計画している
- 全国の関連施設と連携して展示や発表、販売の機会を設けている。
- フォークダンスの講師を招き、ダンス活動

取り組み3

- 就労継続支援B型事業所のフラワーアレンジメント事業／作品制作・販売、地域団体等でのワークショップ
- 歌、カラオケ、音楽療法
- 季節行事の創作活動として
- 療法としてのアート・音楽（臨床美術・音楽療法）
- 映画鑑賞

文化芸術活動について

Q2-6

・書道の講師を招き、書道活動
・地域へのチラシ配布に、作品紹介
・時々取り組む絵画やとっておきの芸術祭に向けての製作活動
・障害当事者の出張紙芝居公演鑑賞
・不定期で近隣の銀行のロビーに展示させてもらったこともある。
・SNS による、作品の公開や自主製品の案内
・ボランティアさんによる三味線演奏会を年に１回程度行っている

高齢者

取り組み 1

・生け花教室：華道の免許保有の先生を雇って月１回開催。材料費のみ参加者から徴収。
・放課後等デイサービスでの創作活動
・カラオケ
・木工製品を企業や行政と連携して製作、販売している。
・アクリルボックスを利用した作品制作と展示（WEB を含む）
・書道
・週一物作り
・音楽療法（法人内職員に音楽療法士在職）
・書道で季節に応じた文字を書いてもらっている
・ボランティア団体による音楽などを鑑賞している（コロナウイルスにより中止している）
・カフェの開催、地域の子供さんも店員になる。
・崇仁文化祭
・塗り絵
・生け花クラブ　利用者が思い思いに生花をいける。
・地域の民謡同好会に場所貸しで施設スペースを利用していただき、その会にご入居者、ご利用者も参加している。
・クラブ活動としての取り組み（書道、陶芸等）
・月１回施設内の陶芸室にて陶芸作品を作成、施設内に展示。
・クリスマス会等のイベントで、利用者様と職員でピアノを一緒に弾き、皆さんに歌ってもらう
・季節イベント装飾
・施設内の作庭
・日常的なクラブ活動として折り紙クラブ、編み物クラブ、お茶の会、コーヒーを楽しむ会など
・書道
・民族的な音楽、舞踊の観賞、実演
・施設内の庭園を利用した園芸活動
・書道クラブ
・習字
・書道

取り組み 2

・書道クラブ；書道家のボランティアによる月１回の開催。材料費のみ参加者から徴収。
・臨床美術という、アートプログラムを専門家へ委託契約により、利用者に提供している。
また、演劇ワークショップを実施し、異業種連携で取り組んでいる。
・合唱
・音楽療法
・SKY フェアに出展
・今はコロナで中止しているが、月１回外部ボランティアによるコーラスの会を実施
・地域の小学校の作品展に参加（コロナウイルスにより中止）
・空想の街をつくり、イベントをしかける。
・貼り絵
・音楽療法　講師に来園頂き実施していたが、現在コロナ禍の為、休止中。
・外部ボランティアの方が来訪しての催し物
・月１回施設にて華道作品を作成、施設内に展示。
・地域の詩吟同好会に場所貸しで施設スペースを利用していただき、その会にご入居者、ご利用者も参加している。施設の祭りの機会に発表会をしている。
・利用者様が各イベントに関連する創作物を作り、事業所に展示する
・工作活動
・私自身がバイオリンやコントラバス、ピアノ、オカリナなどを趣味程度にしてますのでお昼時やイベントなどで演奏
・民謡
・地域の方々とのタペストリー制作

Q2-6

・書芸（日本語、韓国語、中国語）
・生け花クラブ
・茶道
・外部団体による公演

取り組み 3

・手芸クラブ；機能訓練指導員による月１回の開催。材料費のみ参加者から徴収。
・利用者の主体的な活動として、絵画や音楽活動を実施し、地域で披露するなどしている。
・手芸や工作での作品作り
・書道
・サークル（茶道・華道・書道）
・その他、貼り絵や絵手紙など色々な創作の余暇を実施
・ホーム内の、飾りをアーティストが手がける。
・芸術鑑賞
・お茶クラブ（茶道）講師に来園頂き実施していたが、現在コロナ禍の為、休止中。
・月２回施設にて書道作品を作成、施設内に展示。
・カラオケ
・ボランティアの方に来ていただき、様々な音楽会を行っていただいたり、マジックを観たりしている。今はできませんが…
・近隣の支援学校との交流演奏会の企画
・華道

児童等

取り組み 1

・百人一首
・音楽療法
・ミュージックケア
・施設内での創作活動
・楽器（バンド）演奏、職員がサポートする形で
・演劇等鑑賞
・段ボールや牛乳パック、新聞紙などの廃材を使った工作
・折り紙
・季節に応じた制作活動（クリスマス飾り、お正月飾りなど）
・人形劇
・ダンス発表
・切り絵のクラブ活動
・コンテンポラリーダンス
・マリンバコンサート
・児童館まつり　地域住民とのコミュニケーションと交流を促進する活動
・外部出演者(助成金を利用して）に依頼して、和太鼓、人形劇、パネルシアターなど
・幼児とその保護者が陶芸を楽しむ。
・生活発表会
・音楽鑑賞

取り組み 2

・書道
・陶芸、造形、絵画、写真などの芸術全般
・図画工作
・地域の店舗での展示スペースの交渉、展示
・写真・絵画（内外コンテスト等）、施設対象の外部コンクールへの出展や、施設内で子どもたちや職員の撮影した写真コンクールを実施
・民舞の練習と発表
・色鉛筆やクレヨンなどをつかったお絵かき
・段ボール工作
・自己表現のための制作活動（自分が着てみたいと思う服をデザインして実際に使ってみるなど）
・歌
・音楽鑑賞
・クラフト作品発表
・将棋のクラブ活動
・他機関との連携による演劇鑑賞
・きりえクラブ　興味を持った児童・保護者を対象に活動を行い、地域の作品展に展示している。
・ 職員の演奏や劇（劇、パネルシアター、ブラックライト、吹奏楽、和太鼓など）
・小学生がテーマによる絵画をする。
・作品展
・人形劇鑑賞
・和太鼓
・音楽鑑賞

文化芸術活動について

Q2-6

・歌や踊りの上演（和太鼓含む）
・人形劇
・絵画活動
・音楽鑑賞

取り組み 3

・将棋
・こまどりアニメーション
・博物館での年１回、展覧会の実施
・書道・華道（ボランティアによる）
・日常の自由工作活動
・ハマっているものや好きなものを文章、イラストなど好きな形で表現・紹介してもらい廊下に張り出し「美術館」という形でみんなに見てもらう
・オンラインでの紙芝居などを模索中
・踊り（体操）
・人形劇鑑賞
・季節の工作の取組
・将棋クラブ　興味を持った児童が活動を行い、大会にも参加している。
・学習会
・和太鼓・盆踊り
・ねん土を使っての造形活動
・お正月遊び（獅子舞）

その他

取り組み 1

・日常的に、利用者は朝鮮半島の歌をうたい、職員がチャンゴを叩く時間があり、季節のイベントでは民族衣装を身にまとい、リズムにあわせてみんなで身体を動かしている（踊っている）。
・マンガを用いて難病について知って頂く広報活動。
・日々の仕事として、絵画、詩、その他の創作活動を行い、展覧会グッズ化等、様々な手法を用いて発信している。
・造形活動、絵を描く、工作など

取り組み 2

・朝鮮学校の声楽部、朝鮮歌舞団、書の先生、漫画家、韓国の伝統芸術家、韓国の若手歌手などを来訪者として迎え、歌舞音楽を楽しんだり、書や似顔絵描きなどの機会を設けている。
・染織を講師から本格的に学び、商品化に取り組んでいる。
・戦隊ヒーローに扮して行う地元・上賀茂の清掃活動を 2008 年より展開（毎月第 3 水曜日）。
・音楽活動、歌を歌う、楽器遊び、踊り、和太鼓など

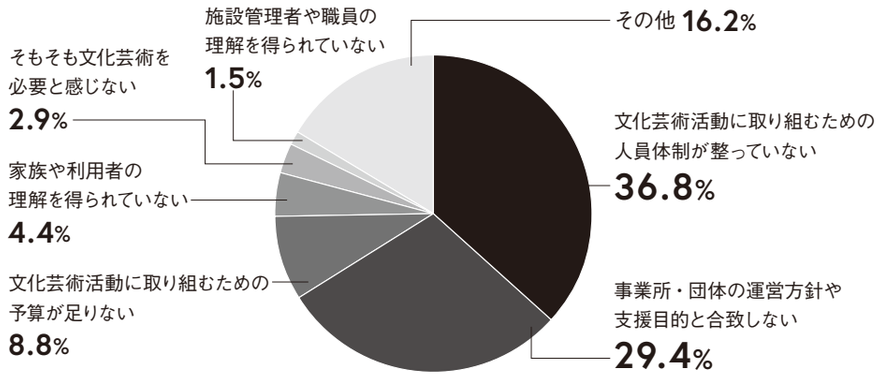
取り組み 3

・各地からの学生や人権教育・文化交流の訪問者が来られたときには、利用者が歌を披露したり、訪問者に歌ってもらったり、一緒に歌ったりなど文化による心の疎通をはかっている。
・公共性の拡大を主な目的として、施設の図書館化を進めている。
・絵本読み聞かせ、パネルシアター、人形劇など

※自由記述の内、明らかな誤字・脱字は修正した。
※回答者が特定されうる固有名詞については割愛した。

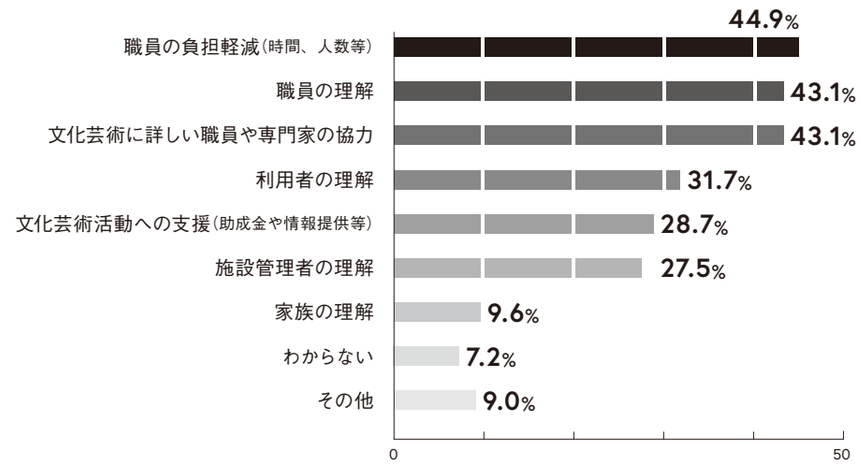
Q3 貴事業所・団体で文化芸術活動に取り組んでいないもっとも大きな理由はなんですか？

回答数68 | 単一回答



Q4 文化芸術活動に取り組むために必要なものは何ですか？

回答数167 | 3つまで

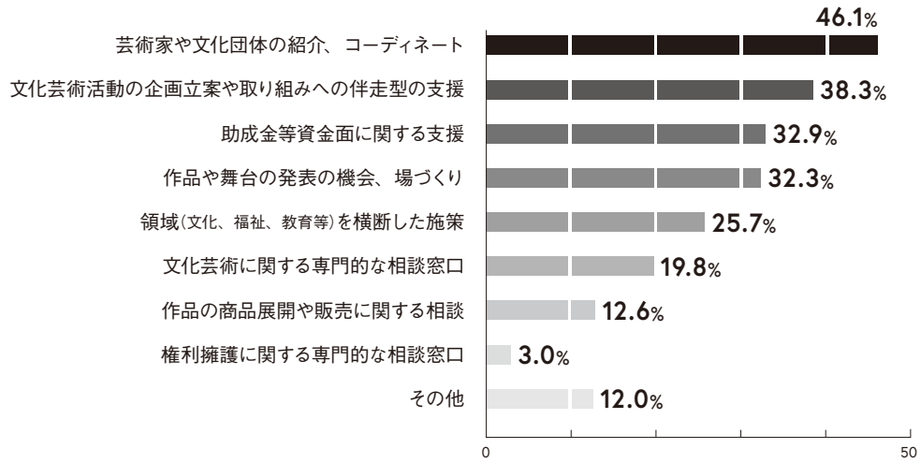


※「その他」の回答
【障害のある方】働く A 型事業所で利用者がもとめていません。／就労継続支援 A 型事業所のため、取組を求められていない。／時間的な余裕がない／販売ルートの確保／予定なし
【高齢者】専門家の、高齢者に対する理解／実施する際の、プログラムや運営がうまくいかないことがある。／先ずは、支援側の活動に対する理解／その意義についての学び
【児童等】地域の中で鑑賞など取り組めるスペース／コロナ禍での活動ガイドライン／予算がない中での実施なので、協力してくれる方を探す
【その他】文化芸術活動を楽しむ心／特に文化芸術活動として取り組んでいる訳ではなく、保育の一環として取り組んでいる状況

文化芸術活動について

Q5 文化芸術活動に取り組む上で、どのような支援が必要ですか？

回答数167 | 3つまで



※「その他」の回答

【障害のある方】わかりません／人員確保／障害者支援による報酬と文化芸術活動がリンクすることを理解できる行財政局職員の育成／場所、スペース／取り組むつもりはない／就労継続支援 A 型事業所のため、取組を求められていない。／予算が欲しい／余暇活動で個々に取り組まれたらいいかと思います。／分からない／予定なし

【高齢者】人材不足／他施設の取り組みを知りたい／（共生社会）活動イメージの共有／わからない／とにかく人材不足、その改善が必要

【児童等】オンラインでの活動を支援してほしい。／働く職員の負担軽減

【その他】必ずしも必要ではないが、あればより内容や活動の幅が広がる

Q6 京都市の文化芸術支援施策（Social Work / Art Conference 事業含む）に期待することを、ご自由にお聞かせください。

自由回答

障害のある方

・知識の無い、利用者、支援者に一から教えていただける環境を作ってもらう事。
・希望する方が任意で集まれるセンターのようなものがあれば A 型でも支援できるでしょう。
・より多くの団体が、より頻繁に活動や製品・成果の発表の機会を得られるようにしてほしい。
・芸術関係や伝統工芸等に興味をお持ちの方がおられるので、就労に繋がるような見学や体験・実習など受け入れておられるところとの橋渡しや案内をして頂けると助かります。
・アンケートだけはなく、どんなことをしているのか実際にアトリエに来て頂いて見てほしいです。是非お越し下さい。
・支援職員は芸術の素人なので、作品の評価や見せ方のアドバイスなどがほしい
支援を受ける側だけでなく、芸術、美術を提供する側の新たな雇用の機会や活躍の場が生まれることに期待します。
・とっておきの芸術祭や北区民文化フェスティバルふれあい発表会には、毎年参加させていただいていますが、こうした発表の場や審査していただく機会があると大変うれしいです。
・アドバイスをいただける専門家の派遣など考えてください。
・様々な人たちが、自由に参加できる場として期待します。その中で差別や偏見なく学べる機会を多く作ってほしいです。
・当事者の収入面が優先ですが、販路等マーケティングまでを含めた商品開発からの一貫した取り組みが必要であると考えます。
・制作時間と賃金の兼ね合いを素人で考えるのは少し難しいと感じております
・就労系の為、なかなか芸術まで手が回らないのが現実です。芸術系と合わせてなにか授産製品が出来ないかなとは考えてはいます。
・福祉とアートがコラボレーションしていくために、資金面とマンパワーの支援を期待しております。
・利用者の休日の余暇活動の幅が広がればいいと思います。
・利用者支援は職員でできますが、芸術のコーディネートの専門家ではないので、そのサポートをしていただけるのは助かります。
・今後の取り組みを見て、自分たちに活かせるかどうかを検討したい
・コロナウイルス蔓延により今のところなかなか余裕が持てない状態なので、少なくともコロナがおさまる迄は積極的な取り組みがむずかいしいと思われます。
・発表の場の提供 利用者のデザインを取り入れた商品開発など
・具体的な情報発信を望む
・京都ならではの文化に触れる機会を楽しみにしています。

高齢者

・私共は高齢者施設を運営しております。重度化に伴い作品づくり等は難しくなり、映画等の見て楽しむことも長時間は困難な状況である。楽器や歌等の演奏を聴くことが一番効果があるように思います。しかし、皆さん本物志向というか昨今はあまり未熟な技術は望まれず、ある程度プロの演奏者に近い技術がないと満足されないようです。特養では自分たちで何かを発表することは難しく、上手な人に見せていただいて満足していただいているのが現状です。一度現状を見に来ていただいてもよいかと思います。できればバイオリニストの五嶋みどりさんの活動されている団体のように、本物でお年寄りの心を震わせていただけるとありがたいです。
・当施設では、デイサービスなどの支援を受ける立場と捉えられる利用者がいつまでも社会参加し、その人らしい生活の継続を目指した取り組みをしています。自身の今まで取り組んでこられた活動としてや、新たにチャレンジする活動、思いを発信するための活動として様々な意味をもって、文化芸術活動に取り組んでいます。そして、その活動は、レクリエーションにとどまらない、本物の文化芸術に触れ、本物の作品制作や活動にしなければならないと考えています。そのためにも、私たちの様な福祉事業所と一緒にできる事を考え、SDGS を意識した活動となるよう、伴走していただけるとありがたいです。と、抽象的な事を書きましたが、具体的には、高齢者の就労支援の取り組みとして、行なっているものづくりに文化芸術分野とのコラボができ、それぞれの分野の活性化に繋がればと考えています。よろしくお願い致します。
・支援者が文化芸術に親しむ事は利用者の生活の質を向上させることに役立つと信じています。期待しております。
・作品の展示や発表出来る機会を作っていただければと思います。
・京都市の特性を生かしより良い文化芸術支援に繋げていきたいです
・利用者が文化に触れられる場が創出されるといいと思う
・新型コロナウイルスの影響で気持ちが沈んでいる人も多いです。文化芸術などで一人でも多くの方が笑顔になられる取り組みをして下さることを期待しております。
・活動に熱意がある人財を、市外に出す＝京都では活動ができないとならないようにわかりやすい施策を打ち出していっていただければ幸いです。

文化芸術活動について

Q6

・高齢者に限らず、京都市民が気軽にアートや芸術に触れる機会を増やしてもらいたい。
・身近に接する機会があればいいと思う。
・活動に消極的な方も多く、多彩な活動をしても、結局は同じ方が参加するというジレンマがある。多くの方に参加いただけるよう、なにがしかの仕掛けを考えていきたい。導入に関してや運営の場でのレジュメ作成やオーディエンスの巻き込み方のアドバイスが欲しいです。
・ご入居者、ご利用者が地域と繋がる意味でも、人生の一場面で生活を豊かに続けていくためにも、豊かな趣味活動や生きがいとなる活動が必要ですが、現状の施設職員だけでの対応は仕事量としても対応が難しく、また専門性のないものは大人の趣味としては不十分と考えます。専門家と繋がることができるコーディネートがあり、またそのサポート、継続の仕方に関するマニュアルがあると、さらに活動していくことができると考えます。その点のご支援をお願いしたいです。
・このアンケートの主旨がいまひとつ理解できていない為、各設問に適切に回答できていますか？また、施設向けの質問が多いように感じましたが、当方は「居宅支援」を担当する部署であり、回答してもよかったのでしょうか？「様々な社会問題を文化芸術を通じて、解決をはかり、人々の共生を目指す」という内容をもう少し、詳しくお伺いしたかったです。我々は対象者の日常の支援をしていますが、複数の職種が関り、対象者の自立支援を目指しています。それと「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり」というものがどのように関連してくるのか、現在の私では理解できていませんでした。
・文化芸術活動を取り組む事で、ご利用者の生活が豊かになる事を望みます。その為には情報や企画の取得が必要となるため、そこに期待しています。
・高齢者が積極的に取り組むということは、事業所によってはとてもハードルが高いです。観るも造るも施設にどなたかが来ていただくことで取り組めることは増えていくような気がしますが、いかんせん業務の忙しさ故、普段は中々時間を多く割くということは難しいです。またコロナ禍では、いつも以上に感染対策等様々な細かい仕事が増えている状態です。正直文化芸術というところよりも、清掃業者の協力などの直接的な支援がほしいという思いもあります。心豊かにいていただき、楽しみを増やすことはとても大事なので、文化芸術の活用も行いたくはありますが。
・芸術と福祉のコラボレーションで、地域、社会、福祉、芸術などさまざまな分野で効果が発揮できると思いますので、継続な取り組みの期待と、様々な事例を共有できればいいのにと感じております。
・芸術と福祉のコラボレーションを実施することにより、当施設の利用者の生活意欲が高まり、職員のモチベーションも向上しています。一方で、どうしても私たちの経験の無さが芸術家の方々への負担を増やしてしまっているなぁ思うことが多くがあります。私たちと芸術家の方の間に入っていただけるような相談役の存在が必要だと感じているところです。福祉施設が自立して芸術家の方々と協働させていただくには、それ相応の時間と経験が必要であり、可能であれば、京都市の文化芸術支援施策で、コーディネート役のような形で伴走して頂ければ、大変嬉しく思います。
・いつもお疲れ様です。
・民族、年齢、価値観、心身状態などなど、いろんなちがいを尊重できる、誰もが自分らしく生きることができる地域づくりの一翼を担っていただきたいです！
・高齢者と地域住民の関係が希薄となっている時代に、文化芸術を通して地域住民の繋がりができることで公助的な役割を果たし、地域生活が継続できることを期待する。
・日常の厳しい人手不足の中で文化芸術活動を大切に考え位置付けるためには、人手不足の緩和が必要です。またそれと同時に、双方向のコミュニケーションに大きな制約のある人たちが多く暮らしておられる特養ホームにあっては、それでも日常の忙しさを超えてでも意義あるものとして現場の職員たちがしっかりと認識しなければ実行につながりにくい面があります。

児童等

・乳幼児向けの文化芸術支援の充実
・子ども達に本当に日本の文化を伝え、心に残してあげたい気持ちはいっぱいですが結構値段が高額なので悩みます。

Q6

・公の場所の提供。資金の援助。
・文化芸術が高いところにあるのではなく、普通の暮らしの中にあることを促進してください
・文化芸術活動を行っていると答えてきたが実質教室内だけで完結していることなので、地域のアーティストなどお招きしてワークショップなどできたら素晴らしいなと考えている。「繋がれる場」を提供していた開けたら助かります。
・コロナ禍での活動ガイドラインを京都市としてしっかりと出してほしい。
障がいがある子どもたちの作品が、ただ単に【障害者アート】というジャンルで扱われることに違和感を感じています。
・どんな施設であろうと、利用者や職員が楽しみながら、取り組むことが大事であり、それを支援できるような取り組みをやってほしい。
・保育所の子どもたちでも楽しめるものを紹介してほしい。このアンケートは保育所にとっては答えにくいかなと感じました。
・伝統文化を大切にする京都市ですので、伝承発展するための施策が必要です。
・個別の施設に必要な機会、経費の支援があると助かります。文化施設へのアクセスがよろしくない場合の支援など。
・児童に新しい文化、領域を体験させ新たな興味に触れる機会を作っていきたい。
・児童が情緒豊かに育つような身近な取組の提案をお願いしたいです。
・児童館は健全育成や子育て支援を軸に地域社会のコミュニティー機能を復権させ、共生のまちづくりに貢献するために、京都市の文化芸術支援施策の協力を期待します。
・保育所の子どもたちが、文化芸術にふれることが少なくなってきているので、そのような機会があればいいと思っている。例えば、和太鼓の演奏など開くことにより、子どもたちがやってみたいと思えるなど、そのことによりいい刺激になる機会があればと思っています。
・コロナの心配が治まったら、もっと深く文化芸術について関心を寄せられると思います。
今は日々のコロナ対応などで手一杯ですが、このように少しでも文化芸術を守るために動いてくださる方がいることはありがたいです。

その他

・文化施策をとおし、他者を理解し自己を解放する経験が積み上げられていることを、さらに発信していくこと。特に、差別や抑圧、貧困などによる社会的疎外を解決していく取り組みのひとつとしても、文化芸術支援の役割を発揮していただくこと。
・京都市の文化芸術支援施策というものを初めて知ったので、またどのようなものなのか知り、考えていけたらよいと思いました。何も知らずすみません。

※自由記述の内、明らかな誤字・脱字は修正した。
※回答者が特定される固有名詞については割愛した。

調査結果の考察

文｜樋口貞幸（調査設計・分析担当、大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員）

本調査は、京都市と一般社団法人 HAPS が取り組む「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」に基づき実施されたものである。

共生社会とは、「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様なあり方を相互に認め合える全員参加型の社会である」と定義されている[*1]。この理念の実現に向け、多様なソーシャルワーク実践と文化芸術をつなぐ相談事業「Social Work / Art Conference（SW/AC）」が開設されるに際し、今後の事業計画の策定にあたって取り組んだのが本調査である。調査対象は、SW/AC の主要なステークホルダーのひとつである京都市内の社会福祉施設等のうち、「高齢者施設等」「障害者施設等」「子ども・子育て支援施設等」3,419件である。本調査に対し、このうち167件（有効解答率4.9%）から回答をいただくことができた。調査方法はインターネットのウェブフォームを活用し、ネット環境のない一部児童関連施設では質問紙も併用した。

本調査を設計するにあたって着目したのは、福祉施設等が文化芸術活動をどのように捉え、どこに文化芸術の必要性と価値を見出しているのかという点である。残念ながら、回収率は芳しいとは言い得ないが、コロナ禍にあって167件もの回答をいただけたことに、改めて感謝の意を表したいと思う。

回答の詳細は調査報告にゆだねるとして、いくつか特徴的な傾向を紹介したい。

「平素から『文化芸術活動』に取り組んでいるか」との問いに対して、「取り組んでいる」「取り組んでいるが、新型コロナウイルスの影響で中止している」と回答したものが、59.3% と過半数を超えた。このうち、61.6% が「造形（絵画、版画、粘土造形、立体作品の制作等）」に取り組み、次いで58.6% が「音楽（カラオケ、童謡、遊戯等を含む）」に取り組んでいると回答があった。障害者、児童ともに「造形」がもっとも多く、高齢者は「音楽」が多かった。造形活動としては、絵画、スケッチ、塗り絵、お絵描きなどがみられ、音楽では民謡、カラオケ、合唱などの取り組みに力を入れていることがわかった。

文化芸術活動に取り組む〈経緯〉について伺ったところ「利用者に意欲、関心があって」が60.6% ともっとも回答が多かった。片や活動の〈継続性〉に関しては「支援事業の一環として継続して取り組んでいる」が75.8%、次に多かった「文化芸術活動は利用者の意志、判断に委ねている」が29.3% と極端に差がついた。また、その〈目的〉については、「利用者の生活の質の向上」が87.9% と飛び抜けて高く、「利用者の満足度の向上」66.7%、「利用者とのコミュニケーションの手段」55.6%、「芸術療法として」30.3% と続く。

このことから、文化芸術活動に取り組んでいると回答した施設の多くは、「利用者のニーズに対する取り組み」をきっかけに始まり、「利用者の生活の質の向上」や「利用者とのコミュニケーション手段」を目的に、「支援」や「余暇活動」の一環として安定的かつ継続して文化芸術活動に取り組んでいることが窺える。言い換えると、すでに定型化したプログラムが構築されており、取り立てて大きな活動転換を望んでいないようにも見受けられる。

では、SW/AC が相談を受ける上で押さえておきたい点はどこか。それを知るには、回答の内面の部分、すなわち、自由記述をつぶさに読み解いていく必要がある。回答の選択肢にうまく合致しづらいため、数値として現れない意見があるからだ。自由記述をみると、やはりコロナ禍における不安が多く目に付いたが、工夫をこらし、よりよいプログラムを模索する姿も散見される。芸術に親しむこと、文化や芸術を伝えることを責務と捉えるような記述もあった。つぎに、着目したいのは選択回答の中の少数の意見である。文化芸術活動に取り組む目的に「障害者や利用者の才能を広く社会に紹介するため」（18.2%）、「障害者や利用者の存在を広く社会に認知させるため」（16.2%）という、ソーシャル・アクションの一環として文化芸術を活かそうという意見が見られた。もうひとつ着目したいのは、「新しい芸術表現を追求するため（アーティスト活動等）」（6.1%）と活動経緯にある「職員に文化芸術活動の経験者がいる」（15.5%）である。こうした意見は、将来的に SW/AC とのパートナーシップを形成する可能性があることを示唆している。もちろん、現場では慢性的な人手不足、工賃につながらない、利用者ニーズに合致しないという回答も一定数を占めており、人的・時間的な余裕のなさや目的の不一致も伺える。

社会福祉施設の本義は、利用者の生活上の課題に対して働きかけ、利用者に内在するストレングス（強み）を活かして生活の質（QOL）の向上をはかり、もってそのウェルビーイング（人々の福利）の増進を目指していくことにある。ゆえに、社会福祉施設で文化芸術活動を行うにあたっては、利用者の意志が尊重されなければならない。このことは、SW/AC の活動理念あるいは行動指針として、本事業に関わる者全員と共有しておくことが求められる。そのうえで、個別化の原則に乗っ取った、SW/AC ならではの相談支援のあり方を模索していくことが望ましい。

つぎに、文化芸術活動に取り組む上で求められている支援についてみておきたい。もっ

とも回答が多かったのは「芸術家や文化団体の紹介、コーディネート」（46.1%）で、「文化芸術活動の企画立案や取り組みへの伴走型の支援」（38.3%）、「助成金等資金面に関する相談」（32.9%）、「作品や舞台の発表の機会、場づくり」（32.3%）と続く。SW/AC は、ソーシャルワークと文化芸術の双方の専門性を有する相談事業を行っているが、「文化芸術に関する専門的な相談窓口」に対する要望は19.8% と、必ずしも高いとは言いがたい。その他の記述に「わからない」「予定なし」との回答があったように、具体的になにを相談してよいかわからないということもあるが、社会福祉施設の要望の多くは相談支援のその先を求めているという見方もできる。

このことから、これから相談事業が本格的に稼働するにあたって、あらかじめ SW/AC の相談支援の介入のレベルについて方針を定めておいた方がよいと思われる。端的に言うと、相談の範囲に福祉施設等職員のスーパーバイザーとなるスーパービジョン関係を含むのか、事業展開に向けたコンサルテーションやハンズオン支援（現場での伴走型支援）を行うのかということである。活動の進捗に伴い「作品の商品展開や販売に関する相談」（12.6%）、「権利擁護に関する専門的な相談窓口」（3.0%）といった、より実践的な相談が寄せられることも想像に難くない。

なにより、SW/AC が働きかける先は社会福祉施設だけではない。芸術関係者の側への働きかけも重要な役割だ。芸術関係者に文化芸術活動が社会福祉における〈社会資源〉であるという認識が浸透しているとは言い難く、同様に社会福祉施設の側にもその認識は薄い。また、社会福祉施設において行う活動である以上、芸術関係者には各々の施設ごとの理念や目的を把握してもらう必要がある。利用者や施設職員といかにしてラポール（信頼）の形成を図るかといった対人支援に関する技術や情報の伝達も相談の範囲として取り扱うことが求められる。

利用者、施設職員との信頼に基づいたパートナーシップの基本は、「対等な関係」にある。芸術優位性に基づく芸術側の一方的な押し付けやパターナリズムに陥ってはならない。利用者のみならず、施設職員、芸術家の三方のモチベーションと自己実現に資するかどうかもまた、事業成功の鍵であることを踏まえ、相談業務に携わることが肝要だ。

ひとつ、芸術家と福祉施設や利用者との対等な信頼関係がグループダイナミクスを引き起こした例を紹介して本稿を終えたい。沖縄県内で不登校や引きこもり状態にある子どもたちの居場所支援を行う NPO とクラシック音楽の専門家による協働事業「ゆかいな音楽家と、ときどき引きこもり」だ。このタイトルは、不登校の子どもたち自らが名付けた。不登校や引きこもりによって極度に減少する社会関係や文化的体験をフォローすることを当面の目的としていたが、子どもたちの発案で自身の置かれている状況や引きこもりに至った理由をミュージカルにしたいと、舞台公演を行うまでになった。音楽家たちと子どもたち、職員相互の働きかけと信頼関係が、自己開示を可能にした例と言えよう。

これまで、非専門家が担う芸術活動は、芸術的卓越性の追求ではなく、地域活性やコミュニティワークに主眼が置かれるがゆえに大衆迎合的で社会批判に乏しく、陳腐で芸術的価値が低いとのそしりを免れなかったのは事実である。

だがよくよく考えてみると、芸術の専門家による活動それすなわち「芸術的価値がある」ということはない。芸術の価値とは、人々と作品あるいは芸術的事象との作用のなかに生じる関係に依拠するものであり、関係性の変化とともにその価値もまた変化し続けるという点に普遍的価値がある。芸術家、利用者、施設職員、あるいは地域といった環境の交互作用がもたらす、芸術と社会福祉いずれの領域にも属さない（あるいは横断する）間（はざま）に浮き上がる価値の発見こそが、まさに「共生社会における文化芸術活動」の醍醐味ではないだろうか。

SW/AC の活動は全国に先んじている。参照例のない活動は、試行錯誤の連続である。このチャレンジを心から応援し、筆者のエールとしたい。

1 | 文部科学省（2012）「特別支援教育の在り方に関する特別委員会報告 1」による定義 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325884.htm

調査結果を受けて
—— 福祉・教育に関わる分野で文化芸術を行うこと

文｜奥山理子・小泉朝未（Social Work / Art Conference）

人との関わりの質を求められる福祉、医療、教育などの分野と文化芸術とは、どのように接点を持ちうるだろうか。本アンケート調査では、福祉施設等での文化芸術活動の実態を把握するとともに、文化芸術活動を推進するための支援ニーズを汲み取ることを実施目的とした。調査結果から読み取ることができたニーズについて述べつつ、冒頭の問いについて、この一年の Social Work / Art Conference（SW/AC）の相談対応を通じて、現在私たちが考えていることをまとめたいと思う。

まず、調査結果の中に、SW/AC の支援内容を反映しているものがあるので紹介したい。福祉施設等で文化芸術活動に取り組む上で必要な支援(Q5)として、「芸術家や文化団体のコーディネート」、次いで「文化芸術活動の企画立案に向けた伴走型支援」の回答が最も多かった。これらは、SW/AC 開設以降寄せられた団体からの相談にも通じる内容であり、実際に伴走型の対応を行なっているケースが多い。そのことが今回調査を行った福祉事業所・団体のニーズに即した対応であると確認できたことは、始まったばかりの相談事業の後押しとなった。

また、SW/AC や京都市の文化芸術支援施策への期待について述べる自由回答(Q6)の中で、今後の提案や連携のあり方を検討するうえで参考になると感じたものを挙げたいと思う。

- 集まり、文化芸術活動を行えるセンターのようなものがあると良い
- 支援を受ける側だけでなく文化芸術を提供する側の雇用の機会や活躍の場が生まれて欲しい
- 様々な人が自由に参加でき、差別や偏見なく学べる場であって欲しい
- レクリエーションにとどまらない、本物の文化芸術に触れる・本物の作品制作活動をする機会が欲しい
- 文化芸術を通して地域住民のつながりができ、地域生活が継続できることを期待する

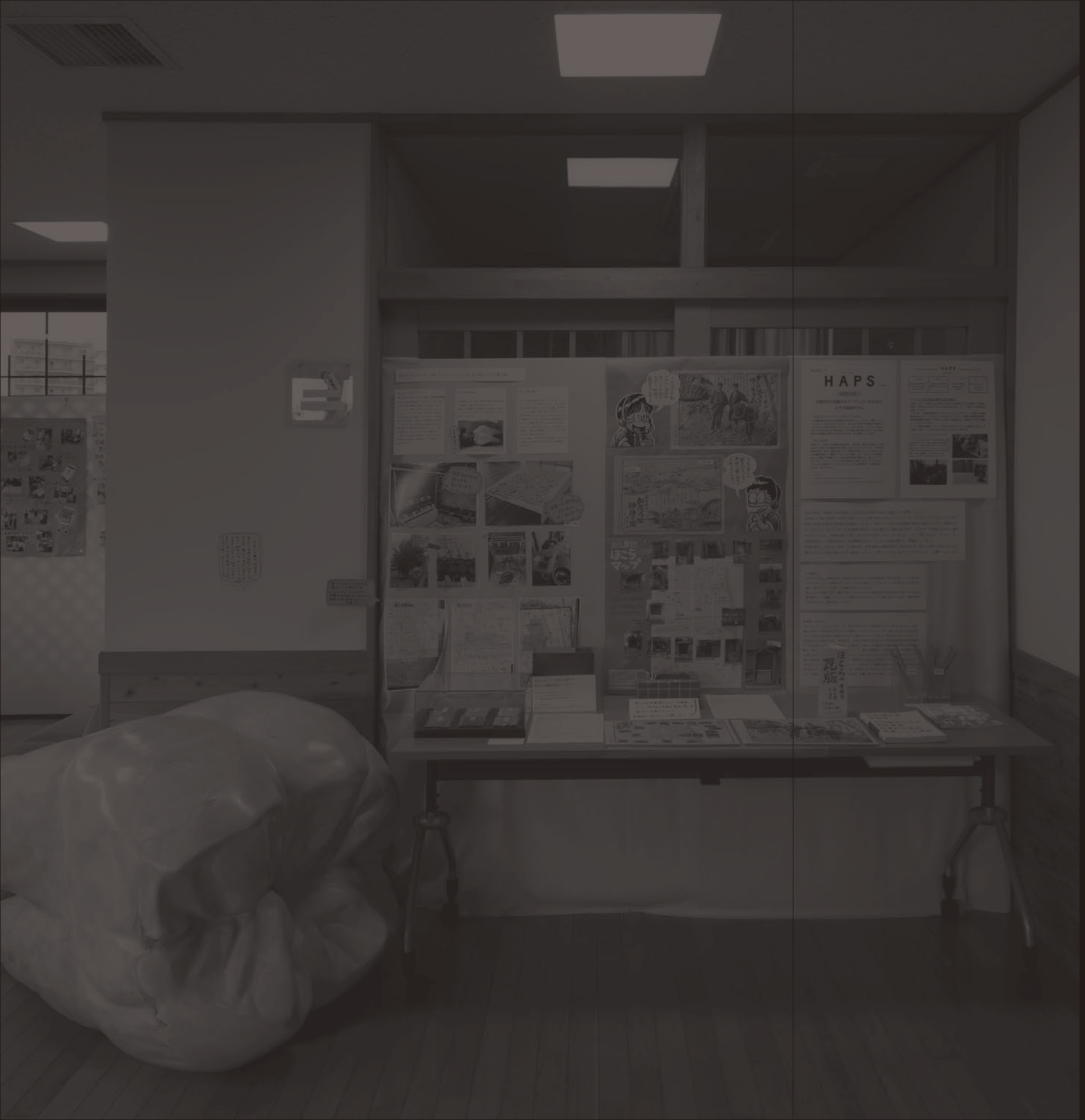
こうした回答からは、福祉施設の日常に変化をもたらす可能性を文化芸術に感じていることが読み取れる。また、回答者らの事業所・団体で支援する当事者や支援分野に特化した場や機会を求めるというよりも、文化芸術を通じて、さまざまな人がフラットな関係性の中で出会い交流すること、その中に当事者や職員らがいる状況が作り出されることへの期待を見ることができる。

一方で、潜在的なニーズも見えてきた。文化芸術活動に取り組まない理由(Q3)として、人員体制の問題に次いで「事業所・団体の運営方針や支援目的と合致しない」という回答が多かった。これは、本アンケートの回答率が伸び悩んだ要因にも関連していると考えられる。自由回答の中にも、「対象者の日常や自立を支援する福祉現場と、“文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり”がどのように関連するのか、まだ理解できていない」とする旨の意見があった。

私たちは、文化芸術を特定の人に与えられる特権だと捉えたり、生活や思想の豊かさを象徴する付加価値的な要素だとは考えていない。文化芸術は、本質的な問いを投げかける表現や、経験を超えた状況を想像させる表現を通じて、私たちが生きる世界について考えてきた。そう考えると、様々な背景によって支援を必要としている人々と日々対峙し、人や社会と関わりながらケアを担う現場においても、重なる部分を多く持つはずである。

今ケアの現場で起きていること、なかなか上手くいかない課題を抱えていること、地域や社会へ活動を広げていくことなどに対して、文化芸術の観点や方法を用いることで、新しい道筋がひらかれる可能性は決して低くないのではないか。SW/AC の役割は、双方が結びつくことの意義を実感するための実践を地道に積み重ね、各地の事例とともに、情報を発信していくことであると言えるだろう。本調査を通して寄せられた声から読み取ることができたニーズは、同時に、私たちが果たすべき使命を示してくれたように思う。

最後に、改めて記しておきたいことがある。SW/AC の相談事業は、様々な社会ニーズとその支援に取り組む現場に対してひらいており、社会福祉の領域に関わりながらも公的な制度を利用しない団体や、不登校・引きこもり、セクシュアルマイノリティなど今回調査対象となっていない人々との関わりも想定している。したがって、調査対象範囲や回答数が限定された本調査結果に見られる福祉施設の現状や文化芸術活動に伴う課題は、SW/AC への相談ニーズとして安易に一般化できるものではない。私たちは、今後も変化を続けるであろう個人や社会の状況から生じる相談に対し、丁寧に耳を傾け、柔軟に対応できる相談所でありたい。



Chapter 3

Practice

モデル事業

新型コロナウイルスの感染拡大の影響を大きく受けながら、前年度に引き続き下京区崇仁地区にて、山本麻紀子および谷本研＋中村裕太による2つのプロジェクトが展開された。山本は、京都市立芸術大学が2023年に移転してくるために生じた社会的変化、例えば集合集宅への地域住民の移住といった現象に寄り添いながら、地区の様々な「生」と向き合う活動を、3つの柱、すなわち「巨人の歯と眠り」「糸と布染め」「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」として実施した。なかでも挿し木プロジェクトは、大学移転地にあった樹木から挿し木を育て、10年間のスパンを経て地区内に植え戻すという長期的なプロジェクトへの展望が、この1年の間に広がった。谷本研＋中村裕太の「タイルとホコラとツーリズム season8《七条河原じゃり風流》」は、地区内のホコラを徹底的に調査しながら、その過程をイラストと文章からなるかわら版として計4回発行・全戸配布し、住民のホコラへの関心と記憶を呼び覚ました。そのかたわら、鴨川流域や崇仁で行われていた普請・土木工事の「砂持ち」に付随する風流に着目して、新たな「砂持ち」の再演と地蔵のモザイク画の制作を試みた。特に、コロナ禍においてなかなか地域との関係性を持てないなかでの全戸配布は、プロジェクトの地域浸透へとつながった。本モデル事業には、事業内部とは異なる視点から各プロジェクトを捉え、その成果や影響をより多面的に評価するため、リサーチャーが配置されている。今年度は感染対策の一環で、アーティスト・アートコーディネーター・行政職員・地域関係者らへのインタビューを中心にプロジェクトのプロセスが記録され、それらを現時点で総合的に捉えた上で、主にコーディネーターの働きに対する評価が行われた。（中川眞）

崇仁地区を中心に実施したプロジェクトによせて

文｜石井絢子（HAPS、本モデル事業アートコーディネーター）

プロジェクトを始めるにあたって

京都市「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業 モデル事業」（以下、本モデル事業）にて HAPS は、2019～2020年度にかけて、京都駅東部に位置する崇仁地区を中心にアーティストとともに取組みを行うこととなった。2019年度時点での状況を共有すると、被差別の歴史を持つ崇仁地区に2023年度に京都市立芸術大学（以下、京都芸大）が移転するにあたり、2020年度から工事が本格化し、元崇仁小学校、元崇仁保育所、元市営浴場、元市営住宅など、約38,000㎡にわたる移転予定地内の既存建物の解体開始が決定していた。また、予定地在住の住民の多くは2019年度中に近隣の新しい市営住宅等へ移り、店舗は移転ないし閉店することが決まっていた。高齢化率の高い地域での大きな変化に対し、知り得る限りの住民や地域に関わってきた人々の想いや反応は、当然ながら様々にグラデーションを帯びている。

HAPS は2017年度より隣接する東九条地域を中心に本モデル事業を行なっていたが、崇仁地区で事業を行うにあたり、まずは数ヶ月間、コーディネーターとして土地に耳を傾けようと試みた。地域の方々や様々な団体、研究者などから話を伺い、レクリエーションや教室を見学し、時に運営を担い、高齢者や彼らを支える人々などとともに時間を過ごした。そこで少しずつ滴り落ちてくる言葉に出会い、その向こう側にある心を想像しながら、資料や書物には書かれていないこの場所の一端に触れた。そして、いくつかの視点から未来に向けて過渡期における事業の在り方を検討の上、山本麻紀子、谷本研＋中村裕太の2組3名のアーティストへ依頼し、参加が決まった。（経緯詳細は、2019年度報告書を参照のこと）

新型コロナウイルスの感染拡大、生み出されつつあるものへの働きかけについて

山本麻紀子はプランから具体的な実践にさしかかろうとし、谷本研＋中村裕太は本格的なリサーチにさしかかろうとした2020年3月頃より、日本国内でも新型コロナウイルスの感染拡大が本格化し始めた。一度更地になる、という土地の大きな変化を目前に、プロジェクトを通して感染を媒介する恐れと、今動かなくては表現やそれを源とする様々な可能性が失われる恐れとが、目の前に横たわった。二者を天秤にかけることなく、ともに尊重する形で未知のウイルスとともにアートプロジェクトを継続し得るか検討し、第1回の緊急事態宣言より当面の間は「人の直接的な対面を行わない」ことを基本方針にすることにした（後に感染対策をとり、同意のもと必要に応じて最低限の対面を行いながら進行することになる）。行政の方針の影響を受ける可能性もあったが、一律で停止してしまうのではなく、急務として個別性に寄り添うことも重視し、各アーティストと HAPS で継続を決定し、地域の関係者らへ周知しながら進行することになった。

本モデル事業は、アウトプットの形態を問わないものとし、その成果発表の時期も年度内であれば問わず、地域へ足を運ぶ回数なども特に定めていない。また、開始前に企画者がいかにコンセプトを立てようと「これから生み出されるもの」を事前にキュレーションしようとする、というのはほぼ不可能な行為であると考える。むしろ、アーティストが自ら発見し出会うことと相互に作用し合いながら表現することにプロジェクトの意義を見出し、コーディネーターの予想を超えた動きが生じて然るべきだと考えたい。この場合「生み出されつつあるもの」への働きかけは、日常の会話やメール、地域住民と会うタイミング、打ち合わせの場所決め、そういった小さな行為の積み重ねの中にこそ潜むのだろう。よって、当初の設定にアーティストを閉じ込める意図は無いながらも、とは言え何らかの方向性を指し示そうとするものとして、2019年度に企画の枠組みを検討する時点で筆者はこのように書いていた――「政策に端を発するコミュニティの再編成、著しい高齢化や新しいまちづくりにより土地の記憶が喪失する可能性は、崇仁地区に限らない問題である。行政と住民。地区内出身者とそうでない人。新しい住宅に引っ越す人とそうでない人。ともすれば簡単に陥りそうな二項対立を超え、この世にあるすべての命や、あるいは命がないもの―例えば、植物、虫、石、風、死者―を含むすべてのものを等価と見なし、様々なささやきに、それぞれが耳をすませ、ささやきを受け取った自らを信じ、他者を尊重し、表現を通して応答しようと試みる。この地域の中にある声から、小さな、ささやかな響き合いを新たにつくり出そうとするプロジェクトを構想した」――実際はどうだったのであろうか？

各アーティストの取組み

山本麻紀子は、崇仁に隣接する東九条地域に住居とアトリエを設け、元崇仁小学校の教室を「制作室」として利用し、日常生活の中で地域を散歩したり、子どもたちとワークショップを行うなど、崇仁の中での動きは数年前よりあった。ここから改めて対話やリサーチを重ね、2020年2月にプランが固まった。本モデル事業では「巨人の歯と眠り」「糸と布染め」「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」と3つのプロジェクトが、京都芸大移転予定地における解体工事が始まる前から順次行なわれることになった。

彼女は2012年以降、世界各地の巨人伝説を発想源とした「巨人プロジェクト」をライフワークとして行なっている。そこで眼差してきたのは、人と人が生きる場所との関係性の中で生み出されてきた伝説である。2018年には元崇仁小学校にて、立体作品「巨人の歯」と、それにまつわる物語――滋賀の巨人がくしゃみをしたら、歯が吹き飛んで鴨川に落っこちたという内容である――を創作した。巨人の口から「吹き飛んで落ちた」状態として作られ、世界を漂う歯は、新たな収まり場所を探すかのように旅に出、イギリスやポーランドでのプロジェクトを経て、2020年に崇仁へと戻った。「この世界には様々な形のデコとボコがあり、その2つのバランスで世界は成り立っている。人の手で無くなりつつあるものがあるならば、人の手で救い出すことをしなくてはならない」と話す山本は、この歯とともに、無くなりつつある建物や植物、それが存在する土地と向き合おうとした。

「建物が無くなりまた新たに建つさまは、人の生死を表しているよう」とも語る山本とは、主に1回目の緊急事態宣言下において、人と植物の命を同じ地平に置き、また、何もしなければ失われる表現の存在やそこから開かれる可能性を念頭に、人間同士の感染リスクを考慮しつつ、残りわずかな時間で更地になる土地においてプロジェクトを行った。「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」については1年以上にわたり、土に挿した枝から目に見えない「根」がゆっくりと、新たに地中へ伸びるのを待ち続けた。小さなポットの中の命は、いずれ再び崇仁のどこかに、地域住民を始め様々な人の手を介して根をおろす予定である。多くの人と接さずに行った今年度の取組みにおいて、山本は継続を決め、記録集の形態で取組みを示しドキュメンテーションを行う運びとなった。

谷本研＋中村裕太は、リサーチや思考に1年の多くの時間を費やし、確定したプランをいた

だいたのは2021年1月上旬である。特に中村は2015年に行われた「Still Moving」（主催：@KCUA）において、APP ARTS STUDIO として「SUUJIN MAINTENANCE CLUB」に参加し、地蔵祠の台座の「メンテナンス」を行っていた。その際は主に構造物としての祠に対峙し、地域でのあり方を深く捉えるのは本プロジェクト以降となった。谷本は、以前より足を運ぶこともあった同地区に関心を寄せていたという。当初は京都市内全域の地蔵祠の生態系から、その一部として崇仁を捉える方向性を検討していたが、最終的には地域で失われつつある地蔵や祠、地蔵盆などに焦点を絞った。地蔵がいない祠や台座を多く目にする中で、中村の言う「（これまでのシリーズの中で主だった）『考現学的』に対して『考古学的』な手つき」で、今はあらわれていないものに対するアプローチを行った。「地蔵」や「祠」を主に据え、「いま・ここ」の「ここ」を深く掘り下げて、すでにこの世にいないかもしれない人や、そこで育まれてきたであろう精神性に触れることになった。その過程では、谷本が個人的にリサーチを重ねていた「ちびっこ広場」など、「地蔵盆」と同様に地域コミュニティにおける住民の自治的な動きが象徴されるほかの要素に思考が迂回することもあった。最終的には、地域で行われた「砂持ち」を「労働」と「祝祭」の観点からを捉え直し、鴨川の七条河原の石を用いた砂持ちの再演と、地蔵の顔の「版」の制作、それらをもとに制作したかわら版の発行・配布・掲示や屋外展示を行った。特にかわら版については、展覧会を開催して「招く」のではなく地域の暮らしの中へ歩み寄り、家や店舗へ「配布する」アプローチを試みた。その過程で地域住民より新たな話が寄せられたり、楽しみに待つ方も現れ始めた。彼らは、日常の中に埋没し失われつつある光を再発見し、作品としてのかわら版の制作と配布を通して、地域の内側に再び灯そうとした。重ねて、時間をかけてそれらが外側から観られ、アクセスされ続ける可能性を開いた。

アーティストたちはともに、現在の地域において失われつつあるものをすくいとり、耳をすまし、それらに対するアプローチを試みた。

コロナ禍におけるアートプロジェクト

ある「土地」が身体に染み入り、風景の中に経験や感情が宿り始め、歩きながら有機的に思考が展開していくまでには一定の時間がかかる。その上、今回のモデル事業のようにコーディネーターから「依頼され」「誘われ」来たアーティストが、土地を捉え自分ごととして何かを生み

出そうとする行為が、そのキャリアや人生の中に位置付けられるには、より時間がかかるであろう。表現の入口を見出すプロセスはそれぞれに異なり、例えば、ふらふらと歩いては興味の惹きつけられたものについて調べてみたり、コーディネーターの視点を共有されたり、飲食店でちょっとした関係性を築いたり、資料を読み解いたり、その中でより深く人と話すことになったり、一見無関係と捉えられる領域との補助線を引いてみたりと、それらが複雑に重なり合っている。今年度は土地との関係性を築く過程で少しずつ感染が拡大していったことで、様々なものとの関係がゆっくりと開かれ、呼応しながら進む「流れ」は、重石が載り堰き止められている感覚があったり、意識的に止めることもあったであろう。その上で、「それでも今、アートプロジェクトを行い続ける」という通常以上の覚悟を負いながら（この覚悟は意識的にせよ、無意識的にせよ、この社会状況の中で進行するからにはどのアーティストにも生じていたと思う）、土地に出向き続けることになっていった。「人と身体的に関わりあうこと」が望ましくなくなった1年間のアートプロジェクトを進行する過程では、「人と会う」という行為の意味や必要性を問い続け、人と直接接する機会は格段に減り、別の方向へと集中することになった。コーディネーターとして、地域や社会において何かを置き去りにしていないか、感染しない方法をとろうとするあまりに落としていることがないかと、割り切れないながらも進め方を判断することもあった。一方で、今年度の試みはその総体が、時空を超えて未来へ生きる人へ、作品を通して想いを投げかけようとするコミュニケーションの在り方を編み出すことへとなっていった。

認識を解きほぐすこと

「被差別の歴史を持つ」——この地域での取組みを語ろうとする時に、枕詞とされることが多い言葉である。事実である一方で、一つの認識を入り口や語り口として固定化することは、生み出されてきた豊かな営為を見過ごし、一元的な見方の中に閉じ込め続ける可能性や暴力性をはらむ。「言語化することで、人を傷つけ続けることに加担しないか」「言語化しないことが、事実を隠す意図を孕むことにならないか」——社会的、歴史的に織り込まれた事実は、今年度の取組みの根底には確実に存在することから、葛藤しつつも本テキストの冒頭には書き添えた。HAPS が初めて崇仁でプロジェクトを行った2019～2020年度に参加したアーティストは、各視点で個別的な事象に目を向けた。大きな枕詞を少しずつ紐解き、そこに織り込まれたささやかで、多くは言語化されずに人々の無意識の中で共有されていたのかもしれない豊かさを少しずつ見出すことへとつなごうとした試みだったと思う。

プロジェクトが内包する複層性と、生活圏での試み、そこから開かれつつあるものについて

本モデル事業は、京都市が策定した計画と予算に基づく事業の枠組みで、HAPS が主催し、HAPS の職員がアートコーディネーターとして企画・制作を担い（地域・アーティストの選定も HAPS が担う）、アーティストとともに展開している。京都市の市有地が多くを占める地域において、プロジェクトを行う際の様々な調整は、所管課である京都市文化芸術企画課が窓口となり、主にアートコーディネーターの依頼を受けて市役所内の各部署との調整が行われる。関係者だけでもアーティスト、HAPS、行政と三者が共存する。その上で、多様な視点を持つ地域住民、関係団体などを含むと、プロジェクトが内包する眼差しは複数にわたる。互いに補完し合うように結びつき、一方向へ向かうエンジンとなることもあれば、立場による価値基準や優先順位の相違が大きな隔たりとして姿を現すこともある。

特に年度末には谷本＋中村の作品撤去時期をめぐり一部住民とアーティスト、HAPS、行政の意向が折り合わず調整の末、年度内に作品を撤去後、年度を越えてかわら版の「号外」を発行する運びとなった。また山本については、次年度以降も自主的にプロジェクトを継続することを決め、新たな体制について行政も交え検討することになった。年度単位の事業ではあるが、生身の人間が生き、想いも暮らしも連なり続ける空間で行う以上は、行政単位の時間の区切りに沿わないことも生じる。結果として各アーティストは年度内で一定の成果を発表した上で、それぞれの区切りがつく局面まで、年度を越えてプロジェクトを継続することになった。

こうした本モデル事業のプロセスの一部は、アーティストや関係者らの語りとともに、リサーチャーがより詳細に報告する。また、今年度に含みきれなかったものについては、継続調査として次年度の報告書へ掲載する。

短期間で数値的には見えない細やかな変化を見つめ、互いに反応しあいながら、ともに生きる在り方を思考し続けることが、この事業の一意義である。こうした生活圏における芸術を通した「共生」の模索の一端を、本報告書を通してご覧いただけると幸いである。

山本麻紀子

PROJECT 01

山本麻紀子は、崇仁地区へ2023年度に移転する京都市立芸術大学（以下、京都芸大）の移転予定地を中心に、3つのプログラムを展開した。

巨人の歯と眠り 2020－2021

元崇仁小学校の教室を制作室とし、2018年に山本が生み出した立体作品「巨人の歯」とともに、京都芸大移転予定地に存在する、まもなく解体される建物やその敷地内（元崇仁市営住宅、元崇仁市営第三浴場、元崇仁小学校、元崇仁保育所）で眠り、みた夢をもとに作品を制作した。

生きてきた人間の思想や経験が表れた空間や、命の痕跡が残る建物が無くなることと、人の命の終末を重ねあわせて捉えた山本は、それらを「無くなるのではなく、眠りの世界へ行く。そして一部は、この世界を構成する要素として、空気の中に粒のように残る」と言う。「眠り」までの間に住民と話し、歩き、資料を読み、植物と向き合い、山本が感じ取った地域の、あるいは世界の集合的無意識は、山本の身体に蓄積された意識・無意識と結びつき、身体の持ち主である山本自身もコントロール不可能な夢として表れる。それらを、眠りの場所の敷地内に生育し、工事によりまもなく抜根され撤去される植物で染めた糸布で描き出した。

糸と布染め 2020

京都市立芸術大学移転予定地に生育していた植物、媒染液、絹糸、布

京都芸大移転予定地に生育する植物を採集し、絹糸と布を染めた。染められた糸や布は385色にわたり、色毎に植物名・採集場所・採集年月日が記録された。山本は染める行為を「植物の命の色をうつしとる」と表す。採集地が工事により更地となり、今はなき草木の命がうつる絹糸や布は、「巨人の歯と眠り」の作品へと展開された。

山本は過去の作品においては、染色した糸の経年変化（退色）を、生きている命が日々変化する自然の摂理と同様に捉え、色を定着させるための媒染液を使用していない。一方、本プロジェクトにおいては、色を可能な限り長く残すため、媒染液で引き出し定着させた。

崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト） 2020－

芸大移転予定地で生き、工事によって失われる樹木の「挿し木」を試み、多くの人々とともに崇仁で生きてきた命をつないでいこうとする試み。樹木名・採集場所・採集年月日が記録され、今年度は山本が樹木の枝を苗木ポットに挿し、少しずつその様を地域に共有しながら、毎日世話を重ね、根が生えるのを待った。2021年3月時点で83のポットが生育されている。

当初は、地域住民や地域を支えてきた方々を中心に挿し木の「里親」となってもらい、家で根が生えるのを待つ時間をともに持つことを予定していた。あわせて、根が十分に生えた植物を、様々な人とともに話し合い、数年かけて崇仁地区やその周辺地域へ移植することを構想していた。進行中に京都府立植物園の樹木医である中井貞氏のアドバイスを受け、挿し木が安定して地植え可能となるまでに樹種によっては約10年かかることを知る。

新型コロナウイルスの感染拡大や植物の生育状況を踏まえ、2020年度で終了する本事業における取組みは山本が挿し穂を育てることに注力した。今後は山本が新体制で、挿し木として生き延びた樹木の地植えが全て完了するまで、当初のプランをベースにプロジェクトを継続する（現時点では、2030年までを予定）。

「挿し木」とはクローンであり、元の樹木の DNA とともにその生育過程で周辺環境に適応し個体が獲得した特徴を引き継ぐ。土地の記憶が宿る命を様々な人の手を介して育て、生きてきた人々から土地の物語を聞き取り、専門家を交え新たな生き場所をともに話し合い、再び地植えする――。この場所で生きてきた人と、これから関わりはじめる人を思いながら、2030年までの動きとして山本が思い描いている一連の流れは「巨人の歯と眠り」や「糸と布染め」を経て、多様な生の在り方と向き合い続ける取組みとなるだろう。

credit

協力｜京都府立植物園、京都市下京いきいき市民活動センター、下京地域体育館、京都市下京・東部地域包括支援センター、崇仁デイサービスうるおい、崇仁まちづくり推進委員会、総合福祉施設 東九条のぞみの園、柳原銀行記念資料館

記録撮影｜片山達貴

警備読書人｜加藤至、神馬啓佑、石黒健一、中谷利明、下寺孝典

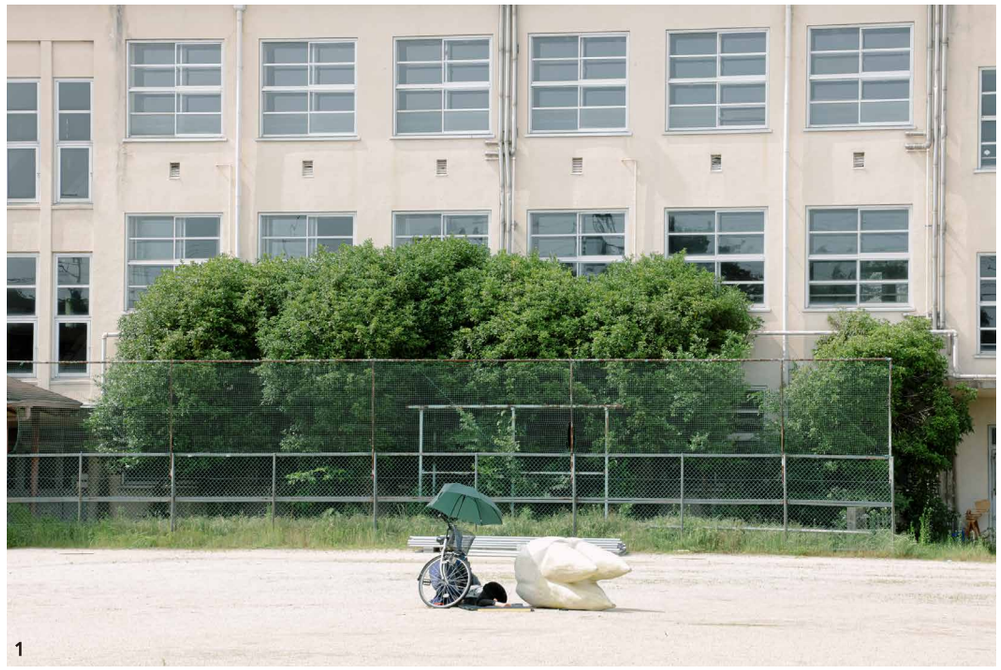
糸束づくり｜笠木日南子、砂原うり、上村双葉

挿し木のアドバイス｜中井貞（京都府立植物園）

協力｜東若菜（神戸大学大学院農学研究科・助教）、雨宮章（京都府立文化芸術会館）、出壱攷、さがひろか、野村誠、米田量

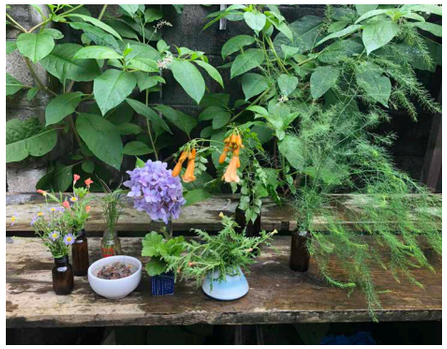
点訳のてびき
鷲田清一
「待たない社会」
そして「待てない社会」
2000.5.15採集
赤西の子
5/15

巨人の歯と眠り 2020–2021



1 元崇仁小学校校庭での眠り | **2** 元崇仁保育所での眠り | **3** 元崇仁市営第三浴場前の様子 | **4** 元崇仁市営住宅にて巨人の歯を運ぶ
撮影：片山達貴

糸と布染め 2020

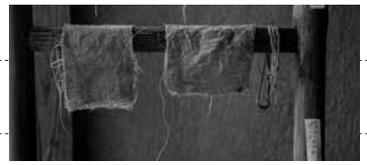


1・2 「巨人の歯と眠り」の作品になる前の、385色の糸と布　撮影：片山達貴

崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）2020–

1・2・3 撮影：片山達貴

プロジェクトの流れ

		巨人の歯と眠り	糸と布染め	崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）
2019年 11月〜	リサーチ・プランの構想			
2020年 2月〜	リサーチ・制作			
4月14日 17日 18日 23日 25日 28日 30日		●元崇仁第三浴場での眠り ●元崇仁市営住宅での眠り 	●元崇仁市営住宅での植物採集と糸と布染め1日目 ●元崇仁市営住宅での植物採集と糸と布染め2日目 ●元崇仁市営住宅での植物採集と糸と布染め3日目 ●元崇仁市営住宅での植物採集と糸と布染め4日目 ●元崇仁市営住宅での植物採集と糸と布染め5日目 ●元崇仁市営住宅での植物採集と糸と布染め6日目	●元崇仁小学校校門近くのサクラの挿し木づくり実験 ●元崇仁市営住宅での枝切りと挿し木づくり1日目 ●元崇仁市営住宅での枝切りと挿し木づくり2日目 ●元崇仁市営住宅での枝切りと挿し木づくり3日目
5月1日 3日 4日 9日 10日 11日 15日 17日 19日 20日 26日 27日 28日 29日 31日	元崇仁市営住宅・元崇仁第三浴場等解体工事開始 	 ●元崇仁小学校での眠り 	●元崇仁小学校での植物採集と糸と布染め1日目 ●元崇仁小学校での植物採集2日目 ●9日採集分の植物で糸と布染め ●元崇仁小学校での植物採集3日目 ●15日採集分の植物で糸と布染め ●元崇仁小学校での植物採集4日目 ●19日採集分の植物で糸と布染め ●元崇仁小学校での植物採集と糸と布染め5日目 ●26日採集分の植物で糸と布染め続き ●元崇仁小学校での植物採集と糸と布染め6日目 	●元崇仁小学校での枝切り1日目 ●1日枝切り分の挿し木づくり ●1日枝切り分の挿し木づくり続き ●元崇仁小学校での枝切り2日目 ●9日枝切り分の挿し木づくり ●元崇仁小学校での枝切りと挿し木づくり3日目 ●元崇仁小学校での枝切りと挿し木づくり4日目 ●元崇仁小学校での枝切りと挿し木づくり5日目 ●元崇仁小学校での枝切りと挿し木づくり6日目 ●29日枝切り分の挿し木づくり続き
6月23日 25日 26日 27日 28日 29日				●京都府立植物園の樹木医の中井さんにお越しいただく ●オオイヌタデ（？）が崇仁デイサービスうるおいへ ●元崇仁小学校での枝切りと挿し木づくり7日目、オオイヌタデ（？）の元気がなくなり引き取りにいく ●26日枝切り分の挿し木づくり続き ●26日枝切り分の挿し木づくり続き ●元崇仁小学校西側キンモクセイの枝切りと挿し木づくり
7月 15日 16日 22日 23日 28日 29日	元崇仁小学校等、解体工事開始		●元崇仁保育所での植物採集1日目 ●15日採集分の植物で糸と布染め ●元崇仁保育所での植物採集2日目 ●22日採集分の植物で糸と布染め ●元崇仁保育所での植物採集3日目 ●28日採集分の植物で糸と布染め 	●元崇仁保育所での枝切りと挿し木づくり1日目 ●元崇仁保育所での枝切り2日目、挿し木置き場に金網新設 ●22日枝切り分の挿し木づくり ●元崇仁保育所での枝切り3日目 ●28日枝切り分の挿し木づくり
8月1日 2日 3日 5日 6日 12日 17日 19日 20日		 ●元崇仁保育所で巨人の歯と眠る	 ●元崇仁保育所での植物採集4日目 ●5日採集分の植物で糸と布染め ●元崇仁保育所での植物採集と糸と布染め5日目 ●元崇仁保育所での植物採集6日目 ●19日採集分の植物で糸と布染め	●挿し木小屋（屋根付き小屋）づくり開始 ●オオイヌタデ（？）があちらの世界へ ●挿し木小屋完成 ●元崇仁保育所での枝切りと挿し木づくり4日目 ●元崇仁保育所での枝切りと挿し木づくり5日目 ●元崇仁保育所での枝切りと挿し木づくり6日目 （京都府立植物園の樹木医の中井さんに同行いただく）
9月	元崇仁保育所等、解体工事開始	以後制作は続く		以後挿し木の世話は続く

マネジメントの動きひとくちメモ

「巨人の歯と眠り」で、山本さんは解体間近の建物や、建物がある敷地内で数時間の眠りにつきました。HAPS ではそのリスクを洗い出し、対策として保険に加入したほか、夜間は本職の警備員を配置。昼間はアーティストに「警備読書人」としてプロジェクトにあわせた選書を依頼し、本を読みながらこれから大きく変化する場所に身をおき、警備を担ってもらいました。これは次の人を指名する紹介制で、数名が参加しました。

制作プロセスにおいては、映像・写真、文字記録を残しました。プロジェクトは進行する中でプランが変化したり膨らむなどするため、次の動きが決まり次第、コーディネーターがカメラマンやリサーチャーと、記録のタイミングやポイントを細かく調整しました。高齢者が多い地域の感染拡大下においては、コミュニケーションを十分にとるのが難しい方が多くいました。また、今後も生きる命を扱っていることや、変化する地域で取り組んでいることも考慮すると、記録は重要であったと感じています。

進行にあたり、知り得る地域の関係者や住民には、手紙や電話でプランをお伝えし、途中で進捗レポートを作成し共有につとめました。「巨人の歯と眠り」は建物の管理・所有者である京都市の許諾を得た上、必要に応じて、その場所を利用していた元居住者などとお話しし、了承いただいた場合のみ実施しました。説明をある程度理解いただいた上で、山本さんからも電話をしました。感染対策として、山本さんがその方にあわせて制作した「いいよ」「ごめん」の風呂敷をお返事として上の階のベランダから振ってもらい、山本さんとコーディネーター、福祉施設職員が道にいて互いに手を振り合いました。

「崇仁すくすくセンター」で挿し木とした樹種を決めるにあたっては、京都市から、京都芸大移転後も残置する予定の樹木リストを取り寄せ、参考資料としてアーティストに共有しました。元崇仁保育所は元職員の方へアンケートを取ることができ、参考にしました。挿し木の育成は非常に難しく、山本さんとともにアドバイザーを探し、おもに京都府立植物園へ相談の上職員である樹木医の方にご協力いただきました。

撮影：片山達貴、山本麻紀子、石井絢子

PROJECT 02
谷本研＋中村裕太

タイルとホコラとツーリズム season8《七条河原じゃり風流》 2020－2021

「タイルとホコラとツーリズム」とは、京都市内に点在する路傍祠のリサーチをきっかけに、美術家の谷本研と中村裕太が2014年より展開するプロジェクトである。ホコラにまつわる土着の信仰や人々の営みに向き合い、観光のまなざしと独自のユーモアを交えて作品を生み出してきた。近年は各地へ飛び出していたが、今回のプロジェクトで再び京都へ戻ってきた。

今回、アーティストたちは地域の「労働」と「祝祭」に目を向ける。特に、明治期に旧柳原尋常小学校（地域に存在した元崇仁小学校の前身）の建設に際して、住民が一体となり、鴨川の砂を運んで建設用地を整備した「砂持ち」に関心を寄せた。当時の住民は仮装などを交えて、砂を運ぶという労働を祝祭に変えていた。また、崇仁地区にはたくさんの地蔵ホコラがあり、夏の祝祭的行事とも言える地蔵盆には住民が集い、地域の心の拠り所にもなっていた。それらの地蔵の一部は高齢化や、新たな市営住宅の建設、近年の新しいまちづくりの中で地域内を移動し、また、一部の地蔵はお寺へ収められた。

このプロジェクトでは、変わりゆく地域の中でお地蔵様にまつわる逸話を伝える「かわら版」を発行した。毎号の紙面にはアーティストたちが河原より黙々と運んだ砂利を用い、地区内の市営住宅の砂場にて描かれた地蔵の顔が生み出されるさまが掲載される。

制作したかわら版は毎週、アーティストが崇仁地区の全戸のポストへ配布した。やがて地区内の京都市下京いきいき市民活動センターや飲食店が、対外的な掲示・配布拠点となっていった。制作した地蔵のモザイク画は市民センターの外壁に大きな幕として掲示され、人々が行き交う街角に地蔵の姿が現れることになった。

かわら版の発行と掲示

その一　2021年2月28日（日）「かわら版発行の辞」
その二　2021年3月6日（土）「崇仁学区のお地蔵様」
その三　2021年3月13日（土）「お地蔵様は移動する」
その四　2021年3月20日（土）「労働と祝祭」
配布拠点｜京都市下京いきいき市民活動センター 1F
その他配布場所｜崇仁地区の施設・飲食店など
地区内にお住まいの方には、発行毎に各戸配布

屋外展示

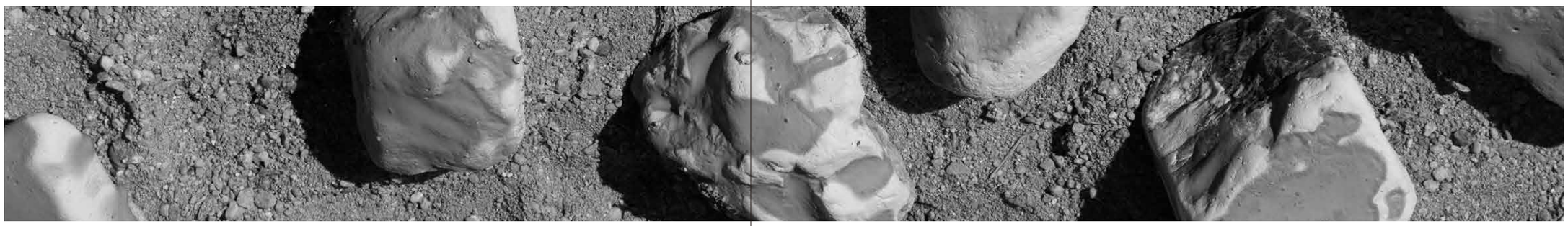
場所｜京都市下京いきいき市民活動センター 外壁
かわら版　2021年3月13日（土）～ 2021年5月5日（水）
崇仁のお地蔵様の幕　2021年3月20日（土）～ 2021年5月5日（水）
※ 当初の会期は4月2日（金）までを予定していたが、延長予定

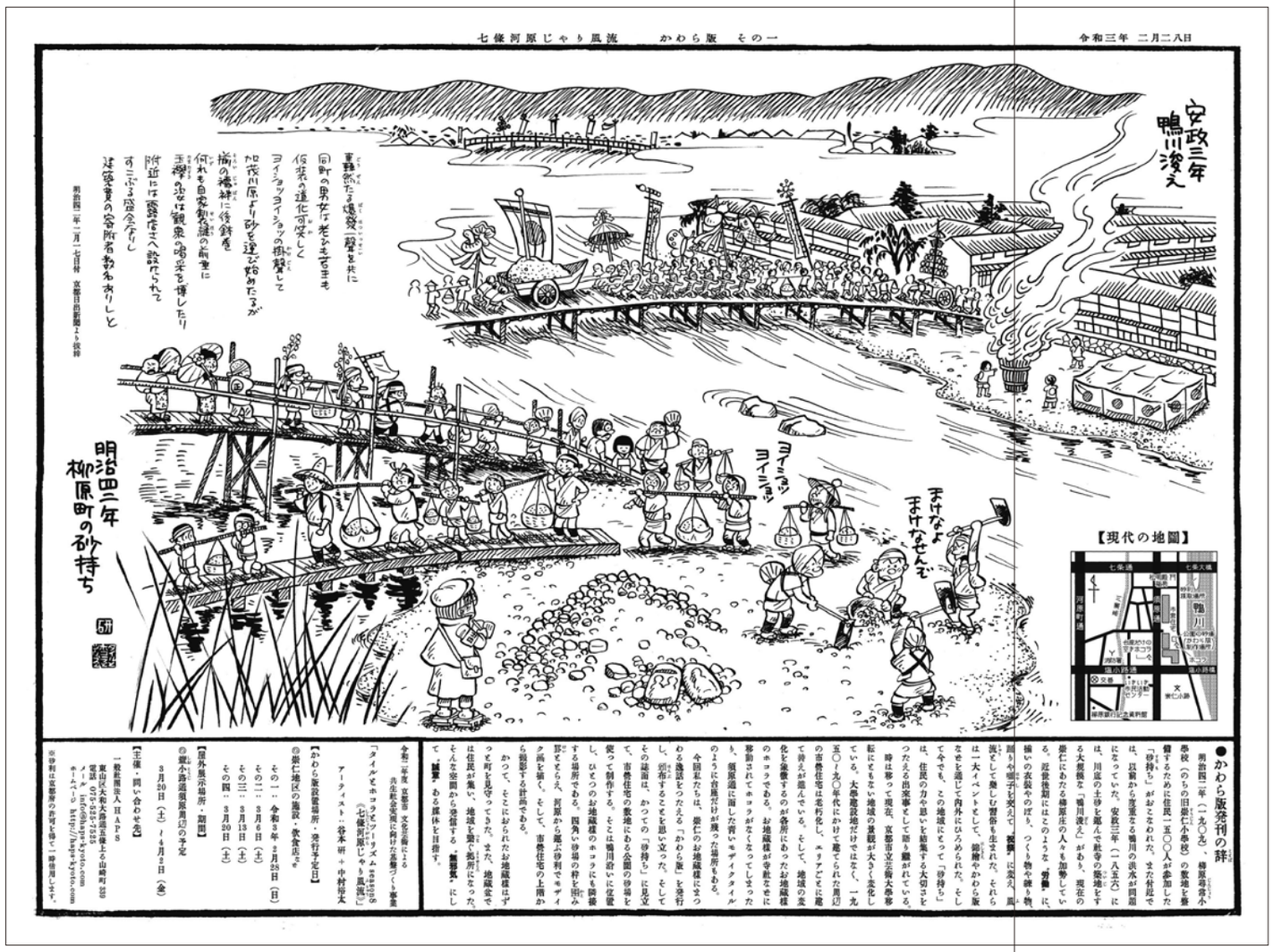
ツアー

2021年4月3日（土）に実施予定

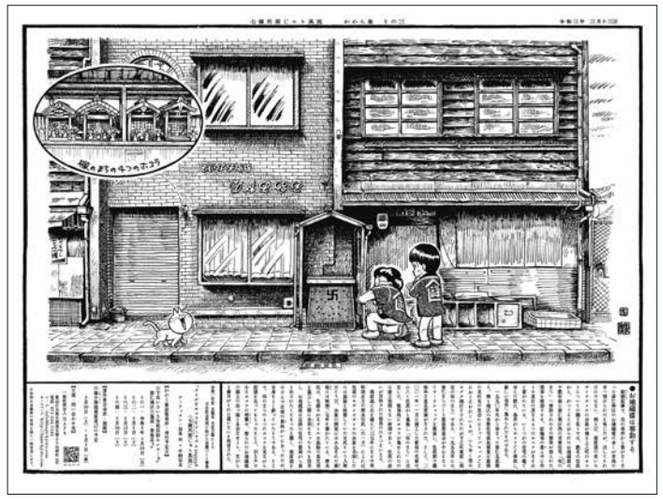
credit

協力｜京都市下京・東部地域包括支援センター、京都市下京いきいき市民活動センター、崇仁デイサービスうるおい、崇仁まちづくり推進委員会、柳原銀行記念資料館
記録撮影｜表恒匡、麥生田兵吾





その一 中面



その三 中面

その四 中面

その一 表面

その二 表面

その三 表面

その四 表面

プロジェクトの流れ

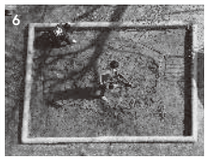
2020年1月～ 2021年1月～	リサーチ、およびプランニング プランに向け、具体的な調整開始
2月13日、14日 20日、21日、25日 28日	●七条河原よりじゃり持ち ●崇仁市営住宅の砂場にてお地蔵様のモザイク画を制作 ●かわら版その一発行と掲示
3月6日 13日 20日 30日	●かわら版その二発行と掲示 ●かわら版その三発行と掲示 かわら版の屋外展示開始 ●かわら版その四発行と掲示 崇仁のお地蔵様の幕展示開始 ●制作場所である砂場の現状復帰
4月3日	●ツアーを予定
5月5日	●展示会期終了予定
	2021年度報告書へ続く

マネジメントの動きひとくちメモ

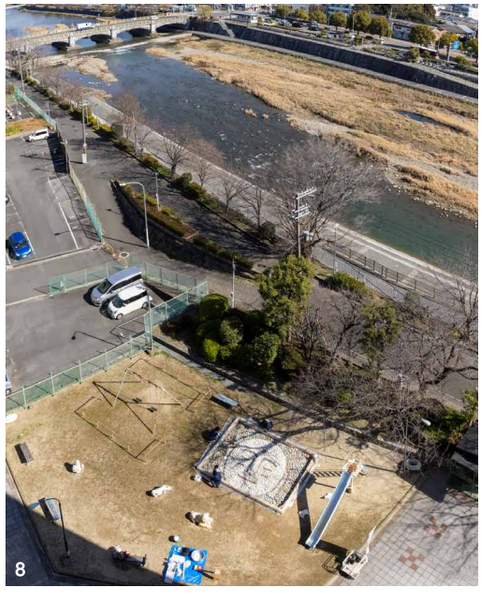
地蔵やホコラに関する話は地域の飲食店や、11月に開催された「崇仁文化祭」に出展した際にアンケートを募って地域の方にうかがう等しました。「かわら版」の制作や配布の際、特に地図表現や公開範囲については地域の関係者へ情報共有や、一部相談をして進めました。

京都市の「屋外広告物等に関する条例」では、市の景観計画に即し、掲示可能な広告のサイズ、位置などが区域により定められています。屋外展示の「崇仁のお地蔵様の幕」は広告物ではありませんが条例の対象に該当したため、行政と詳細な条件確認や調整を行いました。それらとのすり合わせと並行して、場所との関係性の中で作品にとって望ましい展示場所を、おもにアーティストが最終決定しました。

鴨川の石の使用については、京都府の京都土木事務所へ相談し、一時借用の許可を得て実施しました。市営住宅内の砂場の使用については、その所有・管理主体である京都市を中心に相談をし、住民の方々への周知方法などを地域の関係者や住民の方へ相談しながら行っていきました。プランが確定した1月以降、生活の場と接する／重なる公共的な空間における企画に必要な、多様な調整を担いました。



1 台座のみ残り、お地蔵様はホコラごと移動されている（崇仁）｜**2** 各所から移動したホコラは別の場所へ｜**3** 砂利持ち開始前ののぼりづくり｜**4** 七条河原での砂利持ち｜**5** 集めた砂利をリヤカーで運ぶ｜**6** お地蔵様を描く前、砂場をならす｜**7** 砂利をうめる｜**8** 制作中に見に来た住民の方｜**9** 地域の飲食店の方にかわら版を見ていただく｜**10** 掲示していただいた店の扉の向こうに、かわら版に描かれた風景が｜**11** 別の飲食店に貼られたかわら版｜**12** 京都市下京いきいき市民活動センターによるインタビュー｜**1・2・8** 撮影：麥生田兵吾



1・2・3・4・5・6・7 撮影：麥生田兵吾｜8 撮影：表恒匡

山本麻紀子

YAMAMOTO Makiko

1979年	京都生まれ
1999年4月	京都市立芸術大学・美術学部・構想設計入学
2001年9～12月	短期交換留学 / ノヴァスコシア美術大学・メディアアート学科(カナダ)
2003年3月	京都市立芸術大学・美術学部・構想設計卒業
2005年3月	京都市立芸術大学院・美術研究科・絵画専攻・構想設計修了

ある特定の場所のリサーチを通して観察や考察を続け、常識や習慣など日常の中で見過ごされている事柄や疑問を糸口にして、他者とのコミュニケーションを発生させるプロジェクトを行う。その一連の過程を、写真、絵、映像、刺繍など様々な形式に展開させて作品制作を行っている。2018年より、京都市の「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」の一環として、高齢者福祉施設・東九条のぞみの園(京都市南区)に関わり、利用者や職員、また地域の方々と共働する「ノガミッツプロジェクト」を実施。また、ライフワークとして、2013年より15年計画で日本(水戸)とイギリス(ペンザンス)の巨人伝説のリサーチをベースに「眠り」や「怒り」をテーマに巨人の世界を探求している。8年目の現在は「植物」や「土」をキーワードに模索中。

個展歴

2020年1月～ 3月	移動展覧会「ノガミッツプロジェクト2019-2020 ノガミッツタペストリー」/ 京都市地域多文化交流ネットワークセンター(京都市南区)、凌風小中学校(京都市南区)、THEATRE E9 KYOTO ホワイエ(京都市南区)、京都市下京いきいき市民活動センター(京都市下京区)、ヘルスピア21エントランスホール(京都市南区)
2019年2月	「いつかの話　あの人の風」/ 元山王小学校(京都市南区)
2017年10月	「巨人と眠り」/ Art Hostel Kumagusuku (京都市中京区)
2014年8月	ミッドナイト・サマーシアター / HAPS (京都市東山区)
2012年7月～9月	クリテリオム84 山本麻紀子 “Mending Mito” / 水戸芸術館 (茨城県水戸市)
2012年5月～6月	Through The Windows / The Russet (イギリス・ロンドン)
2011年6月	Lost and Found / Past Vyner Street (イギリス・ロンドン)

グループ展

2019年10月～ 12月	Story teller / アキバタマビ21(東京都千代田区)
2019年5月～ 8月	セレブレーション 日本ポーランド現代美術展 / 京都芸術センター (京都市中京区)・スターリ・ブロヴァル(ポーランド・ポズナン)・トラフォスタツィア(ポーランド・シチェチン)
2018年10月	京都国際映画祭 / 元淳風小学校(京都市下京区)
2017年11月～2018年3月	装飾は流転する－今と向き合う7つの方法 / 東京都庭園美術館(東京都港区)
2015年8月～9月	カフェイン水戸 R / 佐久間ビル1F (茨城県水戸)
2015年3月～5月	still moving / 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA (京都市中京区)
2015年2月～3月	海嘯に祈む / 宮城大学(宮城県仙台市)
2014年11月	Imitator 2 Japanese & Irish Visual Arts Exhibition / The Mart (アイルランド)
2014年11月	舞台がぼんやり見えてきた / 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA (京都市中京区)
2013年6月～7月	Sweet Revenge / 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA (京都市中京区)
2012年3月～6月	パリに笑壷を運ぶ、現代日本映像作品展 / パリ日本文化館 (フランス・パリ)
2011年9月	Name Naming / Sawtooth ARI Inc. (オーストラリア・タスマニア)

プロジェクト

2018年～ 2020年	ノガミッツプロジェクト / 総合福祉施設 東九条のぞみの園との協働プロジェクト(京都市南区) ※2018年度、京都市の「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」の一環として実施。2019年度以降は、東九条のぞみの園の独自事業として2年間継続した。
2013年9月～2015年3月	宮城大学と芸術系国公立大学による復興支援企画「海嘯に祈む」/ 南三陸町 (宮城県仙台市)
2013年～15年計画	巨人プロジェクト実施中

パフォーマンス

2019年6月	「巨人と眠り－ポーランド編」/ 京都芸術センター (京都市中京区)
2019年4月	“だいだらぼうとホリバーン－巨人に歌をうたおう” / ミナックシアター (イギリス・ペンザンス)
2017年10月	「巨人と眠り－巨人×眠り×音楽」/ Art Hostel Kumagusuku (京都市中京区)

谷本研＋中村裕太

(「タイルとホコラとツーリズム」)

TANIMOTO Ken + NAKAMURA Yuta

撮影：麥生田兵吾

谷本研 (1973年神戸生まれ、滋賀県在住。1998年京都市立芸術大学大学院美術研究科造形構想修了) と中村裕太 (1983年東京生まれ、京都府在住。2011年京都精華大学芸術研究科博士後期課程修了。博士[芸術]) によるゆるやかなユニット。街中に点在する路傍祠やそこに使用されるタイルに着目した「タイルとホコラとツーリズム」(Gallery PARC、京都、2014年) を出発点に、東シナ海を取り囲む対馬・沖縄・台湾・済州島にみられる土着信仰のツアー記録を作品化した「season4《一路漫風！》」(京都芸術センター、2017年)、明治期に広島からの入植によって生まれた北海道北広島と広島との関係を扱った「season6《もうひとつの広島》」(広島市現代美術館、2019年) などがある。

主な展覧会

2019年12月	やんばるアートフェスティバル2019-2020 ／大宜味村立旧塩屋小学校周辺(沖縄県大宜味村) ＊タイルとホコラとツーリズム season7《ムイカーヌシーのコイコイ、ウンガミ様》
2019年8月	タイルとホコラとツーリズム season6《もうひとつの広島》／広島市現代美術館(広島市南区)
2019年4月	京都府内の学校所蔵 考古・歴史資料展2／京都文化博物館(京都中京区)
2019年1月	やんばるアートフェスティバル2018-2019 ／大宜味村立旧塩屋小学校周辺(沖縄県大宜味村) ＊タイルとホコラとツーリズム 番外編《父をたずねてやんばーる》
2018年8月	タイルとホコラとツーリズム season5《山へ、川へ。》／ Gallery PARC (京都市中京区)
2017年8月	東アジア文化都市2017京都「アジア回廊現代美術展」／京都芸術センター (京都市中京区) ＊タイルとホコラとツーリズム season4《一路漫風！》
2016年8月	タイルとホコラとツーリズム season3《白川道中膝栗毛》／ Gallery PARC (京都市中京区)
2015年11月	タイルとホコラとツーリズム 番外編《お地蔵様を運ぶプロジェクト》／ゼスト御池(京都市中京区)
2015年8月	タイルとホコラとツーリズム season2《こちら地蔵本準備室》／ Gallery PARC (京都市中京区)
2015年2月	お地蔵さまサミット／キャンパスプラザ京都(京都市下京区)
2014年8月	タイルとホコラとツーリズム／ Gallery PARC (京都市中京区)

プロジェクト

2021年2月～	タイルとホコラとツーリズム season9《ただいま！玉手箱》 ＊ Gallery PARC による作品販売プロジェクト[m @ p] への出品作品として

「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」モデル事業報告書

文｜中村優花（本モデル事業リサーチャー）

1　本レポートの目的

本レポートは、京都市の「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」のうち、2020年度に一般社団法人 HAPS が主催したモデル事業についての評価を行うものである。評価の材料は、現地での視察および、地域住民や京都市職員、アーティストに対するヒアリングから得た情報で、それらを用いて HAPS のマネジメントが適切であったかを評価する。

次章では、今回崇仁地域でのプロジェクトを進めた山本麻紀子と谷本研＋中村裕太の2組のアーティストのそれぞれについて、プロジェクトの進行を追った。続く3章では、「共生社会実現に向けた基盤づくり事業」を進めているのが京都市であることから、事業を担当している京都市職員2名へのヒアリングを行い、今回のプロジェクトの目的や HAPS に対する評価を整理した。4章では、今回のプロジェクトに対する住民と地域に関わる人々の声をまとめた。最後に、1章から4章の内容を受けて HAPS のマネジメントについての評価を行った。

2　事業の進み方について

2.1 山本麻紀子の場合

プロジェクトの概要

山本は2018年度の東九条でのモデル事業に引き続き、2020年度の崇仁での事業にも抜擢された。今回のプロジェクトは、「巨人の歯と眠り」「糸と布染め」「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」の三本柱で進められることとなった。

一つ目の「巨人の歯と眠り」は、彼女が巨人伝説を発想源に2018年に元崇仁小学校で制作した巨大な歯の立体作品「巨人の歯」とともに、崇仁地域の解体が予定されている建物やその敷地内で眠り、そこで見た夢から糸や布を使った作品を制作するというものである。二つ目の「糸と布染め」は、工事が予定されているエリア内に生えている植物から糸や布を染めるというものである。染色した糸や布の一部は、一つ目の「巨人の歯と眠り」の作品制作に使用される。そして三つ目の「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」は、京都市立芸術大学（以下、京都芸大）の移転工事の中で伐採される樹木の〈挿し木〉を行い、地域内外の希望者に一定期間里親になってもらい、複数の人の手を介し見守り育てながら、10年かけて京都芸大の敷地など崇仁地域内やその周辺に移植しようとする活動である。その過程で、樹木に関する物語を住民から聞き取り、専門家等を交え地域の生態系などを考慮しながら、樹木の地植え場所やその未来について、多様な人々とともに考えていく予定である。

リサーチの内容／崇仁に対して感じたこと／構想がどうやって固まっていったか？

崇仁でプロジェクトをするにあたってどのようなリサーチを行ったのか、という質問に対して「私リサーチしたんかな？という思いが最初に出てくる」と山本は語った。もちろん、崇仁のことを知るためにコーディネーターの石井を通して本を借りて読んだり、巨人の歯を制作していた時に関わってくれたという知人から話を聞いたりはしていた。また、緊急事態宣言が出る以前に石井と一緒に地域の住民に話を聞きに行ったりもしている。

だが、そのようにして地域にどんな人が住んでいてどういう活動をしているのかということを知る一方で、「自分自身で崇仁を歩いて、樹木を触ったり植物を触ったりする中で、どのようなことを感じるか」ということを常に大切にしていたと述べる。崇仁を歩いたり、草木や空気、また、その時点でのまちの風景に触れたりして時間を過ごす中で、それらについて自分自身がどう感じるかという彼女の感覚が解放されていった。特に樹木に関して、何か痕跡があると「あ、こんなふうに関わっていた人々がいたんやろうな」とか「あの木気になる」というように感じる木があり、それを市役所の人に伝えると「あれは元崇仁小学校の、ある校長先生が植えはったらしいですよ」と教えてもらうということもあったという。このように感覚を頼りに日々過ごす中で蓄積されていったことが「巨人の歯と眠り」の夢になったと感じていると語った。

上記のような感覚を解放していく過程で崇仁についてどのような印象を抱いたかという質問に対しては、「これからほんまにこの地域はいろんなことが変わっていくんやなあっていう実感があった」と答えた。日ごとに工事用の白い壁が建っていき、解体工事が進むにつれて、2日前にはまだ残っていた木が急に切り倒されているところや住民が移動した新しい住宅を目にして、「崇仁のみなさんは本当に激動の、大きな大きな変化の時期に、まさにいるんだな」と実感したと語っていた。

このような感覚の解放、崇仁への実感を経て、山本は「崇仁だけでもすごいたくさんの人間以外の命が生きていて、そのことと関わっている世界を見たときに、もう一層違う世界のことを考えられるに違いない」と思い、三本柱で今回のプロジェクトを進めているのだという。彼女は、いろんな思いを抱える人がいる崇仁という場所に関わりながら、「3つのプロジェクトが上手い具合に混ざり合ったときに、崇仁の人たちが、何かに向き合えたり、捉え直せたり、未来について考えたり、そういう風になると信じて」取り組んでいるのだ。

プロジェクトの進行／想定通りに行かなかったことはあるか？

まず「糸と布染め」について記述したい。これは、京都芸大移転予定地に生えている草花を採取し、それを擂りつぶして糸や布を染めるというものだ。この手法は、2018年度の「東九条のぞみの園」との「ノガミッツプロジェクト」作品制作でも山本が用いたものであるが、今回は媒染という新たな試みをしたという。大辞林を引くと、媒染とは「媒染剤を媒介にして染着・発色させる方法。媒染剤の溶液に浸したのち、染めつける。媒染染法。」とある。「糸と布染め」を始めた「東九条のぞみの園」でのプロジェクトのときには、「色が変化していくことこそが、生きるという風に私は思ったので、あ

えて（色を）定着させないようにした」が、今回は媒染によって色の定着を試みることにした。彼女はその理由について、「今回の崇仁の糸染め布染めは、もういまやいなくなってしまった植物なので、そのとき私が採集して染めたときの色を留めておきたいなと思って、媒染をやってみた」と語った。

実際に染め上げられた糸や布に触らせてもらえることになり、糸と布を袋からそっと取り出すと、草のすがすがしい香りがまず鼻に広がった。そして、糸や布に残る擂りつぶされた植物の繊維に目をとめていると、コーディネーターの石井が「一般的な染色の技法では残らないと思う」と言いつつも、「でもこの企画では、染めるというより命そのものをそこに残すとか移すということを考えると、そこに植物そのものが残るように染める方法が山本さんにとって適切な表現方法なんだろうなと私は思います」と続けた。命そのものを移したこれらの糸や布の一部は、「巨人の歯と眠り」の中で出会った様々な命をあらわす作品に使われていく。

その「巨人の歯と眠り」で彼女が一緒に眠る「巨人の歯」は、「京都国際映画祭」の出品作品として2018年の夏に元崇仁小学校で制作されてまもなく鴨川を流れ、その年の冬、総合福祉施設「東九条のぞみの園」にクリスマスプレゼントとして届けられたものだ。彼女はこの「巨人の歯」とともに、2020年4月から10月にかけて崇仁地域内の浴場や崇仁小学校、市営住宅の部屋、崇仁保育所で夢を見るために眠った。

山本が眠る際には、警備読書人という立場の人2名に警備をお願いした。警備人たちは山本が眠る場所から少し離れたところから彼女を見守り、その間2人のそれぞれが持ってきた本を互いに交換して読みながら警備をしてもらった。

「巨人の歯」と眠るという行為によって場所にまつわる夢をどうしたら見られるのかという筆者の疑問に対して、山本は「やっぱり歯と一緒に夢を見ると思って眠りに入るので、最初の方は寝てるのと起きてるのと半分半分くらいで、こんなことあんなこと、あそこの痕跡こんな風になってるなとか思って（夢を見るための）入り口を設けているので、たぶんその場所にまつわる、まつわるというかその場所にちなんだ夢を見たと思います」と語った。見た夢は、「○年代みたいな」とか「夕焼けの色」といったように言語化して日記やメモに書いており、そのキーワードを後から見返すことで「あたたかい感じ」、「あの時に水しぶきが散って…」というように夢で見た情景が思い出されるのだという。作品の制作は、2021年の1月初旬から始められた。彼女がこれまでアトリエ兼住居として住んでいた東九条からアトリエを滋賀県に移すことになり、挿し木の隣で制作できる環境を作り出すために挿し木の引っ越しが終わるのを待ってからの開始になった。いざ実際に手を動かして制作を始めてみたところ、作品サイズが大きくなってしまい、想定していた以上に時間がかかっているという。そのように大きくなった理由について彼女は、「巨人の歯を作って崇仁という場所に関わり始めた時から、崇仁という場所について空に布がはためいているイメージを持っていた。それを表現しようとすると、ある程度大きい布でなければならないように感じたから」だと語った。その大きな布の中には、眠りの間に会った人と、引き・寄りといった様々な視点で見た情景が描かれる予定だ。作品が完成したら、以前から抱いていた崇仁のイメージのように、工事が行われている状態で眠った場所の上空に布をはためかせた様子を写真にしたいと希望している。現在はとにかく完成を目指している状態であるとのことだった。

最後に「崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）」についてだが、2020年4月にかなり慌ただしく始められたと山本は語った。というのも、新型コロナウイルスの感染が拡大していく中でも解体工事が止まることはなく、どんどん樹木の伐採が進められていたからだ。それでも伐採される樹木のリストを確認しながら枝の採集を進め、ポットに挿していった。

だが、挿し木の世話は想像以上に難しく、根が出ないままだめになってしまったポットも多くあったようだ。2020年10月にヒアリングした際、彼女は挿し木について記録している日誌にある土や水、使った液体肥料について記したタグのようなものが貼り付けられたページを開いて、「全部採集したものが駄目になったときは、これが残ってるんです。これは（挿し木が）全部駄目になったっていう印なんです」と教えてくれた。その時点で321個残っていたポットは、彼女が滋賀にアトリエを移す前まで東九条の HAPS HOUSE で育てられた。

引っ越しに際して、元々生えていた場所と同じエリアで挿し木を育てるのがベストだとは思ったものの、滋賀と京都を毎日往復するのは現実的ではないため、挿し木を滋賀に運んで山本が一緒に冬越えをすることになった。コーディネーターの石井の提案で、移動させる前の挿し木がどのような状態だったのか1つずつ挿し木の写真を撮影することになり、その当時300鉢ほど残していたポットの中から順調に育っているであろう85鉢を選別してカメラマンに撮影してもらい、12月半ば頃にそれらのポットを滋賀のアトリエに移した。山間部にあるその家では12月でも氷点下になることがあるため、手作りのビニールハウスをつくって屋内の部屋にポットを置いていたという。現在、それらの挿し木の横で「巨人の歯と眠り」の作品制作が続けられている。

山本は植物や樹木が撤去されていくことに心を痛める一方で、人間の手が自然に加えられることについて、「挿し木は人の手がないとできない、絶対に成立しないこと」だと語る。彼女がこのプロジェクトで大事にしているのは、「人と樹木の間の物語」である。特に小学校では、その木の前で泣いたりその木の幹を触って何かを語ったりした子どもたち、先生たちがいるはずで、そういう木が人間の意図で伐採・撤去されていくときでも、人間ができることがあるという。今回であれば、それは里親として地域の人、おじいちゃんおばあちゃん、子どもたちに、一定期間根が伸び、成長していく様子を想像して見守ってもらうことであり、彼女はそのことを「心を使うこと」だと言う。「人間が指や頭を使うだけじゃなくて、心も使うことで自然にかかわることができる、というようなことを考えています。人間が自然に対してできることってまだまだいっぱいあるだろうし、逆に、自然が人間にしてくれることっていうのもたくさんあると思ってます。」

彼女は、この「崇仁すくすくセンター」を「共生社会事業」モデル事業として単年度の企画で終わらせるものではなくもっと長い時間をかけて行うものだと考え、その結果これは10年間のプロジェクトへと拡大することとなった。人間の寿命を遥かに超える時を生きる樹木が根づき、枝を伸ばし、葉を広げるさまを、山本と、地域の人やプロジェクトに賛同する人々が代わる代わる見守り、地植えをし、その後も大切に育ててゆく。そうして「人と樹木の間の物語」を何年、何十年かけて継承してゆく。崇仁地域において一度途切れそうになったその物語を、今、彼女は再び編み直そうとしている。

以上の三本柱で進められているプロジェクトの成果をどう対外的に見せるかということについて、最終的に冊子を作るという方向で進められている。2018年度のモデル事業でも展覧会という形で地域住民や地域外の人たちに披露されたように、通常であれば展覧会という形を取ることが多いだろうが、今回は冊子として発表し、長く形に残るものにすることに決まった。このことについてコーディネーターの石井は、木が永い時を生きていくことに触れ、「数十年後百年後の人間がこの時代を振り返ったと

きに、この（新型コロナウイルス感染拡大という）状況下でこういう試みを行っていたというアーティストの考えや表現、一人のアーティストの存在を超えたそれ以前の地域の歴史から連なる、樹木をめぐる人の動きや物語が残っていったらいいなという想いがずっとあった。今後プロジェクトが継続することを見据えつつも、樹齢を超えて（永い時間）残る可能性の高い紙という媒体で残したらいいんじゃないかなということを思いました」と語った。

この石井の言葉を受けて山本は、コロナ禍で対面のコミュニケーションができなくなった中で「（淡々と）一人で何かに向き合う時間がすごく長かったので、その一対一でやってきた姿勢というかやり方っていうのを感じてもらうためには、展覧会みたいな形じゃなくてその人のペースでページをめくってもらうみたいなところを見てもらう風な方が、私はしっくり来たので、最初の方からあんまり展覧会という形じゃない方がいいなとは思っていました」と続けた。

また、プロジェクトを進める中で、良くも悪くも想定外だったことはあったかという質問について、山本は新型コロナウイルスの感染拡大への対応について挙げた。

2020年4月の緊急事態宣言の発令に伴い、ちょうど彼女が本格的に動き出す直前の4月16日にHAPSから「コロナウイルス感染拡大下において、新たに定めた方針と、山本麻紀子さんとともに行う企画に関するご報告・ご相談」という文書で今後の方針について住民を中心とした関係者に向けて知らされた。一時は事業の停止も視野に入れながら行われた話し合いの中で、HAPSは山本の事業を継続したいという思いを受け、「当面の間、『対面でのコミュニケーションを行わずに』活動を続ける方法をと」ることでのみ事業の継続と感染対策を両立できるのではないかという提案を行い、上記の文書による関係者への説明が始められた。

山本は最初、その方針に対して「厳しい方針だな」という印象を抱いたものの、「コロナだからこの事業やめますとならなかったのは、本当に感謝しています」と語った。ただ、当時新型コロナウイルスに対する情報や対応がまだはっきりしていなかった時期だったとはいえ、彼女にとっては「どうしても対面でしか成立しない関係性」があり、絶対に対面しない、例外は無いというような方針だったので、とまどい、葛藤する場面があったとも述べた。たとえば、「『巨人の歯と眠り』で眠る場所として使用させてもらう場所を管理されていた方とは、もうすでに長い間関係を築いていた上に、いつも活動を応援していただいていたこともあり、眠る前になぜこういうことをするのかなど、意図をきちんとお伝えしたかったができなかった。そのため心残りがあるままで眠らなければならなくなってしまった」のだという。

また、前述の警備読書人に来てもらうにあたっても困惑したことがあったと語った。新型コロナウイルスの感染拡大に対するHAPSの方針を踏まえて、山本がその警備読書人と会わない（遠くから見えるのも避けなければいけなかった）ようにするルートや、警備をしてもらう場所に来てもらうタイミングの指示を考え、紙媒体で警備人に渡すということが新たに必要となり、複雑な作業が一気に増えてしまったという。そのことについて彼女は、「この場所で眠るっていうことに集中したかったんですけど、方針が厳しめだったので、あの時それによって作業が増えてしまったことはちょっとしんどかったなあっていうのはあります」と語っていた。このほかで上手くいかなかったのは挿し木の技術や知識が足りなかったということなどで、筆者が漠然と想像していた新型コロナウイルスの感染拡大によるモチベーションへの影響はなかったとのことだった。上記の通り、「もちろん対面でしか成り立たないことや掬い上げられないことは絶対にあると信じているが、だからといってそれができないからプロジェクトが止まるわけではない」と力強く語る様子が印象的だった。

住民との関係の作り方

今回のように特定の地域に入り込んでプロジェクトを行う際、山本は常に考えていることがあるという。それは、「地域に根付いている組織や団体、いつも地域の人が集まってくる喫茶店の人々と関わりを持ったり、その方々からの意見をいただいたりする」ということだ。彼女個人で動くだけでは行き届かせることのできない人たちの方が圧倒的に多いため、地域の方々に力を貸していただかないと表面上のことしかできないと語る。特に彼女は今後「崇仁すくすくセンター実行委員会」を立ち上げ、10年かけてプロジェクトを行っていこうとしている。彼女にとって、このプロジェクトに地域の人に関わって欲しいという思いが非常に強いため、このような「長期のプロジェクトをするのなら、関わる場所と自身がやりたいことを複合的に考えてどういう体制で取り組まなければならないか、いつも考えなきゃいけないなと思っています」と語った。そして、そのように住民に関わっていただく際、「参加する・しないはそちら側（住民側）にある」「強制的な要素はできる限り入れない」ということも常に意識しているという。挿し木プロジェクトについても、それぞれの人の「心にピントが合ったところ」で関わってもらえるような枠組みを作っていきたいと語っていた。

今回のプロジェクトに関わったことで感じている思い

山本は今回のプロジェクトで、「未来のことを一緒に考えられる時間をともに持てるようなことを10年かけてやっていきたい」と語った。自分の人生を誰かに語ることで別の人の力になったり、人の手が関わって育てられ地植えされた挿し木のことを次の世代の誰かが気になったりというように、自分も主体的に何かに関われるのだということをゆっくりで良いので崇仁の人々と一緒に体感していきたいのだという。

今回崇仁でこれまで生きてきた樹木は一時的に姿を隠してしまうが、いまそれらの木と同じDNAを持った挿し木が山本のそばにいる。彼女はそれを、崇仁で長く生きてきた先輩たちに里親の最初の時期を担ってほしいと語った。たとえその木に特別な思い出がなかったとしても、その木が生きていた時代のことを知っているおじいちゃんおばあちゃんに見てもらい、一時的に姿形が見えなくなっている間も人がその挿し木と時間を共有してほしいという。そしてその後で児童館の子どもたちや、飲食店の人たち、その他の地域の人にも代わる代わる里親になってもらい、木自体が持っていた時間、思い出、歴史に、いま崇仁で暮らす人たちが木と一緒に過ごした時間を上乗せすることで、今度は木が崇仁の人と過ごした時間を引き継ぎ、未来へ運んでくれるというストーリーを彼女は思い描いていた。

プロジェクトを振り返って

今回のプロジェクトの始まりを思い返して、はじめこのプロジェクトを受けるのは難しいと判断した、と山本は話した。コーディネーターの石井が山本に声をかけた2019年の秋頃、山本は2018年度の東九条でのプロジェクトに継続して取り組んでおり、2つのプロジェクトの同時進行は難しいと感じたという。だが、石井が諦めずに何回も声を掛けてくれたこと、また、2019年に山本の大切な人たちが数人亡くなってその姿が見えなくなったことに崇仁の状況を重ねたことの2つから、「これは私いまやらなあかんな」と思ったのだそうだ。だが、そのときはまさかプロジェクトの一つが10年を超えるプロジェクトになるとは思っていなかったと語った。

今回そのような経緯を経て崇仁でのプロジェク

トに関わったことによって、「事業の中で一貫して抱いている思いはありますか?」という筆者の質問に対して山本が述べた答え（前述の「今回のプロジェクトに関わったことで感じている思い」の部分を参照）は、彼女自身も「プロジェクトを始める前にはまさか私の口から出るとは思えなかった」思いだったと話す。そのようにプロジェクト全体を振り返って、「大変やけどやらないといけないことやったんやなって思ってます。石井さんは崇仁のプロジェクトが巨人のプロジェクトへつながるものになると思いますみたいなこと言ってくれてはって、まさにその通りになっている」のだという。

彼女は2012年から、5年間を1ブロックとしてそれを3回、計15年かけて行う巨人プロジェクトを行っている。そのうちの第2ブロックに入っていたときに2018年度の東九条でのプロジェクトが始まったことで、ライフワークとして行ってきたことと新しく始めたプロジェクトがリンクする部分が出てきた。その上、今回崇仁でのプロジェクトで挿し木というものに出会い、巨人プロジェクトは今や崇仁すくすくセンターに合流しているのだという。「自分個人としてずっとずっと死ぬまで取り組むとか向き合っていくプロジェクトが自分の体の中に1本走ってて、そこに新たにやってきたプロジェクトが自然な形で合流していったっていうのは、自分自身では不思議なことでもあるし、そういう機会をもらえたことは本当にありがたい。ありがたいっていう言葉で済ませられないくらい、感謝しています」と、石井への感謝の気持ちを述べていた。

2.2 谷本研＋中村裕太の場合

プロジェクトの概要

これまで谷本と中村の二人組で行ってきた「タイルとホコラとツーリズム」の season8として、今回崇仁で「タイルとホコラとツーリズム season8《七条河原じゃり風流》」が行われた。

その内容は、鴨川の崇仁地域に面した部分の河原から〈砂持ち〉をして拾った石で市営住宅内の砂場にお地蔵さまのモザイク画を描き、その様子をかわら版にして崇仁地域の全戸に配布。そして、完成したモザイク画の写真をターポリンの大きな幕として印刷し、京都市下京いきいき市民活動センターの外壁に掲示するというものである。

今後、住民とツアーを行い、後述するかわら版の号外を発行してプロジェクトは終了となるため、2021年3月現在ではプロジェクトは継続中である。

リサーチの内容／崇仁に対して感じたこと／構想がどうやって固まっていったか？

2021年2月にヒアリングを行った際に谷本は、「タイルとホコラとツーリズム」の season8である今回のプロジェクトの入り口は「空き祠」だったと語った。「崇仁は、地蔵祠の多い京都市内で、台座だけになってしまっている祠が一番多い地域で、このあり方って何なんだろうというのが入り口としてあった。そして、昔は地蔵盆などの祭にそこで人が集まるという役割を持っていたのに、今はお地蔵さまも住民もいなくなって役割を失ってしまった台座というものに、ここでなにができるのかというところから今回のプロジェクトが始まった」という。また中村は、「今回の season は以前の season と比べると、祠自体、もしくはお地蔵さま自体が地域の中で担ってきた役割というものに、より関心が向いてきた」と語った。だが、そもそもこの祠自体を扱うかどうかについても、プロジェクトの初期の頃は決まっておらず、京都芸大の移転に伴う工事で崩される予定のお堂にあった柳地蔵のための祠を作るというアイデアや、ちびっこひろばという京都市独自の制度による公園を扱うアイデアが出ていた。空き祠になっているというのはたしかにこの地域の一つの特性ではあるが、それ以外の方法も探っていくという姿勢でリサーチが行われていたとのことだった。

そのような中で新たにアイデアとして出てきたのが、かつて崇仁で行われた〈砂持ち〉だった。前述のちびっこひろばには必ず砂場があることもあり、砂というモチーフに二人が面白さを感じたことに加え、彼らがリサーチを始めたときには団地だった場所が京都芸大の移転工事に伴って更地になったのを目の当たりにする中で、時代は違えど、かつて柳原尋常小学校（崇仁小学校の前身）が作られるときに地域の人たちによる砂持ちによって小学校の敷地の基礎が造成されたという話が思い起こされ、何か巡り合わせを感じたと谷本は語った。そうして、砂持ちを再演するかのように河原の石を使って市営住宅の敷地内にある砂場にお地蔵さまのモザイク画を描くというプランが固まった。そのように信仰の対象となるお地蔵さま自体を作るということに対して、谷本は当初、自分たちが“本尊”を作っても良いものかという葛藤があったという。けれども、砂場を一つの版に見立て、そこに集めてきた石や砂、砂利を使って一瞬だけ現れるお地蔵さまの御影を描くというのは、自分たちにもできることだと思ったと語っていた。

砂持ちについて中村は〈労働と祝祭〉というキーワードを用いて、「明治期の新聞を読むと、ただ単に労働として地域の人たちが砂持ちをしていたわけではなく、仮装など、そこにある種の祝祭性があったことが分かった。だから、今回のプロジェクトでは労働が多いんですけど、その祝祭性というものを、自分たちが仮装するのではなく、お地蔵さん自体に色を入れるなどしてより華やかなものに仕上げていくことによって表現したい。この地域の方々が従事してきた労働の歴史がある。でもやっぱりこの地域の中にある種の祝祭性のようなものがある気がしているから、そういったものをピックアップして行きたいと思ってこのプロジェクトを動かしているという部分もあります」と語った。

中村はこの〈砂持ち〉、〈労働と祝祭〉というキーワードが出るまで、空き祠やそれ以外の歴史を深掘りしてもなかなか飛躍できるようなアイデアが出ず、モチベーションが上がるきっかけがなかったという。それは、コロナ禍の中で始まったプロジェクトであるがゆえに、地域への入り方をどうするべきか分からなかったり、リサーチの方向が定まらなかったり、崇仁という地域そのものに対する彼らの立ち位置を決めきれなかったりしたことが少なからず関係していた。けれどもその中で砂持ちや、労働と祝祭というアイデアが出てきて、コーディネーターの石井や藏原とともに〈砂持ち〉というものをどうやって実際に行うか話し合っていく中で、だんだんと今回のプロジェクトがまとまっていった。

谷本と中村は、いわゆる研究者やリサーチャーとして地域に関わる訳ではなく、リサーチをきっかけに得た情報や出会いをどう芸術表現へと結び付けていくのかということをポイントにして活動している。その際、プロジェクトごとに地域での自分たちの立ち位置を定めることを重要視しているという。谷本は、今回は HAPS からの誘いをきっかけに崇仁に入ったため、初期の段階では地域の住民とコミュニケーションが取れておらず、どのような立ち位置でこのプロジェクトに取り組むべきかかなり悩んだと語った。しかしリサーチを進めるうちに、半分言葉遊びの要領で「河原の石で作る、本当の“かわら版”だよね」「かわら版といえば新聞だ」「じゃあ僕らは、新聞記者のような立ち位置で地域を見つめるというあり方もあるんじゃないか」といった具合に、最終的に新聞記者、さらにはその新聞の配達員という立ち位置で地域に入るというところに落ち着いていった。

今回二人は、かわら版の記者という非常に社会的、政治的な意味合いを持つ立ち位置を選択しながらも、記事のテーマは歴史やまちづくりといった崇仁地域の特徴ではなく「空き祠」を選んだ。中村はこの理由について、「二人には歴史的に何かを調べるという手つきがベースとしてあり、同時代性よりも歴史的なコンテキストに関心がある。そうした歴史的なコンテキストに触れることは、地続きに今日の地域の中にあることだから、それがある種の問題提起になり得る、そういう手法ではないかなと思います」と語った。崇仁の歴史やまちづくりというのは二人にとって与えられた情報に過ぎず、彼ら自身で発見したものではないため創造性を感じられないのだという。「圧倒的に二人は自分で発見しないと発動しない。与えられるとそれは情報で終わっちゃうけど、それを自分で発見したということが大事って感じですね。そういう意味での当事者性はすごく大事にしている」とのことだった。

プロジェクトの進行／想定通りに行かなかったことはあるか？

以上のような紆余曲折を経ておよそ1年かけてプロジェクトの構想が決まった一方で、制作は2ヶ月というかなり短い期間で行われた。

2021年2月13日･14日に、谷本と中村、HAPS 職員、京都市職員の少人数で鴨川の河原から石を運び出す〈砂持ち〉が行われた。参加者それぞれが手頃な石を思い思いに拾い、袋に入れ、台車まで持ってくるという作業を複数回繰り返して石を集めていった。その作業はかなり重労働ではあったのだが、〈労働と祝祭〉というキーワードが思い浮かぶような、和気あいあいとした様子で終始進められていた。また、通りすがりに興味深そうに見ていたり、「何してるの」と話しかけてきたりする人も散見された。

その次の週の2月20日・21日には、お地蔵さまのモザイク画を描く作業が進められた。谷本と中村は、かわら版の版となる砂場が上から見たときに綺麗に見えるよう、砂を盛ったり掘ったりして凹凸を付ける作業や、絵を描く材料となる石を色や形で選別するという作業を行い、それらの石がひとつひとつはめ込まれることで、次第にお地蔵さまの姿が現れていった。石について、元々赤みがかっている石はお地蔵さまの頬や口に、黒の色味が強い石は輪郭や後光の線を描くのに使われ、その他は岩絵の具で彩色されて、白色のものはお地蔵さまの顔に、それ以外の赤・青・黄・緑色のものは背景を描くのに使われた。

この石を置くという作業について、中村は「置かされる」という感覚があったと話した。「自力的なアートを作りましたみたいなそういう感覚ではなくて、徐々に場の空気であったり、他の素材の力であったりというものを使いながら、だんだんと生まれてくる感じがあった」という。また谷本は、「化粧地蔵の多くは風雨にさらされてもうお顔がわからなくて、子どもたちが地蔵盆の日に好みの色を塗って、たぶんその時に子どもたちもボコボコの石を見て、ここ目かなとか、この辺が口かなっていうのを想像しながら描いていくと思うんですけども、（今回のプロジェクトは）それに近い行為やったんかなっていうのを改めて思います。だから、像そのもの、石仏そのものを作るんじゃなくて、まあお化粧をしたぐらいの感覚なんだなあという感じ」だと語った。

そして、2月28日にかわら版その1が発行され、谷本と中村、HAPS スタッフなどで全戸配布を行った。その後、3月20日まで毎週末に全部で4回、かわら版が発行された。またこの日より展示が開始され、京都市下京いきいき市民活動センターの1階に配布ブースが設置され、外壁に幕が懸けられた。この屋外展示は当初4月2日まで（計2週間）の予定であったが、京都市下京いきいき市民活動センターのご厚意で、5月5日まで延長されることが決まっている。

だが、そのように展示の延長が決まった一方で、砂場にブルーシートをかけて作品を保管していることに対して住民から疑問の声が上がり、4月3日に予定していた住民のツアーを待つことなく、急遽3月30日に砂場のモザイク画を撤収することに決まった。これは、谷本と中村に前もって相談することのないまま、決定として二人に伝えられ、中村はそのこと自体は非常にネガティブなことだったと語った。だが、谷本と中村、HAPS、京都市の三者でオンライン会議を重ねるうちに新たにかわら版の号外を出すというアイデアが生まれていったことで、「アクシデントが起きた中でも逆にそれを転換させ、それすらも自分たちの作品に組み込んでいくというアイデアに至ったことは、自分たちにとってもいい経験だったかなと思います」とも述べていた。

また谷本は、号外を出すというアイデアが出た際、「しめた」という気持ちも抱いたという。それは、当初の予定通りであればかわら版のその4で発行は終わりだったため、お地蔵さまと桜を一緒に映した写真を世の中に公開できるタイミングがないはずだったところを、号外が出ることになったおかげで、ちょうどその写真を公開できるようになったからだ。結果的には、3月31日にすでにモザイク画が撤収されて何も無くなった砂場と桜を撮影することになってしまったのだが、「その風景そのものが表現になるんじゃないかなという風に思い、あえてそれを号外に出そうと思っていますので、結果的にではあるけれども、毎週発行されるかわら版の誌面で、お地蔵さまの顔が現れて、また消えていくという定点観測的な記録としてうまくはまっているような気がしています」と話した。もちろんこれによって撤去せざるを得なかった事実を良しとすることはできないだろうが、中村は同様に困難な状況を積極的に捉えて、発想を転換することができたとした。

このことに加えて、谷本は全戸配布をできたということは想定外だったと話した。二人ははじめ、出来上がったかわら版は須原通り沿いの廃屋の前にある青いタイル張りの台座のところに置き、前を通った人に取ってもらうという受動的な形での配布を考えていた。しかしそれが、安全上の理由でできないということになり、「じゃあもうこっちからポスティングしよう」と決めたことで地域住民のほぼ全員に二人から働きかけができたのは、想定外だったが大きな出来事だったと思っていると語った。

住民との関係の作り方

谷本は、コロナ禍でのプロジェクトであることから今回は率先して住民と関係づくりを行うことはなかなかできなかったと言いつつも、通常のプロジェクトでは、作品を媒介にした関係を作りたいと考えていると話した。特に今回は、かわら版を見たことによるコミュニケーションが生まれてくることを期待しているという。一方で中村は、普通に、なるべくフランクに喋れるような立ち位置に自分自身がいることを意識していると述べた。中村が自分のことを喋るというより、相手の話を聞くという姿勢であることを重視するのだという。誰かの話を聞く際にも二人の間で役割分担をしているそうだ。谷本はできるだけメモを取り、中村はそれを信頼して相手のしぐさを見たり、裏で何を思っているのかに思いを巡らせたりすることによって、二人で協力して面白いポイントを探していくということだった。

また、今回崇仁地域の全戸配布を行ったことで中村は、新聞配達員として谷本編集長がつくった新聞を地域に配るという面白さを感じたという。その一方で谷本は、立ち寄った喫茶店の店主にお地蔵さまのお話をうかがっていた際、たまたま居合わせたおじいさんが「何の話をしてるんだ」と声をかけてくれ、よく話を聞いてみるとその男性は昔お地蔵さまの祠を全部カメラで撮影していたという話を聞

くことができ、そのときの内容がかわら版の記事の中に入っていったという出来事を挙げた。そしてそれは、「普通の新聞記者の取材とは少し違う形だと思うし、初めは試行錯誤の中でリサーチしたことが直接作品につながるかどうかもわからずノートに書き留めていたが、最終的には1年間かけて記録したことのだいたいをかわら版の記事として落とし込めたので、結果として、まさに記者的な立ち位置で取材をしていたのかなという風に思う」と振り返った。

今回のプロジェクトに関わったことで感じている思い

中村は今回のプロジェクトについて、東九条での山本麻紀子と地域との関わり方を見ていたこともあり、ゼロベースで始まったという実感はあまりなかったという。だが、今までの「タイルとホコラとツーリズム」では地域と関わることが前提ではないプロジェクトが多く、今回の崇仁でのプロジェクトでもそれは前提にしていなかったにもかかわらず、始まる前からなんとなく今までとは違う season になるだろうとうっすら思っていたし、実際そういうものになりつつあると感じていると語った。また、プロジェクトの初期段階から、「共生社会事業」のプロジェクトということで、HAPS としての目的とアーティストとしての目的が共有できたらいいと思っていた、とも話していた。ただ、スタートの段階で目的を決めてしまうのではなく、自分たちのやりたいことをベースに活動する中で、HAPS やコーディネーターの石井と互いの目的をすり合わせていくことがおもしろいと感じる、と語った。

一方で谷本は、崇仁においてよそ者であることを常に意識していたため、地域との距離の取り方についてずっと考えていたという。だが、「今回の事業をきっかけにして人間関係の繋がりが出来て、崇仁に面白さを感じてここに関わり続けるようなことが起きたとしたら、それもありだなと思っている」と話した。そして、常にそういう偶然性を大切にしたいし、作品を発表したあとで何かが起こると面白いと語った。

プロジェクトを振り返って

【中村】

2021年3月末までのプロジェクトを振り返って中村は、「最後、寄り添っていったという感触がある」と話した。前述したように中村は、アーティストはプロジェクトの意義に従順に応えるだけではなく、アーティストとしての目的を同時に持つべきだと考えているが、そのことについて3月31日までの動きを振り返ったとき、最終的に彼が目指して行くべきものが HAPS や京都市のそれに寄り添っていったように感じているという。

また中村は、今回のプロジェクトの中で自分の目的が達成されたと感じた時が2回あったと語った。1つは二人の目的であるお地蔵さまの絵が完成したとき、もう1つは、予期せぬ全戸配布を毎週行ったときだった。特に後者は、今までの彼らのプロセスでは考えつかない、実践しにくいようなことであったが、今回 HAPS や京都市と一緒に事業を行ったことによって得られた感覚だったと話した。また、ポスティングという行為は、ただ地域を歩くのとは全く異なるリアリティがあったそうだ。それは、「あ、ここに人が住んでるんだ」、「ポスト1つ向こう側に人の生活があるんだ」、「これを誰かがいずれとるんだ」というような、中村にとってかなりリアリティがあることとして感じられたし、そのように毎週同じところを回る中で、中村自身も予期していなかった欲望や目的が、HAPS と組んで一緒にプロジェクトを進めていくことによって実現できたという面白さがあったと語った。

そして、「地域の人を意識しながら作ったこと」、「1年という長いスパンで活動したこと」は今回が初めてに近かったとも話す。それに伴い、今回はプロジェクトの鮮度を保っていくこともポイントのひとつになったという。今後は、ずっと活きが良い状態を保つ方法を考えていきたいと話していた。同時に、今回のプロジェクトでは「アーティストが背負っていくもの」を意識しながらやっていた部分があるとも話した。以前彼らが広島市現代美術館で行った「タイルとホコラとツーリズム season6《もうひとつの広島》」のときには、地域に入りきれないままだったけれども、今回新聞記者という立場をとったことにより、地域への入り方が見えてきた感じがしたと締めくくった。

【谷本】

谷本は感想としてまず2つのエピソードを挙げた。ひとつは、元々かわら版を置く予定だったタイル張りの台座のすぐ前にある清華園という中華料理屋の入り口に、かわら版を貼ってもらったというエピソードだ。自分たちが作ったかわら版を地元のお店に貼ってもらったことについて、普段の展覧会でギャラリーに展示するのとは違うダイナミックさを感じることができて嬉しかったと話した。しかも、そのかわら版にはちょうどお店の目の前にある祠が描いてあり、その絵が描かれた面が見えるように出口の扉に貼ってくださっているので、かわら版を見てから扉を開けるとまさにその風景が目の前にあるという、一種のインスタレーションになってしまっているのが面白いと思ったという。

もうひとつは、京都市下京いきいき市民活動センターが面している交差点にお地蔵さまの幕を展示していた間に、交差点に面したレザーショップサワイという店が解体されて無くなってしまったというエピソードだ。その場所に幕を掲示したことで、偶然交差点の風景が変わる瞬間をお地蔵さまがずっと見守っているような形になり、「このタイミングであの場所にお地蔵さまを僕らが設置したというのは、何か不思議な巡り合わせだなという風に思いますし、あの場所に展示するっていうのも、いろんなアイデアがあった中で最終的に自然に落ち着いた場所でもあるし、なるべくしてなったような気がしています」と話した。

それから、今回のプロジェクトは谷本にとってコロナ禍における初めての活動だったため、はじめ、どういう形で活動ができるのかということを模索していたという。それを経て、今回のプロジェクトでは「通常の展覧会と違って屋外で展示をしたり、全戸配布をしたり、スタッフ側だけで砂持ちを行ったりして、今だからこそできる、普段だったらできないことができた部分もあるんじゃないかなと思います」と締めくくった。

3 京都市職員の声

3.1 この事業に対する京都市の考え方

「共生社会事業」に関わる京都市の文化芸術企画課の職員に対して今回の事業に期待することを尋ねたところ、以下の4つの回答を得た。

- 共生社会実現のための基盤づくりをすること、そのモデルになること
- 崇仁地域の社会課題に対して文化芸術の力で何か変化を起こすこと
- 京都芸大移転に向けて文化芸術を受け入れる地

盤をつくること
●アーティストに良い影響が与えられること

そして、このモデル事業という取り組みがなくなった後も、新しく出てくるであろう社会課題とアーティストとが上手く結びつく状態になるのが理想だという。だがそれと同時に、アーティストの作品だけで社会課題を解決するというのは困難であると考えているとも述べていた。

アーティストが作品の中で社会課題を取り上げる方法はいろいろあるが、「そこに住んでいる人や関わっている人たちの意思、人権を無視してまで芸術表現をするべきではない」というのが、市の職員として彼らが持っている基準である。アーティストの表現は大事にされるべきだが、そこに関わっている市民の生活が脅かされるようなことは避けなければならない。しかしその一方で、アーティストの表現が最大限発揮される瞬間に一番強くメッセージが発せられる、とも彼らは考えている。白から黒のグラデーションの中で、どちらか一方に寄ったところばかりを市の職員が目指そうとしたら、表現の面白さはどんどん失われていってしまうだろう。両者の間のどこを選ぶか、常に注意を払いつつ進めなければならないと語った。

特に今回の崇仁でのプロジェクトでは、社会課題を風刺的に取り上げるのではなく問題の本質を見極め、そこに対してどういうアプローチをすればその課題が露悪的にではなくみんなの心に響くのか、ということを重視しているという。また、課題に対して行うアートプロジェクトについて丁寧に説明することで「ああ、そういう課題があるよね」とか「自分でも気をつけないといけないよね」と市民に広めていくことができればいいと考えている。

それから、京都芸大が2023年度に移転してくる前に「アーティストと普通に（気後れすることなく）つきあえますよ」、「アートの表現にももっといろんなものがあるんですよ」ということを今の段階から住民に伝えることで、京都芸大が移転してきた後に地域との接続が上手くいくようになることが理想だと考えていると語った。

3.2 今回の崇仁地域でのモデル事業に関わった感想

文化芸術企画課が所管する事業で崇仁地域に関わるということは、今までになかったことだった。今回事業を始めるにあたって、職員が崇仁の住民から話を聞いたところ、文化芸術やアーティストに対する期待を非常に強く感じたという。だが、そのように面白いと感じてくれる住民もいる一方、生活圏に知らない人が来ることに対して不安を持つ住民もいるのだということに改めて気付いたと語った。彼らは、文化芸術企画課という文化芸術を推進していく立場に立った場合、アーティストサイドでアーティストが希望することを実現させるために調整を進めていくことが仕事となる。しかし、彼らは文化芸術企画課の職員であると同時に京都市の職員でもあるため、京都市職員としての立場に立った場合、地域の住民が幸せに、不安なく過ごせるようにするために働くことが求められる。「ですので、住民にとって何が1番いいことなのかということを意識しながら進めていかないといけない、調整をしていかないといけないんだなということを改めて感じました」と述べた。

特に今回谷本研＋中村裕太のプロジェクトについて、どうしても京都市としてアーティストの希望を通せない場面があった。「それは文化芸術企画課の職員としては非常に心苦しかったし、自分の力不足も感じて、もっと文化芸術企画課として庁内で調整できる力を付けていかないといけないなと思いました。また、住民の中に（今回のプロジェクトのことを）非常に前向きに捉えて、どんどんPRを進めて欲しいという意見があったけれども、それを叶えられなかった部分がありました」と、プロジェクトに関わって感じた難しさを口にしていた。

3.3 今回のモデル事業の達成度

「モデル事業に期待していたことはどの程度達成されたと考えているか？」という筆者の質問に対して、ある文化芸術企画課の職員は「これは数年とか10数年とか、そういうようなスパンで見ていくようなものだと思うので、今の時点で達成された、されていないというのは正直分からない、答えを出せないかなと思う」という回答をしつつも、「ただ、それをどのように評価するのかというところが重要かなと今の時点では思います」と続けた。

彼は今回の谷本研＋中村裕太のプロジェクトについて、タイルとホコラという土着のもの、人々の生活に密接につながっているものを大切なものとして捉えて、それを他の地域の人が見ることで何か大切なことに気づくという手法を評価していた。「現地を非常に丁寧にリサーチされて、そこにたくさんの祠とかお地蔵さんがあったということを発見されて、『ここにあったやつがそっちに移っているんやで』とか、『この祠はここにあったやつなんやで』とか、そんなことまで地域の人たちに聞きながら明らかにしている手法に驚きました。そのような、一番良いことは何なのかということをできる範囲で実現する手法を残しておかないといけないなと思いました」と話していた。また、「崇仁という地域にこういう一面もあったんやなあっていうことに気づいてもらえる、人々の暮らしがあり、子どもたちの大切にしてきた歴史があり、それは別にほかの地域と何も変わらないということに改めて気付く機会を与えてくれたんじゃないかなと思いました」と語った。

一方で、このような事業はまだアーティストとして経験を積んでいない人がおいそれとできるようなものではないだろう、と述べた。今回、アーティストとしての経験豊かな2組が非常に丁寧なアートプロジェクトを崇仁で行った。その事実は結果も含めて非常に重要であるし、それを記録に残して後生の人に見てもらえるようにすることで、何かを始めようとするときの参考にしてほしいと考えているそうだ。

先述の通り、今回の事業だけで共生社会が実現するということはない。しかし、「（関わった）人や方法、心（この事業に対する想い）といった部分をしっかりと後世に残していき、後の人に知ってもらえるようにすることで、（この事業に期待する4つの目標を達成するための）重要な布石というか礎になるし、そうして行かないといけないと思っています」と決意を口にしていた。

3.4 コーディネーター（HAPS）の成果や意義／課題

今回のモデル事業は、京都市の計画に基づいて一般社団法人HAPSが主催している「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」の一環として実施されている。このモデル事業の実施には、「非常に高い専門性がなければできないことだと思います」とある文化芸術企画課の職員は述べた。また今回のモデル事業においては、「本来であれば行政の方が得意とするような地域との調整も、HAPSに本当に主体的にやっていただきました。もう感謝しかないというような状態です」とのことだった。

今回のモデル事業を崇仁地域で始めた2年前、「文化芸術企画課ってなんやねん」というような状態だったという。しかし今では「ええなあ、ええなあ」とみんなが言ってくれるような状態になっているそ

うだ。それはアーティストが非常に丁寧な仕事をしているということがもちろん前提としてあるが、アーティストの仕事をコーディネートする人が住民とアーティストを繋がなければ両者の思いが互いに伝わることはなかっただろう。そのことから、「今回石井さんにはそれ（アーティストと住民の意思疎通の仲立ち）をしっかりしていただいたという認識です。ですので、成果とか意義という言葉よりも、石井さんがいないとこの事業は成り立っていないというぐらいの認識です」と評価した。

一方で課題もある。それは、「やっぱり石井さんみたいなことが出来る人がまだまだ少ないということ」だという。今後崇仁地域に京都芸大が移転して来ることで、崇仁地域の中でアートプロジェクトが盛んになっていくだろうと予想される。だが、「ここまで丁寧にできる人を僕は知らないんです。だから、こういった人を育成しないといけないんだろうなという課題意識は持っております」と、今後も持続的に崇仁地域でアートプロジェクトを行う場合の人材不足を懸念していた。

4　モデル事業に対する住民の声

今回のプロジェクトの成果について、崇仁地域の住民や崇仁地域に関わる人物へ以下の4つの質問でヒアリングを行った。

①作品を鑑賞して（アーティストのしごとに触れて）どのような感想を抱きましたか？
②今回の作品を観た（アーティストのしごとに触れた）後で文化芸術や表現活動に対する印象はどのように変わりましたか？
③今回の事業によって地域の中に何か変化が生じたと感じましたか？それはどのような変化ですか？
④コーディネーター（HAPS）の成果や意義と、逆にいなくてもよかったと思った場面（課題含む）を教えてください

以下ではその回答を紹介する。

4.1 ①「作品を鑑賞して（アーティストのしごとに触れて）どのような感想を抱きましたか？」という質問に対する回答

・部落の歴史や崇仁の歴史、まちづくりといった観点からではない作品の発想が非常に良かった。（山本の作品について）崇仁にあった植物を採取してそれを残していくということは、長年崇仁でいろんな人を見てきた中でも斬新な手法で高く評価している。（谷本＋中村の作品については）何気ない写真に意味づけをして、しかもいろんな人が関わってくるということが非常に良かった。今後、彼らの感性で、社会的に極めて重要な歴史を探っていってもらえたらさらに良いと思う。〈山内政夫さん－柳原銀行記念資料館事務局長〉
・今回の両名のアーティストの作品というのは、絵画や彫刻といったいわゆる芸術作品と聞いて想像しやすいものの枠にとらわれないものだったような気がしている。これも芸術の一つの形なんだというのを、私自身も再認識したし、いきいき市民活動センターの利用者にとっても認識できる場、機会になったのではないかと思った。〈吉田隆真さん－京都市下京いきいき市民活動センター 副センター長〉
・（山本が）もうすでに解体されてしまった崇仁小学校の正門の桜を移植してくれて、小さな花を今年の春に咲かせてくれて、非常に嬉しく思った。現在育てていただいている様々な草木が、ゆくゆくは地域の中で、いろいろなところでまたみんなに見てもらえるような形で育っていってほしいと思っている。今回の事業は、お地蔵さんの取り組みも含めて、今まで自分たちが見過ごしてきた地域の植物や自然とか、文化的なものとかを改めて見つめ、再認識するという機会になったと思っている。〈森本弘義さん－崇仁自治連合会 副会長〉
・初日に（山本の）挿し木を持ってきていただいて明日からどんな風になるか楽しみにしていたけれども、なかなか元気にならずすぐに返すことになってしまい継続ができなかったことを残念に思っている。また（挿し木のお世話を）できたらいいなと思っている。（谷本＋中村の作品については、崇仁デイサービスうるおいフロアに）かわら版を置いたり利用者に配布したりしたことで、興味がある方から「そんなところにもお地蔵さんあったんだね」といった具体的な中身についての話もあった。すごく面白い取り組みをされているなと個人的には思っているけれども、制作過程がよく分からず、経過が速く見えた。そのため、利用者に伝える間がなく、どんどん号数が増えて終了したという感覚で、一部だけしか関われなかったのが残念だと思った。〈大森晃子さん－社会福祉法人カトリック京都司教区カリタス会 崇仁デイサービスうるおい 主任〉

4.2 ②「今回の作品を観た（アーティストのしごとに触れた）後で文化芸術や表現活動に対する印象はどのように変わりましたか？」という質問に対する回答

・芸術はどうしてもパトロンと言われるような出資者に買われて（世間に評価される）というのが1つのパターンになっていたりするから、今回のプロジェクトでは HAPS さんがパトロンのような立場になったとも言えると思うのだけれど、そういう部分でアーティストが日の目を見るというか、そういう場所を提供できたことがよかったと思っている。もっと発展型の何かができたらいいなと思う。〈田辺尊史さん－京都市下京いきいき市民活動センター センター長〉
・アーティストの方が実際に地域に入っていき、地域の資源を生かして表現活動を行うという一連のプロセスを垣間見たことで、実際に地域でアートを通して何かを解決するということのおもしろさと、同時にその大変さがすごく見えたのかなという風に思う。〈吉田さん〉
・正直、変わった、変わってないっていうところは即答できないが、ここ何年かでアーティストと関わらせていただく中で私の中ですごく印象に残っているのが、コミュニケーションの部分において福祉とかなり通ずるものがあるんだなということ。私たちは高齢者とかご家族のお話を聞くことからまず始めて、その中からご本人の困り感とか支援の方向性を決めていくという順序だけれども、アーティストの方も作品を生み出す中で、その地域の実情みたいなことを本当に丁寧に時間を掛けて聞き取りされている。そのヒアリング能力みたいものはすごく高いなと思った。それは私たちの支援にものすごく通じる部分があって勉強になった。作品に対してのイメージというか、接し方のイメージで印象が変わったというところが大きかった。〈宮崎彰子さん－京都市

下京・東部地域包括支援センター センター長〉

・今回の取り組みを見ていて、芸術の中では記録がすごく大事なんだなということを思っている。制作の途中経過や「こういう意図で作りました」ということ、「こういう思いでいろんな人が関わってこういうものができました」ということが分かることで、心が共有できるというか、その芸術作品自体に思いを馳せられる、作品そのものだけではなくその経過にも思いを馳せられるということが、今回のいろんな取り組みを見させていただいて思ったこと。〈大森さん〉

・いままで芸術的な分野についてはあんまり関心がなかったが、京都芸大が2023年の秋に開校するということから、地元としても「文化的なものとか芸術的なものが地域全体に広がっていったらな」、「そういうものが大事にされるまちになったらいいな」という風に思っていた。今回改めて文化芸術の取り組みを見せてもらって、いよいよ具体的な取り組みを京都芸大の開校に合わせて地域としても考えていけたらいいかなという風に思うようになってきた。〈森本さん〉

4.3 ③「今回の事業によって地域の中に何か変化が生じたと感じましたか？それはどのような変化ですか？」という質問に対する回答

・単純に部落の始まりや柳原銀行の活動、部落解放運動といったものではなくて、「こういう掘り起こし方がある」と地域の人と他の人とを結びつけるような可能性があるんじゃないか、文化芸術は幅広いものをもたらすような期待があるんじゃないかということで、地域の人もそういう風に変わってもらうきっかけがあるといいな。〈山内さん〉

・変化的なものはたいして感じなかった。というのは、やはり住民のみなさんにアピールしたかったなというのが正直なところです。アピールできればもうちょっと住民のみなさんの思いも違ったのかなという気がする。〈湯谷芳博さん – 崇仁自治連合会会長代行〉

・大局的に見れば、この地域でアートを受容する力みたいなものは今回の事業だけに留まらず動きとして出てきているのかなという印象は受けている。〈吉田さん〉

・少しずつ根付いてきているのかなという印象がある。ほかの人、外部の人たちが地域に入ってくることに地域が慣れてきだしているのかなと。石井さんが色んなところに足繁く顔を出したり声をかけたりされていることが実を結んでいるのかなと思う。ただ、一部でお地蔵さんのプロジェクトの中で苦情が出たという声を聞いて、外部の機関がイベントをするということであれば、まだまだ地域への根回しは細かくやっていく必要があるんだなということは感じている。また、今までは長屋時代の人たちがまとまって同じ市営住宅に入っていたけれども、今は誰がどこに行ったのかがわからないというような状態になっている。そういったところで地域のバランスが崩れているから、活動の中で背景も知っておくともうちょっとリスク管理ができるかなと思っている。〈宮崎さん〉

・正直なところまだ根付くというところまではいっていない、まだ分からない部分が多いのかなと思う。ただ、このような取り組みを重ねていくことで、「こないだもやってたしまた今回もなんかやってるな」とか、「何もなかった敷地にこういうのができているな」といった言葉がだんだん出てくるようになると、我がことというか、地元のことのように感じていただけるのかなとは思う。〈大森さん〉

4.4 ④「コーディネーター（HAPS）の成果や意義と、逆にいなくてもよかったと思った場面（課題含む）を教えてください」という質問に対する回答

・もし今回の HAPS の仕事に点数をつけるなら、80点。直接美術家と我々住民が関わるのは異種格闘技のようなもので、なかなかこちらの思いが伝わらないだろうし、向こうのこともたぶん全部は理解できない。その間を結びつけることが非常に重要である中で、HAPS は地域に入っていって説明責任を果たすという丁寧な取り組みをしていたため、非常によかったと思う。今まで部落差別を無くしたり人権を大事にしたりするという取り組みを行う上で、このような前例はあまりなかった。だから、この仕事はこれからもやってほしいと強く思っているし、上手くいったかどうかはわからないけど育ってほしいと思っている。残りの20点については、今後京都芸大が移転してきた後に起こることへの期待。京都芸大が来るとはいえ、ちゃんとした方程式を持っているわけではおそらくなくて、これまで関わってきたいろいろな人がバラバラになっているので、それらをどうまとめるかということがあとの20%の中で大きな意味合いを持っているのかな。〈山内さん〉

・今回 HAPS さんがいなかったらこのような完成度の高いものはできていなかったと思う。また、展示の許可の手続きをすべて展示会場でやらなければならなかったとしたらそれは難しかったけれども、市の条例などに沿う形で HAPS にコーディネートしていただいたので助かった。〈田辺さん〉

・今回の取り組みの中で HAPS はとても大事だったと思う。アーティストが実際に地域で関係性を作るというのは、アーティストがダイレクトに行ってすぐに出来るものではなく、地域に詳しいコーディネーターが必要な箇所に根回し等をしてアーティストを受け入れる態勢が作られていくということだと傍から見ていて充分感じ取れたし、その意義は絶対にあったと思う。コーディネーターがアーティストの意思、意図を解釈するのを手助けしてくださったおかげでそれを分かりやすく市民に発信することができたという点において、インタープリターとしてのコーディネーターの意義があったのではないかなと思う。また、縦割りの行政の各部署とのやり取りもコーディネーターの石井さんが一括して行ってくださったことによって、作業効率、意思決定のスピードが上がったと思う。ただ、コーディネーターの方が全体を統括して進めてくださるというのはスムーズである一方、全体への日程や意識の共有が難しいと感じる場面も若干あった。関係機関全員が認識共有できる場のようなものが持てるといいのかなという気がした。〈吉田さん〉

・石井さんが関わってくれることによって、いろんな人とのつながりが増えてきたことが1番大きい成果だと思っているし、我々がこれから大事にしていきたい、していかんとあかんことやろなと思っている。ともすれば自分たち自身が地域の中に閉じこもってしまうという面がなきにしもあらずな中で、HAPS の取り組みは地域にとっていい刺激になったと思うし、これを機にもっともっといろんな人やほかの地域とのつながりを大事にしていけたらなという風に思っている。特に今はコロナのことがあるから同じ崇仁の中でもなかなかみんなが顔を合わせる機会が持てない状態になっているが、この新型コロナウイルスのワクチンが広がっていけば、それを梃子にしてもう少し地域の中の繋がりも大事にしていきたいなと思っているので、HAPS の皆さんとも情報交換しながらやっていけたらなと思う。〈森本さん〉

5　まとめ

前章の崇仁地域の住民へのヒアリング内容をまとめると、以下のようになる。質問①「作品を鑑賞して（アーティストのしごとに触れて）どのような感想を抱きましたか？」の回答からは、今回の2組のアーティストの作品について、これまで崇仁地域を表象してきたものから着想を得るのではなく、崇仁という場所を特別視せず他の地域と同じようにそれぞれのアーティスト独自の感性で地域を眼差し、作品を制作したことに対する高い評価が読み取れる。また、そのような作品のおかげでこれまで見落としてきたものを住民が再認識するきっかけになったという声や、絵画や彫刻、音楽といった、分かりやすく五感で体感できるような作品の形ではない、プロジェクト全体に価値があるアート作品のあり方を改めて認識するきっかけになったという声が寄せられた。その一方で、せっかく面白い取り組みをしているのに住民に伝える間もなくプロジェクトが終了してしまったことを残念とする声もあった。

質問②「今回の作品を観た（アーティストのしごとに触れた）後で文化芸術や表現活動に対する印象はどのように変わりましたか？」では、このモデル事業によって、金銭的な価値をつけることが難しい作品を制作しているアーティストが評価される機会をつくることができたのがよかったという声、アーティストのヒアリング力に対する評価の声、アーカイブの重要性を感じたという声、京都芸大の移転に伴い地域の機運醸成に取り組んでいきたいという声などが寄せられていた。

質問③「今回の事業によって地域の中に何か変化が生じたと感じましたか？それはどのような変化ですか？」の回答では、特別な変化は感じていないという声と、アートや外部の人を受容する力が少しずつ根づいてきている変化を感じたという声の両方の声が上がった。また、今の時点では根づくとまでは言えないと言いつつも、これからもこのモデル事業のような取り組みを重ねることで住民の捉え方も変わるのではないかという声や、地域コミュニティの状態を知っておくことでリスク管理につながるのではないかという声が上がった。

質問④「コーディネーター（HAPS）の成果や意義と、逆にいなくてもよかったと思った場面（課題含む）を教えてください」の回答のうち成果や意義としては、HAPS がアーティストと住民の間に立って通訳のような役割を担ったことで円滑な意思疎通が可能になったということに対する評価が最も多く見られた。また、今回 HAPS のおかげで広がったつながりをこれからも大切にしていきたいという声や、京都芸大も含めた崇仁に関わる人たちを HAPS が取りまとめていってほしいという期待の声も寄せられた。一方で課題として、HAPS が全体のやりとりを一括して進めていたことで、HAPS だけが全てを把握しているという状態になってしまっていたことが指摘されていた。

以上の崇仁地域の住民の HAPS に対する評価と、第3章で述べたモデル事業に対する京都市の考え方を踏まえて、この事業におけるコーディネートの特徴は以下の3つであると考える。

- ●崇仁地域を取り巻いている社会、歴史、文化、自然、コミュニティなどに関する要素を単に課題としてのみ捉え、“暴く”というアプローチを用いて表現するのではなく、これまでとは異なる角度で意味や価値を見出そうとしたこと
- ●物理的な作品だけでなく、その生成をめぐるアーティストの行為や態度に社会的価値を見出すこと
- ●様々なセクターの間に立ち、そのそれぞれを繋ぐ役割を担うこと

一つ目の「崇仁地域を取り巻いている社会、歴史、文化、自然、コミュニティなどに関する要素を単に課題としてのみ捉え、“暴く”というアプローチを用いて表現するのではなく、これまでとは異なる角度で意味や価値を見出そうとしたこと」という点について、芸術作品の中にはまだ広く認識されていない社会問題や課題を可視化することを目的としたものもあるが、今回はそのような芸術が持つ“暴く力”が最大限抑えられていた点が特徴的だと考える。

今回 HAPS が起用した2組のアーティストは、被差別の歴史といったこれまで崇仁地域を表象してきたものから着想を得るのではなく、「人と樹木の関係」や地蔵祠、〈砂持ち〉というような独自の視点で崇仁を眼差し、作品を制作していた。それらは崇仁地域の住民にとって身近ではあるけれども普段意識することがなく、半ば忘れかけているような部分だった。そのような部分を今回アーティストが掘り起こして作品にしたことに対して、住民からは喜びや感心の声が上がっていた。そして「これも芸術の一つの形なんだ」という言葉からも分かるように、住民の“文化”や“芸術”に対するハードルを下げることにも繋がったと考えられる。

また、「（崇仁は差別の中にあるため）自分たち自身が地域の中に閉じこもってしまうという面がなきにしもあらず」だという言葉も住民から上がっていたが、もし今回作られた作品が差別という問題を暴くものであったとしたら、ここまで崇仁の人々に受け入れてはもらえなかったのではないかと思う。なぜなら社会問題や課題を可視化し、世間に“暴く”ような芸術作品はその強烈なメッセージ性ゆえに多くの人々の関心を集めるが、暴かれた問題周辺の全ての人に安息がもたらされるとは限らないからだ。

その点、今回の2組のアーティストは崇仁の課題に目を向けつつも、その課題を対外的に伝えることを目的にするのではなく、崇仁で暮らす人々に届けることを目的にした作品を制作している。これは、京都市が重視している「社会課題を風刺的に取り上げるのではなく問題の本質を見極め、そこに対してどういうアプローチをすればその課題が露悪的にではなくみんなの心に響くのか」という観点から見ても、崇仁という地域で行うアートプロジェクトとしては適切だったと言える。したがって、このようなプロジェクトを行えるアーティストを選定し、コーディネートしたという点で HAPS を評価できる。

二つ目の「物理的な作品だけでなく、その生成をめぐるアーティストの行為や態度に社会的価値を見出すこと」というのは、筆者がリサーチを行った期間の中で何度も石井が口にしていた言葉である。今回のモデル事業に関わった2組のアーティストは、たとえば絵画や彫刻作品のような、それ単体だけで価値があるものだけを制作しているアーティストではない。だが、リサーチから作品制作までの過程を含めて、彼らが価値のあるものを創り出していることは明らかである。このような、資本主義経済の原理の外でもまた大きな価値を生み出してきたアーティストが活躍する場を HAPS がつくっていくという使命感を、筆者は石井から感じ取った。そして実際に住民や京都市からも、リサーチやヒアリング、制作された作品といったプロジェクトを構成する要素それぞれが高い評価を得ていたことから、このコーディネートは上手く機能していたと評価できる。

また、今回のモデル事業でこのようなコーディネートを行った結果として、アーティストの新しい可能性を広げることにもつながったのではないかと考える。たとえば山本は、今回のプロジェクトのうちの一つが彼女自身で続けてきたプロジェク

トに合流し、今後10年かけて行うプロジェクトへと成長した。山本は、石井がずっとそうなることを信じて言い続けてくれたおかげだと話し、そのような機会を得られたことに感謝していた。このように、京都市の職員が今回の事業で期待していた「アーティストに良い影響が与えられること」が、コーディネーターの働きによって起きたと考える。

三つ目の「様々なセクターの間に立ち、そのそれぞれを繋ぐ役割を担うこと」について、一般的には行政が得意とする住民との調整を今回 HAPS が積極的に行ったという点は特筆すべきことである。今回 HAPS が住民の中に入って活動したことにより、モデル事業が円滑に進んだということが伺え、崇仁地域の住民と京都市からは、その丁寧な取り組み姿勢とアーティストの仲立ちをしてくれたという点からコーディネーターの石井が絶大な信頼を寄せられていることが分かった。また、谷本＋中村のプロジェクトの中で急遽作品を撤去することになってしまった後で、谷本＋中村、行政との間に HAPS が入って話し合いの場を設けたことで、かわら版の号外を出すというアイデアが生まれることになった。アーティスト、住民、行政の誰もが「石井さんなくしてはできない」と口にするくらい、今回のプロジェクトにおいてコーディネーターは重要な役割を果たしていたということが読み取れた。

一方で、今回 HAPS がセクター同士を繋ぐ役割を十二分に果たしたことにより、かえって人材育成と関係者への情報共有の面での課題が浮き彫りになった。ここまでのプロジェクトを行えるようなコーディネーターがまだまだ少ないことは問題であると京都市の職員は指摘する。彼はこの点について、「共生社会実現に向けた基盤づくり事業」の普及啓発や人材育成事業にさらに力を入れることで改善をはかりたいと述べていた。また、新型コロナウイルスの感染拡大の影響もあり、谷本＋中村のプロジェクトは急ピッチで進められることになった。そのため、作品制作の中で協力することになっていた施設の職員から、制作過程がよく分からないままプロジェクトが進んでしまっていたという声や、コーディネーターが全体を統括して進めてくれるのはスムーズである一方、全体への日程や意識の共有が難しいと感じる場面もあったという声が上がっていた。これについて石井は、今後は定期的に情報共有の場を設けることで、改善したいと話していた。

最後に、新型コロナウイルスへの HAPS の対応についても言及したい。今回のモデル事業は、ちょうど新型コロナウイルス感染症の流行という未曾有の危機が世界に広がり始めた中で開始されたプロジェクトだった。日本国内の感染者が増え、各所が対応に奔走している中、HAPS は迅速に新型コロナウイルスに対するガイドラインを制定し、最大限安全に配慮しながら事業が継続できるよう取りはからっていた。その時々にできることを積み重ねながら進められている2組のアーティストの仕事は、観る者の心にそっと寄り添ってくれるものになるに違いない。一鑑賞者として勇気づけられた者として、このような情勢の中で今回のモデル事業を進めるために尽力した HAPS、そして素晴らしい作品を制作している2組のアーティストに敬意と感謝の意を表したい。

今回の山本麻紀子と谷本研＋中村裕太によるプロジェクトは、2021年3月の段階で、まだ終わりを迎えていない。今後のプロジェクトの動きは、次年度の報告書に記載される。

2018年度モデル事業 継続調査報告

「ノガミッツガーデン」の継続を通して、福祉とアート、施設と地域のあり方を考える

文｜高嶋慈

ノガミッツタペストリー制作の様子（土曜日昼の部）

2018年度京都市「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」のモデル事業では、アーティストの山本麻紀子が、京都市南区にある社会福祉法人カトリック京都司教区カリタス会総合福祉施設 東九条のぞみの園（以下、「のぞみの園」）と協働し、施設の中庭の再生と特養入居者との対話に基づく作品制作を行なう「ノガミッツプロジェクト」を展開した。それまであまり活用されていなかった中庭には、施設の園芸委員会メンバーの職員とデイサービス利用者が野菜を栽培できるように畑が整備されるとともに、地域住民から「おすそわけ」としていただいた植物が植えられ、「ノガミッツガーデン」として生まれ変わった。京都市のモデル事業としては1年間の活動だが、2019年度以降は、南区の補助金も得てのぞみの園の自主事業として継続している。本稿は、2019～2020年度の自主事業の活動に焦点を当てた継続調査である。

自主事業へ移行後の活動概要——タペストリー制作と移動展覧会

2019～2020年度の活動は、ノガミッツガーデンでの園芸活動、特養入居者と山本の対話の継続とともに、デイサービス利用者、職員、地域住民、地域の児童施設や小中学校の子どもたちと協働し

てタペストリー制作を行なった。約2×3メートルの布に、ノガミッツガーデンができるまでのプロセスや日々の園芸活動の様子を山本が下絵として描き、職員や地域住民たちが刺繍でその線をなぞり、デイサービス利用者が仕上げの色塗りを施した。また、地域住民からの「おすそわけ植物」40種を、子どもたちが表現したパッチワークが散りばめられている。パッチワークには、地域で採集した草花で染めた糸が使用された。約90名の人々が様々な工程に関わり、約1年半かけて完成した作品であり、2021年1月から3月にかけて、東九条地域での移動展覧会で展示された。制作場所になった京都市 地域・多文化交流ネットワークセンター（希望の家）や凌風小中学校、THEATRE E9 KYOTO など計5会場を巡回した。

移動展覧会・THEATRE E9 KYOTO ホワイエでの展示風景

初年度のモデル事業での作品制作は、山本が特養入居者との対話の中からその人の生きてきた証となるモチーフを抽出し、ハンカチに刺繍し、「私とあなた」という個人的な関係の中で手渡すというものだった。手のひらサイズのハンカチというささやかな布が、タペストリーというより大きなサイズに拡大するとともに、作品制作に関わった人々も、施設内という「点」から地域へと範囲が広がり、さらに地域を巡回する移動展覧会という展示方法によって、地域との関わりがより視覚的に提示された。

調査の方法と目的

本調査では、アーティストの山本麻紀子、のぞみの園施設長の小笠原邦人、園芸委員会メンバーの職員3名に対して、HAPS の石井絢子の同席のもと、それぞれヒアリングを行なった。アーティスト、プロジェクトの運営主体、現場の職員という立場や視点の違いから、様々な構成主体が関わり合うことで成り立つアートプロジェクトの諸相と意義、課題を明らかにするとともに、アートと福祉、施設と地域のあり方についても非常に示唆的な言葉をいただいた。

アーティスト・山本麻紀子へのヒアリング

自主事業への移行とタペストリーの移動展覧会

ノガミッツプロジェクトは2019年度からのぞみの園の自主事業に移行する形で継続され、成果として2020年度末にタペストリーの移動展覧会が行なわれました。京都市のモデル事業としては1年間だけですが、初年度が終わった時点で、続けていきたいという思いやビジョンはあったのでしょうか？

はい。初年度が始まったときは、「どんなことができるんだろう」と全く白紙でした。2018年6月に初めて施設にうかがって中庭を見たときに「東九条に住み始めてから日々の暮らしの中で自分が体験したことを元にして何かができる」と思えて、まずは中庭のほうから動き出しました。並行して、入居者さんとの対話を重ねるうちに「お話を聞かせてもらったお返しがしたい」と思うようになり、ハンカチやオブジェをつくりました。その後、初年度の終わり頃から、「施設内の人も施設外の人も一緒に、幅広い年齢層の方々（特に小中学生など、施設内の方々が普段なかなか関わりを持ちにくい方たち）と何かをつくりたい」という気持ちが出てきました。

私はそもそも、新しく人や場に関わるとき、「1年では何も分からないし、長く付き合いをさせてもらいたい」という思いがあります。今回は、初年度にお庭づくりの監修をしてくれた小西由悟さんが「畑作業を習得するには3年かかる」とおっしゃっていて、「今後も職員さん主導で畑やお庭を運営してもらうには、3年かかるんだな」と思ったので、具体的に「3年間」という指標が出てきました。

タペストリーの制作には、希望の家児童館と凌風小中学校の家庭科部の子どもたちが参加しています。地域の福祉施設との関わりには、積極的な施設や学校だったのでしょうか？

希望の家児童館はのぞみの園と同じ法人が運営しているので、協力をお願いできました。凌風小中学校には、カリタス会の理事長とのぞみの園の施設長と一緒に企画書を持ってお願いに行きました。吹奏楽部がボランティアで演奏に来ていたりと、すでにつながりがあったこともあり、協力していただけました。

「移動展覧会」というアイデアはどのようにして出てきたのでしょうか？また、来場者からの感想はどうでしたか？

本当は、2019年度の終わりにタペストリーを中心としてその他いくつかの作品をまとめた展覧会をする予定でしたが、コロナで状況が読めなくなったので、展覧会だけでなく、報告会やトークも中止せざるをえなくなりました。でも、制作に関わってくれた人、特に希望の家児童館や凌風小中学校の子どもたちの家族の方に見てほしいと思ったんです。みんな、いろんな工程を体験して一生懸命頑張ってつくってくれたし、「こんなに大きい作品のこの部分をつくったんやで」って親に言いたいだろうなと。そこで、制作をさせてもらった場所を含む複数の場所で展示したら、ご家族だけでなくより多くの地域の皆さんにも見てもらえると思って、移動展覧会をしようと思いました。

やってみて、移動展覧会って面白いなと思いました。各会場となった場所の担当の方が「どうしたら、見に来る人が喜んでくれるか」と考えて、説明書きを書いてくださったり、「こうした方がいいんじゃないか」と自主的に関わろうとしてくださるのが、すごいなと思いました。ギャラリーなど会場を借りて展示する場合、全部自分でやってコントロールできるわけですけど、そうではなくて、その場所の人も展覧会を作るということに関われるってすごくいいあり方だなと思いました。今回のようなたくさんの方々と協働で制作をした作品を発表するというケースにおいて、ですが。感想ノートには、「人が動いているみたい」とか「いろんな人が一枚の布に触って、関わっていったことがよく分かる」など、たくさんの感想を書いていただきました。

いっぽう、事業の主体が変わることで、サポート体制や予算も変わってくると思います。やりにくかったこと、課題が見えてきたことはありますか？

サポートに関しては、京都市の職員の方やHAPS の皆さんにすごく頼ってました。（初年度のコーディネーターを務めた）あごうさとしさんにもたくさん相談にのっていただきました。あごうさんは特に、私がものすごく時間や労力を割いていたことを気にかけてくれて、「費やしている時間に対して対価が発生してないんじゃないか。アーティ

ストも一つの職業なんだから、きちんと謝金をもらうべきで、創作活動で生活できるような仕組みをつくれないか」といろいろなご提案やアドバイスをいただきました。初年度におすそわけ植物をくださった近隣の住民の方との連携や広報の面では、引き続きHAPSの石井さんにすごく助けてもらいました。

また、京都市の職員の方に教えていただいて、2019～2020年は南区の「みなみ力で頑張る！区民応援事業補助金」に申請し、サポートをしていただきました。ただ、南区の補助金は「対地域にどれだけ貢献・発信しているか」という評価基準があります。ノガミッツガーデンは施設内にあるため、常時、地域の方々に開放することが難しいので、他の方法を探りました。施設外の方々とのタペストリー制作だけでなく、植物や畑でできた野菜のおすそわけ返しやイベント・ワークショップを行ないました。

一方で、施設内にも目を向けてみると、園芸委員会メンバー以外の職員さんとの関わりは薄いままであること、ノガミッツプロジェクトのことをまだよく知らない職員の方もいらっしゃることも少し気になっていました。私がこれまでのぞみの園に関わらせていただいた中で日々感じていることや今までやってきたことを、何かしらの形で職員さんとも共有していきたいなと考えています。私は、入居者さんとの対話の内容を日記に残しています。その内容は私にとって心を揺さぶられたものばかりでした。いただいた言葉に影響を受けたこともたくさんあります。それら入居者さんの発する言葉を、自分ひとりのものにしておきたくないなという気持ちが大きいです。普段私よりも何十倍何百倍もの時間を入居者さんと一緒に過ごされている職員さんに伝えたい、そう思っていました。

また、初年度の初めに職員さんにアンケートを取って、「どんなときに感動しますか」「一番嬉しかった出来事」などを尋ねたのですが、それを起点にお話ができていないことも気になっています。介護や福祉の仕事以外に別のフィールドの勉強をされていた方々がたくさんいらっしゃいました。移動展覧会のときには、のぞみの園の職員さんで、どんなものでも手作りできる器用な方に展示用の構造物をつくっていただきました。そういう職員さんたちの別の側面を、もっと職場でも発揮してもらえるようなことができたらいいんじゃないかなと思っています。職員さんだけでなく、入居者さんが持っている素敵さを引き出せるようなこともできたらいいなと思っています。2021年4月からはのぞみの園の職員として月3回働かせていただくことが決まったので、他の職員さんとの関係性をこれからつくっていきたいと考えています。同時に、業務で忙しくされている職員さんの手が行き届かないようなところで、私なりにできることを見出していきたいと思っています。

園芸委員会の方とは、初年度から関係性ができているのでしょうか？

はい。毎月（コロナの状況下でも）、少なくとも1回はミーティングを開催して、あと2日ほどはお庭作業を続けてきました。園芸委員会のメンバーとはよくお話しますし、2019年の春頃から皆さんが主体的にお庭・花壇づくりや畑作業をされるようになって、「もう私の役目は無いのでは」と思えるくらいです。

コロナ禍の影響と、「対話の日記」の活用に向けて

今年度はコロナ禍のため、活動制限されたなかでの事業だったと思います。どのような影響や困難がありましたか？

特養の入居者さんとは面会できなかったのですが、園芸委員会にはずっと参加していました。

ノガミッツプロジェクトの2年目（2019年度）から、「入居者さんの願いを叶える」こともやりたいと思って、施設長に相談したり、入居者さんのご家族とお会いしてお話を聞いて計画していました。「メタセコイヤの並木道を見にいきたい」とか「おうちにいる旦那さんに会いたい」と言っている入居者さんがいらっしゃるので、行きたい場所に電話で交渉したり、その様子をご家族や施設の職員さんにも見ていただきたかったので撮影の許可をお願いしたり、こつこつ動いていました。でもそれがコロナで行けなくなって、中途半端なままになってしまいました。職員さんのアンケートの件もそうですが、入居者さんとの約束を放っておきたくないなという気持ちもあって、のぞみの園の職員になることをお引き受けさせていただきました。職員の立場でしたら、特養の入居者さんとも面会できますので。また、先ほどお話しました、入居者さんとの対話の日記ですが、施設長にはすでにお送りして読んでいただきました。職員さんにも読んでいただきたいので、例えば朗読会など共有できる場もつくれないかと施設長と相談しています。

日記に記されている「対話で感動したこと」というのは、具体的には言葉ですか？表情や反応など？

入居者さんの選ぶ言葉や表現、表情、細やかな感情の揺らぎ、考え方や世界の見方です。普段は見せない入居者さんの一面を見て、「こんな背景があったのか」とか「こんな反応をされるのか」とか、お話をするたびに毎回感動があります。例えば、初年度からずっと関わっている特養の入居者さんに、このあいだ、久々にお会いしたのですが、体調がすぐれずささやくような声しか出てなくて、でも私と会えて嬉しい気持ちを、手の重なりで表現してくださったんです。「ああ、私も同じ気持ちだな、言葉で言えないときは、きっと私もこうするだろうな」って思いました。

ノガミッツプロジェクトから崇仁へ

今後は職員として、施設との関わり方も変わっていくと思いますが、これからの計画やビジョンはありますか？

ノガミッツタペストリーの移動展覧会に合わせて、2019～2020年の2年間の活動をまとめた記録冊子をつくりました。その際、改めて2年間の経緯を振り返って「ああ、ノガミッツプロジェクトとして私ができることはもうやりきった」と感じたんです。あと、昨年度（2019年度）から崇仁で新しく始まった、HAPS主催の別のモデル事業[1]に参加させてもらって、その活動のうちの一つが10年計画[2]なので、そちらで今後手一杯になると思います。のぞみの園では、職員さんとの関係性づくりや、施設内でのワークショップを考えたり、入居者さんとのお話やお出かけもできたらいいなと思っていますが、タペストリー制作のような大掛かりなことはせず、もう少し小さなことで私ができることを探っていこうと思っています。

「入居者の方とのお話やお出かけは継続したい」ということですが、山本さんにとって作家活動の一部なのでしょうか？線引きがあるのか、それともあえてしないようにしているのでしょうか？

お話を聞いている時間に関しては、制作のことは何も考えてないです。ただ目の前にいる相手のことを知りたいし、「なんでそう思うのかな」とか「なんでこんな言葉で話されるのかな」とか、その一人の人間に向き合っている時間です。作品をつくるのは、また別の階層にあります。ただ、のぞみの園での職員さん、また入居者さんとの関わりの中で私が感じとっていくものは、結果的に、崇

仁のプロジェクトに深く影響していくと思います。過去を振り返ること、楽しかったことや辛かったことを思い出すこと、そしてそれを誰かに話すこと、できていたことがだんだんできなくなる状況の中で自分と自分以外の存在との関係性について、葛藤を乗り越えるための思考、私には見えない人やものとの会話。こうしたすべてです。

崇仁のプロジェクトも、個人の作品をつくっているという認識とは少し違います。私は人と関わりながら何かを取り組んでいきますが、それは「実働」の部分で、「個人の作品制作」はまた別の階層で向き合っています。ノガミッツタペストリーも約90名の方と一緒につくったものですし、「自分の作品」というより、「のぞみの園の宝物」だと思っています。職員さんも制作現場に毎週来てくださいましたし、デイサービスの利用者さんも最終工程として色を塗ってくださり、小中学生、地域の方々、そして地域外の方々とも一緒につくったものです。「人の目に触れてほしい」という思いは強いので、自分が持っているよりも、のぞみの園に飾ってたくさんの人に見てもらいたいです。

「死」へ向かう時間のもつ意味

初年度から積み重ねてきた経験が、ご自身の作家活動に与えた影響や意識の変化はありますか？

私は、日々の暮らしと創造することの間に境目があまりないので、「作家活動」と言われると、すぐには言葉にならないです。後から振り返って「あのときのぞみの園に関わって、ああいうことを考えたから、今こういう選択をしたんだな」ってやっとわかってくるような感じです。なので、「生き方としてどう変わったか」という質問として受け止めてもいいですか？最近、大きく心が揺さぶられたことがあります。「一人の人間が死に向かっている時期は、意味や価値があることとして用意されているんだな」と思うようになりました。今までは、その時期はいったい何のためにあるんだろうと思ってました。でも今は、「死に向かう時期は、自分の考えてきたことや見てきた世界を、家族であろうと知らない人であろうと、誰かにバトンタッチするための時期として用意されている」と思うようになりました。死ぬことは生きることととてつもなくつながっていて、ここにいる人たちはものすごく重要な時期を過ごしている。

なぜそう思ったかというと、入居者さんと話せば話すほど、私はものすごくたくさんのものを受け取りますし、受け取ったら「これはこう考えたらいいのかな」とか自分なりに深く考えます。会話が成り立たない方とでも、手を握るだけだったり、にこりと笑顔を交し合ったり、表情はなくてもその方の目や顔や手のしわをじっくり見ている時間だけでもです。「（結婚相手は）酔っ払いはあかんで」というような一言でも、そこにはその方の人生がのっかっています。私が「ああ、そうなんですね」としっかり目を見て反応したら、その方は「伝えたいことを託した」と何となく満足気な表情で元気になる。ちゃんと向き合ったら必ず相互作用が存在します。そのささやかかもしれない相互作用を重ねていく、とても重要な時期として、本来、人が死ぬ前の期間が用意されているんじゃないかなと思うようになりました。歳を重ねるからこそ出てくる言葉、ペース、表情、しぐさ、そこに集約されているように思います。

山本さんの作家活動自体が、協働作業のプロセスのなかで作品をつくっていくものなので、人との関わりは制作活動の根本にあると思います。でも、ワークショップをやっても、決められた制作期間だけの関わりになってしまいますが、そうではない時間の流れ方や豊かさがここにはあると思います。さらに特養の入居者の方なので、その人の人生が凝縮されたコアを、言葉にならないかたちであれ、受け取っていると思います。それは、人と人との関わりという面でも根源的なものであるし、ケアというものの根本でもあると思います。

そのことは、施設長もよくおっしゃってます。今後、崇仁のプロジェクトの方に絶対に影響を受けると思います。

のぞみの園施設長 小笠原邦人へのヒアリング

のぞみの園の自主事業への移行

ノガミッツプロジェクトは2年目の2019年度から、のぞみの園の自主事業に移行して継続されています。事業の継続を決められた理由についてお聞きします。山本さんの活動が園にとってどのような意義を持ち、なぜ必要だと判断されたのでしょうか？

当初は、京都市のモデル事業でノガミッツプロジェクトを1年間やるとお聞きしていました。でも、地域の方々におすそわけしていただいたお花を育てていくという、今後もずっと続く取り組みをやっていただいたので、「ここで終わってはいけない、地域とのつながりを続けていきたい」という思いから「続けるべきだ」と考えました。芸術家がいなくなって、自分たちだけでやれるかどうか自信がなかったこともあります。

もうひとつの理由は、初年度に山本さんが利用者さんと関わるなかで、福祉を職業にしている人よりも、もっと福祉の感覚を持っておられると感じたので、ぜひうちの職員にもその部分を見てほしいと思いました。作品をつくるために、その人の思いを丁寧に聞いていくという対話の姿勢にすごく魅力を感じたので、山本さんと今後も一緒にやりたいと思いました。

「福祉の専門家よりも、福祉の感覚を持っている」とは、具体的にどのような部分ですか？

福祉とは、その人の喜びを追求したり実現していくことだと思います。山本さんは、その人が生きてきた日常生活の部分にぐっとフォーカスして、生きてきた道を肯定していると思ったんです。例えばそれが散髪屋の看板や軍手といったハンカチの作品の刺繍のモチーフとなって現われ、昔に還るというところで自分の存在を改めて認識してもらえるものになっています。そうした、人に喜んでもらう、自分もお話を聞かせてもらって喜ぶという関係のあり方に、語弊があるかもしれませんが、福祉人よりも福祉の感覚があると思いました。

もちろん相手は認知能力の落ちている方ですから、同じことを繰り返して話します。一日で聞き取るわけではなくて、何回も顔を合わせて、根気よくというか、人が話をする姿を応援するような聞き方を山本さんはされるんだろうと思います。彼女が書いている対話の日記を私も読ませていただき、すごく感動して、うちの職員にも伝えたいと思っています。いろんなことを利用者さんが話してくれる、その「おすそわけ」をいただく。「おすそわけ」の考え方を施設の理念につなげていきたいので、そこに山本さんの日記を活用することが今後できたらすごく嬉しいです。

自主事業に移行したことで、サポート体制も変わったと思います。京都市の事業のときは、市の職員、HAPS、コーディネーターのあごうさとしさんなど協力体制がありましたが、サポート面では難しさもありましたか？

やはり難しかったのは、芸術家と福祉施設が契約するという部分です。報酬やできた作品の所有権について、人に聞いたりインターネットで調べてもよく分からなくて、HAPS のスタッフの方に相談にのっていただきました。もし、全く初めての芸術家の方と契約して何かをやってもらうということだったら、ちょっと無理だっただろうなと思います。モデル事業の流れがあって、HAPS からいろんなノウハウを聞かせてもらったことは大きかったと思います。

ノガミッツガーデンを通して福祉の理念を浸透させていく

事業を継続することで、施設内部や地域との関わりには、どのような意義や変化がありましたか？

芸術家と協働する活動は、ずっとやっていきたいと思っています。芸術家が施設に入って活動することももちろん素晴らしいことですが、それを職員が見よう見まねで真似しながら、オリジナリティを出してやっていく部分にすごく魅力を感じていますし、職員が自立して継続していくことに芸術家が入った意味がすごくあると思っています。

園芸委員会のメンバーは、お庭の整備を積極的にやるようになっています。目標も、何をしたら利用者さんに喜んでいただけるかを皆で考えて、例えば夏祭りに野菜カレーをつくりたいから夏野菜をつくる、その野菜を育てる喜びを利用者さんが感じる、職員はそのサポートに楽しみを持つ。そうしたいろんな形で利用者さんと一緒に楽しみながらやっていく。芸術がきっかけでそうなっていったことが、すごく魅力的だと思っています。そういう関係が本当の人間どうしのつながりだと思うので、福祉を職業としている者として、このノガミッツガーデンを通して浸透させていきたいと思っています。

お庭が触媒になるということですね。

そうです。ノガミッツプロジェクトに関わる前は、出来上がった作品だけが芸術だと思っていたのですが、「そうじゃないんだな、プロセスが芸術になるとか、つくり上げるまでの間に感動があるんだな」と思うようになりました。

地域の方からは、おすそわけの花を持って来ていただいたり、「おすそわけ」というキーワードや「のぞみさん」という言葉を言っていただくことが増えました。福祉施設は、介護が必要な高齢者を家族に持つ人しか知らない施設になってしまいがちです。でも、ノガミッツプロジェクトをやって、お庭のおひろめ会をしたり地域に開くことで、この施設が25年前に地域の方々の要望でつくられた施設であることが埋もれないように、どんどん開けていくようにしないといけないなと思いました。25年前に施設をつくりたいと声を上げた人が40歳だったとしたら、今65歳なので介護保険を申請できる年になっています。その人たちに「のぞみの園という福祉施設をつくってよかったな」と思ってもらえる活動をしなきゃいけないと、自分の気持ちにも変化がありました。

2020年夏 ノガミッツガーデンでの作業の様子

タペストリー制作とコロナ禍での判断

2019 ～ 2020年度はタペストリーの制作に取り組まれました。初年度より作品自体の規模も膨らみ、関わる人たちも、施設の中だけではなくて、児童館や小中学校のこどもたち、地域の方など、範囲もより広がっていきました。ご覧になっていかがでしたか？

やっぱり嬉しかったですね。本来は、私自身が学校や地域の方にのぞみの園を知ってもらう広報をしないといけないと思うのですが、その方法ってなかなか難しいんです。小学校に行って「老人ホームです、よろしくお願いします」と言っても、伝わらない。でも、タペストリーの制作という共通の目的ができたことで、「のぞみの園ってあそこの市営住宅の一階のことか」って中学生が言っているのを聞いたときに、嬉しいなと思ったんです。山本さんにのぞみの園の外に出て活動していただくことで、園のことをもっと多くの人に知ってもらえるようになりました。

いっぽう、2020年度はコロナ禍で、山本さんのように人と関わりながら協働制作するアートプロジェクトにとっては厳しい状況だったと思います。どのような判断でプロジェクトを進められていきましたか？

山本さんには、かなり早い段階で入館の許可が下りました。というのも、入館制限について言うと、利用者さんと直接関わるかどうかがポイントになるんです。傾聴ボランティアの方は、利用者さんとお話をしたり、ふれあう機会があるので、入館禁止になったのですが。

また、タペストリーの制作場所になった、施設外の希望の家児童館などは、あまり制限もありませんでした。タペストリーは2年目の2019年度から始めていますが、進み具合がよくなかったこともあり、私自身もタペストリーを介して地域の方々とのふれあいを期待していましたので、なんとかこの事業をうまく動かしていきたいという思いがありました。また、山本さんが利用者さんと一緒にお出かけして、ビデオで記録する計画もありましたが、できなくなったので、せめてタペストリーを完成させたいという気持ちもありました。

タペストリーの今後の活用方法について考えておられますか？

山本さんも「のぞみの園で披露してほしい」と言っておられるので、まず施設内で飾りたいと思います［註：のぞみの園は外部からの入館禁止のため、移動展覧会の会場にはならなかった］。ゆくゆくは、希望の家児童館での春祭りや夏祭りなどのイベントで、地域が結束してつくったシンボルとして見ていただきたいです。

芸術と福祉の共通項

今後の山本さんとの関係は、どのように考えておられますか？

2021年度の4月からは、職員として来ていただく

予定です。

いわゆる「介護」の業務は、離床、臥床、着替え、入浴、排泄、食事ですが、それらはすべて、言葉かけや会話から成り立っています。山本さんは、良い意味で福祉・介護に染まっていない部分があって、安心させる声かけや介護ができるんじゃないかと思いました。また、「福祉の常識は世間の非常識」と言う人もいますが（笑）、一般社会から見た介護ってどうなのかも知りたいと思っていますし、特に感性の鋭い芸術家の視点からはどう見えるのかをお聞きしたいので、提案しました。ボランティアですと、やはり施設の良いところしか見えなかったりすると思いますが、職員として働いてもらうことで、福祉の現状が見えてくるんじゃないかなと思います。

アーティストとしてではなくて、施設の職員として雇うと。

本当は、アーティストとして迎えたかったんです。でも、前例がないとか、ギャランティの問題―作品をつくるための報酬なのか、利用者さんと対話する仕事なのか―といった住み分けができないと思いました。

芸術と福祉の関係のあり方について、プロジェクトを進めるなかで考え方の変化などはありましたか？

山本さんとこのプロジェクトと向かい合っていくなかで、「福祉も芸術も方向性は同じなんだな」と思いました。芸術作品を見て豊かな気持ちになってもらうこともあるし、福祉介護は安楽に最期を迎えるという本人の喜びや、家族の方の願望を達成できることにあります。人が喜んだり安心するという共通項が芸術と福祉にあって、それを一緒に追い求めたいと思っています。

山本さんには教えられることもたくさんありましたし、芸術家を職業にしている覚悟にも驚きました。人を喜ばせるためにこの職業を選んで、苦しいことがあっても、自分が人を喜ばせたいという夢を貫いている姿は、やっぱりすごく美しく感じます。そういう純粋な思いを持っておられる方と接することは、私自身もすごくプラスになります。タペストリーだって、私たちが契約したものに見合うものかというと、はるかに労力の方が大きかったと思います。それでも「良いものができたね」って笑い合いながら言って感動するんです。そういう芸術家の労力に関して自分も理解を深めていかないといけないし、まだまだそれを知らない社会に対して「これだけ喜ばせてもらっているのは、これだけ努力したからですよ」って伝える必要がある。そういう思いを持ちながらやっています。

ですから、「協力したい」というのとは全然違うと思うんです。芸術家がこういうことをやりたいという提案に対して、「うちの施設にも絶対メリットがあるからやりましょう」という対等な立場で、芸術家と福祉施設が契約したいというのが、実は私の目標です。でも、施設を運営するなかでは、私の一存ではなく、法人の考え方や社会の認知度があるので、「それだけお金を費やすものを見せてくれ」と言われたときに、まだまだ説明できない自分がいることも事実です。ですから、自分が感動して喜ばせてもらった芸術に対して、一般社会の理解をもっと進めていきたいと思っています。

非常に重要なお話をいただいたと思います。作家の活動のために協力するのではなくて、対等の立場であることが大事だと。もちろん、アーティストの活動を「労働」と捉える観点も必要だとは思います。生活があるので、全く無報酬でやるわけにはいかない。ただ、報酬や予算の範囲内でやれることをしようという割り切った合理的な思考で動かないところにアーティストの熱意があり、その思いが作品になって、見た人の心も動かすと思うんです。
制作費やフィーはきちんとベースとして確保しつつ、施設とアーティストが対等な立場で、共通の方向性と理念を持つことで、どちらにも得るものがあると思います。前例もなく、理解が難しい部分もあるとおっしゃいましたが、こうやって活動が続き、タペストリーのように形になって、実例として蓄積されていくことで、将来的には法人や福祉業界全体の考え方も変わってほしいと思います。

やはり、長い付き合いをしていくことが大事だと思いますし、これで途切れてしまうのは、私としても非常に残念なことです。いつか、こういうプロジェクトを、対等な契約で山本さんにオーダーしたいと思っています。

今後のビジョンや計画はありますか？

形があるかというと、ない方が目標になるかもしれませんが、「あそこに行くと、すごく楽しくなる」とか「話をしたくなる」と利用者さんや地域の方から思ってもらえるということですね。そのきっかけが芸術作品であってもいいし、福祉介護の専門家として話を聞いてもらえるということでもいい。

このノガミッツプロジェクトでは触れていませんが、幾つもの課題により、沢山の人たちが苦しい思いをしてこられた歴史がある地域の中で、住民と行政の尽力により誕生したのがのぞみの園です。今回の取り組みで、芸術活動を通して、改めて、人、地域との繋がりの大切さを確認できたのだと思っています。 これからも、のぞみの園であるために、この繋がりの中で、沢山の人と一緒に、良かった歴史も、辛かった歴史も全部丸ごと受け止めていける施設にしたいと思っています。芸術の力で、安心感とワクワク感と、ちょっと寄りたくなるという施設になればと。ノガミッツガーデンの一般開放もしたいですし、お花を持って行って「これ、庭に植えといて」と気軽に立ち寄れたり、「あそこ、おもろいで」と言われるような施設にしたいです。

福祉施設というと、家族が入居していない人にとっては、自分には関係ないと思ったり、ハードルが高いものですが、「行ってみたらおもしろいで」というのはそのハードルを下げて、福祉施設はこうあるべきだという固定観念を崩してくれますね。窮屈な固定観念を崩すというのは、アートの力の一つだと思います。

のぞみの園　園芸委員会メンバーの職員3名（小鴨正明、小泉多美子、横井昌代）へのヒアリング

園芸委員会の活動について

皆さんはノガミッツプロジェクトが始まった2018年度から、園芸委員会に参加されているのでしょうか？

小鴨：はい。

小泉：私は2019年の8月頃からです。自宅でもバラや野菜を育てていて園芸が好きなので参加しました。

横井：私は元々、デイサービスの園芸委員会に入っていて、玄関先の花壇に花を植えてきれいに飾っていこうという話が出ていました。施設の方でも園芸委員会が立ち上がったときに、山本さんと京都市の職員の方とのミーティングがあり、「これから何かしていきたいことはありませんか」と質問されました。それまでも、デイサービスの利用

者さんと中庭でサツマイモを栽培していて、育てて収穫することを皆さんすごく喜ばれていたのですが、地植えではなく、プランターや土の入った袋のままで育てていたので、「中庭に畑やお花があったら嬉しいな」と発言したらこんな感じに大きくなったので、非常に嬉しく思っています。

2020年度はどのような取り組みをされましたか？

横井：トマト、ナス、万願寺唐辛子、ピーマン、きゅうりといった夏野菜を春先に植えて、5月にサツマイモを植えて、袋のまま育てました。ナスときゅうりは漬物にしてデイサービスの利用者さんに食べていただき、昨年は豊作だったので、近所のコミュニティカフェ「ほっこり」にもおすそわけで持って行きました。トマトも豊作で、トマト、万願寺唐辛子、ピーマンは、利用者さんと一緒に「おやつレク」としてピザをつくりました。すいかとかぼちゃも植えましたが、残念ながら生育が良くありませんでした。

小鴨：昨年度は、冬野菜としてカブを植えましたが、生育があまり良くなくて小さいものしかできず、まだまだ試行錯誤しています。

コロナ禍でしたが、収穫や料理の作業は利用者さんと一緒にできたのでしょうか？

横井：はい。一緒に収穫したものを料理レクやおやつレクでつくって食べていただくことがやはり一番の目的ですので、消毒を徹底してやりました。

水やり、雑草を抜く、肥料をやるなど、日々世話が必要だと思いますが、そうした作業にも利用者さんは関わっておられるのでしょうか？

横井：はい。杖をついている方もおられますが、おひとりで歩ける方は、職員付き添いの元で雑草を抜いたり、職員が抜いた雑草のゴミの整理をしていただくなど、一生懸命していただいています。

初年度から畑指導で来ておられる小西由悟さんが「畑作業は3年間やったら身に付いてくる」とおっしゃっていたと聞きました。ほぼ3年間経ちますが、園芸委員会のメンバーだけで自立してやっていけそうでしょうか？

小鴨：まだまだ経験も知識も不足していますが、土の掘り起こしなど作業手順は教えていただいたようにできるようになりました。でも、肥料の配分などは専門知識がないので、教えていただいた内容は継続していますが、改良が必要なタイミングは判断が難しいです。

小泉：幸いにも、理事長が植物に関して知識をお持ちで、いろいろと教えていただきながら、みんなで相談して園芸作業をやっています。自然が相手ですし、天候や、「プランターに次の種をまいて…」「連作が出来ない場合は畑を休ませたり、土を入れ替えて…」とか常に次のことを考えてやっていかないと、持続可能にはならないですね。

畑やお庭を通して、利用者さんのご反応や変化はありますか？

小鴨：デイサービスの利用者さんは、デイサービスのフロアから畑とお庭が見えるので、利用で来るたびに、「ああ、大きくなってるな」という楽しみを持ちながら、実際に皆さんと収穫を迎えたときには、すごく喜びがあったと思います。高齢者の方は土に親しんでいる方も多いですし、自然に対する愛着があるのかなと感じます。

横井：サツマイモの収穫は秋だけの楽しみでしたが、野菜を植えて食べるのが3年目になり、種まきや苗植えから成長をずっと見守ってくださっています。収穫作業には参加できなくても、お席から外が見えるので、「ああ、大きいのが採れたな」と声をあげてすごく喜んでいただけます。「次は何を植えるの？」と皆さん先の楽しみを持っておられるので、私たちも「利用者さんに喜んでいただくために」という自分のやりがいにもなります。

タペストリーの制作について

タペストリーの制作には、どのように関わられたのでしょうか？

横井：希望の家児童館での刺繍の作業です。ほぼ毎回、たとえ30分だけでもと参加していました。その後の、色塗りの最終仕上げは、デイサービスのフロアに持って来て、利用者さんにしていただきました。山本さんも一緒に参加されたいとの希望でしたが、感染予防対策で外部からの入館はお断りしていたので、利用者さんが職員と一緒に仕上げの色塗りをしました。

小泉：私も刺繍の作業に参加しました。土曜日に1時間くらい。希望の家児童館に行って、職員や生徒さん、地域のボランティアの方など、ふだん施設の中にはなかなか来られない方と、お話をしながら共同作業をしました。

参加された住民の方や子どもたちは、のぞみの園やお庭のことはご存じでしたか？

小泉：ノガミッツプロジェクトが発足して、デイサービスでワークショップをしたので、ご存じの方もいらっしゃいました。クリスマス用の飾りに張り子をつくって、園芸委員会でつくったお花の押し花を貼りつけたりしました。地域の方にお声かけをして、お子さんを連れてきたり、楽しく参加してくださったと思います。

完成したタペストリーをご覧になっていかがでしたか？

小鴨：私は、制作作業には直接関わらなかったのですが、ノガミッツガーデンややってきた生活の一部が景色としてタペストリーに反映している内容は、すごく良かったなと思いますし、実際に利用者さんが喜んでいる姿も拝見しました。

小泉：「やっとできた」という感じでした。布の端から刺繍を始めるので、最後に残る作業場所が布の真ん中で、腰をかがめながらやるので大変な作業でした。近くでまじまじと自分たちの作品を見ると、粗い人、細かい人、繊細なタッチの人、色んな人の手が入っていることがものすごく感じられて、「ああ、皆でつくって楽しかったな」と思いました。

横井：床に広げて自分が作業したものですが、掛けてあるものを見ると、全然違うものに見えました。最初から最後まで関わらせていただいて、移動展覧会の展示も一緒に行きましたが、移動するたびに「ここで見るタペストリーはまた違うな」と感じて、毎回感動していました。

利用者さんも関わってくださったので、展示を見ていただきたいと思いました。コロナの中で外出は難しいかなと思ったんですが、施設長にお願いして、THEATRE E9 KYOTO の展示のときに、一日だけ、ガラス越しに外から見えるように道路側に向けて展示していただき、送迎車を停車させて見ていただきました。皆さんすごく感動してくださって、歩ける方は、車から降りて記念撮影して、とても良かったと思います。

変化とこれからの計画や課題

プロジェクトを継続されるなかで、ご自身、施設のあり方、利用者さんの様子など、どのような変化がありましたか？

小鴨：施設にいる利用者さんは、楽しみもそんなに多くないですし、日常生活に変化もなく、活動も低下していくのが現実です。そのなかで、タペストリーや園芸など楽しみを見出していただく、自分たちの終の棲家である施設がお庭を通して変

わっていく姿を見て楽しみを持っていただいていることは実際に感じました。こういう取り組みはすごく意義があったと思います。

小泉：植物に接する時間や関心が、私も利用者さんも増えたと思います。玄関の花壇は今ではいろんな種類の花が咲いてくれて、地域の方々も足を止めて見てくださり嬉しいです。癒される空間があると思います。今年は畑の土替えもうまくできたので、もっといろんな野菜ができていくと思います。最初の年よりは、私たちも上手になっていると感じています。

> 今後やりたい計画や、課題だから変えていきたいと考えておられることはありますか？

小鴨：職員が主導していく必要がある整備がまだまだあります。コロナが収束すれば、利用者さんももっと参加していただけるような内容にしていきたいです。園芸を通して、自分たちの生活歴も思い出して、今後、生活に張りを持っていただく。「おすそわけ」をキーワードにしてやってきましたが、利用者さんに寄り添うことができるのが今回のノガミッツプロジェクトだと思いますので、今後も継続してやっていきたいです。

小泉：まだまだ出来上がっていないのがうちのノガミッツガーデンですが、それでも試行錯誤してみんなで協力しながらつくっているお庭だと思います。これからも知識を増やして育てていって、地域の皆さまにも愛される庭づくりになればと思っています。

いろんな花を地域の方におすそわけしていただき、大事に花を咲かせて種を取っているお花もあります。いつかはその種を、ワークショップや施設のお祭りの機会に、おすそわけのお返しができる機会があればと思っています。社会貢献というか、地域の方々にも楽しんでいただけるように。

横井：キウイやオレンジなど、目でも楽しんで食べられるフルーツの木を植える計画を立てていますが、おすそわけ植物で庭がいっぱいになってきているので、今後、切って開拓していく必要があります。また、立って歩いてお庭に出られる利用者さんは限られるので、デイサービスのフロアから座った目線の高さで見られるような高い位置に、バラを増やせたらと思っています。目が見にくくなっておられる方も多いので、鮮やかな色合いのバラも増やしていきたいです。コロナが落ち着いたら、お茶会をしたいという案も出ています。

まとめ

以上のヒアリングから、アーティスト、プロジェクトの運営主体としての福祉施設、現場の職員、それぞれにとっての（かつ横断的な）意義や課題を以下のようにまとめたい。

アーティストとしての思考の深化と別プロジェクトへの影響

山本のヒアリングの中でも特にコアと言えるのが、特養入居者との対話を継続するなかで、「死」へ向かう時間は無意味なのではなく、「残された者にバトンタッチして託すための時間」として用意されている重要性に気づいた、という変化である。福祉施設に対する非常に示唆的な提言であり、山本自身も述べるように、職員として勤務する今後は、「対話の日記」の施設内での活用を通して、施設への還流が大いに期待される。もちろんここには、山本の感性や視点を福祉にとっても必要なものとして重視する小笠原施設長の深い理解がある。

また、「死へ向かう時間が、生をより豊かにするものとしてつながっている」という山本の思考の深化は、2019年度から崇仁地域で始まった新しいモデル事業の方に、今後深い影響を与えていくと考えられる。崇仁での「挿し木プロジェクト」は、京都市立芸術大学の移転工事で失われる植物の命を、「挿し木」によって未来へつないでいくものである。また、「取り壊し予定の市営住宅の一室で眠り、見た夢や感じたことを、地域で採集した植物で染めた糸や布で表現する」というもう一つの構想は、そこで生活していた住民の記憶とともに無くなってしまう建物の記憶を、「眠り」すなわち「一時的な仮死状態」と自身の身体を触媒にして、別の形に変換させて引き継ぐ試みであると言える。

福祉（施設）とアートの関係

小笠原施設長のヒアリングの中で、特に福祉（施設）とアートの関係にとって重要なのは、「芸術も福祉も、人を喜ばせたり、豊かな生を追い求めるという方向性は同じ」という言葉である。そうした方向性を共有した上で、「職員がオリジナリティを出しながら、自立して継続していくことに芸術家が入った意味がある」という実感に裏付けられた言葉は、非常に重要だ。また、「福祉施設がアーティストに協力する」という一方的な関係ではなく、「福祉施設にとってもメリットがあるからやる」という対等な立場で契約したいという展望は、これからの福祉（施設）とアートの関係を考える上で非常に示唆に富む。

「アートを通して、どう地域に開くか」—課題と浸透

小笠原施設長には、「のぞみの園は元々地域の要望で生まれた施設であり、ノガミッツガーデンを通してもっと地域に開いていきたい」という抱負を語っていただいた。一方、山本のヒアリングからは「南区の補助金の評価軸は対地域への貢献・発信度で測られるが、ノガミッツガーデンの常時開放は難しい」というジレンマもうかがえる。「施設外へ出てのタペストリー制作やワークショップなど別の方法を探った」という結果に結びついたが、特に「対地域」が評価ポイントとなる助成や補助金の場合、施設内での活動と地域への貢献度とのバランスをどう取るかは課題としてつきまとう。

ただ、園芸委員会の職員からは、「地域住民に玄関の花壇を見て喜んでもらえるようになった」「収穫した野菜のおすそわけができた」「おすそわけの花の種を保管し、いずれはお返しをしたい」などの声が聞かれ、ノガミッツプロジェクトのキーワードである「おすそわけ」＝地域への還流が、施設の理念や地域との交流として浸透しつつあることがうかがえる。植物の生長とそれを育てる人の技術的な習熟とともに、長期的な展望の中で成果を見ていくことの必要性が改めて見えてきたと言える。

1 2019～2020年度 京都市「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」モデル事業

2 崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）：京都市立芸術大学の移転工事で失われる崇仁地区の植物の命を、「挿し木」によってつないでいくプロジェクト。地域の住民や関係者などに「里親」となってもらい、地植え可能になるまでの最長9年間、預かってもらい継続する予定。（p.57参照）

（写真提供：山本麻紀子）

2017年度モデル事業 継続調査報告

明るい場所であなたより先に服を脱ぐ

文｜和田ながら

『眠るのがもったいないくらいに楽しいことをたくさん持って、夏の海がキラキラ輝くように、
緑の庭に光あふれるように、永遠に続く気が狂いそうな晴天のように』（2021年再演時）
撮影：前谷開

本稿は、2017年度京都市「文化芸術で人が輝く社会づくりモデル事業」に参画し、舞台作品『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』を上演した演出家・振付家・ダンサーの倉田翠の、事業を終えて三年を経た現在についてレポートするものである。

本題に入る前に、少し長くなってしまうが筆者の立場を明らかにしておこう。

筆者は、京都造形芸術大学（現：京都芸術大学）映像・舞台芸術学科舞台芸術コースに倉田と同期で入学し、学生時代を共に過ごした。ダンサー・振付家の山田せつ子や寺田みさこが担当していたクラスを受講していた時には、授業の発表公演にも一緒に取り組んだ。また、倉田は当時からすでに多作なアーティストで、授業以外でも学内の劇場で意欲的に作品を発表しており、そのほとんどを筆者も観客として目撃している。

大学卒業後、筆者は演劇の演出家として京都を中心に活動している。倉田とは、ダンスと演劇という異なるジャンルに身を置きながらも、「わたしは、春になったら写真と劇場の未来のために山に登ることにした」（2016）や「倉田翠と、和田ながらと、」（2019）で共同企画やダブルビル上演を行うなど、折に触れて場を共にしてきた。

同期の友人として、京都を拠点に活動するアーティストとして、インディペンデントなプロジェクトのパートナーとして、そして互いの作品の観客同士としての関係は10年を越えた。この長い付き合いの中でも、『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』とその後の『眠るのがもったいないくらいに楽しいことをたくさん持って、夏の海がキラキラ輝くように、緑の庭に光あふれるように、永遠に続く気が狂いそうな晴天のように』（以下､『眠るのが～』）の二作品が倉田に与えた影響の大きさは特筆すべきものがあると感じている。

本稿では、本人及び関係者へのヒアリングを通して当時から現在にかけての変化を観察し、『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』と『眠るのが～』の両作品が現在の倉田にどのような影響を与えたか、そして倉田のケースはどのような「モデル」でありうるのかを検討したい。

ヒアリングは、HAPSの岡永遠氏同席のもと、『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』の関係者、倉田が演出した『眠るのが～』（2019～2021）に出演した薬物依存症リハビリ施設「京都ダルク」のメンバー、そして倉田本人に対して行った。

上演データ

『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』

【初演】
京都市「文化芸術で人が輝く社会づくりモデル事業」
日程｜2018年1月27日（土）
会場｜故郷の家・京都 雲史ホール
主催｜京都市
企画制作｜東山 アーティスツ・プレイスメント・サービス（HAPS）
制作｜一般社団法人アーツシード京都

【再演】
ロームシアター京都×京都芸術センター U35創造支援プログラム"KIPPU"
日程｜2019年2月15日（金）～16日（土）
会場｜ロームシアター京都
主催｜akakilike
共催｜ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）、京都市

『眠るのがもったいないくらいに楽しいことをたくさん持って、夏の海がキラキラ輝くように、緑の庭に光あふれるように、永遠に続く気が狂いそうな晴天のように』

【初演】
京都公演
Co-program 2019カテゴリーA（共同制作）採択企画
日程｜2019年8月17日（土）～18日（日）
会場｜京都芸術センター

東京公演
日程｜2019年9月3日（火）
会場｜d- 倉庫

主催｜akakilike、京都芸術センター

【再演】

埼玉公演

日程｜2020年12月26日（土）～27日（日）

会場｜富士見市民文化会館キラリふじみ

主催｜公益財団法人キラリ財団

京都公演

日程｜2021年1月8日（金）～9日（土）

会場｜ THEATRE E9 KYOTO

主催｜ akakilike

提携｜ THEATRE E9 KYOTO（一般社団法人アーツシード京都）

金井忠司氏へのヒアリング

まずは『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』初演の会場となった京都・東九条地域に立地する「特別養護老人ホーム 故郷の家・京都」（以下、故郷の家）の金井忠司氏にヒアリングを行った。当時、金井氏は施設側の窓口としてクリエイションの過程に立ち会い、入所者から出演者を見つけたいという倉田の希望に応え、介護度や体力面を考慮した候補者の選定、出演者家族との調整をはかるなど公演実現のためのさまざまな調整も担った。モデル事業に対する金井氏の感想は2018年度の継続調査ですでに詳しく紹介されているため、今回のヒアリングでは主にモデル事業以降のことについて尋ねた。

ロームシアター京都での作品（『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』再演）は、山田さん（注：山田茂氏、故郷の家の入所者であり『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』の出演者）が出なかったら成り立たなかったんじゃないかと思うんだよね。倉田さんから再演の話が来た時は、山田さんに出てもらいたいが、山田さんがもし不在でも可能な作品にすると言っていたので、山田さんがいなくてもつくるつもりにはしていたんだと思うけれども。山田さんが出演できて良かった。

舞台を作っている他の人たちが倉田さんのような手法を使っているのかはわからないけれど、山田さんを舞台でしゃべらせるっていうことは、老人を演じさせるということではない。俳優であれば、もっと老人らしく上手に演じることができると思うけれど、それとは全く違う。山田さんは演じていないからうまくはないんだけれど、ものすごく魅力があるし、本物をそのまま舞台に載せてしまうのは、新鮮でおもしろいなと思ったね。

『はじめましてこんにちは、今私は誰ですか?』（2019年再演時） 撮影：前谷開

倉田さんが京都芸術センターでダルクと一緒にやった公演（『眠るのが～』初演）を見ましたよ。うまく作っていて、あれはよかったな。

ここ（故郷の家）での作品は、手探りで実験というか、いろんなことが詰めこまれていて、まとまりがないところもあった。悪いとは思っていないけれど。

ダルクとの作品はすっきりしていたし、明確だった。再演してしかるべき作品だったと思う。俳優ではない素人を舞台にあげること、その人に自分自身を演じさせることなど、ここでの試みが繋がっていると感じました。舞台は作品も残るし、過程や人との関係性も残る。そうやってここでつくったものが倉田さんの次に結びつくことを期待もしていたし、嬉しいですね。

ふだん、お芝居はよく見るけど、これまであまりダンスは見てこなかった。倉田さんのダンスを見て、ダンスをおもしろいなって少し思えたね。

金井氏自身が日常的に舞台鑑賞に親しんでいるということを踏まえる必要があるとしても、施設の担当者として関わった人物が、事業終了後もアーティストの活動をフォローし、表現手法への深い理解に基づいて作品の発展を捉えていることは、当たり前のようでいて貴重なことであると感じる。

これは、初演後も倉田がプライベートでたびたび故郷の家を訪れていることも大きいだろう。事業そのものが双方に強い印象を残したことに加え、その後の交流が個々人の意思と関心によって継続しているからこそ、一過性ではない関係性が築かれていると言える。（故郷の家では2021年3月現在、新型コロナウイルスの影響で外部からの訪問を制限しており、入所者との交流の場である「カフェ・アリラン」も形態を変更している。）

倉谷誠氏へのヒアリング

京都市の担当者としてモデル事業に携わった倉谷氏は、倉田が東九条地域をリサーチするプロセスに帯同する中で、倉田からのオファーを受け、『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』に出演者としても関わることとなった。事業を担当する行政職員が作品にいち出演者として参加するという例は、筆者も寡聞にして知らない。仮にあったとしても、珍しい例であることは間違いないだろう。更に再演では氏の娘二人にも出演依頼があり、親子共演を果たしている。

倉谷氏には、作品に出演した経緯や、モデル事業を経た氏自身の変化についてヒアリングした。

モデル事業ということもあって、現場でどんな話がされているのか知っておきたいと思い、リサーチはもちろん、倉田さんとコーディネーターのあごうさとしさんや HAPS の岡さんのミーティングも、できる限り一緒にいるようにしていました。その中で、倉田さんから作品に出てほしいと言われました。最初は冗談だと思ったんですけど、何度か重ねて言われて、これは本気だな、と。悩みましたが、上司やあごうさんに相談したら背中を押していただけたので、出演を決めました。

リサーチの過程で村木美都子さん（NPO法人東九条まちづくりサポートセンター「まめもやし」）とお話した時に、まちづくりの活動と家族との時間のバランスについてどんな工夫をされているのかお尋ねしたんですね。僕は娘が二人いて、村木さんもお子さんがいらっしゃる。仕事に時間をかけていると、どうしても子どもと過ごす時間が減ってしまうという自分の悩みを話しました。この時の話は倉田さんも聞いていて、作品中の台詞にも盛り込んでいます。

一度、あごうさんのアトリエで東九条に関するビデオ資料を見る機会があって、土日だったので普段着で行ったんですね。いつもはスーツを着ているので、普段着だと印象がすごく違って驚いた、という話も倉田さんから聞きました。

そういったことの積み重ねで、僕が出演するということを考えたんじゃないでしょうか。

稽古前に、段取りが記された手書きの台本を渡され、話すシーンがあるからその内容を考えておいてと言われました。京都市の職員としての立場のこと、プライベートなこと、思っていること何でもいいと。そうやって稽古で話してみたことが、そのまま本番まで生かされています。

（モデル事業を経て）いろんな人がいるんだなということをあらためて実感しました。地域の人しかり、施設の人しかり、それまで知らなかった世界に触れました。行政職員はいろんな人との調整業務が避けられない立場ですが、これまで出会ったことない人たちに出会えたことで、自分の幅が広がったように思います。

倉谷氏が東九条地域のリサーチに帯同する中で、市の事業担当者としてだけでなくプライベートな個人としての部分もあらわになっていたことがわかる。

事業というパブリックなフレームは、各関係者の関わるべき時間や役割を規定するが、倉谷氏はそのフレームをいち個人として少しはみ出していたように見える。再演に至っては京都市の事業ではなくなっているのだから、倉谷氏が関わる業務上の必然性はないにも関わらず、さらにプライベートに踏み込むような自身の子どもとの共演を引き受けているのだから、フレームからかなり大胆にはみ出ている。そして、『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』は、そういった倉谷氏の「はみ出し」によって成立していた作品だと言える。

京都ダルクメンバーへのヒアリング

モデル事業終了後も東九条に日常的に通っていた倉田が地域の川掃除を手伝っていた時、同じ川掃除にボランティアで参加していた京都ダルクのメンバーと出会った。これが『眠るのが〜』のきっかけになっている。モデル事業が製作の遠因であり、かつ、金井氏が指摘していたように手法上の共通点もあることから、『眠るのが〜』に出演していた京都ダルクのメンバーにも倉田同席のもとヒアリングを行った。

タイチ氏（初演・再演に出演）

初演のリハーサルはどんな感じでしたか？

稽古していても断片的にシーンを作っていくから全体像がなかなか見えなくて、どう繋がっていくのかなって思っていました。僕は自分の実際のエピソードに基づいたセンセーショナルなシーンがあるので、「大丈夫？傷ついてない?」って倉田さんからフォローがあったり、「もし涙が出たらそのままでいい。タイチくんのその時の状態でいい」って言われたり、他のメンバーから「がんばれ」って声が飛んでも許容してくれたり。芝居しないというか、その時その時の僕たち自身でいいんだってことがやりやすかったですね。

倉田翠は、ダルクで会う時と稽古場で会う時で違いますか？

同じようにしてくれていたという印象です。稽古をしていても、否定はしない。なにかが起こったら、じゃあどうするかって臨機応変に対応する。かといって、倉田さんがやりたいっていう芯もあるから、僕らがわがままし放題でもなくて。倉田さんがダルクに通って、僕らとコミュニケーションしていた蓄積があったからこそできたと思う。安心感があったというか。

再演の話が来た時、どう思いましたか？

それはもう、やります、って。でも、初演のときと同じことはできないかもしれない、っていうのは、最初に言いました。初演の時点での話は自分の中で消化されて、今は違うステップを踏んでいるので、同じことをやれと言われたらしんどいかもしれないって。倉田さんは「初演と同じじゃなくていい、今のタイチくんでいいよ」って言ってましたね。

再演で倉田さんのシーンが加わったのは良かったと思いました。倉田さんが、僕たちダルクのメンバーと初演の時よりも溶け込んでいた感じがする。

再演も終わって、作品のことを思い出しますか？

よく思い出します。僕は今まで、儲けて、事業を大きくして、っていうのが仕事の成功モデルだと思っていたけど、akakilikeと出会ったことで、儲け重視じゃなくて自分のやりたいことや表現したいことで仕事を選ぶ方法があるんだって発見した。僕が表現できること、楽しいって思うことってなんだろうって思ったら絵で、今は似顔絵を描く仕事をしています。

ハル氏（再演に出演）

初演のことは知っていましたか？

誘われた時は全く知らなくて、稽古前にビデオで見た。初演に出ていた人に聞いたけど、みんな丁寧には教えてくれへんし、参考にならなかった。練習していても、意味がわからなかった。ダルクのメンバーは全然言うこと聞かないし。稽古なのにお菓子食べてたり、やるよって言われてからトイレに行ったり…。でも、倉田さんが優しかった。akakilikeの人や、関わっていた人たち全員が優しかった。

上演はどうでしたか？

最初のイメージでは、ダルクを批判するために見にくる観客がいるんだと思っていた。でも実際はそんな人はいなくて、観客アンケートを読ませてもらったら、身にしみましたって書いてあったりして。埼玉と京都は劇場の規模も違ったけど、観客の空気感がずいぶん違った。埼玉はほんわかした感じで、京都は圧があったというか。同じことしても京都の方が二倍ぐらい疲れてたかもしれない。

倉田が、振付家と出演者といった通常の舞台公演における役割の前提がまったくない状態から、丁寧に、そして親密な時間をダルクと重ね、彼らの日常を観察し、信頼関係を構築していったことが読み取れる。筆者は初演も再演も観劇しているが、舞台に関しては素人である彼らが、ともすれば舞台関係者よりも鋭敏な感覚によって作品の本質をつかみ、観客の空気感を正確に捉え、強度あるパフォーマンスを成立させていたことに、ヒアリングを通してあらためて感服させられた。

また、タイチ氏が「（倉田が）初演のときより溶け込んでいた」と述べているように、初演と再演では倉田自身の立ち方も変化があったというのは、観客としてもはっきりと見て取れた。初演の時は、ダルクと倉田の間にひりひりとした緊張感が漂っており、倉田自身もその点に関して自覚的であったようだが、再演では全体的にリラックスしたムードで、やわらかい連帯のようなものが感じられた。出演者の人数の変化（再演は初演からおよそ半数）もあるが、これもタイチ氏の指摘の通り、倉田自身のプライベートな部分をあらわにするようなシーンが加えられていたのがやはり大きかったのだろう。

倉田翠へのヒアリング

最後に、倉田翠自身へのヒアリングを実施した。倉田には現在の視点で、事業や作品のことについて振り返ってもらった。

普段の作品作りで関わるダンサーや俳優のプライベートは、ほとんど知らないし、踏み込まない。一緒にやる作品が終われば、私にも次の作品があるし、彼らにも別の次の作品があるから。でも、故郷の家の山田さんとは、普段の作品みたいに一回限り、仕事が終わったらさようなら、ってしたくないと思っていた。akakilike の主催公演として『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』を再演したのも、そういった気持ちが働いている。でも、今はコロナでなかなか会えなくなって、この気持ちに少し変化が出てきた。山田さんはそもそも忘れていってしまうから、山田さんにとっては私との関係は終わっていて、私だけが覚えている。この奇妙さを最近考え始めている。

最初は行政への警戒感があったけれど、倉谷さんと接して、京都市というものへの考え方が変わった。それは、倉谷さんが個人として関わってくれたから。家族について悩んでいる普通の人、という部分を出してくれたから。

ダルクとの作品は自分にとってすごく大きい経験になったと思う。「演出家」という肩書なしの状態から彼らと関わることで、自分がいかに弱いか、ということを思い知らされた。作品をつくっていた当時は、自分はまともで、客観的に自分自身のことを理解できている、と考えていたが、今になって、自分の弱さがはっきりと自覚できる。そしてその弱さは、ダルクの人たちと非常に似ているんだということに気付いた。自分が抱えていた摂食障害も依存症の一種であるように、自分が思っていたよりも彼らとの間に違いがないということがわかってきた。その自覚をした上では、以前と同じようにダルクに通うことに複雑な葛藤がある。もちろん今でもダルクのみんなのことは好きだし、気になっているし、会いたい気持ちもあるが、自分とダルクのみんなとの距離感があやういレベルにまで近づいてしまうのではないかという気もしている。

同時に、ダルクと関わったことで、他人を受け容れたり想像したりできる幅がすごく広がった。彼らと出会ってからの短い時間で、いろんな人のいろんな人生を知った。彼らは自分の話をまるでフィクションのように語る。それは日々の訓練のたまものなんだけれど、演劇として、役者として、すばらしいと思う。

私は人に合わせる性質があるから、人を相手にやっていると、言えないことがたくさん出てきてしまって自分を制御してしまう。特に最近はダルクとの作品や『捌く』といった大人数を相手にする作品の本番やリハーサルが続いたから、その反動みたいにして、ソロダンスを6月末に上演する準備をしている。でも、一人でいると自分自身にリアリティがもてない。稽古場で、自分がなにものなのかをひたすら待っているような時間を過ごしている。

『眠るのが〜』（2019年初演時）　撮影：前谷開

ダルクとの初演を終えたあとに、ダンサーや俳優がおもしろいと思えない時期があった。ダルクの人たちのように壮絶な人生経験を背負っている人たちの存在感に勝てないのがもどかしくて、ダンサーや俳優が舞台上でリアリティを持って立てるかを試す作品『明日で全部が終わるから今までにした最悪なことの話をしようランド』を作った。おもしろいものにはなったけれど、出演者にとっては過酷すぎたとも思っている。今は、ダンサーや俳優も、当たり前に一人の人間なんだというようにフラットに捉えているし、その上で、日々の生活を舞台の上でもうまく活かせるダンサーや俳優がいいなと感じる。でも、東京で振付の仕事をした時に、日常をすっぱり切断した状態で稽古場に来るダンサーがいて驚いた。ビジネスとしてのダンサー。東京ではきっとそうでないとやっていけない、日々の自分なんか消してやったほうがうまくいくんだろうな、って感じた。

中学生の友人がダルクの作品（再演）を見てくれた時、意味もわからずすごく涙が出たと聞いた。説明しようと思ってもうまく言葉にならないけれど、とにかく涙が出たと。その影響があって、いま彼女が準備している演奏会では、演奏だけではなくて言葉も入れたい、言葉で伝えたいって考えてるらしい。

おそらくダルクの作品が彼女にとって意味のある「なにか」になったんだと思う。もちろん私はそういう影響を狙って与えようなんて思ってもいないし、たまたま彼女の親と連絡をとってたから知っただけで、このこと自体、私は全く知らなかった可能性もある。

こういった出来事は、作品が生んだ成果としてカウントすることが難しい。でもきっと、アートが誰かの力になるってことは、こういうことなんじゃないか。

共生社会、包摂、って言葉がこの事業にはくっついてた。でも、誰と誰が共生したいのか？ 誰を誰が包摂するのか？ 共生っていうのは自然と起こることではないんだろうか。私も一人の人だから、街とアーティスト、っていう構造で関係をつくることはできない。私とチュナ（注：丁春燁氏、『はじ

めまして こんにちは、今私は誰ですか?』の出演者)、私と山田さんが関係をつくるということはできる。これを共生と呼べるかはわからないけど、一対一じゃないと無理。

京都市の事業がなければ東九条に関わらなかったし、その後の展開もうまれなかっただろうから、とても感謝している。でも、事業のような枠組みとの関係をどうとるかは難しい。用心深く、粘り強く考えられるアーティストが参画する必要があると思う。

関係のヴァリエーション

倉田が『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』と『眠るのが〜』の両作品を通して経験したのは、さまざまな「関係のヴァリエーション」だということが、ヒアリングを経て見えてきた。

『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』の初演では、倉田は「演出家」として京都市のモデル事業に参画しつつ、個人同士の関係から出演者を選択していった。倉谷氏は「京都市職員」でありつつ、仕事と家庭の時間配分に悩むプライベートな個人として舞台上にあがった。なにより、顔を合わせる都度「はじめまして」をやり直さないといけない認知症の入所者の前では、倉田は常に初対面の個人であり、「演出家」でいることは最初から断念されている。

初演を終え、年度が変わり、倉田は京都市のモデル事業から派遣された「演出家」ではなくなり、友人に会うために東九条に通う個人となった。

『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』の再演にあたっては、公演そのものの枠組みが再編された。初演は京都市が主催する公演だったが、再演は倉田が主宰する akakilike の名義による公演である。主催が異なる、というのは、観客から見れば違いはあまりわからないかもしれない(し、実際の作品の見た目にはほとんど関係ない)。しかし、筆者も公演を主催する立場になることが多いため、この違いに倉田が込めた意味がよく理解できる。誰かに頼まれた仕事をやるのか、自分の責任において発表するのか、どこが金銭を負担しているのか。作家が体感する違いは相当に大きい。倉田は『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』を、京都市の事業としてではなく自分個人のこととしてあらためて引き受けなおそうとしたのである。

そして、新たな出演者として、倉谷氏の子供二人と、初演では映像出演のみだった浦宏年氏が加わった。本作の出演者たちと倉田とは、個人的な親交が現在も続いている。

そして倉田は、京都ダルクのメンバーと、「演出家」という前提もないままに出会い、関わり、『眠るのが〜』を制作する。

ふだんの作品でダンサーや俳優と関わる時は、作品をつくっている期間だけ、稽古場や劇場でだけ関係を結び、公演が終われば離れていく。お互いのプライベートには踏み込まない。ダンサーや俳優は、「演出家」としての倉田翠と接する。

『はじめましてこんにちは、今私は誰ですか?』(2019年再演時)
撮影:前谷開

『眠るのが〜』(2019年初演時)撮影:前谷開

というスタンダードから考えれば、この二作品での「個人」を鍵とした関係のヴァリエーションはイレギュラーであり、作品創作における安全圏を逸脱する危険を冒していたとも言える。いずれも作品としての評価も充実し、倉田自身もポジティブに振り返ることができるのは、関係の繊細な綱渡りをやってのけた倉田の努力があってこそだが、しかしどこかでひとつでも掛け違いがあれば不幸な結果を招いていたかもしれない。「演出家」というカギカッコを外して個人として関係するということは、リスクと表裏一体でもある。

倉田が示した「モデル」

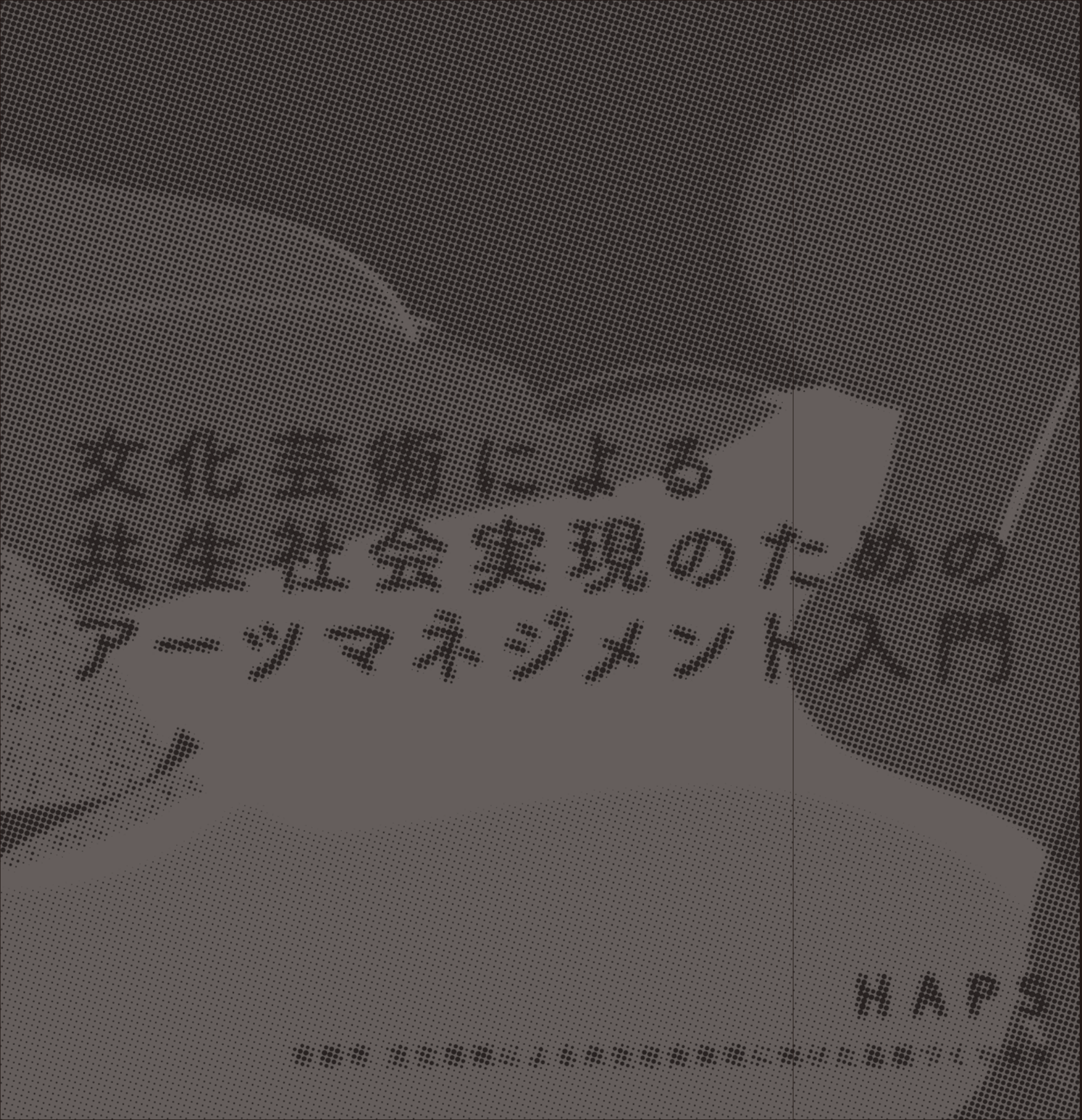
倉田の、徹底した個人へのこだわりは、akakilike の代表作である『捌く』のキャッチコピー「やばいことは1人でやる。誰が悪いかがはっきりしない「悪い」が1番悪い。みんな一緒で、どうやってソロになるか。」が示すように以前からの倉田作品のコンセプトと繋がっているが、東九条という地域やダルクのような組織を作品やアーティストが代表しているかのように捉えられてしまうことへの抵抗として、そして「共生社会」や「包摂」といった用語への警戒心として、より克明にあらわれてきたものでもあるだろう。地域や属性でまとめてレッテルを貼ってしまうのではなく、倉田は最も小さい単位の声で対話を試みてきた。

さて、倉田が示した事業の「モデル」とはなんだろう。

『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』と『眠るのが〜』両作品に共通しているのは、倉田自身が出演していることと、服を脱いで着替えるという行為が含まれることである。

ここで問われているのは、暗がりから指示をして他者に服を脱がせるのではなく、自らが明るい場所で服を脱ぎうるか、ということであるように思う。他者を前にして、はじめに自分から脱ぐことができるか。

この「モデル」は、「モデル」というにはあまりにミニマムかもしれない。先述した通り、きびしいリスクも伴うだろう。それでも、この三年間の倉田が果敢に挑んだこととは、いかにぎりぎりの無防備になれるかであったように思う。



Chapter 4

Seminar
連続講座

文化芸術による共生社会実現のためのアーツマネジメント入門

本講座には2つの特徴があった。第1はオンラインによる実施、第2は福祉事業者などの本業をもつ傍ら積極的にアーツマネジメントを行なっている実務家の招聘、というものである。オンラインは新型コロナウイルス感染症の拡大状況を鑑みてやむを得ず行なった措置であったが、逆にオンラインの特性、すなわち特定の場所において対面で実施するよりも多くの方、とりわけ遠方の方の参加が容易になるのではないかという期待ももった。参加者の数はそれほど増えなかったが、北海道から沖縄まで遠隔地からの参加者が少なからずあった。講座に引き続いて、SW/AC の奥山理子・小泉朝未を進行役とする「談話室」を30分ほど開催し、肩の凝らない談話空間をめざす試みも実施した。そして今回の目玉は、第2の福祉施設などの実務家の招聘であった。我々の事業は、アートの届きにくいところにアートを届け、豊かで多様な生活空間を広げてゆくところにあるが、今回のゲストスピーカーはまさにそれをハイレベルな形で実現している人々である。福祉や教育関係の受講生にとっては、より身近に感じられる存在ではなかっただろうか。アートについては話し慣れておられないということで、事前には緊張されていたが、スライドや動画が十全に準備された見事なレクチャーで、新鮮な刺激を与えていただいた。（中川眞）

第 1 回講座

ゲスト

特別養護老人ホーム グレイスヴィルまいづる

淡路由紀子

Yukiko Awaji

日時：2020年11月12日（木）19:00－20:30
進行：中川眞

特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづるについて

2005年舞鶴市において京都府北部初のユニット型特養として開設。特養、ショートステイサービス、デイサービスを運営。2009年から舞鶴市地域包括支援センターに職員を派遣。2010 ～ 2020年は施設の一部を地域の放課後児童クラブ (学童保育) の開設場所として提供。「寄り添い、受けとめ、一人ずつと向き合います」をモットーに、介護を必要とする高齢者の背景、一人ひとりの性格やライフスタイルを踏まえ、毎日の気分を尊重したケアの提供に取り組む。

Zoom での講座に登壇した淡路由紀子さん

特別養護老人ホーム グレイスヴィルまいづるでは、入居者とダンサーの砂連尾理氏による「とつとつダンス」の公演をきっかけに、現在まで施設内でアートプロジェクトが続いている。施設長の淡路由紀子氏にアーティストのみならず、子どもや地域住民など多様な人々が行き来する施設のあり方や、アートと施設で行われるケアとの接続について伺った。

グレイスヴィルまいづるのこと、また淡路施設長ご自身について紹介をお願いします。

特別養護老人ホーム グレイスヴィルまいづるの施設長をしている淡路です。グレイスヴィルまいづる (以下「グレイス」と表記) は2005年に開設しました。ユニットケアという形式で、個室と共有スペースのあるユニットごとに介護職員が居住する入居者を支えます。入居者の介護度の平均は4.2

『とつとつダンス』公演チラシ

で何らかの認知障害があり、よほどのことがない限り、入居者は残りの人生を当施設で過ごされます。10ある全ユニットは1階にあって、それぞれが中庭に面しており、コロナ禍の現在は、入居者とご家族が庭から窓越しに面会をすることもあります。キッチンからご飯の匂いがする、洗濯物を入居者自身にたたんでもらうなど、生活の雰囲気を大事にすること、入居者の状況や気分に合わせたその日の過ごし方を作ることを大切にしています。

施設開設5年目に舞鶴市のアーティスト・イン・レジデンスの企画を受けて、グレイスにダンサーの砂連尾さんが滞在され、入居者とのダンスパフォーマンス「とつとつダンス」公演を舞鶴赤れんが倉庫で行いました。入居者がパフォーマーとなり、舞台上におられる姿を見たときに、「すごい！アーティストって一体何なんだ、もっとこうした入居者のパフォーマンスを見たい、知りたい」と思いました。

そこで、砂連尾さんにはレジデンス期間が終了した後もグレイスでダンスワークショップを行ってもらうようにお願いしました。職員の刺激にもなればと思っていましたが、はじめは職員側の反応はすこぶる鈍く、むしろ遠方からの見学者が増えていきました。私自身はダンスワークショップが良いものだという確信があり、気づけば10年継続していました。今ではワークショップは職員自身が様々なことを企画する段階へと進んでいます。看護師の仲井は、入居者を部屋まで迎えにいき、一人ずつ参加者を増やしてくれました。彼女は、ぐれいす村合唱団を率いてくれていますが、砂連尾さんから学び「入居者の、体の奥深い部分にこの手が届くように」との思いでワークショップを実施しているそうです。仲井のような職員がいてくれることで入居者の表現もぐっと上がってきたのを感じています。

施設内の地域交流スペースを学童保育に貸していたこともあって、グレイスには地域の子どもたちが施設に自由に出入りする環境がありました。ダンスワークショップにも子どもたちが面白がって様子を覗きにくるようになりました。砂連尾さんは簡単に受け入れて、入居者と子どもたちがダンスをする空間を作っていきました。

新型コロナウイルス感染症の拡大後は子どもたち、地域コミュニティの繋がりは断ち切られてしまい、ご家族の訪問も停止せざるを得なくなりました。ただ、面会制限をしていても入居者を孤立させない方法を職員たちと考えています。砂連尾さんとは Zoom を使ったワークショップを実施し、平面のモニターに反応してくれるだろうか、という一同の不安をよそに、入居者らの反応は非常に良いものがありました。

職員さんを巻き込むことの難しさというお話がありましたが、もう少しその点をお伺いしたいです。仲井さんがワークショップに積極的になったきっかけなど。

ダンスワークショップを始めてから、研修という形では集まるけれど、職員の参加が続かない状態が続いていました。入居者がパフォーマンスされる姿は本当に魅力的で、その姿を見たいという思いが私や砂連尾さんたち関係者にはあり、ワークショップをもとにした独自の企画で『とつとつダンス part.2 愛のレッスン』という公演を実施しまし

テレビをワゴンに乗せて移動しながら、砂連尾さんによる少人数のリモートダンスワークショップを実施

た。薬害スモンで全身が麻痺された女性と砂連尾さんがデュオをしました。そこで彼女に付き添っていた看護師が仲井で、そのときに見たパフォーマンスからものすごく影響を受けたそうです。その女性の生きざまに触れたというか。その後、ワークショップに私と一緒に積極的に関わってくれるようになり、感性のいい職員や、今まで参加していなかった入居者らを誘ってくれるようになりました。それがきっかけで今のように順番にいろんな現場の職員が参加してくれる、積極的な関わりが生まれています。私のような経営者がいくらやりたくても、現場の職員がまず一人、理解してくれたことで、現場の仲間に賛同が広がっていったのだと思います。

経験というか、実際に入居者さんの様子を見ている人たちの実感が大切なんですね。管理職の側がアートの活動を受け入れにくいことはよくあるけど、逆の展開だったのが面白いと思います。組織全体がアートを取り入れていく力をもっていくようになった。すごくうまくいっているような感じもしますが、苦労もあったのではないでしょうか？

特別養護老人ホームとして本来業務のケアをきちんとやって、同時にダンスワークショップも進めたい、というのはしんどい時期もありました。いわゆる食事、排泄の介助だけでなく、その先にケアということがあるとずっと思ってきましが、現実にはどうやってそれが実現するのか、ダンスワークショップを始めた頃は悩んでいた時期でした。

私は施設長になる前、市役所に勤めていました。それで舞鶴市の企画を受け入れました。けれど、介護って本当に大変な状況なのに、舞鶴市はアートなどをやっている場合じゃないかもと思うこともありました。その頃はまだアーティストが作品を作るということを信用しきれていなかった部分があります。

アーティスト・イン・レジデンスの企画では、施設側の経済的負担はありませんでしたが、企画が終わったのちは、グレイスが負担しています。本来なら必要のない予算で、決して安い投資ではないと思います。役員らの理解があったことは幸いですが、いつか何か結果を見せないといけないとずっと感じていました。

砂連尾さんにもこの10年がどのようなものだったか伺いたいところですね。グレイスと砂連尾さんの関係がどのように変わっていったのかも聞かせてください。

初めて施設に彼に来てもらったときに、衝撃的だったのが、砂連尾さんと入居者との間に、まさにコミットメント、「確かな約束」があったこと。作品を仕上げるというのは、公演を行うことだけなく、一回一回のワークショップを通じて作品に関わる入居者への信頼や思いを深めることなのだと感じました。とつとつダンスのディレクターら舞台関係者も、愛情を持って入居者と接していました。私たちの仕事にも、非常に理解を持っていただき、信頼関係を築いていくことができました。入居者の方々は私たちのサポートが必要で、信頼関係がないとやっていけないところがある。砂連尾さんたちは私たちと同じように信頼関係を築いてくださったので、お互いに入居者を大事にしたり、ケアを大事にしたり、私たちの間に絆ができてきました。

変化があったというより、信頼関係がどんどん強まっていったのですね。

砂連尾さんがワークショップをして、すごく入居者と親しい感じになっても、認知障害があるので次会ったときには忘れていて、「はじめまして」から始まるんですね。それを砂連尾さんは「すごくゾクゾクする」と言って嬉しくて仕方がないみたいです。新人職員などが「なかなか名前を覚えてもらえません」と言うのですが、それでもケアの中で入居者は触れ合い、身体的なコミュニケーションを通じて、相手の人のことをどこかで覚えている、馴染んでいるというか。そうしたことを砂連尾さんの関わりを通じて考えます。

砂連尾さんは、結果は別として、ケアをしに来ているわけではなくて、アートをしに来ていますよね。作品を創るパートナーとして入居者の方をリスペクトしているんですね。私もグレイスでのワークショップの様子を見たことがありますが、砂連尾さんは入居者の方に寄りかかって、信頼以外の何物でもない感じ。でも、そういう関わり方に批判的な言葉が聞こえてくることもありましたか？

介護している者として、そういう関わりをハラハラ見ているときもありましたが、今は「面白くて仕方がない」というふうに思います。いわゆるケアを知らなくても、身体コミュニケーションで向かっていく、あの感じ。私たちは既成概念でもって、人の尊厳などの言葉に当てはめて、ものを言ってしまうのですが、砂連尾さんは私たちが躊躇するようなことをどんどん見せてくれてありがたいなと思います。「認知症の人が舞台で表現したいかどうかなんてわからないじゃないか」という人もいるかもしれないですが、今は私自身が主体的にアートの活動を進めていく立場として、人間は死ぬまで何かを絶対に表現したいのだと思いますし、それが社会にいるということなのではないかと思っています。

表現ということが入居者の方々の喜びになっているということですか。

自律性と言うのか、表現を通じて入居者自らが生きている、自らを発しているということをすごく感じます。ワークショップのたびに入居者と改めて出会うことができ、「こんな人だったのか」とリスペクトしたり、楽しくなったりします。介護を受ける人とする人ではなく、人間同士として出会い直すことがアートを通じてできるようになっていると思います。

そのあたりがアートの力と関連するのでしょうか。

アーティストが作品を作るように、私たちはケアという作品を作ります。ケアとは「入居者のしあわせ」を作る仕事であると定義づけていて、それはほ

かでもない、入居者から教えてもらったミッションです。アーティストが作品を創っていき完成させるときに、アーティストと作品の間をグリグリと循環するエネルギーを感じました。作品を創ることへの渇望、粘り強さや冒険する感性、精神力や肉体を含むセルフコントロールもそこに含まれます。そうしたアーティスティックなコミットメント、確かな約束に私は惹かれたのだと思います。私たちの作品であるケア、入居者のしあわせを目指すときにもトライ&エラーを繰り返し、新しい作品を創っていきたいです。

ワークショップを始めてみたいと思っている人に、最初の一歩を踏み出すためのアドバイス、何か一言をお願いします。

アーティスティックなコミットメントのように、冒険を恐れない、それをするための努力や忍耐も必要、諦めないで信じる力、やりかけたら責任を持ってやり続けることでしょうか。誓いとも違うし、自分はやるんだという約束は必要かなと思います。よく福祉施設ってアーティストにすればなかなか入りづらいと言われるのですが、いろいろな人が繋がりを求めていると思うので相手を信じて繋がっていくということが大事かなと思います。

10年間継続してきた中で、私の役割は現場の職員が自由に、仕事に一生懸命になっていただけるようにプロデュースしていくことなのだと思うようになりました。ワークショップの中で入居者の方々と関わるというよりも、アーティスティックなケアが行われる施設のプロデューサーとしての役割を担っていきたいと思っています。

ぐれいす村合唱団の様子

質疑応答

Q 介護度が高くケア業務が大変だと思いますが、ワークショップのある日は出勤者を増やすなど職員の参加しやすい環境づくりに工夫されたのでしょうか?

施設は24時間365日交代勤務で稼働しています。研修という形で開催するときには時間外手当を支給しますが、ワークショップは気づいた人から参加してほしいなと思い、強制や無理強いはしませんでした。入居者を会場まで連れてきてくれて、そのまましばらく付き添う職員もいれば、ユニットに戻る職員もいます。ワークショップ中は私や仲井、管理栄養士や相談員などが入居者のそばで見ています。飽きてしまったのが見えたら、無理のないように、ユニットや部屋まで私たちがお送りします。ダンスワークショップをするために職員を動員したり、特別に手当を支給することまではしていません。

Q 認知症の方が舞台に立たれる際に動転されたり、何か予想外のことが起こったことはありますか?

今のところ、この10年のワークショップや公演で危ないと感じた場面は一度もありませんでした。第1回目の公演のとき、とつとつダンスに出演される入居者が環境の変化に伴い、嫌がられたり、帰りたそうにされたら、即グレイスに帰るつもりでした。実際には何の問題もなく、舞台の上で美しいとしか言いようがない姿を見せておられました。それにびっくりして、アーティスト、アートって一体何なのかと思いました。付き添った職員たちは、舞台袖にいて入居者に何かあったら直ちに動く、という緊張感で非常に疲れ果てたのですが、出演された入居者は何事もなかったかのように、すごく元気で疲れていないことにもびっくりしました。そのときはわからなかったですが、自律的、自発的なことを入居者さんがされているからこそなんだと思います。

第2回講座

ゲスト
きょうとWAKUWAKU座
今井利華
Rika Imai

日時：2020年11月26日(木) 19:00−20:30
進行：中川眞

きょうとWAKUWAKU座について

2002年京都市右京区常盤にて共同作業所として始動。2012年に自立訓練事業(生活訓練)へ移行し、2016年には就労継続支援B型事業も加わった多機能事業所となる。2018年劇団「まちプロ一座」の演劇に刺激を受け、自主公演実行委員会を立ち上げ、地域や福祉のイベントで公演活動を行う。当事者である自分たちが伝えるからこそ、伝わるものがあると信じて、実体験から生まれた目に見えないが故に理解されにくい妄想症状や家族との軋轢、社会からの断絶といった苦悩を描いた台本を共同で制作。周囲の理解や環境が整うだけで、病状は回復と安定を図っていくことができるということを、演劇を通して発信している。

講座の配信中に南京玉すだれを披露するメンバー

きょうとWAKUWAKU座では、精神科・心療内科に通院している方の支援や就労の一環として、演劇などの表現活動を実施している。2019年には、精神障害の症状を題材にした演劇自主公演を、メンバー(利用者)や職員が一丸となって作り上げた。理事であり精神保健福祉士の今井利華氏に、表現活動に至る経緯や活動を通じたメンバーやスタッフとの関係づくりについて伺った。

きょうとWAKUWAKU座理事の今井さんとメンバーのながいさん、けんじさん、たちばなさんにお話をいただきます。それでは今井さんから活動の紹介をお願いします。

きょうとWAKUWAKU座の概要を説明させていただきます。私たちは福祉事業所であるために、法整備のもと事業形態を変えながら運営してきました。2000年ごろ京都市内では、家族会を中心

に精神障害のある方が下請けのお仕事をする作業所が増えていました。私たちは働く以外の選択肢があってもよいのではないか、障害があっても「わくわく」できるように、何気ない日々の中で、少しでも笑顔になれる瞬間が増えるようにとの思いで、表現活動を主にした共同作業所を始めました。

2006年の障害者自立支援法の施行後は、自立訓練（生活訓練）事業所に移行しました。メンバーさんは公演活動を仕事として行っているので、就労継続支援B型事業に移行したかったのですが、当時は表現活動が仕事でなく創造活動だという認識が一般的で、移行が難しかったのです。メンバーさんたちと大事な居場所をどのように運営するか話をしていると、生活リズムが病状によって崩れやすいという声がありました。そこで自立訓練（生活訓練）を通じて生活リズムを整えていくことになりました。

自立訓練は利用期限が原則2年、最長3年の単位になっていますが、精神の障害のある方は、2～3年で事業所を変えていくのが難しいこともあります。また、きょうとWAKUWAKU座で表現活動をしているからといって、表現に興味がある方ばかりでなく、家から出にくいけれど、近くに事業所があったことで利用されている方もいました。様々な仕事をする機会が欲しいという声も上がり、現在は就労継続支援B型もくっつけて、多機能事業所として運営しています。

自立訓練（生活訓練）では、地域で自立した生活を送るために衣・食・住に必要な技術を身につけていくプログラムや、発声の方法や発声のための体力づくり、紙芝居や演劇の表現のプログラムをします。就労継続支援B型では、働く体験を積み重ね、将来の就労に向けて必要な技術や自信を付けていくことや、就労は考えなくとも、ここを自身の居場所として何らかの役割を担います。下請けではお菓子の袋詰めから、房紐、ギフトセットづくり、清掃などを行います。またメンバーへの昼食提供などもします。表現プログラムとしては、精神疾患を理解してもらうため、メンバー間で原案を考えて脚本にし、自主公演を行ったり、紙芝居、南京玉すだれ、皿回し、バルーンアートなどの技を身につけたり、公演依頼があれば披露できるように練習をしています。

まずその場に「いる」という表現から始まるので

シアターウルでの第一回自主公演の様子

いいと思っています。私たちは劇団のプロになることを目指してはいません。利用者が活動に出てくることを通して「ここにいるだけでいい」と気付き始めると少しずつ自分の表現が豊かになっていきます。そして、次第に自信をつけ、生活が広がりを見せていきます。私たちは、「表現」というツールを使って、彼らがさらに多くの人と交流を広げ、いっそう自分らしさを取り戻すことを応援することが大事だと考えています。

メンバーさんにお伺いしたいです。演劇など表現活動を行う中でご自身の変化や、メンバーさん同士の関係性の変化などあったでしょうか。

たちばなさん：自主公演をすることで、自信がついて、就労に向けた支援センターに通うことができています。演劇は趣味として続けて力になっています。演劇の魅力はこの脚本のようなことが起こったら、と想像できる楽しみと、みんなで行うことの楽しみです。しんどい症状もありますが、演劇をすることでその症状の伝え方が変わってきました。

けんじさん：こんな僕でもセリフを覚えられたということですね。長いセリフを言えるかなというのは心配と共に楽しみもあります。

ながいさん：間違っているかもわかりませんが、ロールプレイングというのは役になりきるということを指していると思います。いろんな役を通してその人の気持ちになってみるとか、感情移入するとかそういうことができたりする。今回自主公演の実行委員会に参加させていただいて、アイディアをたくさん出させていただいたんですけども、止めようと思っても止まらないオヤジギャグを入れた台本にするという意見を取り入れていただきました。

いろいろな人が関わることで関係性が解かれるというのか、固定した関係性が変化することもありますか。

最初は自分たちだけで取り組んでいましたが、理事の中にも演劇関係の者がいたので、巻き込んだり、一回目の自主公演から新たに繋がりができた方たちと二回目の公演で関わっていただいたり、というように広がっていく形になっています。昨年は劇作家で精神科医の胡桃澤伸さんの舞台事務局をさせていただく機会があり、今回の公演では台本の監修に入ってもらってリアルに上演できるように手伝っていただいています。

もう二回目の公演の台本は出来上がっているんですね。その内容も当事者の方の経験を踏まえたものなのでしょうか。

精神疾患を患うと入院に至るまでの対応で傷つく体験をされる方も多いと思うのですが、そのことについて二回目の自主公演では脚本にしました。メンバーさんは障害の特性で、一時間くらいの長編を記憶することが難しいこともあるのですが、みんなで相談し、公演の合間に映像を取り入れ、台詞を覚える負担が減った舞台を作る予定にしています。

メンバーさんの言葉で印象に残っているのが、「好きで精神疾患になったわけじゃない」ということです。自分たちの病気のことをうまく伝えるにはどうしたらいいかを話し合ってきて一回目の自主公演に繋がったので、二回目の公演も自分たちの病気の体験談をもとにした台本になっていきました。

第2回自主公演『正樹～STORY～』チラシ

精神障害の経験を普通の劇団の演者が演じることは、ある意味、難しいのかもしれないですね。当事者ならではの内容になっているのではないかと思います。観客の方からの反応もご紹介いただけますか。

一回目の自主公演は、関西に私たちがいることもあって、幻聴がどのように聞こえているかコミカルな形で伝えようと作ったのですが、鑑賞されていた当事者の方からすればまだ表現が甘い、もっとダークな部分があり表現し切れていないからきちんと台本にして欲しいという指摘がありました。よかったと応援してくれる方も多くいました。

鑑賞に来られたのは当事者の方のほうが多かったと思います。京都の劇団あしたの会という聞こえない人と聞こえる人が一緒に作る劇団の観劇に何年か前から伺ったり、滋賀の劇団まちプロ一座さんは当事者の方たちが障害のことを台本にされているので、お互い見に行ったり、演劇の情報交換をするという交流があります。

活動を継続するにあたって苦労されていることはありますか。外から見えにくいことだとは思うのですが。

利用されているメンバーさんたちは、精神疾患を持たれているので、演じることで自分の病的体験が重なり、しんどくなることもあります。一般の劇団であれば、一定の期間を決めて、練習に入り、セリフを覚えて本番に向けて取り掛かっていくことができると思うのですが、ここではしんどくなってしまう方へのケアも必要になります。事業所だけでは大変なこともあるので、メンバーが受診されている相談員、看護師、ケースワーカー、主治医の先生にも気持ちを聞いていただいて、サポートしていただく連携も行っています。

演じることで、どう自分の気持ちが揺れ動いたのか、自分の病的体験と線引きをしていくことに時間をかけています。福祉の専門の職員と演劇に従事している職員の間では考えが違うこともあるのですが、情報交換を重ねて、どういう関わりをしていくのか対話をしながら進めています。しんどいことを一緒に共有しながら、そこを乗り越えるとメンバーさんもすごく強くなっていくので、時間をかけながらでも一緒に歩んでいくことが大切なのだと思います。

アーツマネジメントの観点から伺いたいのですが、事業所の運営主体であるNPO法人PRPきょうとという組織の中で演劇を実施していくにあたって、気をつけておられることはありますか。

どうしても現場の職員と理事というのは、離れがちだと思うのですが、うちでは基本理事も巻き込んで現場に関わってもらい、メンバーさんとの繋がりを作ってもらっています。職員もメンバーも理事も一緒になって対話し考えながら、作り上げていくスタンスを持つことを大切にしています。10名以下の理事で、職員を合わせてもそんなに数は多くないこともあり、他の法人に比べると理事の関わりは大きいのではないかと思います。

助成金を取った活動もされていますか。

自主公演に向けて申請はしましたが、なかなか難しく、通ったり通らなかったりしています。二回目の自主公演は秋10月を予定していたのですが、コロナの影響で舞台が借りられなくなり、申請していた助成先からもこの状況で本当に演劇をやるのか、と言われて助成がおりませんでした。来年2月へと自主公演は延期になったので、そこに向けて今ちょうど助成金の申請を行っています。

Zoomでの講座に登壇する（左から）今井さんとメンバーのたちばなさん、けんじさん、ながいさん

新型コロナウイルス感染症の蔓延で表現活動はかなり制約を受けているのでしょうか。

自粛期間中も時間を短くした通所や人数制限をするなどして、福祉サービスの継続はしていましたが、表現活動はいわゆる三密にあたる行為が多いので、事業所にきて取り組むことが非常に難しくなりました。メンバーさんと話し合いをして、Zoomを使った台本の読み合わせをしようかということになったのですが、個々のネット環境も違い、Wi-Fiの契約をすることで経済的に苦しくなる方もいたので、長い時間Zoomでのやりとりは難しかったです。

「いる」ということが一つの表現なんだというお話を最後にもう少し聞かせてもらえますか。

精神障害のある方は、複数の人と一緒に場を共有して過ごすことが難しいという背景があります。人の多いところでは調子が悪くなってしまうことがあります。そこから人と会うことが怖くなったり、自分の殻に閉じこもって引きこもってしまったりします。きょうとWAKUWAKU座のような場所に一歩出てくるということ自体が非常に大事な彼らの意思表示、表現なのだろうなと思っています。ここに「いる」ことができるようになるということが、繋がりをご本人が見出していく大事な過程だと思っています。

質疑応答

Q 演劇で「役になりきって感情移入をする」このような体験は、メンバーさんの日常生活やご自身の内面にどんな良いことを起こすのでしょうか?

たちばなさん：台本の中で脚色して面白いようになっている部分は、自分の病気をネガティブに捉えずにポジティブに捉えるきっかけになっています。辛い場面でもなんでこういうことになったのかなと考えるので、他のメンバーや友達がしんどい時はこういうことになっているのかなと共感できるので、とてもいい効果をもらっていると思います。

けんじさん：僕は幻聴持ちの役をやったので、これで幻聴が実際に出てきたらどうしようと思っていたのですが、今のところそれはないです。普通に演技をしていました。

ながいさん：台本に入れ込んで、言葉にして言ってしまうということを繰り返すことで、自分の悶々として繰り返し考えていたことを手放せたという感じがあります。定期面談をしてもらったときに、よく手放せたなと思うので、こうやって演劇を作ることが楽しいなと感じます。

Q 演技をすることでどこに向かいたいですか?

メンバーと演劇を作ることは人間関係をより豊かにしていくためのツールである部分が大きいです。演劇をすることでどこかに向かうというよりも、その時間を豊かにしていくという点が大きいと思います。メンバーさんから役者になりたいという声があがる時もありますが、演劇の経験を通して自信をつける、自分自身が強くなっていけることの方が彼らにとって、とても大きいのかなと思います。けんじさんも、表現活動がすごく好きで、これが生きがいと言ってくれています。

たちばなさんはWAKUWAKU座を卒業されて、別の就労支援の事業所にステップアップされていますが、OGとして演劇活動には関わってくれています。卒業しても演劇を通して関わる、繋がっているということは法人としても大事にしていきたいと思っています。演劇に関わってこなかったOB OGにしても、裏方で手伝いたいという希望があれば関わっていただけたらと思っています。

第3回講座

ゲスト

彫刻家

花岡伸宏

Nobuhiro Hanaoka

日時：2020年12月10日（木）19:00－20:30

進行：藏原藍子（一般社団法人 HAPS）

Profile

1980年広島県生まれ。京都府在住。2006年京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程修了。近年の主なグループ展に『東アジア文化都市2017京都「アジア回廊 現代美術展」』（二条城、2017年）、『六本木クロッシング2019展：つないでみる』（森美術館、2019年）、『ユーモアと飛躍 そこにふれる』（岡崎市美術博物館、2013年）、主な個展に『つくるということ』（大阪府立江之子島文化芸術創造センター[enoco]、2020年）などがある。「第12回岡本太郎現代芸術賞展」特別賞（2009）、「2006 JEANS FACTORY ART AWARD」優秀賞。

『東アジア文化都市2017京都「アジア回廊 現代美術展」』二条城での展示作品
撮影：来田猛

生活に根ざし生み出される表現とはどのようなものだろう。アーティストの花岡伸宏氏は福祉施設での勤務や地域住民らとつくるアートプロジェクトなどを行ってきた。他者や他者のつくるものと出会うなかで、改めてものをつくることについて、またそれを通じて生きることや他者と関わることについて伺った。

花岡さんは福祉施設で勤務されながら、彫刻家として活動され、近年では地域の方とのアートプロジェクトなども行われています。今日は様々な場面での他者や、他者がつくるものへの関心についてお伺いします。

普段は彫刻家としての活動と、福祉関係の施設での仕事との二つを行き来しています。いわゆる彫刻といっても、オブジェのようなものというよりは、いろいろな素材を組み合わせてつくるアサンブラージュという手法で制作しています。作品を見てもどれが作品なのか分からなくなるようなもの、ものが変化していく過程を見せるものなど、つくるにあたってどの地点が完成なのかを問いかけるような制作スタイルです。衣服や木材や端材など自分の生活圏内にあるものを組み合わせた作品や、彫刻をつくる途中の経過をそのまま完成として展示するという実験的なものを作っています。自分でつくりかけたオブジェを、別の作品に組み込んだり、完成した作品をまた新しいものに組み込んだり、それらがアトリエのなかでゴミになったりと、サイクルが起こる制作をしています。

花岡さんの作品も徐々に変化をしてきたと思うのですが、福祉施設での出会いも一つのきっかけだったのかなと考えています。

大学を卒業した2011年頃は、紹介いただいた仕事で、遊園地のオブジェ、アトラクションの乗り物、立体看板などを造形する会社で働いていました。しかし、仕事では樹脂などの人体に有害な化学物質を使うこともあるので、長期的にこの仕事を続けるのは少ししんどいなと。もともと興味があった福祉関係の仕事に就いてみたいと思い、たまたま求人サイトで見つけた、障害を持った方と一緒に下請け作業を行う作業所という場所で働くことになりました。そこでの出会いが制作や今までの考え方、価値観を変えていくまず初めのきっかけだったように思います。

というのも、実際に一緒に仕事をし、障害を持った方と向き合ったときに、今までに自分の行ってきたコミュニケーションが通用しなかったんですね。一人一人の距離感、言語のチョイス、表情、その伝わり方など、人とのコミュニケーションの取り方がそれぞれに全く違う。会話中ものすごく顔の近い人や、突然抱きついてくる人、聴覚が敏感で後ろから話しかけるとビックリして転んでしまう人、16時ピッタリになると話の途中なのにすぐに帰ってしまう人、楽しいことや嫌なことを手紙にして伝えてくれる人、嫌なことがあると身体をつねってきたり裸になってしまう人など、人に何かを伝えることや接し方の振り幅を鍛えられるような毎日でした。このような経験は、作品を制作して発表し、人に見てもらうことを通じてコミュニケーションするという、美術の表現と共通していると感じました。その面白さがすごく似ているなと感じて。だから職場で働くことが面白かったです。

はじめは職場を通じて障害のある方と出会い、その後京都府アールブリュッ都ギャラリーや京都府庁での企画がはじまったのでしょうか。

ちょうど福祉施設で働き始めた頃に、僕の先輩でもある彫刻家・美術家で、京都亀岡の障害

『京都府民美術館―集積と解放』（2013）
京都府庁旧本館での展示の様子
撮影：草木貴照

『京都府民美術館―集積と解放』（2013）
京都府庁旧本館での展示の様子
撮影：草木貴照

者支援施設みずのきにあるアトリエに勤めておられた森太三さんにたまたまお話をいただきました。みずのきが関わる展示の企画があるから参加しないかと。障害のある方と美術の表現をするということは、まだ繋がっていなかったので、すごく嬉しく思い、参加しました。

みずのきは知的障害のある方が入所する大きな施設で、その一角にアトリエがありまして。そこに通っておられた当時60代の山崎孝（たかし）さんと、北川善貴（よしき）くんという若い方と『集積と解放』という展覧会をすることになりました。山崎さんは指や筆をぐるぐるまわして玉を描くなど、作品に繰り返し丸が出てきます。目なのか、何なのかわからないですけれども。障害があるなしにかかわらず、作品として面白いなとまず思いました。

北川くんは、みずのきアトリエに一度見学に行った時にいらした方で、制作を始める時には必ず手洗い場のシンクのところに水をためて、段ボールなどの紙を濡らして、クシャクシャにしたのをゴミ箱に入れるというのを繰り返されていました。感触を楽しんでいるような。濡らした時の手触りといったことが、気持ちいいのかわからないのですが。活動時間の大半をこの作業で過ごされることもあったようです。制作前の儀式のようなこの工程が自分としてはとても面白く感じ、この行為が彼にとってはとても重要な作業だったのでは？と思い、彼の作業風景を映像に撮らせてもらうことになりました。ギャラリーでは映像モニターと一緒に実際に紙を捨てているゴミ箱と、紙屑を展示させていただきました。

北川さんや山崎さんの制作プロセスや、行為のなかで集積していく、繰り返す動きに注目されたんですね。

同じような繰り返しの行為で何か別のものを作りたいとも思い、ワークショップを実施しました。展示会場の真ん中に発砲スチロールのオブジェをつくっておいて、来場者がくぎで挿していくものです。柔らかな素材に釘をブスっと刺す感触が気持ちよく、長い時間没頭してやっておられる方もいました。何かに固執して、繰り返し積み重ねていくなかで生まれる集合体の塊やその痕跡を形にしてみたいと思っていました。

花岡さんが勤務する作業所で出会われた方と、仕事の文脈から離れて展示をすることになったというお話についても伺えますか。

『集積と解放』は、たまたまお話があったから

展覧会する機会ができたんですが、自分から発信していくときに、自分が働いている場所の利用者さんに注目したいなと思いました。作業所では朝礼、ラジオ体操、今日の仕事の発表時間があり、各自の作業スペースに行きます。そのときに毎日1枚絵をくれる人がいました。その人は西村健二さん（通称 ケンちゃん）という、僕より2つ上の当時30代の男性で、インターネットや自分の家の中にあるチラシや雑誌で見つけたものをモチーフにして、動物や漢字を家で描いてきて、それを見せてくれるんです。時々、遠慮はいいから取っておけというような顔をして、僕のポケットにそっと入れてくれることもありました。別の職員さんは、なんやこれっ？て捨てたり、スルーしたりすることもあったんですが、僕はそれが捨てられなかったですね。なぜならこれが彼のやり方（挨拶）に思えたからです。というよりもこの習慣が面白い。

毎回絵の中に僕が出てくるので、僕の肖像みたいなものを描いてくれているということですから、何らかの形で展示したいなと。大阪の中津にあるアーティストでもある高須健市さんが運営していたギャラリー、アートスペース ZERO-ONE で展覧会を企画させてもらいました。自画像をテーマにして、ケンちゃんにもらったものを壁に貼ったり、僕の衣服をオブジェに変えたものを展示したりしました。彼は結局見にこなかったですが、お母さんは喜んでいましたね。

作業所には絵を描いたりする人だけがいるわけではないです。絵を描ける人は、こういう形で昇華されるというか、武器になる。人に見せて社会と繋がりやすいというか、理解されやすいですよね。絵の内容でなくて、絵を描くという、行為が理解されやすい。でもそういうふうに表現できない方のほうが多いです。世間で知られないような、毎日の生活の中で繰り返していること、生産性のないようなことを続けられる方も多く、そこにすごく興味があります。

西村健二さんの描く絵

さきほどから伺っていると、何がつくられているかというより、制作への姿勢や行為に興味を持たれて関わりを作られているように思いました。最後に西成での活動についてお話を伺えたら。

大阪の西成という地域に一年ほど調査に行きました。Breaker Project というアートを通して地域と関わっていく NPO 法人があり、そこで話をいただいたのがきっかけです。高齢者が多かったり、日雇い労働者の集まるあいりん地区だったり、建物が古く空き家が多かったり、飛田新地と呼ばれる遊郭街があったり、結構ゴチャゴチャしている。昼間からカップ酒を飲んでいる人がいるような自由な感じがあります。

その地域で暮らしている方の中で、何かものづくりをしている人たちに焦点を当て、お家を訪問させて頂きました。編み物をしている人が多く、人形、小物入れ、ペットボトルをいれる袋など工夫して日常に役立つものをつくる、技術のある方がたくさんいらっしゃいました。

プロジェクトでは、自分の制作スタイルと照らし合わせて、彼女らに実験的なものづくりをお願いすることにしました。用途があるものではなく、形だけのものや、使い道はないが縫ってあるだけのものなど目的を変えてつくってもらうと、おもしろいものができるんじゃないかなと。例えば、僕の制作した手の木彫を包む手袋をつくってもらいたいと提案しました。本当の手袋は指があって、指の形に沿って包むように編むんですが、これは彫刻なので台座もふくめてつくられ、カバーのようなものになりました。結構短い期間、一週間ほどでつくってくれました。

思った通りにつくれるという技術があるということですよね。模様も入っています。

センスの良い方だったので、僕の作品に足してくれたというか造形的な面にも配慮してくれていたように思います。それをきっかけにいろんなものを包んでもらおうと思い、僕の作品だけでなく、1円玉のカバーやペットボトルの蓋などゴミのようなものを包むカバーもつくってもらいました。

つくられた方の反応はいかがですか？

これは、奥張っているから、なんとか編みだね、みたいな感じです。

プロフェッショナルな感じで。イメージに沿って。

なんで？と言うのでなく、つくることを面白がってくれました。職人みたいに提案したものを喜んでやってくれて、しかも仕事が早い。無益なことに力を入れてくれる、モチベーションがすごくいいな、そういうもので展示の構成をしていきたいなと思いました。古くなったお家のいらなくなったものをもらってきて、飾ってあった集合写真を置いたり、タンスを編み物で包んでもらったり。硬さが良かったのか、色を合わせるわけでもなく家に届いたハガキなどで襖を補修しているのを見つけて、そのまま展示したりもしました。（p.134写真参照）

花岡さんが制作で行われているアサンブラージュという手法とも共通するのでしょうか。

うーん。完成を無視して、ほんとに機能的に貼り合わせされていました。結果的に第三者がみると、ものすごいコラージュになっている。貼り方も絶妙で。この感覚は、なかなか出せないですよね。こういうのにすごく嫉妬してしまう。これと自分の作品を並べたいなという気持ちになります。基本的に、ものづくりや生活の中でできあがった、目的からちょっと逸脱してしまったものに興味があって。

プロジェクトを経て実施された展示『つくるということ』に、地域の方からの反応はありました？

手伝ってくれたおばちゃんたちなどは結構見にきてくれました。ギャラリースペースにノブがあるんですが、現場でノブのカバーを編んでもらったり。

僕らみたいに美術をやっていたら作品に対する関わり方のルール、例えばギャラリーで作品に触ったらまずいなという気持ちみたいなものがあります。そういうのがないですよね。作品として見るのではなく、目の前に当たり前に存在しているものとして見る感じ。

見にきてくれたおばちゃんが「ちょっとこの子、頭寒くないか？」って、頭像の彫刻のサイズを計り出して。帽子を一週間くらいで持ってきてくれました。せっかく編んでもらったのでそのまま帽子は被せて展示しました。昔話の笠地蔵のエピソードのようでした。

皆さん協力的に、展覧会を楽しんでくださった

『つくるということ』
大阪府立江之子島文化芸術創造センター［enoco］での展示風景
撮影：麥生田兵吾

ように思います。

花岡さん、地域でものづくりされている方、それぞれの視点での関わりを作られたんですね。「ものをつくること」を通して、関わり方やその場が成立しているのが面白いなと思います。

彫刻家として活動しているので、彫刻として成立させる展示はやっているつもりなんですが。一緒に関わったおばちゃんたちは、ものづくりに関しては自分と共通している部分はあるけれど、オブジェの扱い、作品に対する見方や関わり方は違いますよね。僕と、そのおばちゃんたちの、今までの価値観みたいな、培ってきた価値観の違いが見えてきて、面白かったです。

僕が最終的に感動したエピソードがあって、このプロジェクトによく携わってくれているおばあちゃんで、その方は足が悪いのですが、わざわざ手押しぐるまで見にきてくれました。展示をしたギャラリーは、結構駅から遠いんですよ。そのおばあちゃんも、ギャラリーに着いたらもうヘトヘトで、「あー疲れた、一服しよ」と言って彫刻作品の一部であった畳部分に「よっこいしょ」と腰掛けました。そしてそのまま椅子、ベンチのような存在として、作品に座わりながら見てくださったんです。自分の作品がこういうふうに見られたいという…理想があるんですが、そこをいとも簡単に崩されて。そのおばあちゃんと、地域との関係から生まれた作品との関わりが現れていたように思います。腰掛けた瞬間に関わりが完成したというか、自分の作品のあり方がすごく完成された感じがしました。

生活空間に近いところで、この展示空間が受け止められたということでしょうか。

うん、作品を見るというよりも、もっと広い意味で、よくわからない、存在しているものと対峙してくれたということでしょうか。プロジェクトが成功したような気がしましたね。

HAPSオフィスでの講座配信の様子

質疑応答

Q　福祉施設で働き始めた頃から現在までの間に、障害のある人の表現に対して、自分や周囲の反応の変化を感じることはありますか?

8年前に福祉施設の現場で働くようになって、アール・ブリュットというか、美術で表現されている方に出会うようになりました。ただ、そういう美術という括りではない形で関わることのほうが多く、一般的には表現と見られないような些細な日常行為を見守ったり、障害を持った方の家族の苦悩や訴えに対面する機会もありました。このように他人の生活という非日常に触れることができた福祉現場での経験から制作の思考に大きく影響を受けたように思います。障害者アートや、アール・ブリュットに見られる、突出した才能の持ち主だけに注目するのではなく、どちらかというと、表現に至らないような、小さな活動を注意深く観察し続けることで自分自身の表現と結びつけていければと思います。

第４回講座

ゲスト
京都市修徳児童館
木戸玲子
Reiko Kido

日時：2020年12月17日（木）19:00－20:30
進行：中川眞

京都市修徳児童館について

京都市下京区で3館目の児童館として修徳小学校跡地（新町通万寿寺）に建設され、2001年に開館。総合福祉施設として、特別養護老人ホームやデイサービスセンターも同じ建物内にあり、下京図書館も合築され、横には都市公園も隣接している。総合福祉施設の特徴を生かして、子どもや子育て中の保護者の方、地域の方や高齢者の方々が互いに関わり合いながら暮らせる地域づくりを目指し、遊びという子どもたちにとっての主体的な活動を中心に、異年齢・異世代の交流、活動を通じて〝繋がり合い育ち合うまちづくり〟を目指している。

HAPS オフィスでの講座配信の様子

京都市修徳児童館では、子どもと地域の高齢者とのお茶会や、商店街のまちあるきの企画などを通じて多世代の繋がりを作り、子どものことを語り合えるまちづくりを試みている。館長の木戸玲子氏に、遊びや生活を中心とした文化活動と子どもの支援と共生のまちづくりについて、また活動継続のための工夫について伺った。

2012年から京都市の修徳児童館の館長をなさっている木戸さんは20年ほど前から、児童館に勤めておられるプロフェッショナルです。京都には児童館が130ほどありますが、児童館は子どもだけでなく、地域のためのものでもあり、地域に対して児童館を開いていくことに非常に熱心に取り組まれています。子どもに関わる話が多くなりますが、児童館がそうした広がりを持っていることは、アートをはじめいろいろな分野でも応用して考えることができるのではないかと思っています。

ではまず簡単に修徳児童館の紹介をさせていただきます。児童館は０歳から18歳の子どもと保護者が登録なく、自由に利用することができます。京都市のなかでは、子どもの居場所としてみなさんがイメージされる「学童クラブ事業」は児童館の中で行われています。児童福祉法第40条に児童館は「遊びを通して子どもの健全育成をする場所」として定義されています。遊ぶことで身につく自己肯定感や協調性などの力がありますが、そこには目標に向かって頑張る力や人とうまく関わり折り合いをつけたり、怒りや悲しみの感情をコントロールしたりする力が含まれます。子どもたちがやりたいなと思った遊びで夢中になるうちに子どもたちの中にこうした力が育まれるように、支援をしています。

修徳児童館は京都市の児童館活動指針に基づき、三つの目標を立てています。

1 子どもの自立支援

子ども自らが気づき、考え、決断し、行動する。そしてその行動に責任を取る過程を大切に、様々な体験機会を提供し、問題解決能力を育てる。

2 子育て家庭支援

保護者のライフスタイルや価値観が多様化するなかで、保護者の思いに寄り添い、前向きに子育てができるように支援する。

3 共生のまちづくり

児童館は地域の中の施設として、また子育て拠点として地域に働きかけ、子育て家庭を支える地域社会づくりの一端を担い、子育て環境を整える。

小学生でもコロナによる休校の影響から7時間授業があったり、習い事があったりする中で、子どもたちは忙しく、自由にやりたいことをする放課後や余白の時間が少ないように思います。児童館に子どもたちがいるのは、ほんのわずかな時間ですが、その間はせめて自由に彼らが自分たちのやりたいことを自分たちで考えて、やってみることを支援しています。

子どもにとって入学や卒業などの節目は大切な区切りですが、児童館は逆に、切れ目のない支援を目指します。そのためには保護者だけでなく、地域のお年寄りなど子どもたちの育ちと子育てを支えてくれる大人との出会いが重要になります。マタニティの方を対象に、マタニティフォトの取組みや、ベビーマッサージの機会を作ったり、パパと子どもの交流を作るイベントなどもしています。地域の中に子どもたちが出かけていって、地域の方や高齢者に出会う、地域の中で多世代が繋がりやすいような企画も様々に行っています。

（2020年）3、4月以降から新型コロナウイルス感染症の流行がありますが、子どもたちや遊びの活動にも影響があったのでしょうか。

当日のスライド資料

学校が休校になっている期間は、子どもたちは行く場所がない状態でした。学童クラブに関しては、保護者の就労支援が大きな柱になっているように、医療関係にお勤めの方や保育士さんなど仕事を休めない、在宅勤務もできない親御さんの子どもたち中心にお預かりしていました。ただ子どもの遊び場所として開放することはできませんでした。その頃は学校や図書館など軒並み閉まっていたので、その度に公園に子どもたちがあふれるという現象も起こっていました。普通に再開したのは今夏の7月頃からです。

修徳児童館は下京区の五条通りの少し北側にあって、周りは民家やビルに囲まれた都会的な環境ですよね。少し広めの公園が児童館のすぐ隣にある。子どもはすごく群れてしまうというか、接触し合ってしまうのだと思いますが、ストレスはあったでしょうか。

公園には小学生だけでなく、乳幼児の親御さんや中学生なども集まってきていました。家にいないといけないことはわかるけど、家にばかりいられないという人たちでいっぱいになることもあったと思います。子どもたちは、7月以降学校が始まってから帰ってくる道中ですごく大声を出したり、ものすごく走り回ったり、今までの年にはなかったような様子を見せていました。おそらくストレスがあり、発散させたいところなのですが、遊びにも制限がかかる状況でした。

職員間で感染防止にこういうふうに取り組もうという話し合いをされたこともありましたか。

ウイルスをゼロにすることを目指すよりも、子どもと一緒に理解するということをしましょうと話をしました。それを触ってはだめ、あれをしてはいけませんというのではなく、現状を子どもたちと考えつつ、自分たちにできることは何かということ、マスクをするとか手洗いをするとかその必然性を子どもたちと一緒に考えていくということをやりました。

0歳から18歳までが児童館を利用するというお話もありましたが、中学生などはどういう形で過ごすのでしょうか。

学校生活がうまくいっていて、部活動があって、自分の目標がある子どもたちはそんなに頻繁に児童館には来ません。そういう子たちは時々卓球しに来るとか、家に帰る前に一息つくとかそういう利用の仕方です。その一方で学校に行きづらい子どもや、友達や家庭の中でうまく自分の気持ちをぶつけられない子どももいますので、そうした子どもたちの居場所となる場合もあります。居場所と言っても、何か特別なことをするわけではなく、子どもたちは職員と話しをしたり、本をずっと読んでいたりします。職員と話をするという時間が子どもたちには大切なようです。

児童館で時間を過ごしていると、卒業したら児童館の職員になりたいという声も上がるのではないですか。

いますね。児童館の職員には何か特定の資格が必要なわけではなく、子どもや福祉に関わる資格（保育士、教員、社会福祉士の資格など）があれば望ましいという程度です。働き始めてから、勉強や研修を受けて資格を取るケースも多いです。以前「進学決まったわ」と言ってきてくれた子がいて、保育士の免許を取れる学校に行くと言うんですね。保育士さんになるの、と聞いたら、「いや、その免許持ってたら児童館でも働けるやろ」というようなことを言っていました。

制度上では、児童館は教育の施設ではなくて、福祉の施設ですよね。児童福祉施設だということで、木戸さんの中で限界を感じられることはありますか。

社会的に子どもの貧困や虐待などが課題とされていますし、少子化も大きな問題となっています。みんなが学校で楽しくいられ、家で愛されて育つばかりでないこともあります。子どもたちが豊かに育っていくには、子どもたちを24時間支える必要性があるんです。みんなで子どもたちを支えて行こう、子どもたちを安全に見守って行こうという社会を作ろうと思うと、とてもじゃないけど児童館だけが頑張ってできるものではないです。関わっているのはごく一部の時間ですが、だからこそ色々な場所と連携をしたり、関係を持ったりします。たくさんの人が子どもたちに関わり、子どもについて話ができる、そういう社会を作っていくことも児童館の仕事の一つだと捉えています。

連携先にはどのようなところがありますか。

イメージしやすい連携先は子どもに関わる施設です。学校や保育所関係、児童相談所、役所の子どもの窓口などはこちらも話がしやすいです。日常的に連絡調整をして、最近元気がなさそうな子どもについてお話しすることや、児童館に学校の先生が子どもの様子を見にきてくれることもあります。社会全体で支えようとするときには、色々な機関から集まって話をすることも。ただ子どもたちの生活を考えていると、やはり地域の中に家があり、そのなかでの生活があるので、専門機関ではないところとの関わり、日常的な関わりも作り出そうとしています。

修徳児童館横の公園での「あおぞらだがしや」の様子

そこに非専門家である地域の人との関わりが関係してくるのでしょうか。

そうですね。だからこそ児童館の中が地域の人に見えやすいように発信することは大事にしています。印刷物やホームページで表現することもしていますし、一番効果的なのは一緒に何かをして、肌で感じていただくということです。言葉で何か説明するより、お互いの思いがわかりやすい。できるだけ地域の中に出て行って、楽しいことをするということを基本に考えています。コロナの流行以降は自由にできなくなり、今年度はストップしてしまった事業もありますが、地域に向けて児童館でこんなことやりたいです、子どもたちが訪ねてくるのでお願いしますと言うと、多くの方に優しく受け答えをしてもらえて、一緒に活動させてもらっています。

公園で何か事業をしたり、ハロウィンの時には子どもたちが衣装をつけて地域の中のお家を訪ねていったり。児童館が近い松原通を活性化しようというグループとは一緒に松原通沿いの家のガレージやお店をお借りして、子どもの遊び場として使わせてもらい、子どもや親子、地域の人たちが行き交う松原道（みち）の駅をしました。

地域で活動するためにはなぜこれをするのか、何を協力してもらいたいのかをしっかり伝えないといけません。これまでに失敗したこともあり、面識のない者が訪ねて行ってなかなか理解されないということもありました。あいだに児童館と地域の双方を理解していただいている方を挟む、先に声かけをしておいていただくなどの方法をとっています。

木戸さん以外の方も説明に回るのですか。

子どもと一緒にお願いに行くこともあります。ただやはり道筋の付け方があって、私から地域の方に相談をして、その方からお声かけいただき、具体的に直接やりとりをするという流れがあります。

街全体を歩くわけにはいかないので、そういう依頼の仕方をしています。

児童館が公民館的な要素を持つようにすると言うのか、パブリックな場所として地域の方も参加する活動にされているように感じます。

今の子どもたちは特に、やったことがないことへの抵抗感が非常に強くなっています。上手にできなければならないと思っていたり、未知のものへの挑戦をやりたがらない子どももいます。たくさんの選択肢から自分の好きなものや得意なものが見つけられたらいいですが、子ども時代から割とその選択肢が少ないように見えます。地域の色々な人と関わることで子どもたちの体験そのものが広がればいいなと思っています。

その一方で、大人も「やりたい」ということがあります。リタイアされた方が、子どもたちにプログラミングを教えたい、将棋を教えたい、読みきかせをしたいなど子どもとこんなことをやってみたいと思っている人が児童館に来ることもありますし、こんなことができる人だったら子どもと是非何か一緒にやってほしいなと思うこともあります。ただ、大人が何でも準備をしておくのではなく、子どもたちそれぞれがやりたい気持ちになったり、考えたりすることが中心になるようにお願いしています。児童館の職員は子どもと大人、大人のやりたい気持ちをうまく繋ぐように動きます。

一方的にやりなさいと言うのではなく、子どもたちとの相互作用がポイントなわけですね。地域の人からどういうふうに評価されているのか、それを図る仕組みなどはありますか。

アンケートを取ってみる、お話を聞かせてもらうということはありますが、評価を考えることは来年度の課題だと思っています。子どもの意見は日々聞いていますが、児童館の外の学校の先生や地域の方が児童館をどんなふうに見ているのか、どういう期待をされているのかを受信できる場所が少なく、積極的に作っていきたいです。いつもは子どもたちがすでに集まっている場所に地域の人たちに参加していただくのですが、子どもたちのために大人が集まるという空間づくりに挑戦しようと思います。

最後に子どもにとって遊びというのが、なぜ大切か教えてもらえますか。

遊びは生きる力に繋がっていると理解していただけたらわかりやすいでしょうか。1足す1は2ということを子どもたちは計算できるんです。ただ本当の意味での学習や生きていく力というのは、一個のものと一個のものがあって、それが合わさったら二つになるという具体的なものなんですね。

成績重視の世の中に暮らしていると、子どもたちは計算が正確にでき、漢字を書けても、イメージができない、漢字を使って文章を作るのが苦手、学んでいることと実際のものとが繋がらないことがよくあります。体験がないと学習の意味というのはわからないです。子どもの心が動く体験をすることで、生きているということがどういうことか究極的には身につけばいいなと思っています。

大人も自分の好きなことや没頭できることで遊びますよね。豊かな気持ちになったり、それを誰かに伝えたくなったりする。それは生きる力になりますし、潤いにもなります。子どもたちがたくさん遊ぶということが人を作っていくことに繋がるので、遊びの力を信じていきたいと思います。

「三世代交流こどもお茶会」の様子

第5回講座

ゲスト
総合福祉施設 東九条のぞみの園

小笠原邦人

Kunito Ogasawara

日時：2021年1月14日（木）19:00－20:30
進行：中川眞

総合福祉施設 東九条のぞみの園について

1995年に設立された高齢者総合福祉施設。「地域に住宅と高齢者施設を！」という地域住民の強い声を元に、市営住宅と老人ホームを合築した施設が誕生。特別養護老人ホームは京都市の公設民営型老人施設の第1号として建設された。「社会福祉法人カトリック京都司教区カリタス会」が、戦後東九条地域（京都市南区）において展開してきた福祉活動と、京都府下において 1972年から特別養護老人ホームを運営してきた実績を背景に京都市から運営を受託。

Zoomでの講座に登壇する小笠原邦人さん

総合福祉施設 東九条のぞみの園では、2018年度に京都市「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」のモデル事業としてアートプロジェクトが行われ、2019 年度から現在に至るまで自主事業としてアーティストの山本麻紀子氏との「ノガミッツプロジェクト」が継続している。施設長の小笠原邦人氏に、アートプロジェクト継続の動機となるもの、育まれたアーティスト・職員・利用者・地域との関係性について伺った。

最初に施設の特徴やそこで行われているアートプロジェクトについて説明をお願いします。

総合福祉施設東九条のぞみの園（以下のぞみの園と表記）は地域住民の声を元に、市営住宅の一階部分を老人ホームとした施設として誕生しました。カトリックの理念のもと、地域と関わり、地域に住まわれている高齢の方々の生活を支えることに重点を置いて事業を展開しています。当時の新聞からも本当に住民の方々の強い思いがあっ

行政の谷間に
市、重い腰上げる

総合的施策、展開へ

住民「遅すぎたが」

予算に計上

1993年(平成5年)10月19日　火曜日

地域福祉の核に

設備キメ細かく　生活援助員を配置

市内で初　25日着工

老人ホーム
デイサービス
在宅介護支援

市営住宅（高齢者向け）に施設合築　京都市

京都市東九条市営住宅・特別養護老人ホーム（仮称）の完成予想模型

のぞみの園設立決定当時の新聞記事

てできた施設であることがわかります。

アートプロジェクトを実施するきっかけになったのは、私が施設長になり3年ほど経った頃に京都市による「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」のモデル事業への参加を京都市とHAPSの方に呼びかけていただいたことです。当時は京都駅東南部エリア活性化方針が当施設のある地域に出されたところで、何ができるかなと思っていたこと、同じ地域で2017年にモデル事業を実施された高齢者施設があり、ぜひうちでもやってみたいと思っていたところで、ありがたく企画に参加することになりました。

アーティストの山本麻紀子さんと始まったノガミッツプロジェクトですが、彼女は日常の小さなことや常識などに着目して、他者とコミュニケーションを取る作品制作をされてきたと聞きました。生活施設である高齢者福祉施設の日常をどのように表現されるのか、非常に興味を持ちました。ノガミッツという名前は、「のぞみのその」に「の」が三つあるということで山本さんが考案されたものです。

山本さん自身が東九条の住民で、近隣の住居の軒先にある植え込みや鉢植えをおすそわけしてもらった実体験をもとに、地域住民と施設を結びつける施設の中庭を中心としたプロジェクトを構想されました。中庭はもともと入居者鑑賞用に作られたものですが、手入れが難しく、あまり活用できていない状態でした。ノガミッツガーデンづくりでは、地域の方から沢山、お花をおすそわけしてもらい、中庭に植えたり、畑を作ったりしました。利用者さんに喜んでいただき、自分たちが誇れる中庭を作ろうということで、職員も一致団結し、プロジェクトのコーディネーターの方々も一緒になって汗を流して、協力していただきました。

利用者さんは畑で育つ作物のことを気にしてくださっています。「明日はどこまで行ってるやろうか」とか「私はやり方知ってるからやったるわ」とか。利用者さんがノガミッツガーデンを通じて自発的になり、明日の生活を見られる、画期的な庭づくりだったと感じています。

それまでは地域の方に施設の中を見ていただく機会はなかなかなかったのですが、年度末にはノガミッツガーデンのお披露目会を開き、地域の方々50名ほどに施設の中を見ていただくこともできました。

庭づくりのほかには、山本さんが特養の入居者さんとの対話をされ、その方々が大切にしてきたことやそれまでの人生といったものを凝縮させて刺繍を施したハンカチを作られました。展覧会では、入居者さんそれぞれのお話をもとに手のひらにおさまるサイズの粘土のオブジェを制作されて、それを入居者さんに手渡した時の写真とオブジェが埋められた鉢植えも展示されました。その後ハンカチは入居者さんへプレゼントし、オブジェは入居者さんとともに他に誰にも見られない状態で中庭に埋めました。対話されて、展覧会をご覧になった入居者さんからは、「体は不自由かもしれへんけれども、心は豊かになりました」という言葉もいただきました。

私もこのプロジェクトに感動しましたし、利用者さんにこういったご自身の声を形にするというのか、個人の思いを社会に向けて発することで、ご自身の中で思い返すことのできる取り組みが素晴らしいと思いました。

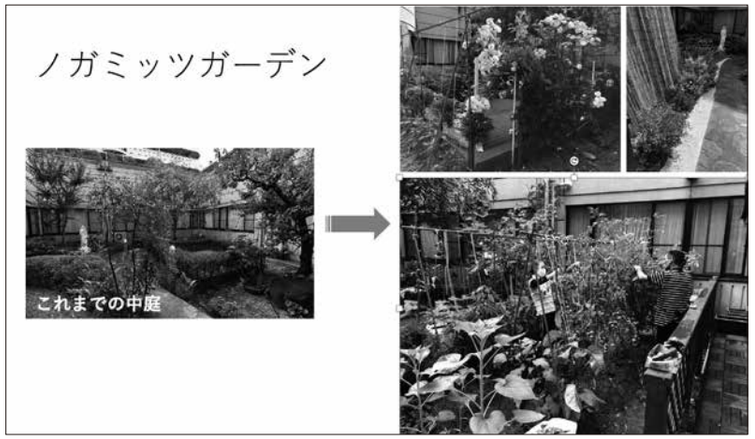
そこで2019年からは施設とアーティストによる自主事業としてプロジェクトを開始させました。ノガミッツガーデンの運営と山本さんと入居者さんとの対話を続けるとともに、ノガミッツガーデンの作庭風景を大きな布に山本さんが描き、地域に住む子ども、中学生、興味を持った方々とタペストリーを協働制作するということを行いました。タペストリーは約1年半かけて、90名ほどの方に参加いただいて完成しました。

芸術家の力を借りながら、私たちでも何かできないかということで、地域への広報のためのチラシづくりをしたり、広報誌でプロジェクトについて自分たちで執筆しました。

丁寧にありがとうございます。直近のことで言うと、高齢者が多く集まる場所で新型コロナウイルス感染症の影響が相当あったと思います。タペストリー制作にも影響したでしょうか。

2020年の2月中旬ごろから感染が蔓延し始めて、うちの施設でも2月末から面会の中断、ノガミッツプロジェクトも一時停止ということになりました。他の高齢者施設で感染者が出てきて、誰が罹るのかわからない状況で、マスクの着用をはじめ、感染防止するというのは大変なことでした。デイサービスの利用控えによる、経営への影響もあります。

タペストリーづくりもできず、企画をしていた山



ノガミッツガーデンの変化（当日のスライドより）

本さんと利用者さんとの対話やお出かけも中止になりました。6月以降は三密に注意をして、再開しましたが、参加いただいた方には少し窮屈な思いをさせたかもしれません。

困難な状況でも活動を続けていこうというモチベーションは何だったのでしょうか。

児童館などでもタペストリーづくりをしていたことで、子どもたちから「タペストリーまだせえへんのか」という声がありました。職員もうずうずしているというか、プロジェクトを楽しみにしているので、暖かくなり感染も落ち着いた段階で、頑張ってやってみようという話になりました。

職員の方には施設長がプロジェクトへの参加のために説得されたりしたのでしょうか。

やはり介護をする中で時間を作ることが物理的に難しかったり、またアートというと身構えてしまったりする職員もいるかもしれませんが、純粋に新鮮な出会いとして捉えて、職員たちはプロジェクトをすんなりと受け入れてくれたように思います。一般的に施設は少し閉鎖的なイメージがありますが、職員のあいだでも自分を表現するという機会はあまり多くないかもしれません。のぞみの園では少しの時間でいいから参加してみないかと声をかけると喜んで参加してくれる感じがありました。余計なことが増えて困ると言われたことはなかったです。

タペストリー制作の様子

『ノガミッツタペストリー』展覧会チラシ

2018年は私たちの方から半ば持ち込みで始まったプロジェクトなのですが、自主的に続けられてきたお話を聞けて本当に嬉しく思いました。ただ自主事業をするにあたっては財源などの問題をどのようにクリアされたのでしょうか。

まずは助成金をいただくということを目指しました。可能な範囲でできることとして、南区「みなみ力で頑張る！区民応援事業」という助成事業に応募しました。プロジェクトに共感していただき、数十万円の助成をいただきました。のぞみの園からも半分程度を上乗せし、プロジェクトのために使っています。

長期にわたりアートプロジェクトをされるなかで、何か困りごと、悩みなどは出てきましたか。

2018年は京都市の事業としてコーディネーターにお任せしていた部分で、迷うことがありました。アーティストにこれだけやっていただいて、対価としてどれくらい支払えばいいのか、作品や制作活動をお金に換算したときにどれくらいのものになるのかということが見当もつきませんでした。山本さん自身と話し合いをしながら決めていくことになりましたが、こちらから提案するときの基準がわからなかったです。

アーティストには相応しい対価が支払われるべきと思いますが、他方でアーティストは納得いくまでやりきってしまうところがありますよね。自分を表現できる場をのぞみの園が提供されたということは、経済的に換算できない価値であったのかもしれません。山本さんは2019年には何回くらい訪問されたんですか。

福祉の常識が世の中の非常識と言われることもありますが、アーティストご本人に、聞きにくいこともありました。その時はHAPSなどコーディネートをする団体に質問させてもらいました。また、アーティストの作品の取り扱いについても無知だったので、作品のクレジットと言いますか、作品の著作権や所有権などの契約関係が難しかったです。

2019年だと山本さんは一週間に３回くらい来てくださって、タペストリーの制作を週1回されていたことを考えると、物凄い回数だと思います。どんなことが私としてもできるかなあと考えました。

福祉には福祉の常識があり、アートにはアートの常識がある、その出会いの局面に小笠原さんが立たれたということですね。専門とは違うところにご自分を位置付けながら進めていく必要がある、まさに社会包摂型のアーツマネジメントの難しいところであり、面白いところだと思います。両方の世界を通訳していく必要がありますね。

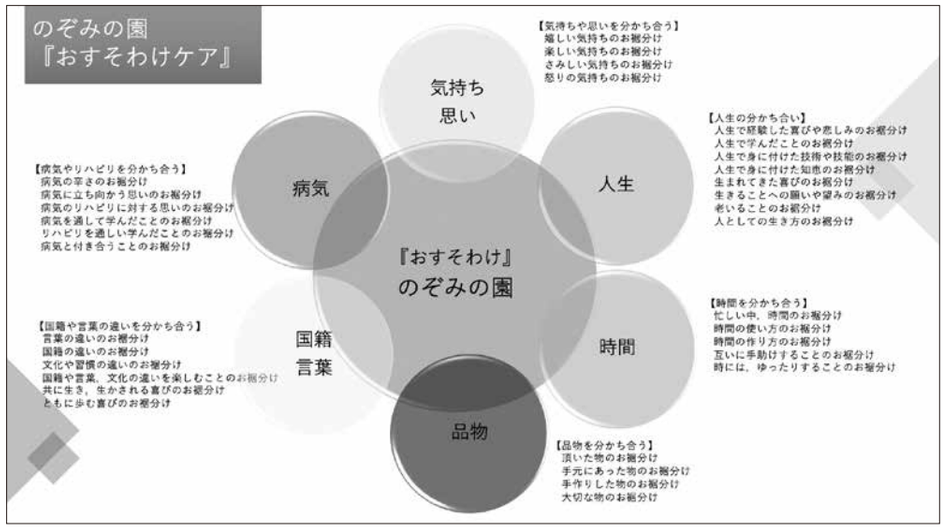
とはいえ、アーティストとの出会いは面白く、モ

チベーションは上がりました。アーティストの作品を作る過程を見ていると、人々の想いを余すことなくのせて、その心を大事にされていること、妥協しないということ、その上でアーティスト本人の想いものせるということについては、福祉、介護の世界に通じるところはあると思いました。

アートの持つ力とはなんでしょうか。今後の予定も含めて教えてください。

アートは何を見て、何を感じるのかということが大きな価値で、捉え方は人それぞれであって良いと思います。タペストリーづくりに参加した人にとっては、「ああ大変だったけどいいものができたなあ」、参加していない人には「タペストリーを作る地域なんだなあ」など視点を変えて見られていきます。それぞれの人が作品を見て、発想力を持って感じることがそれぞれに正解なのだと思います。有形無形を問わず、それぞれの想いを積み重ねて自由に発想していく、作るものの気持ち、見るものの気持ちを照らし合わせながら、自分の立ち位置をもう一度確認できる、それがアートの力だと思います。

2020年3月に面会禁止などの措置の後、計画していた展覧会や報告会は中止になりました。そこで、協働制作したノガミッツタペストリーの展覧会では、少人数で見られ、密にならないよう展覧会を移動させようというコンセプトで実施することになりました。展覧会は無人で運営しますが、小冊子を作りました。2019年度のプロジェクトの内容をまとめています。たくさん刷ったので、ぜひ持ち帰ってもらえればと思います。



「ノガミッツプロジェクト」の実施を通じて構想された施設のケア方針『おすそわけケア』

質疑応答

Q 協働制作のタペストリーも著作権の対象になるのでしょうか?

一概にはいえないと思いますが、著作権はアーティストにあります。また所有権もアーティストにあるものとしています。展示をするときには、アーティストと施設で協議の上、利用するという契約を結びます。

Q イベントは行えなくとも、野菜栽培やそのおすそわけなどは日々の営みとして、コロナ下でも続いているのでしょうか?

実は、ノガミッツプロジェクトが始まるのと同時に並行して、「園芸委員会」というものを職員らと作りました。定期的に会議をして、何をどこに植えるかを計画し、おすそわけ植物があると電話を受けて、取りに行かせていただいたこともあります。現在も園芸委員会の活動は続いています。施設入り口にも花やおすそわけ植物、その中には取り壊しになった元崇仁小学校で育っていた植物を植えたりしています。地域の方にそうした作業をして声をかけてもらえるのが、職員としてはすごく嬉しいみたいです。

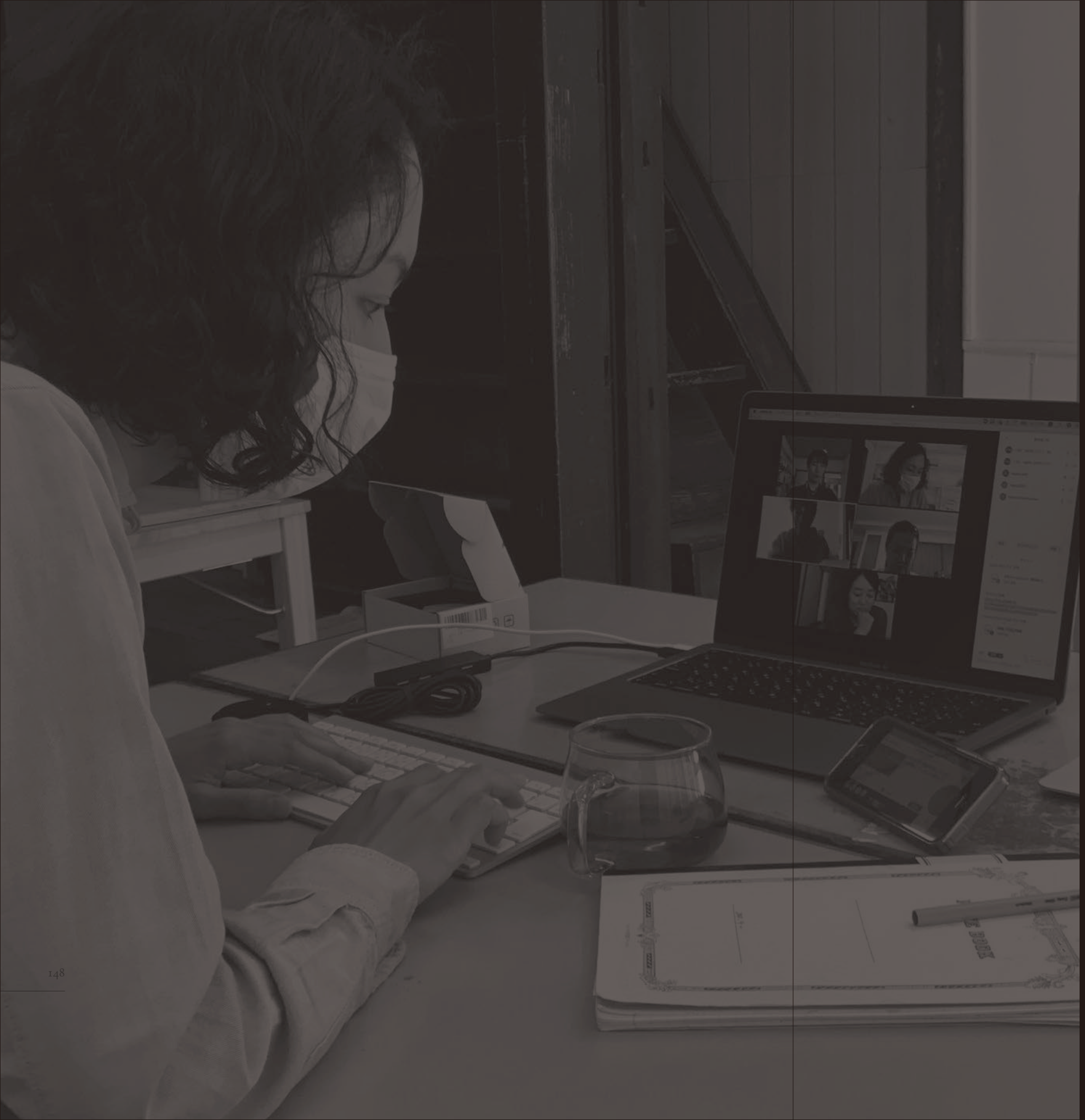
Q 展覧会の先にどのようなことを考えておられますか?

やはり継続することを考えています。おすそわけの花をくださるときに、「のぞみのためにあげるんや」というようなことを地域にお住まいの方がおっしゃいます。住民の方の要望で20年以上前に設立された施設ですからその頃声をあげられた方々が、介護保険のサービスを使う年代になってきておられます。その方々がこの施設を使ったときに、あのとき声をあげてよかったなと本当に思ってもらえる施設にしなければと感じます。新しいことや大きなことをするというよりも、じんわりとしみじみとよかったなと思ってもらえるために、おすそわけを育む庭を地味であっても続けて、アートとしてどのようなことが付け加わっていくのかを模索していきたいと思います。

Q プロジェクトを通じて利用者・職員の方々の変化が連鎖的に生まれていったかと思いますが、施設長ご自身にとってはどのような変化が最も大きかったと感じられていますか?

一人ひとりの人間を見ていく、というアーティストの姿勢に非常に影響を受けました。施設長になってからいろいろなことをやらないと、と頭でわかっていても、職員に対して感謝の気持ちを忘れがちだったのではと振り返ることにも繋がりました。職員を理解するために様々な方面から話をするようになったと思います。山本麻紀子さんが利用者さんと話していると、この方がここまで話をするのかと、毎日接している私と比べても驚くこともありました。そうした姿を拝見して、私の中で一生懸命、人を理解しようと努力する部分は変わってきたのかなと思います。

講座レポート執筆：小泉朝未



Chapter 5

Cultivation

人材育成

文化芸術にかかわるコーディネーター、マネジャーの育成は、多くの社会的領域におけるニーズの高まりもあって急務であるが、なかなか容易ではない。文化芸術のみならず、福祉、医療、地域、教育といった多ジャンルについての見識と経験を必要とするからである。本事業では育成には時間がかかると想定し、2年かかって実践的に学ぶことを基本線として計画された。同時に、実践から生じた課題や疑問を先行事例や研究から学ぶという理論的なアプローチも重視した。2020年度には雇用という形で被育成者を1名受け入れた。既に大学院で博士号を取得済み（題目は「ともにあることを実現する身体の表現 ―アートプロジェクトの記述を通じた考察から―」）というキャリアがあったため、理論面を鍛えるための研究会のコーディネートを任せるなど、当該者の特質を活かせる方法を考えた。時期的に SW/AC の発足と重なったため、実践面ではそこでのアシスタントコーディネーターとしての仕事を中心に活動することとなり、同時にモデル事業にも関わった。リサーチ活動も含めて緻密な仕事ぶりによって本育成事業は順調に展開したと判断、引き続き雇用して2年目の活動を期待することとなった。（中川眞）

人材育成レポート

アシスタントコーディネーターとしての一年

――― どうですか、一年この仕事をやってみて。

この仕事ですか？面白いですよ。人の話を聞く、ということが仕事の中心だなんて。でも、話してもらうことで、何かが動き出すんです。相談者が持っているものが私たちのところに溜まっていって、それを必要とする人に伝わる形で手渡す。そうしてつながりができるだけで何かが生まれていくというのは、希望を感じます。社会が変わっていく、時間をかけた対話ということにつながっていく気はするんですよね。

幸いなことに「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」のアシスタントコーディネーターとしてのレポートを書くページを割り当ててもらった。まずこの一年の始まりから振り返ってみようと思う。

同事業のアシスタントコーディネーターは、人材育成の一環で募集された。事業監修者やディレクターやHAPS職員のもとで、事業全般に関わる実務［相談事業の開設／先行事例や市内での需要を調査／普及・啓発講座の実施／モデル事業の実施／事業に関する広報活動］を経験させてもらうという仕事である。公募に際して、様々な分野と文化芸術を結ぶための相談事業を作る構想を聞いたことが印象に残っている。人と人、人と社会やそこで作られる制度との接面を作り出す仕事、という話だった。それは2020年3月頃のことで、現代アートや芸術表現に関わっていくことと、様々なマイノリティの状況や、差別や抑圧の歴史をとらえ関わりを持ちづけることとが、方向を共にするのか確信が持てないでいた頃のことだった。

新しい相談事業の開設に立ち会うことは、社会で時に私たちを支え、分断する様々な制度とアートを交え両者に変化をもたらしていく仕事に思えた。そうして私は大学院での研究、執筆、教育の享受と、短時間労働をするために様々な場所を移動する生活から抜け出し、週5日×7.5時間の勤務を始めることになった。

一年をかけて、事業に関わる様々な業務に関わらせてもらい、マネジメント、編集、広報、コーディネート、記録、デザインなどアートに関わる仕事や専門性の区別も徐々

にできるようになっていった。その中でも初めての経験として戸惑いつつ、挑戦してきたのは、先に記した相談事業（「Social Work / Art Conference（SW/AC）」として開設）で、様々な立場の人から相談を受け、話を聞く、という仕事だった。

相談の仕事は、経験してみると、社会の制度やアートに変化をもたらしていくといった歯切れの良い表現より、公共図書館のイメージの方がぴったりくるように思う。SW/ACという相談先にはあらかじめ様々な分野の書籍や記録が保存されているわけではないが、一応誰もが利用でき、事前に伝えてもらえればスタッフがいて、やってきた人々は自由に過ごすことができる。スタッフは訪問者に声をかけて、人となりをうかがいながら、何か必要なことはあるかを聞き取り、相手が言葉にするのを手助けしながら、その記録を書き込んでいく。別の資料と照らし合わせた比較内容を見せたり、次にやってくる人たちにこれまでの記録内容をまとめて伝えたりすることもある。

相談は鮮度が重要な要素であることが多いから、記録が集積し、保管された図書館と安易に比較しない方が良いのかもしれない。SW/ACの特徴は、人を介してものごとを整理したり、新たな情報を得ることができたり、知らなかった人々に出会っていくことができることだろう。人々の持つ課題意識やこれまで専門にしてきたことが相談を通じて言葉となり、それが他者へと伝えられると何かが動き出す。

福祉の現場で行われる相談は、誰かの支援や人々の生きる状況を変えていくことにつながっている。アートに関わる、SW/ACでは、プロジェクトや制作物や人との関係が生まれてくる。そこで相談や対応が蓄積することは、ある種の文化を形成するだろうか。その文化は、立場の異なる人々が他者に向けた言葉を作ることによって、時間をかけて話を聞き合い、正解を決めてしまわないことに価値を置くような文化なのだろうか。

このように、私は相談の実践についてアートと公共性や倫理に関わる議論へ文章をまとめてしまうのだが、地道に話を聞き、一緒に悩む姿勢を大切にすることで生まれてくるものを楽しみにしつつ、今後も相談を聞くというコミュニケーションの形式をもとに、人と関わり、何らかの提案をする可能性を探究したいと思っている。

――― コーディネーターという仕事は、何をするのでしょうか。

私もずっと掴みきれませんでした。コーディネーターにインタビューしたり、その近く

で仕事を手伝ったりすることもあったのですが。もともと立場に紐づいた役割や働きを把握するのがあまり得意ではなかったので。そんな人がコーディネーターでいては困るのね、ということがわかるようになりました。立場、を把握するだけではないですね。関わる人たちの人柄や性質、背負っているものを知ろうとしつつ、プロジェクトの行き先をある程度見通し、人との関係を作ったり、整えたりしていくこと、でしょうか。

HAPS は、アーティストやかれらを支える人からの相談を受け付けてきた。その蓄積が、コーディネートという仕事にもある種のスタイルを持たせるのだろうか。アートや表現には様々なものがあるという前提のもと、HAPS のスタッフらは相談を聞き、すぐに答えを出さず、その相談者の背景にある制作・居住・仕事などの環境を整えてきたのだろう。アートの基礎となる創作環境のみならず、創作者の生活環境を支えていくことは、アートイベントを企画、実現することとはかなり異なる指向性、もしくは射程の広さを持っている。それは、コミュニケーションを基礎にして、関わる人々との様々な調整を行っていく作業となる。

この一年は感染症対策の一環で、スタッフらと物理的に空間を共有して仕事する機会は少なかったものの、毎週の全体ミーティングや、ちらと見かける言動の端々から伝わってくるものがあって、学ぶところが多かった。スタッフが事務所にやってきたアーティストに声をかけるとき、そこには独特の朗らかさがあり、相手を取り巻く状況を知って、なんらかの配慮をしようとする姿勢があるように見える（ご機嫌伺いがうまい、とでも言おうか）。

HAPS がモデル事業として地域で行うアートプロジェクトでも、コーディネートが行われる。アシスタントとしてその実務を手伝わせてもらうことで、コーディネーターがアーティストらとともに、もしくはそれよりも事前にプロジェクトの実施される地域に身を浸し、地域で生活や商売を営む様々な人々との関係を作っていく仕事を目の当たりにすることになった。

個々の人々がどのように生活し、何を軸にして生きているのか、どのように人との関わりを作りたいのか。「人々」の中にはアーティストも、地域で暮らす人も、活動する人も、行政関係者も含まれる。コーディネートという仕事は、そうしたことを汲み取りながら、関わる人々やその背景を含む関係性をケアする可能性を多分に含んだ仕事なのだろう。この新たな発見は、コーディネートという役割への期待を広げてくれるものだった。

すでに2019年度のモデル事業コーディネーターがインタビューで語っていたことだが、そのようにして丁寧に作られた関係性が、プロジェクトや作品の土台となり、作品の強度を増していくこともあるという。ケア的なコーディネートが行われつつ、地域の中で様々な人が生活し、時には生きづらい社会状況を生きているということ、そのことが表現に至っていない場合もあるときに、そこで生まれるアートとはいったいどのような表現なのだろうか。これはまだ考え始めたばかりの問いである。

――― これからどこへ向かいたいですか。

地道に相談を聞いて、相手を知るための問いかけをうまくできるようになりたいと思います。そのために本を読んで、時々文章にして振り返り、ということを続けます。相談を受けて話を聞き、私が次の言葉を発するだけで、判断や、理解の方法、これまでの集積なんて実は簡単に相手に透けて見えているのでは、と思うこともあります。だから、透けて見えても信頼してもらえるように、自分自身にもつねに問いかけながら、相談の土台を作っていきたいです。例え価値観が対立していたとしても丁寧に話を聞けるように。そういうふうに人のことを知りつつ、同時に相手の立つ歴史や社会的な立ち位置を立体的に見ていきたいとも思っています。

自分自身に問いかけ、応答し考えを深めていくのが私のスタイルである。テキストはそうした思考のスタイルを反映したものにした。もしかしたらこうした様々な書き口の文章が、誰かの目に留まり、コーディネートや相談をアートの文脈で行うことに興味を持つかもしれない。HAPS や SW/AC に相談してみようかなと思う人がいるかもしれない。それこそ報告書を作る目的に適っていると思うのである。勝手ながら今回はこのような報告までで、お許しください。

インタビュアー・インタビュイー・執筆　小泉朝未

巻末対談

奥山理子×遠藤水城
アートと社会をめぐる営為を捉え直す
——「ケア」の視点から

話者：奥山理子
SW/AC ディレクター

遠藤水城
HAPS代表

進行：中川眞

今日はオンラインミーティングという形ですが、HAPS の代表である遠藤さんと SW/AC ディレクターの奥山さんをお迎えして、この「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」について、じっくりお話ができればと思っています。私は現在、この事業の監修という立場にいますが、2014年〜2017年に文化庁の事業で大学ベースのアーツマネジメント・プロフェッショナル育成事業に取り組んでいました。その前から日本やアジア諸都市において社会的課題のある空間でのアート活動を調査していて、その活動の重みや面白さを痛感していたものですから、「社会包摂型アートをコーディネートする人材」が今後求められるのではないかと思って、その事業を始めたのです。200人以上の方々が参加なさって、講座とかゼミ、プロジェクト実践など色々やりました。そういう方面に関心をもち、進んでくれる人はいないかなぁと力を尽くしたのですが、期待していたほどの結果にはならなかった。なんとなく不発というか未消化な思いを抱いていた時に、京都市と HAPS の方から新たな事業へのお誘いがあったので、「今度はなんとか」と思って前向きな気持ちで引き受けた次第なのです。まずは私のことを話しましたが、最初にお二方から HAPS、SW/AC の活動について簡単に紹介をお願いします。

こぼれ落ちるものを掬うために

遠藤：HAPS は、そもそも若手芸術家支援ということでスタートしています。特に制作や生活、発表に困っている芸術家を支援する、それがひいては京都市の創造的な環境に貢献することになります。ここまでのところパフォーミングアーツよりも美術に重点を置いていて、さらに言えば現代美術というジャンルを対象にしてきました。

これをなんとか拡げていかなければ、という気持ちがずっとありました。ただ、ジャンルを拡げるというよりも、別の拡張法があるのではないか。芸術家の概念を拡張したり、支援の枠組みを変形させたりすることで、掬い取れるものがあるのではないか。京都市立芸術大学の移転の話が出てきた頃から、HAPS として京都駅東南部エリアに関わることになり、その中で、エスニックマイノリティの問題とか障害のある方や高齢の方、いわゆる社会的弱者や社会的少数者とされる方と協働する機会が増えてきました。若手芸術家支援というよりも、取りこぼされてしまうかもしれない表現そのものの支援が前景化してきたんです。そもそも若手芸術家が支援を必要としているのは、彼ら・彼女らの発信力や立場が弱いと同時に、その表現がいまだに社会にスムーズに受け入れられない、強い言い方をするとある種排除されてしまう憂き目にあってしまうからです。そう考えると、弱くて放っておくとなくなってしまうかもしれない表現をいかように社会に定着させるのかという点で、HAPS の若手芸術家支援と共生社会事業は繋がってくる。二つが並走しているというよりは、より大きな枠組みを構想する方向を模索しています。その際に中川さんや奥山さんのような別の視点を持った専門家の方に入って頂くことにしました。お二人には本当に感謝しています。

当たり前のことかもしれませんが、そもそも、現代美術という狭い領域の中にも、矛盾があります。決して一つの物差しで全てが決まっているわけではありません。この価値指標が立ったらあっちが立たない、というように、複数の物差しが同時にある状態がそもそも芸術のいいところなんです。僕の主張が強くなりすぎることによって HAPS がいろんなことを取りこぼしているなという反省もあったので、ディレクター格の立場の人にもっと入ってもらって、視点を多数化・多角化させて、物差しがちゃんと複数同時に走っている状態を機能させるべきだと考えています。お二人にはそれぞれの物差し、それぞれの価値基準で意見をいただいて、ディレクションしていただきたいと思っています。これは言うなれば、HAPS 自体の中に矛盾を抱え込むことなのかもしれませんが、その方が現実に適っているだろうとも思います。

奥山：遠藤さんと中川さんから声をかけていただいた時に、HAPS ではすでに共生社会事業としていくつか取り組みが始まっていて、さらに新規に相談事業を立ち上げたいという段階でした。そこで立ち上げの方針や相談の体制について、奥山の方で考えて欲しいということだったわけですけど、ちょうど私自身も相談事業のようなことをやってみたかった、始めたかった時期なんですよね。本当に時を同じくしてというか。

2015年ごろから障害のある方たちを含む、様々な社会のマイノリティの方たちや社会課題そのものについて文化芸術がアクセスしたり、実際何かを現場で取り組んでみるっていうのが、それ以前に比べて格段に増えていっていたなと思います。その渦中に自分も身を置きながら、その現場がどのように進んでいくかということを見てきたわけなんですけど、ある種のブームになって注目されてはいるものの、実際には、何か一つプログラムを実践してみましょうとか、最終的にはイベントをやるので、それに向けた関係づくりや練習を重ねて行きましょうとか、で、そのイベントやショーイングが終わったら解散、その後については責任持ちませんよっていうような、そんな感じで。

予算がついていろんな企画や体制が作られていったことに対しても、当初は自分自身それで可能性が増えていくことはすごくいいことだっていうふうに思って取り組んでいたんだけど、実際アーティストと一緒に福祉施設とかいろんなコミュニティに出かけて行ってみると、他愛ない会話であったりとか予め用意されたスキームでは収まらないような会話っていっぱい起こってくるんですよね。だけれどもそのほとんどが、イベントにするには強度が足りないささやかなものだったり、プロジェクトとしては公式に残せない、だけれども日常の会話として

はすごく面白いのになっていうことがどんどんこぼれ落ちていく状況を見ていて、こぼれ落ちてしまうものそれ自体を引き取ったり、耳を傾けたり話したりすることが成立するような場を作っていきたいなと思うようになっていました。そんな矢先、HAPSと京都市から、アートと福祉のコミュニティをつなぐインフラを整えていくような形で、新しい相談事業を役に立てていきたいんだっていうことを聞かせてもらったときに、自分が今取り組んでみたい事はまさにそこだと、是非ご一緒したいと思いました。

伴走型支援

> SW/ACが活動を始めて10ヶ月近くが経ちました。どのように始まり、どんなアプローチが可能になりそうなのか、話していただけますか？

奥山：一年間の準備期間を経て、どんな相談がどんなふうにやってくるか見通しが立たないなか始まったんですが、開設早々に、新型コロナウイルス感染症の流行に、全国どころか世界中が苛まれていって、イベントやアウトリーチもできず基本的に対面では無理、というような、出会いにまつわる障壁が様々にありました。それでも、まず福祉関係者の人たちからの相談が予想以上に多くあったことは、嬉しい驚きでした。特に、やっぱり京都市と一緒にやってるっていうところが大きかったとは思うんですけど、さっき遠藤さんがHAPSで関わってきたのはいわゆる非常に小規模な、または個人の、若くまだまだ立場の弱いアーティストと言っておられましたが、それとはある意味で真逆の、福祉分野の中でも施設同士が加盟する協議会や、日頃から規模の大きな活動をしている団体、啓発事業や人材育成に取り組んでおられる方たちに一気に出会う機会が増えたのは、福祉を考える上ではとても興味深い出会いの始まりだったなと思います。

さらにその人たちから、従来の方法では八方塞がりになっている感のある福祉現場の支援のあり方やスタッフの体制、社会に対する認知の更新というものに対して、まだ具体的には手がかりはないんだけど、アートの力を借りて打開していきたいという思いやニーズを聞くことができました。

実際どういうふうに始めていったかっていうところなんですけど、相談のあり方で私が意識していたのは、特に福祉分野の方が相談者である場合に、自分たちの相談内容の解像度と言いますか、やんわり相談に来たけれどもあんまり深く考えてなかったっていうのが割と多くあって、一緒にもう一歩深く、「どうして相談したいと思ったか」を考えていく、掘り下げて聞いていくっていうことをやっていったのが最初の段階です。そうすると、意外と相談にされた際の文面には書かれていなかったようなことが課題だったりとか、例えばワークショップだったりとか、何かものを作る方法について相談を受けたけれども、課題は全然違うところにあって、回数を重ねて聞き取っていくことで、徐々に彼ら・彼女らのバックグラウンドや置かれている現状を知ることができた。そのこと自体がとても大事なプロセスだったなと感じています。そうすると、数回ヒアリングをして、じゃあこういうふうにアーティストとつなぎますね、とか、こういうふうにワークショップを始めてみるときっとうまく行きますよ、あとは頑張ってくださいっていうふうには終われません。プロセスの各段階で「それで本当にいいと思っている?」とか、「それって本当にやりたいことに向かえている?」っていうことを確認しながら、ずっと伴走し続ける必要が出てきたんです。その時点で、伴走型支援というのがSW/ACの相談事業のあり方として一つ重要な柱になっていきそうだなと思いました。というか、一年やってみて、伴走するしかないっていうような状況が多くあったかなと思います。

> なるほど、伴走型支援がSW/ACの当面のあり方だっていうことにたどり着いたのですね。とことん伴走するのは大変だと思うけれど、その覚悟のほどを知ることができました。表面的には見えないけれど、施設や組織が抱えている問題や課題にともに向き合い、なんらかの結果を出していくためには、とても細かい丁寧なプロセスが必要で、当事者の皆さんにはそれは全くデフォルトではない。そこをどう埋め込んでいくのかというのは、まさにコーディネーションの根幹的な役割だと思うのですが、それを当事者やコーディネーターだけではなく、広く波及させたり共有したりするにはどうしたらいいのか、というあたりが今日のポイントになりそうですね。

コーディネーター育成／コーディネーションのあり方

> 先ほど、コーディネーター育成事業をやってみて、あまりうまくいかなかったと話したのですが、それがなぜだったのか考えてみたら、2つほど要因があるような気がします。1つ目は当たり前のことなのかもしれないけれど、一般の大学ベースでやろうとすると社会学や人類学などの横広がりのディシプリン・ネットワークはあるのだけれど、実際に作品を作る現場やアーティストとの接触経験が致命的に少ないのですね。なので、HAPSでの人材育成では、SW/ACのすぐそばで働いてもらうという実践を軸に据えることにしたのです。並行して必要な理論研究も行うと。2つ目の問題は、育成プログラムとして用意をし過ぎた感があるのです。プロジェクト実践という形で、病院、オルタナティブスペース、過疎地、障害者施設といった現場を用意したのですが、ほぼほぼうまくいくように、リスクをできる限り排除したんですね。本当は現場では様々な葛藤があり、思わぬ脱線やハプニングがあり、ということのはずなのですが、案内人であるプロのコーディネーターが障害を予見してしまう。失敗学というのがありますが、失敗しないと身につきません。そのあたり、プログラムがうまくでき過ぎていた感があって、学びが十分ではなかったという反省があります。奥山さんは東京でそういったプログラム実践に関わっておられたけれど、どうでしたか？

奥山：アートプロジェクトが日本全国で数多く展開される中で、それを支えるアートマネジメントという専門性を構築するためのいろんなレクチャーがあったり、ノウハウがまとめられた資料があって、そこから学べたことはたくさんありました。他方で私が感じたことは、批評しにくく、フレーミングしにくい、人と人との営みそのものとか、人と人との関係性の中で起こってくる事柄を、どう分析してコーディネーションにつなげるかという難しさです。リスクマネジメントが重要視され、何かアクシデントが起きたときに一刻も早く現場から関係者、関係機関に伝えていく手順が整理され、プロジェクトの現場で起きることを合理的に対処していく手法が発達することはとても重要で、そうしたノウハウを獲得できたことはよかった。でも、障害のある方たちとのコミュニケーションに代表されるように、じゃあ本人が喋れなかったり判断できなかった場合、合理性をどこで判断するのか。明らかに誰かが苦しんだり傷ついたり、取り残されているような状況で、理想的なプロジェクト像だけを手がかりにずんずん進めていって、なにか大切なことが置き去りにされてしまっていないだろうか。そうした葛藤を自分自身の活動でも感じたし、わかっていても切り捨てなきゃいけないといった状況に遭遇してしまう。「関係が生まれたよ」「いろんな人たちが関わったよ」だけでは物足りないと感じさせるのはなぜか、あるいは「とても悩んだよ」「嫌だったよ」っていう気持ちや、逡巡する状況は単にプロジェクトを止めることでしかないのか。ずっとそんなことばかり考えていました。

今回京都に戻ってきて、改めて本当の意味での共生社会っていうことを実現する上でのコーディネーションとは何か、一から考えてやっていきたいと思いました。そういう意味では、SW/AC の取り組みはロールモデルやモデルケースがなく、誰も教えてくれなかったこと、まだ見たことのない何かを求めて歩み始めているという感覚です。

遠藤：奥山さんが今話したことは、非常に重要な部分だと思います。「とりこぼし」に対してアプローチするフェーズに入っていると思うんです。これまでの「ソーシャリー」なアートの議論は、そもそも芸術が閉鎖的であるという反省から社会との接点を繋いでいくというベクトルの話が多かったと思います。地方芸術祭を筆頭に社会の中でのアートプロジェクトが増えてきた。助成金などの新しいフレームもできて、こうすれば評価されるという指標も見えてきています。ただ、僕の意見ですが、各プロジェクトが成功を語る「語り口」が紋切り型になっていったと思うんですね。報告書の書き方とかパワーポイントでのプレゼンの仕方とかです。僕は当然そこからこぼれ落ちているものが多数あるだろうと思うんです。奥山さんは、それに気づき、そこを切り捨てない方法で、社会とアートに接点はないだろうかという問いを投げかけたと思うんです。それはすごく先に進んでいると感じました。

奥山：SW/AC で相談を受ける時に、私はこの分野に本格的に携わり出した2008年以降に経験してきたことを踏まえて相談者の話を聞いています。これまでの経験の中での傷つきとか、こぼしたこととかを、相談者が関わっている領域のバックグラウンド、その領域での文脈などを想像しながら、私と同じ過ちが起こらないような状況を作りだしていきたいと願いながら、その相談者に対峙してるんですよね。だけど、それってもしかしたら、特に福祉系の団体からの相談に、自分自身を投影してしまってるんじゃないのか、と。相談者は初めてのアーティストとの出会いにワクワクしているだけなのに、私の今までの課題を全部ひっくるめてその先を一緒に創造しましょうって、過度な期待とミッションを一緒に背負わせてしまっているだけになっていたら、これは足並みが揃っているコーディネーターとは言えないんじゃないかと、ハッとさせられる瞬間が、実はこの一年の中で何度かありました。それはどうしたらいいんでしょう(笑)。

遠藤：なるほど。相談に来てくださる方は専門家ではなく、わかる範囲で一生懸命調べたり考えたりした中でこうしたいと言っている。コーディネート側は、すでにあるやり方に落とし込んであげたら、この人の要望は達成できるだろうなと想像できる。でもその後、結局あの問題が起こるだろうと知ってるんですよね。その場合、相談してくれた方の思う通りじゃないかもしれないけど、後々起こってしまう問題を回避するために一緒にこのやり方でやりませんかって言わなければならない、ということですよね。相談してくれた人にとっては、ちょっとわかりづらくなってしまう。

奥山：なんか、相談した時より道が険しくなっている登山道を登らされてるみたいな。

> そこは、丁寧に説明はしてるわけですよね。

奥山:もちろんです。とにかく話はたくさんするので。

> それを納得してもらえて、じゃあその険しい道を歩きましょうか、みたいな感じになるんですか。

奥山：いや、それが……。本当に対話って難しいなって思っていて。今はわからないかもしれないけど、信じてついてきてくださいって言いたい時もあるじゃないですか。今はあなたには見えてないかもしれないけど、きっと、その先には見たかった景色が広がるはずだから、今はちょっと私の背中についてきてねっていう場合もあるし。でもそれって、相談者からすると、進みたかった道とは違う、けど嫌とも言えない。相談者にとってわからないから嫌とも言えないっていう状況に対して、本当だったら一緒に引き返すべきだったのか、それでも進んであげるべきだったのか。まだそういう意味では一年目なので、何かを達成したっていうところまではいってない相談も多いので、まだまだ歩みの途中かなっていう感じではあります。

プロセスの可視化

遠藤：僕は福祉に関して専門家ではないので不用意な発言かもしれませんが、その落とし穴みたいなものを全部知りたいです (笑)。落とし穴リストとか作ってもらいたいですよ。それをやると他団体への批判になるパターンがあるかもしれないですけど、議論を提起するという意味において、してはいけない過ち、それをやると取りこぼしてしまうやり方を共有する何かが必要じゃないでしょうか。

奥山:確かに、こっちでこういう選択をすると、アーティストは怒るよとか、こうすると施設側のコンセンサスが得られないよとかっていうのは確かにありますよね。

> 何かコーディネーションの極北の話を聞いているみたいです。落とし穴を言ってほしいというのは、遠藤さんにとって切実な願いなんですか？

遠藤：それをオープンにしていくことっていうのは、実は今の世の中の流れに沿ってると思っています。僕が専門とするキュレーションの側から言うと、キュレーターというのはそもそも判断を全部隠すシステムなんです。細かく言うと、見せられるところを見せることによって、逆に見せられない部分を保

持し、そこをブラックボックス化することで権威を獲得する構造があるんです。でも、多分それは時代に合わないものになりつつある。キュレーターの権威を剥ぎ取って、一つ一つの判断をオープンにしていくと、キュレーターの特権性がケアをめぐる共有可能な技術体系になる。そうする方がこれからの時代にあってるのかなって気がするんです。そういう意味で、SW/AC では相談の過程を見られるようになるといいのかな、と思ったりもします。

奥山：そうですね。私たちも今年度、本当だったらこの報告書に収録できたらいいなと思っていたけれど断念した、SW/AC としての相談対応のモデルケースともいえる事例がありました。相談のプロセスで私たち SW/AC が、誰のどの発言にピッと感度を働かせて、そこにどう反応したか、どのタイミングを重視したか、ここはいけるぞと可能性を感じたタイミングとかっていうのを、自分たちも試行錯誤ではあるんだけど、オープンにして残しておくことで、もしかしたら別の視点や対応方法があったかもしれない、なぜなら予想とは違う反応があったから、っていうような経験の共有と検証ができることを期待していました。だけど、やっぱり相談者がプロセスを開示する準備までできていないことは多々あるし、プロセスを公開する想定で相談対応をスタートするというのも簡単なことではないと痛感しています。でもなんとか良い形で記録はとっていきたいと思っていますし、いつか公開できるようなものにまとめられるといいなと考えています。

当事者の声とアーティストの創造性、両方を守るには

キュレーターは隠すシステムのなかにいるとおっしゃいましたが、ではなぜそれをオープンに、共有可能なものにした方がいいと考えているのですか？

遠藤：何か、言い方や単位を変えていくことで、一般的にアートと福祉とかアートと医療と言われているものを、同時に考えることができるかもしれません。作品、作者、展示など、いろいろ確定してる言葉があると思うんですけど、そこを柔らかく解きほぐしていく必要があると思っています。

例えば、あまりおおっぴらに言われていないキュレーターのルールを「共有可能」なものとしてざっくり「公開」しますね。キュレーターは暗黙のルールで作家・作品の悪口は絶対言いません。キュレーターが作家・作品に対して否定的なことを公的な場で言ったり、書いたりしているの見たことあります？ないと思うんですよ。そんなルールは実際はどこにも書かれてないし、誰も教えてくれませんでしたが、僕もいつの間にかそういうもんだと思ってやっています。なぜそれをやらないかと言うとキュレーターは「選ぶ」からです。選択するということは他全てを無視しますよっていうことです。極論すれば、選択したものは良くて、選択してないものは全て悪いっていうことです。だからわざわざ悪いものを言わない。

それで、もしキュレーターがこれは悪いって言い続けてたら、言われた人は場合によっては死ぬと思います。精神的に、あるいは実際に。作家が作品を晒すということの中に、実は生死の問題が含まれているということを僕らは知っている。これが理解されなかったら私は死ぬと思ってやっている人はかなりの数存在します。それに対するリスペクトとケアがキュレーターによる選択と無視の様態を決定しています。あまりそういう風に語られることはないですよね。それくらいアートシステムは洗練されているということかもしれません。キュレーターの選択と無視にはすでにケアの概念が入り込んでいて、そう考えるとそこには別の福祉があることになります。アートシステムが洗練させてきた表現者に対する福祉です。

「悪い」と積極的に言わないもう一つの理由があります。それは、キュレーターは作品の全てをわかっていないからです。キュレーターがしているのは、作品の暫定的評価ならびに部分的肯定です。キュレーターだけが作品の全てを理解しているということは絶対にありません。むしろ、キュレーションの実践は全て「作品を十全に理解していないこと」の周りでなされているものです。逆に言えば、部分的にわかっていることだけを共有可能なものとして提示している。僕が考えているのは、「わかっていないこと」を共有可能なものとして提示するキュレーションもあるのではないか、ということです。「作品という生命」の理解し難さを共有する方法についてです。（ちなみに、これは多くの人が「アウトサイダーアート的」なものを「良いと考え、そう言えてしまう」のと対照的な話だと思います。）

こうやって考えると大文字の「表現」や「生命」（作品の生命も含みます）をめぐる技術体系としてキュレーションやアートコーディネーションを組み替え直すという方向が考えられるのではないでしょうか。

奥山：これまでアートに触れてこなかった人がアートの現場に参加することを、「交流」とか「インタラクション」というふうに一見豊かなものとして歓迎ムードで語られる一方で、実に様々な不平等も起こっています。遠藤さんの言われたような「洗練されたアートシステム」には功罪もあるでしょうが、芸術性を保障するために長い歴史の中で構築された考え方や作法そのものだと言えます。しかしそれが、他分野との協働という名目で、素人にもわかりやすい作品や説明でないといけないと軽んじられたり、ぞんざいに扱われたりして、いとも簡単にアートやアーティストが否定されてしまう場面が少なくありません。そういった不幸な状況を作らないためにコーディネーターという役割が機能する場面もあると感じます。アシスタントスタッフの小泉ともよく話してるんですけど、私たちは波打ち際にいるテトラポットみたいな感じで、大波小波をとにかく一心に受け止めて、波を調整して、隣のアーティストに届ける、あるいは、隣の福祉施設に届けるというような役割だと。そのまま大きな波がいってしまうと、届けたい人やその人の領域で大事にされている何かをさらっていったりのみ込んでしまう。特にアーティストたちの創造性の部分っていうのは、いとも簡単に崩れてしまう危うさを感じます。福祉側の、当事者の声や尊厳と、アーティストの創造性や芸術そのものの、両方を守らなければいけない。そのあたりの立ち振る舞いで、全く気が抜けないなっていう感じはしています。

遠藤：福祉施設などでの表現の現場のことを想像すると、支援者がその人にどんな道具を渡すかによって、表現が変わってくる可能性がありますよね。つまり、完全に制作者ひとりがコントロールしてその表現を編み出しているわけじゃない、その人ひとりに負わせるものではなく、周りの人ないしはメディウムに負うものですよね。極論を言えば、創作者の周りにいる人が既に作家であるって言ってもいいし、道具や素材のコンポジションがすでに作品の大部分を決定しているとも考えられる。あるいは人とモノのその配置自体が、固有の価値を創出しているシステムになっているはずで、その在り方自体をそのまま肯定することが肝要です。先程のキュレーターのぶっちゃけトーク部分でうまく説明できなかったことですが、そうやって作家や作品、人やモノに対する考え方を柔らかくして、動的にして、それを全てオープンにして共有する。そういう局面だと思っています。そんな大きな流れの中に、HAPS、SW/AC があるのかなという気がします。

互いに学び合うこと

> 奥山さんと遠藤さんはバックグラウンドがとても違うのだけれど、高度なキュレーションをされてきたこともあって、互いの特質がよく分かるのですね。その違いが新たな手法だとか、HAPS の今後の方向性を生み出しそうです。

遠藤：奥山さんがやろうとしてる相談対応について、今考えてました。僕は酷い人間で、というかキュレーターの無視の倫理に則って、自分にとって面白いと思えない作家や作品はさらっと流してしまいがちなんですが、奥山さんだったらその人の話を全部拾って、面白くする方法を探るってことですよね。こぼれ落ちないように拾い続けることに倫理が宿るわけですよね。それができるのであれば、僕はそこから多くのことを学ぶことができるはずです。僕が面白くないと思っていた人と一緒に面白い展覧会ができる可能性があるってことですよね。その際には、僕の最初の「面白い」の価値基準の変更があり、僕のキュレーター性への変更が加わるはずですよね。すいません、言ってることわかります？

奥山：わかります（笑）。

遠藤：こうやってお互いが学び合えるのか。新たな発見がありました（笑）。一方で、奥山さんが受けた相談に対して悩んでいたら、僕はそんなのできませんってさっと返せばいいじゃんって言う可能性もあるよね。

奥山：はい、すごくよくわかる。言われてしまいそう（笑）。

遠藤：このインタラクションについて考えていたんです。いいことが起きるのかしらって。

奥山：遠藤さんは、どう思われますか。

遠藤：僕は学びたい。興味がない人を前にしたときの自分はそんなに好きではないから。習い性っていうか、蓄積によって自動的になるのが恐ろしいって思ってるから、いかにそれを解除するかっていう一つの課題がある。むしろそちら側から学びたいと思ってます、僕は。

奥山：なるほど。私は、本人が歩けない道に連れて行ってしまってるんじゃないかっていうことに常にビクビクしながら、でももし何かあったらそのときは私も一緒に雪崩に巻き込まれるっていうような覚悟でいますね。ひとりにはさせないから、一緒に行ってみようと。でも本当にそれが本人の望むものなのか、本人のキャパシティに合ってるのかというのは、関わっていく中で関係性の摩擦とか葛藤が起こるたびに不安に駆られるところではあります。

遠藤：でもそれをやったほうがいい世の中かもしれないって思い始めてます。僕が興味のない作家を適当に流していたときの対応は、全部ブラックボックスに入れる行為なんです。それによって様々な権威が温存される。現代美術の権威、良し悪しの概念、もちろん僕の権威も含め、意味のない権威が温存される可能性がある、ということぐらいまでは僕も気づいてるんですが、それを解除していく方法が大変すぎで……。学びます、一個一個学びます。

奥山：いえ、自分の首を絞めているだけのようにも感じます。今だと SW/AC が二人の体制でやっていて、すべての案件に伴走できるわけではないという時に、どれに伴走して、どの案件ならメールのやり取りで終えられるか、みたいな判断がとても難しい。まだ1年目だから、限られた件数だったので何とか取り組めたけれども、それが2年、3年ってなったときに、この対応の仕方でいいのか。さらには中川さんが構想されているような私たちの次に育っていく人材の育成について、それぞれに経験値が異なる中でどうやって相談対応に従事していくとよいのかは、大きな課題だなと思ってます。

遠藤：うーん。すごい道のりっていうことが今わかりました、SW/AC のしていることが。

奥山：ソーシャルワーカー（地域福祉の相談員）たちって、担当をそれぞれ100件以上持ってるとかってよく言うじゃないですか。虐待や貧困などの問題を抱えた家庭を一人で100件、150件、場合によっては200件だなんてどうやって対応してるんだろうって思うし、実際できてないからこその悲劇も起こってしまう。でもその中に蓄積されてきた相談対応のノウハウもやっぱりあるんだろうなとも思っていて。ひとりの人間が、別の人間の相談を受けるってところで、ソーシャルワーカー、カウンセラー、お医者さんたちの知見は、SW/AC 立ち上げの段階でたくさんヒアリングをさせてもらったんですけど、実装中の今、もう一度人と向き合う専門職から参照できることは学んで行きたいなと思っています。ヒントはいろんなところにはありそうだなと。

遠藤：今回話してみてやっとうまく接続点が見えた気がします。

奥山：私も楽しかったです。

遠藤：言葉の精度を高めて、共有できる言葉を増やすしかないんでしょうね。ざっくりと作品とか作者という言葉は使えない気がしますね。プロジェクトという言葉だってまだ荒すぎる。プロジェクト＝これ＋これ＋これ…って、この15個の言葉を足したらプロジェクトです、みたいに、一個一個既存の言葉をね、ばらけさせた方がいいんだわ。っていうことがわかりました。

奥山：細かく解体して、またひとつずつ積み上げていきたいですね。

時間がきました。予想通り、スリリングな話となりましたし、もっとディテールで聞きたい部分もありますが、それは次回ということで。HAPS のフレームを拡張し強靭にしていこうと思われている遠藤さんに私と奥山さんは嵌められたのですが、現在の仕事はとても面白く感じます。HAPS スタッフによる丁寧なバックアップに支えられていることも大きいです。アートのコーディネートをしている NPO やフェスの事務局などの多くは疲弊していますが、HAPS では不作為に起こるアート現場での権力的な非対称性やポリティカルハザードに対して、非常に敏感に対応されているように思います。さて、今日の話の中にあったキュレーションのブラックボックスを公開していくという話はとても大胆で、しかし同時にアートプロジェクトのもっている惰性的な事業フレームに対してクリティカルな役割を果たしてくれると思うので、是非とも実現できればと思います。また、SW/AC のオフィスともなっている HAPS の新たな拠点の立地も重要なファクターですね。近くに京都市立芸術大学が来たり、アート複合施設の建設が計画されていたりと、社会と文化の強烈なコンタクトが起こる現場となりそうです。その間際にいて何を見て、何を感じるのか。大きな社会変化を見届けながら、同時に発信していくことになると思うので、今後は世界に向けた発信というのも視野に入れていきたいものです。では、ここで本日の対談を終了したいと思います。ありがとうございました。

あとがき

文｜中川眞（2020年度 京都市「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」ディレクター）

コロナ禍のなかで

2020年は人類史に残るほどの惨禍を世界中に与えた。いうまでもなく、新型コロナウイルスの感染拡大による莫大な数の死亡者と社会システムの混乱の発生である。また、命を取りとめたが重い後遺症に苦しめられている人も多いと聞く。明らかにこれは大きな災害である。しかも特定の地域だけではなく、国の全土にわたって同様の脅威にさらされ続けている。芸術家あるいは芸術活動も甚大な影響から免れていない。2020年度には政府から２回の緊急事態宣言が発出され、感染を防ぐために人々は極力接しないよう、特に密集状態とならないよう、さらにそれと連動して「不要不急の活動」は控えるよう国民に要請が出された。私が聞き取り調査を行った日本センチュリー交響楽団では、大阪府での最初の宣言発出時（2020/4/7 ～ 5/21）に先立って、３月12日の定期公演以後のコンサートが全てキャンセルとなり、再開したのは6月20日であった。およそ３ヶ月以上にわたって通常の活動が中止となったのであるが、このような中長期的で全国的な活動停止は、第二次世界大戦時以来ではないかと推測される（昭和天皇崩御の際には短期間であるが停止）。1918年から1919年にかけて世界的猛威をふるったスペイン風邪の時は日本でも約38 ～ 45万人の死者が出たが、音楽や演劇活動に関していえば劇場やホールはほぼ閉まらなかった。むしろスペイン風邪よりも明治、大正期はコレラの方が恐れられ、例えば夏の祇園祭の日程が大きく秋にずれ込むといった事態は一度や二度ではなかったのである。

話を戻すと、コロナ禍以来、芸術活動は不要不急の活動であるとか、必要不可欠な仕事（エッセンシャル・ワーク）ではないという言表が強まった。必要なのか、そうでないのかという議論の前に、私が恐怖を感じたのは、芸術活動のジャンルは幅広く、先鋭的なものからコマーシャルなものまでまさに多様多彩であり、コロナ禍においても様々な活動のあり方が可能なはずなのに、一把一絡げに断罪されたことである。それに抗して芸術家が声を発しようものなら、発言はしばしばSNS上で「炎上」した。執拗に攻撃するのはほんの一握りの人々であると分かっていても、炎上は多くの芸術家を萎縮させる。活動再開に対して必要以上に慎重にもなった。もちろん、敢えて実施するよりはやらない方が安全であることは明らかだから、その綱引きに芸術家はこの1年ずっと苦悩してきたといえる。

芸術活動に対する人々からの圧力は、実は2019年に別の形で発生していた。周知の通り、あいちトリエンナーレにおける「表現の不自由展」の問題である。SNS上での非難、大量の電凸などですぐに展示は閉鎖に追い込まれ、終了間際にようやく再開が可能となったが、主催者側と批判する側との間に冷静なコミュニケーションは成立せず、文化庁が助成金を取り消しの宣言を行ったほどであった（後に減額して復活）。この圧力と、今回のコロナ禍における圧力は、私には繋がっているように思える。もちろん文脈は全く異なっている。また、芸術だけが問題なのではなく、おそらく近年に見られる一部の排斥的な行為、ヘイトスピーチの蔓延などと地続きの、包摂とは真逆の排除的行動の広がりの中の一風景なのであろう。

人が接触することによって感染が拡大するから、それを最大限に避けるためだということは百も承知の上で、それでも今回のコロナ禍における芸術活動へのネガティブな言説と社会的制約は、「表現の自由」に対する攻撃であると私は思うのである。攻撃する主体はウイルスであるともいえるし、社会の「空気」だともいえるが、それらが複合して多くの芸術家を萎えさせるのに十分なインパクトがあった。表現したいという強い意志をもちながらも、圧力を前にして必要以上に自粛モードや自主規制に入ってしまった芸術家が多いのではないかと推量する。芸術は未来への扉をこじ開けようとする営為だと私は思うのだが、その扉が堅く閉じられてしまった状況に、際限のない息苦しさと声を出せない無念さを感じる。

その典型的な例として、現代芸術ではないが郷土に根づく芸能をとりあげてみたい。芸能は豊かな収穫を祈ったり、災厄を追い払ったりするのが主旨であり、危機的な状況の中でこそ機能を果たさねばならない。2011年の東日本大震災の頃を契機として、郷土芸能の意味や役割について、まさに実践を追う形で新たな知見が開かれたのは記憶に新しい。端折っていえば、これまでは「地域社会があるから郷土芸能がある」という捉え方をされてきたのが、実は「郷土芸能があるから地域社会がある」というふうに逆転の発想が学術レベルで浮上してきたのである〔参考：橋本裕之「拡張する実践共同体、もしくは地域文化の可能態」2016〕。それは甚大な被害を受けた多くの地域において、郷土芸能が醸成する情動的な結合力によって、コミュニティの復興が大きく前進した事実があるからである。つまり地域文化が危機的な状況においてコミュニティの靭帯を補強し支えたのである。日常に埋没しているときには見えなかった文化の力が可視化されたといってもよい。まさしく芸能の本来の面目躍如となった

瞬間であった。しかし今回のコロナ禍に限っていえば、芸能も例外なくその活動が制限されている。「密」を作るからである。多くの芸能者の無念や無力を感じる声が私にまで届いてきている。儀礼の主宰者である神社などでは、芸能の奉納は行わず最小限の神事を執行して、かろうじて「神」との関係を保っている。多くの芸能が神事性よりも娯楽性を追求してきたというところにも遠因はあるかもしれない。

芸能のように神事などの支えのない近現代の自律的な芸術は、さらに脆弱な社会的基盤を身に染みて感じているところである。もちろん、それに抗して芸術サイドから様々な意欲的な動きが出ているのを私たちは知っている。SNS を最大限に活用したオンライン配信、クラウドファンディング、アニメと博物館の融合などの新しいコンテンツの開発等々。しかし成功例は少なく、組織に属さない多くのアーティストは個人事業主あるいはフリーランサーとして経済的に苦しい日々を送っている。

本稿の冒頭で「不要不急」という言葉を引いた。芸術家は自らの活動を不要不急であるとは思っていないが(少なくとも不要ではないと)、それを説得力ある形で言語化したり可視化したりすることにまだまだ成功しているとはいえない。芸能のような伝統的に引き継がれてきた明確な社会的意義(祈り、厄払いなど)が設定されていないだけに、なおさら説明に窮することになる。しかし、そこをなんとか突破しようとする芸術家もいる。配信などの技術的な対応ではなく、ある意味で、芸術の存在意義を問う根源的な訴えとして。

日本では2020年、新型コロナウイルスによって死亡した人の葬儀に家族は立ち会うことができなかった。感染の危険性を減ずるためであるが、とりあえず生きている人の生命を守ることが第一とされた。しかし、亡くなろうとしている人(あるいはそれを見過ごさねばならない家族)にとってこれほど辛いことはなく、霊の尊厳を確かめるという行為は放棄された。私は特定の宗教に与する者ではないが、人類の歴史の中で死んだ人の数がどれくらいなのか、現在生きている人々の数(約78億人)に比していかに莫大か、そういった死者の霊に取り囲まれて私たちは生きているのではないか、というくらいの認識はもって生活している。だが、芸能にあってしてもそれに抗することはなかった。そのなかで、ある作曲家が抗議の声をあげた。三輪眞弘である。岐阜県立情報科学芸術大学院大学(IAMAS)に勤めながら、アルゴリズムに基づく作曲を続けてきた人である。彼は2020年9月19日に岐阜市のサラマンカホールにて無観客ライブ配信のコンサートを実施し、3時間に及ぶ大作『鶏たちのための五芒星』の初演を行った。ホール備え付けのパイプオルガン、MIDI アコーディオン、ガムラン、箏、ダンスなどが組み合わさった作品である。これは表向きには鳥インフルエンザに罹患して殺処分された大量の鶏の霊を慰めるための作品で、除染のための白い粉(薬品)をダンサーにふりかけるという設定にして、COVID-19のメタファーを表現した。上演は無観客で行われた。霊のために上演をしているので観客は不要という解釈である。その作品解説に三輪は「『清潔な』社会」という文章を掲載している。少し長くなるが全文を引用する。

今回のパンデミックがぼくに与えた衝撃は、その規模や死者数や世界経済への影響などの「被害の大きさ」ではない。そうではなく、人類史上初めて、様々な宗教を持つ人々の集団礼拝を禁じ、ウイルスが原因で亡くなった人々のお葬式を禁じることに世界中の人々が同意したという事実だ。現代の科学技術のおかげで、感染の原因が新型のウイルスだと特定され、その致死率はどの程度で、それがどのように拡がっていくのかなどを医学はもとより統計や数学に基づくコンピュータ・シミュレーションで予測できるようになったことは、昔のように為す術もなく感染をただ「悪魔の仕業」として恐れるしかなかったことに比べれば、ぼくらをずいぶん安心させてくれたはずだ。しかし、その安心と引き換えにぼくらが「不要不急」なものとして差し出したものこそが「礼拝と葬儀」だったということである。つまるところ、それは人の命よりも尊いものが「あった」世界から、何も「ない」世界への移行が完了したことの証であり、ウイルスを「敵」と見做し、今現在地上に生存している自分たちをウイルスから守ることが死者に対して敬意を払うことよりも重要だと、少なくとも「公的に」判断したということでもある。かつてある講演会でぼくは「人類が死者を手厚く葬るようになった時から芸術は生まれた」という趣旨のことを話したことがあるのだが、講演後、「私は、自分が死んだら生ゴミとして処分してもらえばいいと思ってるんですよ」とわざわざぼくに言いに来た人のことが忘れられない。その人はぼくの主張に反論したかったのだろうと思うが、礼拝や葬儀のない人間の世界とは結局、そのような合理的で「清潔な」社会のことだろうと思う。そこには死者の霊も痕跡もなければ、「わたし」の願いを託す未来もない、ただ知能を備えた肉体だけが生息するヒトの世界である。

「清潔な」社会、それは科学的証拠に基づく差別のない公平な社会である。機械システムの前でヒトは誰もがみな同等だからだ。機械にとっては高潔な人格も卑怯な人間も、あるいは高い志も歪んだ心の闇も等価である。先に述べた、人間にとって「人の命よりも尊いものが何も“ない”世界」とはそのような場所だろう。そこでは個々の人間が、人種や家系、嗜好や病歴や財産、購買・行動履歴などあらゆる測定・予測可能な「個体情報」という変数の集合として処理され、機械によって管理のみならず評価される「存在」となっていくに違いない。「機械だからできるヒトの公平な評価」、それは現在の人間が家畜に対して行っていることと変わりはない。人類が無限の経済発展を前提とした資本主義システムを維持しようとするならば、それは必然だろう。

コロナ禍に対する表現者としての応答の一例であるが、自分の表現の核といったものがコロナの状況にどれだけ切り込めるのか、という現代音楽ならではのアプローチではないだろうか。企画と演奏の水準の高さから、この公演は2020年の第20回佐治敬三賞を受賞した。ITの活用による技術的な開発はもちろん必要であるが、他方で「芸術とは何か」と深く考えることによって、「不要不急」といった論調に対抗するという手法もあるように思う。もちろん、その他にも様々なアプローチによって、これから長く続くであろうコロナウイルスと世論という2つの矢と対峙することになるのであろう。

芸術家はそのとき

京都市に在住あるいは拠点をもつ芸術家たちは、このコロナ禍からどのような影響を受けただろうか。2020年の3月初旬から芸術関係のイベントが次々と中止となって大混乱の様相を呈し始めた頃に、いち早く沖縄県の芸能関連協議会が沖縄県内にて、ケイスリー株式会社が全国規模で芸術家へのアンケート調査を実施した。特に印象に残ったのが、モチベーションの低下、不安、生きがいの喪失などといったメンタルな不調を訴える芸術家の声であった。今回の事態はまさに「災害」と捉えるべきであり、その影響把握は欠かすことができない。京都市もまたその深刻さにいち早く気づき、4月にアンケートの準備に入った。「共生社会実現」事業との関連から私は監修に携わることとなった。その時に、福祉や医療の領域でのアート活動も盛んになっているから、そちらも含むべきではないかという議論が行なわれたが、コロナ禍で神経を使い消耗しているセクションであるから、もう少し落ち着いてからの実施が望ましいということで年末年始へと見送られた。その結果については本報告書の p.24からを参照していただければと思う。芸術家への本調査設計・分析は大澤寅雄、樋口貞幸、吉澤弥生各氏が行った。

京都市内に居住あるいは活動をする文化芸術に関わる個人、または団体事業所などが新型コロナから受けた影響と現状での活動状況に関する調査が5月7日～20日と、2021年の1月14日～2月2日の2回にわたって行われた。詳しい結果は京都市のウェブサイトで閲覧できるので、ここではかいつまんで書くことにする。第1回のアンケートでは経済状況の把握と、必要な対応・政策に関わる情報収集、第2回では再度の状況把握とコロナ対応の文化施策の検証が主なねらいであった。主管は京都市で、アンケートの取りまとめ、情報提供先は京都芸術センターであり、第1回では個人から1,122名、団体･事業所から280件の有効回答があった。

個人回答者のほとんどがプロあるいはセミプロであった。京都芸術センターと HAPS が中心的に調査や広報を行ったため音楽関係の反応はやや少なく、美術が451名、音楽が260名であった。最大の問題である「収入損失」は、2月から8月までの半年（想定）で個人が88万円、事業所の方は360 ～ 370万円で、フリーランスが多く、年間にすると損失は倍以上になるかも知れないという懸念が示された。93%の人たちにイベントなどの延期または中止があった。そして目を引いたのが、女性と男性の間での損失差である。男性が106万円、女性は60万円の収入減であった。これは男女間の日常的な収入格差を示唆するものであり、なんらかの構造的な問題が浮上してきたと考えてよい。個人のジャンル別の収入損失では、音楽、美術などは平均88万円で、演劇が若干少なく、デザインや伝統芸能がより大きな損失となっている。

収入に関しては、伝統芸能の能楽、華道、茶道などの生活文化では弟子をとっていて、そこからの収入が激減した。音楽ではイベント、コンサートからの収入がなくなり、美術では絵が売れないなどである。収入が少なくなったことによって創作や発表などの活動ができず、部材を買うことができず、食費や日用品などの生活費も不足しているという、3点の主な影響が指摘された。

5月の段階での困りごとは、創作発表の機会が失われたという点が圧倒的であった。また、生計が立てられない、職務研修や技芸の指導・研鑽ができない、教えることができない、などの困窮が訴えられた。そのなかで、文芸系の作家が創作意欲に大きなダメージを受けたという回答が多いのが特徴的であった。他の領域の芸術家は、どちらかといえば頑張るぞという前向きな回答が寄せられていたのに較べて、やや特異な印象を受けた。

必要な支援としては、創作活動の延期や中止の損失補填、イベントなどの機会の提供、あるいは事業資金の支援を求めるものが中心であった。沖縄県ではモチベーションの低下が大きな問題に見えたが、京都市の場合、経済的な面が中心的課題として現れ出てきた。

2020年8月に実施された兵庫県での調査（実施：神戸大学大学院国際文化学研究科・藤野研究室）では、損失の補填の要望は減少傾向となり、機会提供が逆転して高くなった。つまり一定期間を過ぎると、芸術家は補填は欲しいけれど、もっと場を作って欲しい、チャンスを与えて欲しいという、ある意味では前向きな気持ちに変化しつつあったのである。

クロス集計をすると、ジャンル毎のニーズが分化しているのがよく分かる。一例をあげると、音楽では「オンライン展開のための支援」を比較的多く求めるが、演劇や舞踊ではそれほど多くない。生身の身体を媒介として実空間を共有するというのが演劇や舞踊の根底にあり、オンラインでは替えがきかないということを示唆するものであった。

神戸大学の調査では、果たしてオーディエンス・聴衆がホールや劇場に戻ってくるのかという問いが、大きな危機感、問題提起として取り上げられているが、これに関して興味深い

調査をオーストラリアのアーツカウンシルが実施している（「COVID-19 Audience Outlook Monitor」）。これは鑑賞者側に対するアンケート調査であり、「あなたたちは何を求めていますか？」という問いに2万3千人が答えている。そのなかに「オーディエンス（あなたたち）は戻ってきますか？」という問いがあり、10人のうち9人はアートイベント、文化イベントがあったら戻ってきたいと答えたのである。日本でもこのような受け手側の動向を知る調査があってしかるべきだと思うが、このような臨機応変な活動は専門機関であるアーツカウンシルがあれば可能であり、今回のコロナ禍を通して図らずも京都市でもアーツカウンシルの必要性を感じた次第なのである。

以上のアンケート調査の結果を踏まえて、京都市は文化芸術に対して一次補正、二次補正、三次補正の3回の施策を実行した。

①京都市文化芸術活動緊急奨励金（3億円）
②京都市所管文化施設の利用キャンセルに伴う利用料の還付（2月～9月分）（2億3,840万円）
③文化芸術総合支援パッケージ［相談窓口，ホームページ，まちじゅうアートフェスティバル，ふるさと納税型クラウドファンディングを活用した文化芸術活動の再開支援］（2億3,000万円）
④感染拡大防止と文化芸術活動の両立支援補助金（1億7,000万円）
⑤文化施設（京都芸術センター及び京都市美術館）の感染拡大防止対策（3,600万円）
⑥一時閉鎖期間中の維持管理経費（指定管理者への支払い）（4,290万円）

①の京都市文化芸術活動緊急奨励金については、アンケート調査の設計と並行して募集をおこなったので、必ずしも「結果を踏まえて」という訳ではないが、これらの施策は、総合すると他の自治体に較べれば非常に手厚いものと評価されるのではないかと思われる。

第２回アンケート調査の有効回答数は1,154件であり、第１回調査と同様にコロナの影響や活動の状況、ニーズ把握に加えて、この間の京都市の支援策への評価が新たに問われた。第２回調査の計画・設計当初（11月頃）には感染者数が一定の安定を示しており、このまま終息に向かうのではないかという楽観的な期待もあったが、12月に入ってからは感染が急増し、2021年１月14日から京都に２回目の緊急事態宣言が発出されるという状況に至って、アンケート結果にはその影響が色濃く出た。すなわち、現在困っていることでは「仕事の消失」「生活の維持」「心身の不調」の順に回答の割合が高い傾向が、また必要な支援は「公演、展示、イベント等の延期または中止による損失補填の支援」「文化芸術活動の再開・新規展開に向けた事業資金支援」「文化芸術活動の機会・場づくり」が突出するなど、第１回と全くといってよいほど同じ結果が出た。つまり生活や芸術活動をめぐる事態は改善していないことが数字上でも明らかなったのである。

京都市の実施した芸術家への支援プログラムの満足度については、満足層（「満足」＋「やや満足」の割合）の多い順に、「京都市文化芸術活動再開への発表・鑑賞拠点継続支援金」が満足層86%、「京都市文化芸術活動緊急奨励金」が満足層85%、「京都市文化芸術活動再開への挑戦サポート交付金」が満足層81%、「京都市文化芸術総合相談窓口」が満足層77%、「感染拡大防止と文化芸術活動の両立支援補助金（感染拡大防止等経費補助）」が満足層69%、「感染拡大防止と文化芸術活動の両立支援補助金（施設使用料等補助）」が満足層61%、「オンライン配信へのサポート（オンライン技術に関する連続講座／モデル事業）」が満足層52% となっている。京都市が行う文化芸術活動の支援プログラムは希望する（必要とする）支援と合致していたかを聞いたところ、「はい」が62%、「どちらともいえない」が31%、「いいえ」が7% となった。また、京都市の支援プログラムは、あなたの文化芸術活動の継続または再開につながったかを聞いたところ、「はい」が71%、「どちらともいえない」が25%、「いいえ」が4% となっており、京都市の支援プログラムは芸術家のニーズと合致し、活動の後押しになったことが示されている。

さて、新型コロナは2021年の３月段階でまたもや感染爆発の気配が漂い、３回目の宣言発出が取り沙汰されている。芸術活動にとって空前絶後ともいえる試練の長丁場であるが、表現への希求と共生実現のための協働という私たちのミッションが、今こそ必要とされているのだという確信をもって進んでゆきたいと思う。不要不急ではないということが自ずから理解されることを願いつつ。

[相談事業]

Social Work / Art Conference（SW/AC）

ディレクター｜奥山理子　アシスタントコーディネーター｜小泉朝未

HAPS HOUSE を拠点に相談事業を本格的に開始。
連続講座の各回終了後に「談話室」を開催。

[京都市内の福祉施設等の文化芸術活動の状況についてのアンケート調査]

実施期間｜2020年12月15日（火）－2021年1月8日（金）

調査方法｜質問票（インターネット・ウェブフォーム）

調査対象｜3,419件

※京都市内の社会福祉施設等のうち、「高齢者施設等」「障害者施設等」「子ども・子育て支援施設等」を対象に抽出。

回収数｜167件

回収率｜4.9%

有効回答数｜167件

有効回収率｜4.9%

※調査の一部は、文部科学省科学研究費助成事業「基盤 B：アジアにおける社会包摂型アーツマネジメントモデル形成と応用」（代表 中川眞）を用いた。

調査委員｜樋口貞幸、吉澤弥生
奥山理子、小泉朝未（ともに、一般社団法人 HAPS）

監修｜中川眞

調査協力｜大澤寅雄

ウェブフォーム｜合同会社琉球ラボ

[モデル事業]

プロジェクト1

巨人の歯と眠り
糸と布染め
崇仁すくすくセンター（挿し木プロジェクト）

アーティスト｜山本麻紀子

実施期間｜2020年1月－

成果物として記録集を発行、詳細は次年度の報告書に掲載予定

プロジェクト2

タイルとホコラとツーリズム season8《七条河原じゃり風流》

アーティスト｜谷本研＋中村裕太

実施期間｜2020年1月－

かわら版の発行と掲示

その一　2021年2月28日（日）「かわら版発行の辞」
その二　2021年3月6日（土）「崇仁学区のお地蔵様」
その三　2021年3月13日（土）「お地蔵様は移動する」
その四　2021年3月20日（土）「労働と祝祭」
号外　　2021年度中に発行予定

配布拠点｜京都市下京いきいき市民活動センター 1F
その他配布場所｜崇仁地区の施設・飲食店など
地区内にお住まいの方には、発行毎に各戸へ配布

屋外展示

場所｜京都市下京いきいき市民活動センター 外壁

かわら版

2021年3月13日（土）－5月5日（水）

崇仁のお地蔵様の幕

2021年3月20日（土）－5月5日（水）

※ 当初の会期は4月2日（金）までを予定していたが、延長予定

ツアー

2021年4月3日（土）に実施予定

—

アートコーディネーター｜石井絢子

リサーチャー｜中村優花

［講座］

連続講座「文化芸術による共生社会実現のためのアーツマネジメント入門」

（オンライン配信により実施）

第1回

日時 | 2020年11月12日（木）19:00－20:30

ゲスト | 淡路由紀子（特別養護老人ホーム グレイスヴィルまいづる）

進行 | 中川眞

—

第2回

日時 | 2020年11月26日（木）19:00－20:30

ゲスト | 今井利華（きょうと WAKUWAKU 座）

進行 | 中川眞

—

第3回

日時 | 2020年12月10日（木）19:00－20:30

ゲスト | 花岡伸宏（彫刻家）

進行 | 藏原藍子（一般社団法人 HAPS）

※この回ではパソコン要約筆記を試験的に実施。

—

第4回

日時 | 2020年12月17日（木） 19:00－20:30

ゲスト | 木戸玲子（京都市修徳児童館）

進行 | 中川眞

—

第５回

日時 | 2021年1月14日（木） 19:00－20:30

ゲスト | 小笠原邦人（総合福祉施設 東九条のぞみの園）

進行 | 中川眞

［人材育成］

アシスタントコーディネーター 1名を対象者として採用。

業務内容 | 相談事業・調査・モデル事業・連続講座におけるアシスタント業務およびレポート執筆

プロフィール

［企画・監修］

中川眞　なかがわ しん

アジアの民族音楽、サウンドスケープ、アーツマネジメントについて研究する。著書『平安京 音の宇宙』(平凡社) でサントリー学芸賞、京都音楽賞、小泉文夫音楽賞、現代音楽の活動で京都府文化賞、アーツマネジメ ントの成果で 日本都市計画家協会賞特別賞 (共同) を受賞。インドネシア政府外務省文化交流表彰。大阪市立大学都市研究プラザ特任教授。インドネシア芸術大学、チュラロンコン大学 (タイ) の客員教授も務める。アートミーツケア学会副会長。

［相談事業］

Social Work / Art Conference ディレクター

奥山理子　おくやま りこ

母の障害者支援施設みずのき施設長就任に伴い、12歳より休日をみずのきで過ごす。施設でのボランティア活動を経て、2012年みずのき美術館の立ち上げに携わり、以降キュレーターとして企画運営を担う。アーツカウンシル東京「TURN」コーディネーター（2015-2018）、東京藝術大学特任研究員（2018）を経て、2019 年より、HAPS の「文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」に参画し、2020年、相談事業「Social Work / Art Conference」ディレクターに就任。東京藝術大学 Diversity on the Arts Project 非常勤講師。

［調査］

調査委員

樋口貞幸　ひぐち さだゆき

オフィスへなちょこ、アートアドミニストレーター。芸術家による地域活動や社会貢献活動等の相談や補助金申請の支援、ファシリテーション、コーディネート協力などを行う。大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員。

吉澤弥生　よしざわ やよい

共立女子大学文芸学部教授・NPO 法人地域文化に関する情報とプロジェクト [recip] 理事。専門は芸術社会学。近著に「芸術労働者の権利と連帯」『未来のアートと倫理のために』（左右社、2021）、「アートマネジメントと、非物質的労働の価値」『芸術と労働』（水声社、2018）他。

調査協力

大澤寅雄　おおさわ とらお

（株）ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室主任研究員、NPO 法人アート NPO リンク理事長、九州大学ソーシャルアートラボ・アドバイザー。2003年文化庁新進芸術家海外留学制度により、アメリカ・シアトル近郊で劇場運営の研修を行う。共著＝『これからのアートマネジメント " ソーシャル・シェア " への道』『文化からの復興 市民と震災といわきアリオスと』『文化政策の現在３ 文化政策の展望』『ソーシャルアートラボ 地域と社会をひらく』。

［モデル事業］

アーティスト

山本麻紀子　やまもと まきこ

1979年京都市生まれ。京都市立芸術大学・大学院 絵画専攻 構想設計修了。ある特定の場所のリサーチを通して観察や考察を続け、常識や習慣など日常の中で見過ごされている事柄や疑問を糸口にして、他者とのコミュニケーションを発生させるプロジェクトを行う。その一連の過程を、写真、絵、映像、刺繍など様々な形式に展開させて作品制作を行っている。2018年より、京都市の「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」の一環として、高齢者福祉施設・東九条のぞみの園（京都市南区）に関わり、利用者や職員、また地域の方々と共働する「ノガミッツプロジェクト」を実施。また、ライフワークとして、2013年より15年計画で日本（水戸）とイギリス（ペンザンス）の巨人伝説のリサーチをベースに「眠り」や「怒り」をテーマに巨人の世界を探求している。8年目の現在は「植物」や「土」をキーワードに模索中。

谷本研 たにもと けん ＋ **中村裕太** なかむら ゆうた （「タイルとホコラとツーリズム」）

谷本研（1973年神戸生まれ、滋賀県在住。1998年京都市立芸術大学大学院美術研究科造形構想修了）と中村裕太（1983年東京生まれ、京都府在住。2011年京都精華大学芸術研究科博士後期課程修了。博士［芸術］）によるゆるやかなユニット。街中に点在する路傍祠やそこに使用されるタイルに着目した「タイルとホコラとツーリズム」（Gallery PARC、京都、2014年）を出発点に、東シナ海を取り囲む対馬・沖縄・台湾・済州島にみられる土着信仰のツアー記録を作品化した「season4《一路漫風！》」（京都芸術センター、2017年）、明治期に広島からの入植によって生まれた北海道北広島と広島との関係を扱った「season6《もうひとつの広島》」（広島市現代美術館、2019年）などがある。

コーディネーター

石井絢子 いしい あやこ

HAPS アートコーディネーター。1990年秋田市生まれ。青山学院大学 総合文化政策学部卒業。2013 - 2018年、ベネッセアートサイト直島にて、美術館やアートスペースの運営、エデュケーション、瀬戸内国際芸術祭でのアートプロジェクトの企画・制作等に携わる。2018年より現職。「京都市 文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業」事務局とモデル事業の担当として、東九条・崇仁地域を中心にアートプロジェクトを行う。

リサーチャー

中村優花 なかむら ゆうか

神戸大学国際文化学研究科博士課程前期課程（芸術文化論）。専門は、アートマネジメント、文化政策。人々が存在論的不安を乗り越え、語り直すためのきっかけとしてのアートについて研究している。また、地域間に存在する身体的文化資本の格差を改善する取り組みについても、フィールドワークやアートプロジェクトの運営などの実践を通して研究を行っている。

継続調査

高嶋慈 たかしま めぐみ

美術・舞台芸術批評。京都市立芸術大学 芸術資源研究センター研究員。「京都新聞」にて美術評を連載。共著に『不確かな変化の中で 村川拓也 2005-2020』（林立騎編、KANKARA Inc.、2020）、『身体感覚の旅――舞踊家レジーヌ・ショピノとパシフィックメルティングポット』（富田大介編、大阪大学出版会、2017）。

和田ながら わだ ながら

京都造形芸術大学芸術学部映像・舞台芸術学科卒業、同大学大学院芸術研究科修士課程修了。2011年2月に自身のユニット「したため」を立ち上げ、京都を拠点に演出家として活動を始める。同世代のユニットとの合同公演も積極的に企画し、また、美術家や写真家など異なる領域のアーティストとも共同作業を行う。2018年より京都木屋町三条の多角的アートスペース・UrBANGUILD のブッキングスタッフ。NPO 法人京都舞台芸術協会理事長。

［講座］

連続講座「文化芸術による共生社会実現のためのアーツマネジメント入門」

第1回ゲスト

淡路由紀子 あわじ ゆきこ／特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづる 施設長

1963年生まれ。1982 ～ 2003年京都府舞鶴市職員。2003年舞鶴市を退職し、社会福祉法人グレイスまいづるの設立メンバーとなる。2005年特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづるの施設長に就任。2009年、舞鶴市のアートプロジェクトでダンサー／砂連尾理氏と出会う。2010年3月に砂連尾理氏とグレイスの入居者による「とつとつダンス」公演が行われたことをきっかけに、グレイスヴィルまいづるにおいて、「シリーズとつとつ」と題したダンス、文化人類学、哲学などのワークショップを始める。2020年新型コロナウイルス感染症への対応を契機に、これからのケアプログラムに取り組み中。

第2回ゲスト

今井利華 いまい りか／きょうと WAKUWAKU 座 理事

龍谷大学にて真宗学を学び、浄土真宗西本願寺派の僧侶となる。自坊の法務を手伝う中で、心の病について深く興味を持つ。心の病を抱えながら生きていく当事者を支援する精神保健福祉士の仕事を知り、資格の勉強のために進学。いくつかの事業所を見学した中で、他にない精神障がい者の表現活動を支援する取り組みとメンバーの明るさに惹かれ、ボランティアとしてきょうと WAKUWAKU 座に通い始める。2008年よりスタッフとして関わり、メンバーと共に作成した精神障がいの症状を題材にした演劇自主公演を2019年3月に上演した。

第3回ゲスト

花岡伸宏 はなおか のぶひろ／彫刻家

1980年広島生まれ。京都府在住。2006年京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程修了。近年の主なグループ展に『東アジア文化都市2017 京都「アジア回廊 現代美術展」』（二条城、2017年）、『六本木クロッシング2019展：つないでみる』（森美術館、2019年）、『ユーモアと飛躍 そこにふれる』（岡崎市美術博物館、2013年）、主な個展に『つくるということ』（大阪府立江之子島文化芸術創造センター［enoco］、2020年）などがある。「第12回岡本太郎現代芸術賞展」特別賞（2009年）、「2006 JEANS FACTORY ART AWARD」優秀賞。

第4回ゲスト

木戸玲子 きど れいこ／京都市修徳児童館 館長

1993年より滋賀県大津市の児童館で19年間児童厚生員として勤務。2012年から京都市修徳児童館館長。全国児童厚生員研究協議会理事、京都市児童館学童連盟施設長会副会長などを務め、放課後児童支援員研修、児童厚生員研修等の講師を持つ。児童館と地域との協働の活動展開から、遊びを通して子どもや子育て世代と地域のつながりを育てながら、子どものことを語り合えるまちづくりに取り組んでいる。

第5回ゲスト

小笠原邦人 おがさわら くにと／総合福祉施設 東九条のぞみの園 施設長

大学卒業後、一般企業に就職するが、1994年より特別養護老人ホームのアルバイト職員として介護福祉の世界に入る。約5年間、介護職員としてケアワークを実践した後、老人保健施設の支援相談員や在宅介護支援センターの相談員を経て、2006年に東九条のぞみの園に入職。東九条のぞみの園では、地域包括支援センターで主任ケアマネージャー・社会福祉士を担い、2014年より同施設長に就任する。

［人材育成］

アシスタントコーディネーター

小泉朝未 こいずみ あさみ

1991年大阪生まれ。臨床哲学研究室への在籍をきっかけに、子どもや多様なルーツを持つ人々との対話の活動や、共生に関わるアートプロジェクトの実践、記録、研究を行う。大阪大学文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。2020年4月より一般社団法人 HAPS（Social Work / Art Conference）にアシスタントコーディネーターとして勤務。

［巻末対談］

HAPS 代表

遠藤水城 えんどう みずき

1975年札幌生まれ。2004年、九州大学比較社会文化研究学府博士後期課程満期退学。現代美術のキュレーターとして国内外で数多くの展覧会を開催。2011年より「東山 アーティスツ・プレイスメント・サービス」代表。国際美術評論家連盟会員。

2020年度 京都市 文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業

企画・監修　中川眞
主催・事務局　一般社団法人 HAPS
遠藤水城、藏原藍子(全体進行)、石井絢子(本事業主担当)、岡永遠(報告書進行)、
沢田朔(広報)、小泉朝未(本事業アシスタント)、埜美智子(経理)、櫻岡聡
所管　京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課
四元秀和、倉谷誠

2020年度 京都市 文化芸術による共生社会実現に向けた基盤づくり事業 報告書

発行日　2021年3月31日

発行元　一般社団法人 HAPS
〒605-0841 京都市東山区大和大路通五条上る山崎町339
Tel. 075-525-7525 Fax. 075-525-7522

執筆　石井絢子、奥山理子、小泉朝未、高嶋慈、中川眞、中村優花、樋口貞幸、和田ながら
編集　松永大地(ポケッツ)、石井絢子、藏原藍子 (ともに HAPS)
編集・進行管理　岡永遠(HAPS)
アートディレクション　見増勇介(ym design)
デザイン　関屋晶子(ym design)

印刷　株式会社イニュニック

著作権法で定められた範囲を除き、本書の無断での複製、複写、転載を禁じます。